水上瀧太郎全集

四巻

大正六年頃（大阪赴任前）

小說　四

目次

大阪

一の一

大阪の停車場近い宿屋の三階の一室に、三田は疲れた體を投出した。薄暗い、切立てたやうな急な梯子段を上つた爲めに、上り切ると俄に骨身がゆるんでしまつた。

西向の窓をあけて見ると、靄とも霧ともつかない十一月の夕空が、近々と迫つて來た。目の下の家々の屋根の向ふに、平べつたく幅を取つて、黒ずんだ停車場の屋根が見え、その邊から夥しく煤煙を空に吐いて居た。家々の燈火と、賣藥の廣告塔の強い電光が、附近一帶に流れわたつて居た。汽笛を空に震はして、汽車が東に向つて出て行つた。

彼にとつて、大阪は今日迄緣も由緣（ゆかり）も無い所だつた。中學の生徒だつた頃、博覽會を見に來たのが、後にも前（さき）にもたつた一度だつた。長い月日がたつたので、友達と一緒に乘つたウオオタア・シユウトと、堀の深いお城の外は、何ひとつ覺えて居ない。

子供の頃夢中になつた繪本の感化か、生來さういふ性分なのか、しんねりむつつり底意地悪く

天下をとつた德川家康が大嫌ひで、眞田幸村を崇拜した爲めに、お城に對しては感慨が深かつたが、何處に行つてもせせこましく、贅六そのもののやうな町の有樣は、決して懷しい感じを起させなかつた。

今日になつても、彼は贅六が嫌ひだつた。贅六といふ言葉の屬性であるところの我利々々貪慾吝嗇に、まのあたり取圍まれて、これからさき幾年間暮すのだらうと考へた時は、つくづく月給取の身の上をはかなんだ。學校の寄宿舍に居た時代の知つた顏も、少しはあるにはあるのだつたが、概して純粹の大阪人には知己が無かつた。學生仲間でも、どういふものか他の學生との交際(つきあひ)はうとく、（四字削除）のやうに、一かたまりになつて居るのが、大阪から來る連中の特色だつた。朝も晝も晩も、食事の時間が近づくと、未(ま)だ食堂の大扉の開かないうちから、手ん手に箸箱を持つて、拳骨でその扉を叩いたり、足で蹴つたりしながら、

「おゝい、あけろ、時間やぜ。」

「あけんかい、阿呆。早うあけたらえゝやないか。」

聲を揃へてわめきながら、口汚く賄の給仕(ボオイ)を罵るのがおきまりだつた。

「ちえつ、又浪花俱樂部が騷いでやがら。」

―贅六默れ。」

食堂に近い室々の學生は、義憤を發して怒鳴つた。勿論三田もその一人だつた。

そんな事を思ひ出せば出す程、大阪は頼り無い所だつた。數年前外國へ行く時に感じたよりも、もつと心寂しかつた。

「何しろ酒は本場だからね、こいつが第一樂しみだよ。」

持つて生れた負惜みをいひながら、腹の中では、東京を離れる事が、卑怯未練になさけなかつた。

一の二

その朝、三田は手鞄をぶらさげて改札口を出た。旅人宿や小料理屋、名物岩おこしなどを賣る店の、雜然と並んで居る驛前の廣場には、むかしの記憶が蘇つて來たが、行く先の方角さへ知らない身には、親み難い土地だと思ひ込んで居る爲めか、輕い不安が胸を打つて止まなかつた。

何時からさうなつたのか自分でも知らないのだが、三田は人力車に乘るのが、形の上からも心持の上からも、妙に羞しくて嫌だつた。その爲めに、右に行くのか左に行くのかも知らない癖に、

電車道迄歩いた。
「道修町(ドーシューまち)に行くにはこれに乘ればいゝのですか。」
折よく來た電車の踏段に片足かけないばかりにして訊いた。
「何だッ。」
「道修町に行き度いのですが。」
「何處だッ。——早せんと動きまつせ。」
チンチンと合圖をすると、そのまゝ三田を取殘して行つてしまつた。
「旦那、行きましよか。」
お上りだと見てとつて車夫が、小走りに驅けて來て、三田の當惑した顏を覗き込んだ。
「よし、行つてくれ。道修町だ。」
爲方が無いやと思ひながら、旣に梶棒を下した人力車に乘つてしまつた。
車夫はけげんな顏をして、棒立に立つてゐる。
「道修町だよ。道修町つていふのかしら。」
東京と違つて、大概の町は町とは呼ばないと聞嚙つてゐたのだつた。

相手も困つた風に首をひねつた。
「道修町さ。道は道、修は修身の修――かういふ字さ。」
彼は空中に大きく字を書いてみせた。
「あゝ道修町(ドショーまち)だつか。」
車夫は、なんのこつたといつた風な、人を馬鹿にした調子でいひ捨てると、直さま梶棒の中に身を入れて驅出した。
「なんだ、呑込の惡い奴だな。勝手に道修町(ドショーまち)なんて訛つて置きやあがつて。」
三田は一切の大阪人に對して反感を持つて苦り切つた。
車夫の驅方にさへ大阪の特徴を見出す事が出來た。東京の車夫のやうに、氣取つた驅方もせず、一定の步調も無かつた。蟲のやうに小股に、只管がむしやらに驅けた。その狹い往來にも拘らず、無遠慮に速い。全く型に拘泥しない實利的の驅方だつた。彼は人力車に乘つて居るのが、愈々羞しくて堪まらなかつた。
橋を渡つて、又橋を渡つて、益々狹い通に入つたが、間も無く四角の古びた建物の前で止まつた。二十幾年か前、落成した當時は、大阪最初の煉瓦造で、近鄕近在から辨當を持つて見に來た

といふ話を、東京を出る時古手の社員に聞かされて、さぞかし立派なものだらうと想像したが、今では煉瓦は崩れ、石は汚れて附近の新しい建物の眞中に、廢屋のやうに見えたのである。
受附の子供に名刺を出して、支店長室に案内して貰つた。かねがね氣むづかしい人だと聞いてゐて、内心びくびくして居たが、旅鞄を提げて入つて行つた三田を見ると、直に宿屋の心配をして呉れた。
「さあ、獨身者だと差し當り下宿を探さなくてはならないが、その下宿が大阪には少いからね。」
しきりに煙草を吸ひながら、首をひねつて居たが、社員の二三人を呼んで、曾てその人々が獨身時代に居た下宿屋に電話をかけさせて、空室を問合せて呉れた。あいにく心當りはみんなふさがつて居た。結局、停車場の近くの宿屋に、假に荷物を下して、明日は專門に下宿を探したらよからうといつて呉れた。三田は事務の引繼をうけて、その日から馴れない仕事に頭腦を惱まさなくてはならなかつた。

一の三

會社がひけてから、世話好らしい年とつた庶務係に案内されて、この三階の宿屋に落つく迄の

一日を彼はぼんやり想ひかへしてゐた。

「えゝ、宿帳をお願ひ致します。」

番頭がやつて來た。妙にわざとらしく引呼吸(ひきいき)でものをいふ若いのが、硯と帳面をさしつけた。

「永らく御逗留願へませうか、それとも明日(あす)にもお立ちでいらつしやいますで御座いませうか。」

「それがわからないんです。私は勤人なんだが突然此方(こつち)の支店に寄越されて、來るには來たが居所はなし、格好の下宿が見つかれば明日(あした)にも引越したいが、さうでなければ止むを得ず四五日厄介になるかも知れない。」

三田は宿帳をつけ終つて、硯と共に押返した。

「えへゝゝ、恐れ入ります。いづれ東京から奥様も御出でになりますので……」

「冗談いつちやあいけない、獨身者なんだ。」

「えへゝゝ、御冗談を。」

番頭は二つ三つ頭を下げて出て行つた。

「何をいつてやがるんだ、面白くもない。」

三田は口の中で、馬鹿ッといひ度いのを堪(こら)へた。

番頭の足音が梯子段を下の方に消えると、入違つて忙しい足取りで、女中が御膳を運んで來た。

「旦那はん、御酒あがりまつか。」

「あゝ飲むよ。實は先に御湯に入れて貰ひ度かつたんだがなあ。」

「えらい濟まへんな。御風呂は只今ふさがつて居りますよつて。」

半分は廊下に出ながら、又忙しさうに梯子段を下りて行つた。

幅の廣い顔に白粉の厚い、銀杏返しの兩鬢を思ひ切つてふくらませた女中のお酌で酒を飲むよりは、獨酌に限ると思つて斷つたが、先方は承知しない。

「そんなに嫌はんとお酌させて貰ひまつさ。東京の奥さんに叱られるやうな女子やおまへんさかい。」

三田はぐいぐい飲んで、飯を濟ませた。

其日も全く暮れてしまつた。停車場を中心にした燈火の町は一層光り輝いて、遙に澄んだ大空に反映して居た。彼は數年間外國を經廻つて居た間に屢々經驗した郷愁に似た感じを、その夜の景色の中に浮べて居た。

「御風呂があきました。おもての廣間に、お客さんが仰山來やはるさうにおますさかい、さつさ

とお入りにならんとうるさうおまつせ。」

三田は手拭を引つかむと、直に女中の後について出た。

湯殿の中は朦朧として、澤山の人間が入つた爲めに、腐つたやうな臭氣を立てた湯氣が、いつぱい籠つて居た。やめようかなと思つたが、案内して來た女中の手前、今更三階迄引返す事も出來ないので、忌々しい感じにわくわくしながら、やけに素裸になると、手荒く全身に湯を浴びて、石鹼と脂肪の玉になつて浮いてゐる湯の中に飛び込んだ。

暫時すると、入亂れた足音と話聲が近づいて、五六人の男が一時に侵入して來た。

「すいとる、すいとる。」

云ひながら、縕袍を脱ぎ、しやつを脱ぎ、股引を脱いで入つて來た。

「や、どつこいしよ。あゝいゝ氣持だ。矢張日本が一番氣樂だね。」

「さうさ。これでいゝ嬶でも見つかりやあ尚更だぜ。」

大きな聲で笑ひながら、先客の三田を見て、その笑ひの仲間入をして貰ひ度い風だつた。

「みんな亞米利加から遙々女房を探しに來た連中なんです。」

その中の一人は、早くも三田に話かけた。

今朝神戸に上陸したが、今夜は大阪で一杯飲んで、明日は別れて各々の故郷に歸り、又來月の船で一緒に彼地に行くのだが、それ迄に女房を探すのだといふのであつた。

「君なんざあ御存じないでせうが、合衆國では働きさへすりやあ金はいくらでも入りまさ。その癖、飲む博つ買ふで溜りつこはありやあしない。矢張女がなくちや眞當な根性てものは起りません。人間、女程難有いものはありませんからねハハハ……」

又しても高々と笑つたが、澤山の人間が動く度に動搖する爲め、湯氣の臭氣は愈々非道く、三田は胸が惡くなつて來た。

「どうかい、奥さんをお探しになるやうに祈ります」

いひ殘して、彼は湯船を出た。

「サンキユウ、サア。」

頓狂な聲で、中の一人がこたへた。

三田は、湯に入つた爲めに、かへつて體が汚れたやうな氣がして、頭からざあざあ水をあびた。

一の四

三階に歸る途中、又五六人亞米利加歸りらしいのと、梯子段の眞中で出喰した。

自分の室には、ちやんと床が敷いてあつた。糊の堅い白い布で完全に包まれた枕と夜着に安心して、彼は其の上に横になつた。

廊下を距てたおもて三階の廣間の方は、非道くざわついて居た。梯子段を上つたり下りたりする足音と一緒に、盃洗に盃の觸れる音が聞こえた。

東京を立つ前は、毎晩々々友達と飲み歩いて居たので、體を横にすると、流石に疲勞は遠慮なく襲つて來た。遠くに汽笛の音を聞きながら、彼は何時の間にかうとうととした。

誰かに起されたやうな氣がして、目が覺めたが、誰も其處には居なかつた。そのかはり、想もかけない三味線が、多勢の笑ひ聲にまじつて聞えて來た。

宿屋の三階で、三味線を彈いて騷ぐ奴が居ようとは、全く意外だつた。三田は、思はず知らず半身を起した。

　やすきせんげんなのでたところ

　しやにちざくらにとかみやま

調子はづれにうたふ男の聲に、無理に合せる三味線がしどろもどろになつて、五六人が出たら

めに手拍子を打つのともつれて來た。

The sun shines bright in the old Kentucky home,

'Tis summer the darkies are gay,

突然甲高い男の聲が、わざと氣取つた舌たらずの發音でうたひ出した。安來節も終ひに近づいて居たが、そのおしまひになるのを待兼て、押かぶせてうたひ出したのだ。すると、安來節の方も止めないで、負けるものかといつた風に、又一段と聲を張れば、愈々調子をはづしてしまつて、三味線は遂々追つく事が出來なくなつた。五六人の女の一齊に笑ふのが、一際騷々しく家中に響きわたつた。

「あれえ、姐ちやん。」

男の惡ふざけに、救ひを求める若い聲が、障子を震はせたと思ふと、男と女の足音が入り亂れた。

三田は、厠に行くのにかこつけて廊下に出た。とたんに向ふの室の內側から、襖にぶつかる音がして、手荒くあけて逃出して來た藝者があつた。薄暗い廊下に、華美な色の紋つきの裾を曳いて、紅い蹴出の間から、土踏まずの無ささうな白足袋の足をへたへた踏んで、長い廊下を五六間駈出した。ふりかへつて見ても誰も追かけて來ないので、厠の前の壁にもたれてほつと息をつい

た。

「おゝしんど。」

通りすがる三田に聞けがしに呟きながら、帯の間から懐中鏡を出して、亂れた髪に細い手をあげた。

用事を濟ませて出て來ると、今の藝者は未だ其所に佇んだまゝ、一生懸命白粉紙で小鼻のところをこすつて居た。

三田は素知らぬ顔をして、自分の室に入らうとしながら、その藝者の逃出して來た襖のあいたまゝになつて居る間から、あかるい廣間の光景を一べつした。

Then my old Kentucky home good night,

歌の切目に近づいて、わめいて居た一人の聲が息切のしたやうに詰つて途切れた。と思ふと、殆どそれがその仲間全部の合唱だらうと思はれる多勢の聲が湧き返つた。

Weep no more my lady, oh, weep no more to-day;
We will sing one song for the old Kentucky home,
For the old Kentucky home far away.

一齊に拍手が起つた。
亞米利加歸りの一團がお膳を並べて居る間に、藝者の衣裳のけばけばしさが、幻燈のやうに見えた。誰かしら男同志で抱合つて、舞踏(ダンス)の眞似をしながら、下座(しもざ)から床の間の方に、ぐるぐると輪を描いて進んで行くのも見えた。

一の五

三田は又寢床の上に仰向になつて、徒らに天井を見詰めて居たが、騷ぎは何時迄も止まないので、眠らうとしてもなかなか眠れなかつた。
夜が更けて、流石に騷ぎ疲れたのであらう、鳴物も聞えなくなり、藝者も歸つて行つたらしく、時折惰性でうたふ歌の節が、ものうく聞えるばかりだつたが、不意に元氣を盛返したやうに、亞米利加組は一齊に手を叩いて女中を呼んだ。
廊下に出て來た世話人らしい醉つた聲と、女中の問答をきいてゐると、これから遊廓に行く相談が始まつて居るのだつた。
「そんなら松島迄人力車(りんりき)云ひまんの。おいくたり。」

「みんなだ。十三人だ。大急ぎだぜ。」

さう云つて引返したと思ふと、號令をかける聲で叫んだ。

「諸君、敵は松島方面にあり。突貫ッ。」

湧かへるやうな拍手が又起つた。

「えらいこつちや、えらいこつちや」

一段々々梯子段を下りながら、女中のつぶやいて行くのが聞えた。

Onward Christian Soldiers ! marching as to war, ……

間も無くその一團は、口々に何かしらわめきながら、中には讃美歌を歌ふのもまじつて、醉拂つた足取で、階下(した)に下りて行つた。三階の宿屋はしんとして、遠くの空に汽笛が聞えた。

翌日、三田は會社を休む事にして、下宿屋か、下宿屋と同じ程度の月極(つきぎめ)で置いて呉れるやうな宿屋を探す事にした。一刻も早くおちつかなくてはならない。宿屋に藝者が來て、遅く迄騒がれては到底(とても)勉強は出來ない。三年か、五年か、何年ゐる事になるかわからないが、兎に角此の大阪に居る間は、知人も少く、身よりも無いのを幸に、一生懸命に勉強しようと考へてゐるのだから、どうしても靜な一室が必要だ。日當りのいゝ下宿を探して、他人にわづらはされる事無く、一人

机に向つて、兼々腹案のある長篇小說を書かうといふ、それが唯一の樂みだつた。彼は、昨夜の三味線と、安來節と、Old Kentucky Home と、藝者の悲鳴を想ひ出しながら、今日にも此の宿屋を引拂ひ度いと思つた。

食事を濟ませて、近所で買つて貰つた鼻緒のゆるい下駄を穿いて、玄關先の石疊を往來に出る時、西の方から十數臺の人力車が、勢ひよく此の横町に曲つて來た。車の上には、宿屋の縕袍を着た亞米利加團が、眩しさうに朝日に照らされて乘つてゐた。

往來に出るには出たが、下宿屋の心當りは勿論無かつた。誰かの小說に、女の事でしくじつて、東京に居られなくなつた若い相場師が、堂島裏の下宿屋にくすぶつて居る場面のあつた事丈が心に浮んでゐた。堂島の下宿といへば、既に何となく騷々しい感じはするが、川に近い町だと想像してゐたので、水の好きな三田には、存外いゝ處らしくも考へられた。

電車道へ出て、町角の煙草屋で道を訊くと、堂島は思つたよりも近かつた。ぶらぶら歩いてゐるうちにも、宿屋は澤山あつたが、どれもこれも立派過ぎて、到底乏しい月給では一週間もむづかしさうなものばかりだつた。下宿屋といふと、これは又上方風の薄暗い、日の目も見ない家造が、どうしても机を据ゑて本を讀む人間には住めさうもなかつた。あの小說の主人公も、相場に

も愈々失敗して、はでな遊蕩(あそび)をした昔を想ひかへしながら、くすぶりかへる筋だつたが、そんな廻り合せの悪い者でなければ住めさうもないところだつた。それでも二三軒は上つても見たが、何處も同じ天井の低い二階で、濕つぽい疊が足の下で、いやな音をさせて鳴つた。

一の六

ぐる／＼歩いてゐるうちに、何時の間にか、昨日停車場から乘つた人力車で通つた橋の袂に出た。其處から先には下宿なんかありさうもない景色なので、方角を變へて電車道を突切つて、細い通に入つて行つた。珍しく草つぱの空地(あきち)があつて、子供が護謨毬(ゴムまり)を投げあつてゐたが、其の空地を二階から見下す位置に、小體(こてい)な宿屋があつた。赤い硝子に、杉の家と白く抜いた軒燈の出て居る格子戸の中は、一二間飛石が置いてあつて、安物の植木鉢も並べてあつた。

三田はその玄關に立つて呼鈴を鳴らした。ヂヂヂヂ……と奥の方で鳴るのは、押してゐる手に響くやうに聞えながら、取次はなかなか出て來なかつた。二度三度呼鈴の象牙の頭を押して待つた。

手ごたへはありながら返事がないので、ぼんやりして青い空を流れる煤烟を見てゐると、音を

させないやうに障子をあけて、丸髷の女の顔がのぞいた。うさん臭さうに三田の立姿をぢろぢろ見る目には、來意をいぶかる表情がはつきりして居た。
「私は東京から來た者で、永く泊めて貰ひ度いと思ふんですが。」
三田は帽子に手をかけて、何となく先方の親みの無い態度に氣臆を感じながら云つた。
「室は空いてゐませんかしら。」
「へい、あいてゐないといふ事も御座りませんが、永くとおつしやいますと、一週間か十日――もつと御滯在にでもなりますので。」
「いゝえ、氣に入れば半年ゐるか一年ゐるか――三年五年お世話になるかもしれないんです。こつちで會社に通ふんだから。」
「へえ、おつとめで。」
女房らしい其の女は、流石に障子をすつかりあけて、疊に膝は落したが、矢張り三田を見上げ見下すばかりで、さつぱり埒があかなかつた。
「兎に角室を見せて貰はうぢやないか。」
此の程度の家ならば、月極にして、どうかかうか暮しが立ちさうな氣がしたので、三田はづか

づか上つてしまつた。
「なるたけ日當りのいゝ室がいゝね。」
「へえ。」
女は多少まごついた形で、それでも今更止むを得ないで、廊下を奥に案内して行つた。
狹い中庭を挾んで、二棟になつてはゐたが、間數は二階を合せても澤山はなかつた。古びた木材もお粗末で、掃除も行屆かず、或る室には果物の皮や紙屑がちらかつたまゝになつて居た。
月極といふ事にして値段をきくと、
「あたしとこはお母さんと二人でお商賣をして居りまして、そのお母さんが折惡う留守におますので……」
何となく氣のすゝまない口ぶりで、結局、はつきりした事は云へないと云ふのだつた。それでも無理に大概の見當をきくと、三田が考へたよりは高い事を云つたが、それでも其の位なら、どうにか懷の具合はつきさうだつた。
「どうも少し西日が強さうだが、此方の狹い方の室にして貰はうかしら。」
少しでも安い方にしたいと思ひながら、もう其處に旅鞄を持込む事を考へてゐた。障子をあけ

ると、空地を見晴らす四疊半だつた。
「へえ、まあお値段のところはその邊と思ひますが、何分お母さんがをりませんので。」
女房は同じやうな煮切らない事を繰返して手を揉んだ。明かに斷りたい様子だつた。何故そんな様子をするのかしらないが、見くびられたか信用されないか、どつちみち面白くなく思はれるので、たつてもその室が執心だと云つて困らしてやりたい氣になつたが、又一方には、後になつて、母親といふのが歸つて來ると、忽ち法外な値段を吹かけられさうな不安も感じた。豊かでない懐の爲めに、どんな恥をかゝないとも限らないと思ふと當惑した。彼は中庭の眞中にあるちひさい瓢箪池に泳いで居る金魚に目を落しておもひ迷つた。

一の七

その時、中庭を距てた向ふの小座敷の障子があいて、寢衣のまゝの若い男が、楊子を銜へて縁側に出て來た。思ひもかけない人間の視線にでつくはして、吃驚して、又座敷にかへりさうにした時、後から、華美な長襦袢のしどけない女が、もたれかゝつて男の肩に手をかけた重みで、よたよた縺れて縁側に出た。女は一層驚いた風だつたが、女に特有の度胸を据ゑて、次の瞬間には、

さも何でもないと云つた風で、その癖三田の方をぢろ〳〵見ながら、逡巡してゐる男を促して、湯殿でもあるらしい方に姿を消した。

女房はさりげない顔をして居たが、三田は動悸がして顔が赤くなつた。こいつは連込み専門かなと思つた。先刻(さつき)からの相手のすゝまない心持がわかつた氣がした。

「では、君の方でもお母さんて人が歸らなくちやあ、しつかりした返事は出來ないといふんだから、私の方でも考へて置いて、後で電話をかける事にしよう。」

もう駄目だと思ふと、狼狽(あわて)て廊下を玄關に出て、下駄を突かけて戸外(おもて)に出た。格子の外で振返ると、丸髷の女房は細目にしめた障子のかげから、後姿を見送つてゐた。

宿にかへると、留守の間(ま)に會社から二三度電話がかゝつて來たと云ふので、直に此方からかけて見た。

「あゝ三田さんですか。私は妹尾(せのを)ですが、お宿は見つかりましたか。」

電話に出たのは庶務係の老人だつた。

「見付からない。あゝさうですか。それでは此方に一寸心當りがあるのですが、御覧になりませんか。會社の出入の印刷屋が教へて呉れたのです。場所は天滿橋(てんまばし)を南へ上(あが)つたところで――わか

りませんか。かうつと、高麗橋筋と云つても御承知ありますまいし――さうです、お城のねきです、お城の。」

高臺の靜かな高等下宿で、おもに銀行會社商店などに勤める人が止宿してゐるといふ話だつた。値段はよくはわからないが、學生下宿とは違ふから、多少高いかもしれないと云ふ注意も聞いた。

「どうも難有う。兎に角早速行つて見る事にしませう。」

三田はお城の近くだといふのが氣に入つて、これは屹度いゝ下宿に違ひ無いと思つた。晝飯を喰べると、もうおちついては居られなかつた。天滿橋を南へ上つたお城のねきだといふ見當を、大凡地圖でつけて宿を出た。

行過ぎる電車の中に、天滿橋行といふのがあるので、追かけて飛乘つた。四つ五つ停留場を過ぎて、川上の遠く霞んでゐる長い橋を素晴らしい音を立てゝ渡ると、其處が終點で、その橋が天滿橋だつた。目の前の坂を上るのが、卽ち南へ上るのだらうと思つた。

恰度坂を上り切つた角の酒屋の前に、生れて間もない赤ん坊をねんねこでおぶつた丸髷の、若いおかみさんが日向ぼつこしてゐた。少しそばかすの出た面やつれのした顔に日の光を浴びて、一皮下の血の色が透いて見えるのが、口の中で子守唄をうたひながら、體を左右に搖振つて、背

中の子を寢かしつけようとして居るのだつた。

「一寸伺ひますが、此の近所に權堂といふ家はありませんか。」

「權堂何といふ家で御座いまんのん。私とこも權堂と申しますが。」

おかみさんの顏には、見馴れない旅人の、きゝ馴れない言葉つきを珍しがる色が浮んでゐた。

「下宿屋です。」

「あゝ、そんなら彼處のお風呂屋の前のうちです。」

氣輕に店頭を離れて、赤ん坊のお尻に廻して居た手を延して指さした。

「彼處に子供が遊んでゐますやろ。あのうちです。」

「難有う。」

三田は帽子をとつて挨拶して別れた。

一の八

兩側ともしもたやが多く、その間々に、足袋屋、煙草屋、文具屋、駄菓子屋、床屋、などがあつて、恰度大きな學校の手前の湯屋の前に、宿屋が二軒並んでゐた。御旅館雪本といふ、今朝の

杉の家と同じやうな赤硝子の軒燈の出たうちと、高等御下宿城西館權堂ろくと女名前の看板の出てゐる家だ。どう見ても、雪本の方が上等だつた。門口に立つ柳の枝の、長く垂れてゐる下に、打水のしてあるのもいゝ氣持だつた。

片方は上方風の、往來に面した室には、障子の外に格子のはまつた、しもたやづくりで、門口には止宿人の、本籍地と氏名を朱で書いた、黑塗の札が並べてかけてあつた。

自分の名前も出されるのかと思ふ丈でも氣が重くなつた。勝手口の暗い土間を覗き込んで佇んだ。足下の往來では、砂に圓を描いて、お河童の子が二人で、ごみかくしをしてゐた。

その一人は、疑深い様子で、三田の大きな外套姿を見上げて、砂を掻く手を休めたが、急に立上つて、門のなかの、僅ばかりの敷石に下駄の齒をきしらせながら驅込んだ。氣がついて見ると、酒屋のおかみさんは、また向ふの角に立つて、此方を見てゐるのだつた。三田はつかつか門の中に進んだ。

左手の玄關には、今驅込んだ女の子が、半分あけた障子につかまつて、物見の形で覗いて居た。鼻垂しの小ましやくれた様子が、小憎らしかつた。

「お母ちやん、誰やら來てはる。」

土だらけの指を銜へた口の中で、奥の帳場の人を呼びながら、白目勝の、少し見當の違つた眼で、ぢいつと此方を見詰めてゐる。

「ちえッ、又やりやあがる。」

思はず知らず、三田は睨みかへしてやつた。一體人好のよくないたちなのに、不思議に子供には好かれる三田だつたが、好かれる迄のちよつとの間は、又恐ろしく怖がられた。ぎよろりとした目の玉が、他の人よりはまばたきの度數の少い特徴を持つてゐて、そいつが兎角たたるのだつた。曾て或る有名な、夫妻揃つた詩人の家を始めて訪問した時、未だ六歳位の男の子が、母親の詩人の肩につかまつて、客の顏にぢいつと見入つてゐた。

「お母さん、あの人の眼怖い眼。」

母親の耳にささやきながら、その怖い眼を指さした。女流詩人は眞赤になつて、肩につかまる子供の手を、たしなめる積りで握りしめ、それでもばつが惡いので、兩手で膝に抱上げて、懷に入れて頰擦りしながら、矢張りその怖い眼をぬすみ見た。同じ經驗を其後も屢々繰返したので、お河童の子の樣子を見ると、どうしても、又來やあがつたなと思はないわけには行かなかつた。

「お母ちゃん誰やら來てはる。」

二度目に子供が叫んだ時、母親であらう、奥の方で答へる聲がして、崩れかゝつた丸髷の、干乾びた四十女が、前掛で濡手を拭きながら出て來た。

一の九

「へいお出でやす。」
「あき間はありませんか。」
「へい、あんたはんが御泊りで御座いますか。」
云ひながら、子供と同じ白目勝の目で、遠慮氣も無く、三田の頭から足の先迄見上げ見下した。
「さうです。私です。東京から來たばかりなんだが、なるたけ靜かで、日當りのいゝ室が望みなんです。」
「さあ、お氣に入りまつしやろかどうだつしやろ。」
氣の無い返事をして、女房は矢張り白い目を光らせて居る。
「兎に角あき間があるなら見せて下さい。」
三田は構はず下駄を脫いで上つた。

「どうぞお上り。」

やうやく先方も立上つて、とつつきの梯子段を、先に立つて上つて行つた。女の子も後からくつついて來た。

往來に面した表二階の四疊半と、奥の八疊が只今あいてゐる室だと云つた。四疊半の方は往來が近過ぎてやかましく、向側の小學校の唱歌が、脅かすやうに響いて來た。

八疊の方は光線の入らない暗い室で、次の六疊との境が、釘づけにした襖一重だつた。その唐紙も疊も古び汚れ、梅雨期（つゆどき）のやうな濕つぽい感觸があつた。

「もう外にはあいてる室はないのですか。」

「へい、只今はなア。」

「それぢやあ近日あくあてでもありますか。」

それでなければおしまひだと思ひながら訊いた。

「さあ、離室（はなれ）のお客さんが近いうちに、東京へ歸りはるさうにも聞きましたが、どないでつしやろ。あかん事もあるまいと思ひますけどな。」

煮切らない返事をしながら、縁側の障子をあけると、狭い中庭を距てゝ、目に迫るやうに、新（しん）

廷の二階が見えた。
「あれが離室ですか。」
「へい、つい今年の春建てましてん。其處の廊下からずうつと行けまんので。」
「あすこは良さゝうだなあ。あれがほんとにあいて呉れゝばいゝんだが。」
六疊と三疊の二間續たといふその二階には心をひかれた。締切つてある障子に當る日の色迄、薄暗い此方の八疊には、望んでも得られないものであつた。
無表情な女房は、白い目をうろうろさせて居るばかりで、世間的な會話は不得手らしく、默りこくつてゐる。その袂につかまつて、鼻をすゝりあげてゐる女の子は、何時迄たつても三田の顔から視線をそらさなかつた。やめようかしらとも思ひながら、騒々しい今の宿屋の三階には、財政上からも、何時迄もゐられない事を、三田は頭の中で忘れなかつた。
「それでは、あの離室の二階かあいたら、外に望みてがあつても、屹度私が入れるといふ約束で、それ迄此の八疊で辛棒しようかしら。」
「へい、そないしてもらひましよか。」
折柄階下で赤ん坊のけたゝましく泣く聲が聞えた。

「やゝ子泣いたる。」

女の子は、始めて三田を見詰める事をやめて、母親の方をかへりみた。女房は泣聲に氣をとられて、既に廊下に出て梯子口にかゝつてゐた。

「それではと――明日から來てもいゝでせうね。」

「なんどきでも。」

晝飯は一切抜く事にして、一箇月の宿泊料を割引して貰ひ、夜具蒲團自分持なら、その上に又割引くといふ事もきかされて、三田は明日を約して別れた。

一の十

次の日、三田は三階の宿屋を引拂つて、天滿橋を南へ上るお城のねきの下宿に引越す事になつた。大鞄を人力車に積んで、自分は手ぶらで車夫と並んで歩いて行つた。

今日も亦昨日と同じ相手とごみかくしをして居たお河童は、三田の姿を見ると逃げるやうに門内に驅込んだ。

「お母ちやん、昨日のお客さんきやはつた。」

赤い鼻緒の下駄を引くりかへして、玄關から奥に叫びながら消えた。取殘された相手の子は、門の柱につかまつて、こいつも三田の後姿を、さも珍しさうに見てゐた。

「ようおこし。」

女の子に袂にぶらさがられながら出て來たのは、娘とも女中ともつかない若い女だつた。

「お梅ちやん、これ昨日のお客さん。」

口に銜へて濡れたまゝの指をさして、女の子はやぶ睨の目を上げて三田を見た。

「どうぞお上り。」

お梅ちやんと呼ばれたのは、車夫の手から手提鞄を受取つた。

「大きい鞄はのちに運びますよつてに、玄關にあげといて貰ひまつさ。」

「そんならこれでよろしゆおまつか。――へい大きに。」

車夫は額の汗を拭きながら、手の平に銀貨を受けて歸つて行つた。

二階の八疊の薄暗い床の間をしよつて、三田はおちつかない居所を定めた。づしんづしん音をさせて、大きな男が、お梅と二人で大鞄を運び上げて吳れた。

「えゝ、私かあるじで御座います。」

めくら縞の筒袖に前かけをしめた、いやに色の白い、ぶくぶく肥りの男は、膝つ子をはみ出させて坐りながら挨拶した。
何處に勤めるのか、永く居て吳れるのか、大阪は初めてか——といふやうな、きまり切つた話を長々として行つた。
三田は、机の無い室の頼なさに、直にも買物に出なければならなかつた。來る道で見た三越に行つて、安物の机を註文し、手廻の物を整へ、その足で會社にも顏を出した。兎に角居場所もきまつた事を報告すると、
「へえ、下宿屋でお晝飯ぬきで三十圓。驚きましたなあ。」
と妹尾老人は驚嘆した。
夕方、湯に入るのを樂みにして下宿に歸ると、
「えらい濟まへんが、私とこはお風呂場はおますけれどお風呂は沸せしまへん。お向ひがお風呂屋さんで、皆さんはいりにいて吳れはります。」
茶道具を運んで來たお梅が、言ひにくさうに斷つた。
「旦那はん、御酒あがつてだつか。」

「貰ひませう。」
せめてもの酒を樂みにして、留守の間に居いて居た新しい机に肱をついて、本を讀むには難儀な位光力の弱い電球の、しかも煤けて曇つた下で、三田はうそ寒い下宿のはかなさを、早くも身に沁々と感じてゐた。

一の十一

暫時して、梯子段を上る足音と一緒に、皿小鉢の物に觸れる音が聞えた。お梅がお膳を運んで來たのだなと思ふと、二皮目のくりくりした、頬邊の赤い、癖髮の女の樣子がはつきりと想像出來た。終日歩き廻つた空腹に期待を持つて、その癖知らん面をしてゐると、
「御免やす。」
と咽喉に絡んだ聲で、襖をあけて入つて來たのは、見上げるばかり脊の高い、横幅も充分な婆さんだつた。
「御待遠さんで御座いました。そのかはり、このばあさんが、えゝお燗つけて來ましたぜ。」
三田の膝近くお膳を押して來た。

「始めてお目にかゝります。私がこの家のあるじ、權堂ろくと申します。何分よろしう。」

しやがれた聲なのに、妙にねばり強く、無理にも聽手の耳に押入らなければ承知しない調子が、非道く不愉快だつた。

「私は三田です。」

「三田さんだつか。はて、それにしては見た事が無いオアハハ……」

分厚な齒ぐきをさらけ出して、男とも女ともつかない中性の笑聲で、大きな腹を搖つた。

「ひつれいな婆や思うてだつしやろ。さ、機嫌なほして酒ひとつオアハハ……」

苦り切つてゐる三田を見下すやうに坐つて、お銚子を取上げた。

「私ならお酌には及びませんよ。手酌の方が勝手です。」

持前の切口上で、三田は眞四角に坐り直した。

「そんな事いはんとお上りやす。」

二の腕迄もあらはに手を延して、お膳の上にのしかゝつて、益々膝を乘出して來るので、三田は壓伏されて盃を取つた。

「ほんとに私は手酌の方が好きなんです。自分の飲み度いと思ふ時に飲めるし……」

思ひ切り惡く、辯解がましくいふのにおつかぶせて、
「これが若いえゝ女子やつたら、旦那はんかてお酌斷るいふ事あれしめへんやろ。あてがこないな姿でおますさかい、えらう嫌いはる。これでもな、鶯啼かせた昔もおまつせオアハハ……」
しちくどく駄洒落を並べ立てゝ、一人で悦に入りながら、こぼこぼと音をさせて、先づ盃に酒をみたした。
「えゝお燗たつしやろ。あても御酒が何より結構でおましてなあ、毎晩頂きますよつて、お酒は吟味して居まつせ――よろしうおまつしやろ。」
たゝみかけて強ひられても、口にふくんだ酒の味は、舌の尖に強く、惡甘く感じられた。
「さうかなあ、私の口には少し甘過ぎるけれど。」
「何いうてはりまんね。甘過ぎる事あれしまへん。」
「好々だからね。一體何ていふ酒なんたらう。」
「金露だんが。金露いうたら、泉州堺で出來る一等のお酒だつせ。博覽會やら何やらで、御褒美貰ははつたお酒だつせ。」

一の十二

婆さんは、口の中を唾でいつぱいにして、あく迄も金露の優秀を說いた。だぶ〳〵たるんだ兩方の頰邊から、はれぼつたい目のふち、大き過ぎる癖に餘り高くない鼻、殊にそのだらけた體つきが、妙にいやらしく不愉快だつた。黑々と染めた髮と、極端に蒼黃色い皮膚の色も胸が惡かつた。

これが表の看板にも名の出て居る人間だとすると、先刻大鞄を二階に運び上げて、自らあるじと名のつた男は何だらう。膳の上の、五切ばかり並んでゐる白身の刺身の皿と、半ぺんと青味の浮んでゐるおつゆと、煮豆の小鉢の配列を、心寒く思ひながら、三田は重ねて金露を味つてみた。味と香と品といふ、酒の批判の標準から、どうしても一等賞には考へられなかつた。勿論酒の銘は必ずしも信じ難く、僞物の多い事はどの酒でも同じだが、それにしても現在口にふくむ金露は、うつかりすると頭に來さうな脅迫觀念を伴ふのであつた。

「それにな、私とこは近くに酒屋の親類がおましてなあ、金露の本元から直接に取寄せて賣りますよつて、金露も金露、ほんまの金露だつせ。」

相手が如何思はうとも頓着無く、婆さんの口は愈々滑かだつたが、三田は其の話に誘はれて、

昨日此の家を尋ねて來た時、角の酒屋の若いおかみさんの背景に、金露の樽のあつた事を思ひ出した。しかも同じ權堂だと、親類はあれに違ひ無いと思つた。

「あゝ、あの綺麗なおかみさんの居る家ですか。」

と口の先迄出かゝつたのを堪へて、又盃に唇をつけた。

何となく、あのおかみさんが親類だといふ事が、樂しい事に思はれた。

一本のお銚子はあけたが、ぷんと來る臭を持つた刺身は、一切丈鵜呑にしたゞけで、御飯は味も無く、寧ろ苦しんで一ぜん喰べて箸を置いた。

「御酒もたんとはあがりませんな。」

「えゝ、毎晩一本で澤山。」

「お菜がお口に合はんと見えて、ちよつとも上つてやおまへんな。一ぜん御飯は縁起が悪い云ひまつしやろ。」

「縁起が悪くても爲方が無い。飯粒はあんまり好きでないんです。」

「旦那はん、飯粒たら云ふと罰が當りまつせ。けどなあ、下宿屋さんは大喜びやオアハハ……」

婆さんは笑ひながら、三田の押やるお膳を手元に引寄せたが、お銚子を逆さにして、底に殘つ

た酒を盃にしたんで、ちゆつと音をさせてすゝつて、袖口で唇を拭いた。

「よろしうおあがり。」

頭を下げながらお櫃を抱へて、裾を亂して立上ると、その儘廊下に出て行つた。襖をしめて、梯子段を下りて行く足音を聞きすまして、三田は思はずしらず吐息をもらした。

飲んだ酒がさめて來ると、下宿の二階は身に沁みて寒くなつた。申譯ばかりの埋火に手をかざしても、何處からか吹いて來る風が襟元に觸つて、ぞく／＼する。ふと氣が付くと、廊下の方の欄間には障子が入つてゐないので、玄關から梯子段を上つて來る往來の風は、いやでも應でも此の八疊に吹き込まなければならないのだつた。

三田は幾度となく嚔をした。

一の十三

東京の父母、兄弟、姉妹、友達に、新居の所在を知らせる葉書を書いて居ると、お梅が上つて來た。

「旦那はん、お床をとりまひよか。」

人なつつこさうな二皮目をしばだゝきながら、心持首をかしげて訊いた。
「あゝ、何もする事がないから寢てしまはう。」
三田は此の人のよささうな女には、氣が置けずに口がきけた。
「お寂しうおまつしやろ。」
氣のない聲でうけて、直ぐに押入から夜具を出した。粗い井の字がすりの薄つぺらな敷蒲團には敷布も無く、たつた一枚のかけ夜具も、夏の物にも及ばない程で、こちこちの枕が其處にころがつてゐるのを見ると、三田は全く風邪を引いた氣持になつた。
「おやすみ。」
お梅は叮嚀に挨拶して出て行つたが、三田は何時迄も机の側を離れる勇氣がなかつた。
それでも寒い室の中で、ぽつねんと坐つてもゐられなくなり、大鞄の中から外套や二重廻しを出して上にかけて、蒲團の中に身を橫たへた。首筋に枕は堅く、敷蒲團は背骨に觸つて寢苦しかつたが、それよりも堪らないのは、いろんな臭のまじつた夜着の襟であつた。埃臭く、汗臭く、煙草臭いやうでもあり、髮油の匂もまじり、白粉の古びた香さへかぎわける事が出來た。三田は涙ぐんだ目を固くつぶつた。

それでもなか〳〵眠れなかつた。うと〳〵しかけた頃、襖一重隣室の客が歸つて來た。

「いやどつこいしよ。」

留守の間に敷いてあつた床の上に、胡坐でもかいた様子で、がさ〳〵音のするのは夕刊でも擴げて居るらしかつた。直に後から梯子段を上つて來る者があつた。

「や、難有う、難有う。お梅ちやんにかぎるぜ。」

わざとらしく音をさせて茶をすゝるのであつた。

「あゝ疲れた疲れた。年をとるとかなはんわ。一日中町を歩き廻つて、足も腰もいふ事をきかんやうになつてしまつた。お梅ちやん、あんじよう揉んでおくれんか。」

大阪でも東京でもない、ぎごちない聲だつた。

「いやあ、わるさしたらいやだつせ。お隣にお客さんやすんではりまんが。」

「誰が居たつて構ふもんか。」

「あれえ、聲出しまつせ。」

「聲立てたかてかめへん。」

手をとつて抱きすくめたのか、新聞紙の上に倒れかゝる物音に續いて、

ふと、
「いやあ。」
身をすくめたやうな、咽喉のつまつたやうな、お梅の聲がせはしく聞えた。どたばたしたと思ふと、
「ハハ、、、、折角按摩を頼まうと思つたのに。」
太い男の冗談笑の中を、ばたばた逃げて行く女の足音が、やがて梯子段の下の遠くに消えた。
三田は胸がどきどきして、愈々寢られなくなつた。
翌朝は早くから目が覺めた。階下の洗面場の暗いのと、狹いのと、汚いのには閉口してしまつた。
外のお客は、みんな朝湯に行つて、其處で、うがひもすれば顏も洗ふのだと聞いたが、生れてから町の湯に行つたのは二度か三度しかなく、他人の前で裸になる習慣を持つてゐないので、どうしても氣がすゝまなかつた。
食事を濟ませ、洋服を着て、三田は會社に出て行かなければならなかつた。それがこれから毎日——恐らくは二年も三年も、繰返すべき生活であつた。

二の一

下宿屋城西館の持主權堂ろくは、亭主に死別れて十年になるが、殘された小金を資本にして始めた下宿屋も、今では名義人になつて居るだけで、弟夫婦の經營に任せ、そのかはりに月々極つた金を取上げる約束になつてゐた。

弟といつても異腹の弟で、二人共めい／＼の母親に似た爲めに、顔の格好にも目鼻の見當にも、似たところは見出せなかつた。おしやべりで、酒飲みで、自分でも下手な義太夫の三味線位は彈ける婆さんとはうつて變つて、弟の方は酒も飲まず、遊び事も好かない、だんまりで、月々二度はかゝさずに、生駒の聖天様にお詣りする外には、何の道樂も無いのだつた。

婆さんは口に出して、弟は腹の中で、お互に相手を馬鹿にし切つてゐた。弟にして見れば、近所の銀行に小金を預けて居るばかりで無く、此の下宿さへほんとは婆さんのものなのだから、月々の儲けの中から極つたものを拂はせられるだけでも忌々しかつた。厄介な子供も無く、自分一人で勝手な眞似をして、その癖けちんぼで、自分達には口やかましく干渉するばかりで何もして呉れない。あの婆さへくたばればと思ふ事は度々ある。聖天様におまゐりして、社前で商賣繁昌

を祈る時も、婆さんの死と結び付けて願にかける事もあつた。それなのに此の頃は、兎角自分は氣のふさぐ、體の重い氣持がつゞいて、何となく大病にかゝる前ぶれのやうに感じられるのにひきかへて、達者で風邪ひとつ引かない婆さんは愈々面憎かつた。

婆さんの方は婆さんの方で、自身が一切の利害をしよひ、小言の多いお客に對してつまらない心配をしたり、責任を負はされたりするよりは、弟夫婦に商賣を貸して、確實に貸賃を取つた方が氣樂だと考へて、寧ろ自分の方から進んで約束した話ではあつたが、今になつて見ると、戰爭のおかげの好景氣で商賣は繁昌するし、儲けは以前の倍にもなるのに、やゝもすると自分を厄介者扱ひにし、まるで居候か何かのやうに取扱はうとする相手の根性が、許しては置けなかつた。子供の時分、頭のはちの開いた鼻つたらしで、何をしても近所の子供に負けてばかりゐた弟は、隨分馬鹿にしてゐたのだつたが、それが現に女房子を持つて、此の下宿の主人面をして居るのを見ると、どうしても、のさばらして置けないぞと云ふ氣が起るのだつた。殊に弟が、先年或る大きな工場を持つてゐる石鹼屋の販路擴張係になつて、幾度となく四國路を廻つてゐるうちに出來合つて、うつかり孕ましてしまつたのを、のめのめ連れて歸つた女房といふのが、何から何迄氣が利かなくて、爲る事なす事一々癇癪の種になるのに、そんな女に惚れ切つてゐる弟は、ぢれつ

さういふ時に限つて他人の氣はしないで、自分自身の損のやうに腹が立つのだつた。

は無かつたが、きりやうでもよければ兎に角、やぶ睨では、末始終うまい事もあるまいと思ふと、

たい程見てゐられなかつた。夫婦の間に生れた子供の、二人とも女なのは、決して不平で

二の二

何時迄もこんな弟に、城西館を任せて置くと、自分に萬一の事があつた場合、根こそぎ弟夫婦にさらつて行かれるに違ひ無い。あんな奴等にうまい事をさせて堪るものか——婆さんは此の頃、それぱかりが氣になるのだつた。

そのあげくに、吉野の麓の村に嫁に行つて、澤山の子供を殘して死んだ實の妹の娘のお梅を養女に貰つて、ゆくゆくは此の家を任せ、自分は長火鉢の側で煙草をふかして居る景色を想像して、一昨年頃から頻に掛合つて見たが、田舍者の氣の長さと、遠方に離れてゐる爲めに埒があかず、今年の春は、遂々此方から出かけて行つて談判した。それでも養女に吳れるとは云ひ切らないのを、兎に角人手の無い折柄、手助に借りる事にして、無理やり連れて歸つて來た。

當人もおそろしく氣にして居る癖髮ではあつたが、二重まぶたの目の可愛らしい小作な娘は、

人前に出しても恥しくはなかつたが、如何にもぼんやりしてゐて、人のよすぎるのか、婆さんには物足りなかつた。ゆくゆくは自分の後とりにしてやらうと思ふ腹がある丈、何をさせるにつけても、仕込んでやるのだといふ考へがぬけなかつた。お客の室に長く居る事、――殊に金も無い豣に、女さへ見れば冗談口をきゝ度がる客の室などから、お梅の壓殺したやうな笑聲の聞えて來る時などは、婆さんは默つて聞いてはゐられなかつた。こつそり梯子段の下に立つて、二階の氣配に耳をすます事もあつた。

以前から、女中は屹度一人は居る事になつて居たのだが、婆さんの口喧しさと、喰べる物を十分に呉れないで、御飯のおかはりをすると白い目で睨まれるのに閉口して、大概は一週間か二週間で暇をとつて、此の處一二箇月は、殆ど全く居つかなかつた。

女中に給金を拂ふ心配は無し、飯を喰はれる怖れは無し、此の頃の景氣で貸家は拂底だし、普通の宿屋は素晴しく高し、あらゆる事が下宿商賣にとつて惡くなかつた。物價騰貴をいゝ事にして、客に喰べさせる物は極端に惡くし、おまけに分量もへらした上に、宿料の値上は組合の方で、思ひ切つてやつて呉れたので、實收入は愈々よかつた。どうしても弟夫婦に談判して、もうちつと月々の取上高をふやさなければならないと、婆さんは此の頃その事ばかり考へてゐた。

その頃城西館の客としては、表二階の六疊には、紀州の串本の網主だといふ爺さんが、いゝ年をして花柳病にかゝつたので、病院に通ふ爲めに上阪して、滯在して居た。錢勘定がやかましくて、口小言が多く、婆さんと言ひ争つた事も一度や二度ではなかつた。

離室の階下の六疊には、堺筋の商店に通ふ番頭格の四十がらみの男がゐた。商賣人には似合はないむつつりで、燈火がついてから歸つて來ると、寢る迄新聞の夕刊を讀む外には、滅多に外出した事もなかつた。その二階の二間續きの、此の家では一等の室には、此處三箇月ばかり、東京に本社のある商事會社の社員が、社用を帶びて來てゐた。毎晩々々つきあひ酒に醉拂つて、時には宴會のくづれに何處かへ流れ込んで泊つて來る事もあつた。非道く大きな口をきいて、贅澤らしい眞似をしながら、懐は存外苦しくて、勘定を延ばす癖があつた。

梯子段を上つて直ぐの六疊には、貯蓄銀行の勸誘員がゐた。これが此の家では一番長く居ついた客で、やがて一年近かつた。如何いふわけか女房も子供も岐阜縣の田舍の里にあづけてあつた。酒好きで、晩酌の一銚子にいゝ機嫌になつたり、時々他所で飮んで歸つて來ると、お梅にからかつてしかたがなかつた。その癖世馴れた態度で人をそらさず、婆さんの不平や述懷にも相槌を打つので、存外受けは惡くなかつた。

その隣家の、久しく空いてゐた八畳に入つたのが三田だつた。

二の三

「八畳のお客さんなあ……」

帳場の火の氣の乏しい長火鉢に寄かゝつて、烟管を銜へながら、退屈し切つてゐる婆さんは、臺所で晩の仕度をしてゐる弟に聲をかけた。

「あの三田さんたらいふけつたいな名前の人なあ、愛想氣の無いむつゝりした書生さんやと思うたら、あれでも會社に出てはるのや。」

持つて生れたおしやべりで、無理にも相手を見つけてしやべりたいのに、弟は別段庖丁の手も休めず、何か野菜をさくさく切りながら、

「さうやさうな。」

と氣の無い返事をしたゞけで、流場にざあと水を流した。

婆さんは忌々しさうに、すぱすぱ音をさせて吸つた煙草の烟を、ぶつけるやうに天井に吹きつけた。

阿呆め、女房は炬燵にあたつて、晝寢をしくさつてゐるのに、亭主が臺所で働いてゐる事があるか――と腹の中で弟を馬鹿にしたり、腑甲斐なさを憤慨したりしてゐた。晩秋の日は暮れやすくて、障子は既に暗くなつてゐた。流場の水の音は、愈々忙しなく家の中に聞えるのであつた。

慾ばりぢいさん臼借りて
それで餅をついたらば
瓦や瀬戸かけ
がらがらがらがら

細く黄色い子供の聲と、それに合せて歌ふ低い女の聲と、敷石にきしむ利休下駄の音が聞えて、お梅につれられて遊びに行つた子供が歸つて來た。

「お母ちやん、お菓子ん。」

女の子は玄關に上がると直ぐに帳場に馳込んで來た。お菓子を呉れる母親が居ると思つたら、怖い顏付で睨む婆さんだつた。

「お母ちやんは。」

「お母ちやんは晝間からねんねしてはる。」

婆さんは、奥で樂寢をしてゐる弟嫁に聞えよがしに、取附場もない調子で答へた。その惡意のある態度は、子供にもよくわかつた。

「お婆ちやんの根性惡る。」

下頤を突出して、二つ三つとん／＼と踵で疊を蹴つて、お河童の頭を振亂して母親の方にかけて行つた。

「何ぬかす。ひんがらめ。」

心底からやぶ睨の可愛氣の無いのを憎んで、婆さんは烟管を長火鉢のふちで手ひどくはたいた。

「只今。」

「今日は。」

買物の風呂敷包をかゝへたお梅と、乳呑兒を背中にしよつた親類の酒屋の若いおかみさんが、連立つて入つて來た。

何だ彼だとおしやべりをしあつてゐるうちに、そんな事さへ珍しい出來事かなんぞのやうにお梅がいふのだつた。

「あの二階の八疊のお客さんなあ、一昨日うちへ來やはるとき、むこの辻でおそのさんに權堂い

ふ家は何處や云うて訊ねはつたさうな。」
「へえ、左様か。」
「私が教へてあげたんや。」
丸髷の髱のおくれ毛の、眠つて居る赤坊の顔にかゝるのを氣にしてゐた酒屋のおかみさんも、一膝火鉢の方に乘出して話に加つた。
「あのお客さん書生さんだつか、きつちりした物言ひで――私江戸詞好きやわ。」

二の四

婆さんは、話相手の出來たのに滿足して、ゆるゆると鼻の孔から煙草の烟を立上らせながら一人でうなづいた。
「ほんまに書生々々してはるが、あれでもなんたらいふ會社の月給取や。」
「へえゝ、そない見えへんなあ。大けな體して、こないに歩きはつて、大學校の生徒さんかしら思うた。」
「會社のお勤やつたら、えゝ給金取らはるのやろか。」

別段外に話もないので、お梅も共々に新來の客の噂に身を入れた。

「私かてしらん。」

婆さんは叱るやうな調子で、

「それかつて大概人柄を見たら、わからんいふ事あれへんぜ。一目見て、はゝあこの人は金持や、あの人は信用の出來ん人や――直ぐに見分けるのがこの商賣の一番肝要な所や。八疊のお客さんかつて、大した荷物があるではなし、古い鞄が一つ、穿いて來た下駄も上等の品ではないし、年齡も未だ若し――斯う數へたら大概知れるやないか。」

過去の經驗と年齡の功はこんなものだといはんばかりに、婆さんは一際煙草を味ひ深く吸つた。

「おやおや、しやべつて居るうちに暗うなつた。早よ歸らんならん。」

酒屋のお女房さんは、背中の赤坊のお尻に兩手を廻して、一搖り搖り上げて立ちかけた。

其の時、玄關に靴の音がして、三田が會社から歸つて來た。

「お客さん歸りはつたぜ。」

誰よりも早く氣が付いたのは自分だと相手に知らせる爲めに、婆さんは、大きな聲で怒鳴つたが、矢張り落つき拂つて烟を吹いてゐた。

「お歸り。」

婆さんの聲に促されて、お梅は式臺に出迎へた。

「只今。」

ぶつきら棒に、しかも押かぶせるやうな聲で答へて、靴を脱ぐと直ぐ、わき目もふらずに力のある足取りで、梯子段を踏鳴らしながら二階に上つてしまつた。

「はでな顔してはるな。」

うつかり口に出したのを心がとがめて、酒屋のお女房さんは少しばかり顔を赤らめながら、今更やめられもしないので、思ひ切り惡くつゞけた。

「目が大きうて、鼻が高うて……」

「怖らしい顔だんが。」

あんまり好意を持つてゐない婆さんは、聞捨てには出來ない樣子で、相手の口をつぶらせた。

「えゝ男前いふ事あれへんで。離室のお客さんのやうなんが、ほんまの好男子や。色が白うて、細面で。私がもう一廻りも若からうもんなら、だまつて放つては置かんのやがなあ。」

「いやなお婆ちゃん。」

たしなめながら、お梅も赤くなつて笑つた。
「私はあんな役者見たいな男好かん。白粉塗つて、じやらじやらして。」
「おそのさんは矢張り三田さんがえゝのんか。他所の男に惚れたりして、旦那はんに告げたろ。」
「いやなお婆ちやん。」
酒屋のお女房さんは漸く立上つて、
「歸ろ、歸ろ。」
といひながら、又利休下駄の齒を鳴らして歸つて行つた。

二の五

晩のお膳はお梅が持つて上つた。机に向つて、一生懸命になつて本を讀んでゐる三田は、さも面倒臭さうに坐り直した。
「お待遠さん。」
お銚子を取上げて勸めると、一口つけて、
「はゝあ、博覽會で一等賞を貰はつた金露か。」

存外機嫌よく冗談をいひはしたが、言葉の調子が重苦しくて、小言をいふやうに響くのであつた。

「お口に合ひまへんか。」

「どうも少々甘過ぎる。これ、あすこの角の酒屋から取るの。」

「へえ、うちの親戚になりまんので。」

お梅は一寸口籠つたが、

「あの家(うち)のおそのさんいふ嫁さんが、貴方(あん)さんに道を訊ねられたいうてはりました。」

「あゝ、あの綺麗なおかみさん。おそのさんていふの。いゝ名だなあ、少し義太夫地味(ちみ)るけれど。」

三田の鋭い目尻に、意外に優しい笑皺が浮んだので、お梅も多少氣安く感じて來た。

「若い頃は綺麗におましたけれどな、やゝ児生みはつて、とんとしよむないやうにならはりましてん。」

「しよむない事があるものか。今でも隨分綺麗ぢやないか。」

三田は盃を重ねながら、きれぎれに覺える大阪言葉を興がつてゐた。

「おそのさんも貴方さんを、はでなお顔やいうてはりました。」

「冗談いつてら。」
それつきり言葉が途絶えて、三田は思ひ出したやうに箸を動かして、煮豆を口に運び始めた。
「三田さん、お客さん。」
一段々々梯子段を拾ふやうに上つて來た女の子が、襖の外で呼んだ。
箸を置いて立上つて、づかづか下りてゆく後から、お梅も玄關について行つた。けたゝましい音を立てゝ、門前に乘捨てた自動車が待たせてあつた。
「やあ、三田公ゐたな。」
脊の高い、外套姿の男が、筒抜けの高調子で聲をかけた。
「偉い所に住んでるんだな。どうだ下宿は。」
「どうつて事もないよ。また來たばかりなんだから。まあ上つて見て呉れないか。今恰度飯を喰つてるところなんだ。」
「なんだ、僕も飯を喰ひに行かうと思つて誘ひに來たんだ。くるまも待たしてあるんだぜ。」
「兎に角上るさ。自動車は歸したつていゝだらう。贅澤過ぎるよ。」
「なあに、社のくるまなんだ。」

客は大晦に門の外に歩いて行つたが、自動車に歸れと命じてゐる高調子の聲はよく聞えた。直に自動車は町の遠くに走り去つた。

二階に上つた客の聲は、階下の帳場にゐる婆さんの耳にも聞えた。

「非道え御馳走だなあ。蒟蒻に油揚。煮豆に豆腐か。」

障子を震はせる高笑ひがその後に續いた。

二の六

主人と客は親しげに、お膳を挾んで向ひ合つた。

「どうだい、君の御膳も貰つてやらうか。」

「御免だ御免だ。俺は蒟蒻と蛞蝓が大嫌なんだ。」

「それぢやあ一杯飲まないか。博覽會で一等賞を貰はつた御酒だぜ。」

「よせよ面白くもない。それよりいゝ所へ連れてつて、うまい物を喰はしてやらう。」

とは云ひながら、差しつけられた盃を受けて、お梅の酌ぐ酒を一息に飲んだ。

「いかんいかん。」

大仰に顔をしかめて立上つて、障子をあけて屋根の上に、へつぺつと唾を吐いた。
「こいつあいかん。」
珍しく並びのいゝ、眞白な小粒な齒の間から長い舌を出して、その齒で舌に殘る惡酒の味をしごいてゐた。
「おい、出かけようぢやないか。上方のほんとの酒を飲ませてやるぜ。」
「まあ今度にして呉れ。今日は少し御風邪氣なんだ。御覽の通り欄間が空いてるもんだから、一夜にしてやられちやつた。」
「だつて俺は腹が減つてゐるんだ。」
「だからお膳を出さうつていふのさ。」
「むちやいひよる。社長さんの召上る御膳ぢやあないや。どうしても外に出るのがいやなら、俺は寧ろ饂飩を喰ふよ。素饂飩て奴をね。うめえぞ。」
「それぢやあ、そいつを喰べて貰はうぢやないか。お梅さん近所に饂飩屋ありますか。」
「饂飩上つてだつか。幾ついひましよ。」
「俺は三つだ。三田公は二つだらう。それからついでに、お饅を澤山買つて來て呉れ給へ。」

客は主人の分迄も註文して、それからは高聲(たかごゑ)で、お梅にはわからない事を論じ始めた。
不用になつたお膳を下げて帳場に行くと、婆さんは待構へゐて訊いた。
「あのお客さん何(なん)や。」
「何(なん)や知らんが自身で社長さんやいうてはつた。」
「ふうむ、社長さんか。自動車持つてるのやな。」
婆さんは度膽をぬかれたやうに感嘆して、その客を尊敬すると同時に、さういふ人を友達に持つ三田に對しても多少尊敬の度を増した。
「私(あて)これから饂飩いうて來(こ)んならん。うちの御膳なんぞあかん云うてはる。」
お梅は臺所の下駄を突かけて出て行かうとした。
「饂飩？」
意外な事をといつた風で、婆さんは中腰になつた。
「お梅、お前近間(ちかま)に洋食も御座りますと云うたか。」
「いゝえ、饂飩がえゝ、素饂飩がえゝのやと初手(しよて)から云うてはるのやもん。」
「阿呆(あほ)らしい、お前が氣を利かさんからいかんのや。」

他人事ではないやうに忌々しがつたが、驅出してゆくお梅の下駄の音は、もう既に門の外の往來に聞えた。

二の七

客の田原は三田の學校友達だつた。播州龍野の酒造家の次男で、中學時代には、三田は小說家にならうと思ひ、此の男は社會改革者たらん事を理想とした。早くからマルクスの著書などを讀み、歐羅巴のその道の先達の傳記に夢中になり、若い時代には免れ難い感激癖から、獄裡の人となる事や、斷頭臺に上る事さへ、情熱に燃える夢想として胸底に描いてゐたか、その傾向は何時も三田の嘲罵の的になつた。三田の言葉は隨分手酷しいものだつたが、その眞意は、友達の一時的の狂熱をさまして、大地に踵をつけて歩かせ度かつたのである。

「たとへば時代を溯つて佛蘭西に生れたとして、君は勿論共和黨の陣笠として街頭で演說をする人間だよ。しかし又平和の日が續いて、國民は徒らに葡萄酒に味覺をほこる時代になり、外からは獨逸が壓迫して來ると、君は以前にも增した熱情を以て王朝復歸運動を起す人間だよ。何でもいゝんだ。少しばかりの危險がともなひ、喇叭を吹き、旗を立てて、町中を練廻り、演說さへし

てゐれば。」

「そいつは非道いや。そんなんぢやあないよ。」

「非道い事があるものか。そんなんだよ。」

三田の批評は何時もさういふ意味だつた。尨然たる資本論を讀破する根氣は無く、手取早く宣言書に感激し度いのだつた。勿論かういふ批評を素直に受入れる田原ではなく、自分の信念を熱烈な調子で披瀝して、相手が聞きあきる迄喋らなければ承知しなかつたが、心の中では多少思ひ當る事がなくもなかつた。

やつとの事で學校を出ると、三田は外國に行つてしまつたが、田原は紡績會社に入つて月給を貰ふ身になつた。其處にこそ全力を傾けて改善の實を擧ぐ可き事柄が澤山あると思つてゐた。工場の機械の音は日夜耳にするけれど、彼の仕事といへば最も不得手な算盤を彈く事以外には何も無かつた。勞働問題に觸れたのでも何んでもなく、一年たつたかたゝないのに、事務員の生活には全く倦き果て、たまたま上役と些細な事から口論したのをいゝきつかけにして、彼は辭表を差出した。

暫時遊んで居るうちに、父親も心配し、いゝ顔の役人に出世して居る叔父も口をきいて呉れて、

今度は船會社に入つたが、此處では海員の手當要求問題の起つた時、別段自分達陸上勤務者には關係もない事なのに、豫々事あれかしと待つてゐたところたから、會議の場所にも出しやばつて、多少煽動的な應援演說などもやつたので、當時未だ使用人の氣勢のあがらない時代だから、一も二もなく首謀者と共に首になつた。

もう月給取はこりこりしたと稱して、實は月給取なんかは自分の本領ではないと云ふ自負心も見せに、新領土の視察を口實に、樺太や朝鮮や滿洲を旅行してゐたが、又更に一年ばかりたつと、矢張り父親と叔父の勢力で、阪神間に新設された車輛會社の取締役に就任した。

今度突然三田が大阪に來るやうになつて、誰よりも一番喜んだのは田原だつた。

饂飩を喰べ、おまんも平げて、喋り疲れた田原の歸つたのは夜更けだつた。

三の一

四日五日たつうちに、三田は會社の仕事は段々手について來たが、下宿の住心地はなかなか安定しなかつた。欄間に障子が無い爲めに、曉方は夜着の襟から冷い風が入つて目が覺めた。引込んた風邪も何時迄たつてもぬけさうもなく、のべつに嚔をしては鼻をかんだ。あんまりつゞけさ

まなので、鼻の頭が赤くなつてしまつた。
どの室の客も、寢衣のまゝ楊枝を銜へて、向側の湯屋に出かけたが、三田はあさましい裸體を人前に曝し、他人の脂肪や垢の浮いてゐる臭い湯に入り、おまけにその他人が得手勝手で、流場に小便をする奴もあれば、手鼻をかむ奴もある、花柳病の繃帶をしたのさへゐるのだから、生來の潔癖が承知して呉れなかつた。彼は殆ど誰も使はない薄暗い洗面場で、冷い水で全身を拭いた。
「貴方さん、お風呂はお嫌ひだつか。」
ばけつに水を汲んで呉れるお梅が訝かしさうに訊いた。
「嫌ひつて事もないんだが。」
あいまいな返事をして濡手拭をしぼつてゐると、帳場から婆さんも聲をかけた。
「向ひのお風呂屋には、えゝ娘さん居てはりまつせ。番臺の上にちんとすまして坐つて、三田さん見たいな若い男はんが來ると、見るやうな見んやうな目つきしやはつてな、離室のお客さんやつたら、わざと手ぶらで歩いたるのや云うてな、をかしおまんが。まあ一遍行て見なはれ。ほんまに別嬪さんだつせ。」
年とつた女に特有のみだらな口をきかれて、三田は返事に困つて二階に上つたが、何時迄も湯

に入らないでも居られないので、その次の日は思ひ切つて行つて見たが、別嬪の娘はゐないで、だぶだぶ肥つたお婆さんが坐つてゐた。畜生いつぱいかつがれたかなと思ひもしたが、人前で裸體になるのなら、相手は若いよりも年とつた方がいゝと思つた。

久しぶりで湯に入つて、ぼうつとする程いゝ氣持で下宿の門を潜ると、待構へてでも居たやうに、

「三田さん、ほんまに別嬪だつしやろ。」

と婆さんは卑しい笑顏をして云ふのだつた。何を云つてやかるんだ、嘘つきめ、と思ひながらも、

「えゝ、大したものですね。」

と輕く受けて、どん〳〵二階に上つてしまはうとした。

「おそのさんよりも、もひとつよろしうおまつか。オアハハハ……」

婆さんの高笑ひが家中に響いた。

それでもそれがきつかけになつて、翌日も又湯屋に行つたが、格子をあけると目の前の番臺に、ほんとに十八九の娘が、襟つきの古風な服裝をして、眞白に白粉を塗り、眞新しい銀杏返の頸を

据ゑて坐つてゐたので、思はず知らずぎよつとしたが、まゝよと思つて裸體になつた。矢張り湯屋は行を惡かつた。

夕方歸つて來ても、欄間の風を氣にしながら、あたじけない火鉢の火に噛りついてゐるのは心細かつた。きれいなお女房さんに免じて、金露の味は我慢するけれど、お膳の上の貧しさは、喰辛棒の三田にとつては隨分辛い事だつた。たまにつく魚の切身の、寒い頃にも拘らず、鼻を衝いてむつと來るのは、幾日か店に曝されたものに違ひ無かつた。いゝ加減にお膳を押しやつて、おもてに出て、田原の好物の饂飩屋に腹をこしらへに行く事もあり、いち早く關東煮の味も覺えた。

三の二

扨て勉強しようと思つて、暗い電燈の下で机に向ふけれど、夜の寒さは骨身にしみ、欄間の風は愈々冴えて、どうしてもおちついて本を讀んだり、書き物をしたりする事は出來なかつた。こんな室に居ては、年中風邪の引通しで、何もする事は出來やあしない。若しも外の室があかないなら、轉宿の外に道はないと考へ始めた。

幸ひな事には、恰も豫て約束の離室の二階が空く事になつた。その室の客は、何處かで泊り込

んで來るのか、勤務の都合で歸りが遲いのか、あたりまへの時間には、なかなか宿に居なかつた。三田は僅に一度廊下で擦違つたばかりだつた。戸外から歸つて來たところで、派手な縞羅紗の背廣に綠色の外套を着て居たが、綺麗に化粧の行屆いたてかてか光る顏に薄く白粉でも塗つたやうな男だつた。それが東京へ歸る事になつたのである。

愈々明日は立つといふ日の夕方、三田が會社から歸つて來ると、離室では酒宴が始まつてゐた。醉つた男の聲にまじつて、若い女のはしやいだ聲が湧きかへるやうに聞えた。

らめちやんたらぎつちよんちよんでぱいのぱいのぱい

ぱりことぱななにふらいふらいふらい

わけのわからない文句に節をつけて合唱し、中には手拍子をたゝく者もあつた。止んだと思ふと又始め、繰返し繰返しうたふのだつた。

「なんだい、あれは。」

「流行つてまんね。」

此方の室に給仕に來たお梅は、三田の問に事も無く答へた。

「女の人は。」

「同じ會社の女子(をなご)はんだす。松野さんいはゝるのは、よう遊びに見えるお方で、七分三分たらいうて、こないして、こないして、偉いはいからさんに結(ゆ)うてな……」

お盆を持つた手をあげて、右に分け左に分け、後の方で束ねる眞似をして見せた。

同じ會社の女事務員が、男の社員の下宿に遊びに來るといふ事は、よくある事には違ひ無いだらうが、目の前に實際を見るのは初めてだつた。勿論好奇心は動いたが、さういふ事に立入つて、根深く探りを入れるのは恥づべき事だと思ふ心が強かつた。殊に相手のお梅は口數が少かつた。

らめちやんたらぎつちよんちよんでぱいのぱいのぱい

又一しきり聲をからしてうたふのを聞きながら、三田はお茶漬をかき込んだ。

隣の室の貯蓄銀行員の方には、婆さんがお給仕に出てゐた。襖一重の話聲は時々はつきり聞えて來た。

「若い者にはかなはんな。此方だつて、あゝいふ時代もあつたんだが。」

「何いうて。貴方(あんた)今でもおもしろい事だらけやないか。」

「近頃とんとおもしろい事もないぜ。羨しいな。同じ會社に勤めて居る男が三人、女が三人。飲んで、喰うて、歌うて……」

「それからさきは。」

「えゝ勝手にしやがれ。畜生奴。」

男の聲には晩酌の醉が絡つて來た。

「オアハハハハ……。そんなにけなりがらんと貴方も一番負けずにやつたらよろしいがな。さつさ浮いた浮いたいうてな。」

「そんな事云つたつて一人ぢや始まらないや。」

「ほんなら男はんの腕で、えゝ相手をこしらへたらよろしいがな。まゝさうふさがんとひとつ上んなはれ。――おや、すつかり空になつてしまうた。どれ、もひとつつけて來ましよ。こつちもメートルあげんならんオアハハハハハ。」

あたりを憚らぬ高笑ひをしながら、婆さんはお銚子の替りをとりに立つた。

三の三

三田は強ひて机に向つて讀みかけの本を開いたが、離室のぱいのぱいのぱいは何時迄たつても止まず、手を叩かれてはお銚子を運ぶお梅の忙しない足取も、廊下に繁く聞えて來る。一方隣の

貯蓄銀行員も、何時の間にか酒好きの婆さんと盃のとりやりになつて、少からぬ德利の數を倒し、漸く呂律もあやしくなつた。

「あゝ醉つた、醉つた。酒は憂の玉箒か。いゝ氣持に醉ひは醉つたが、扨て一人では始まらずと。」

「やめとくなはれ、いやらしい。そないにかつゑてはるのやつたら、おくにから奥さん呼んだらよろしうおまんが。」

「あんな婆がどうなるもんか。」

「御挨拶だんな。私かてお婆さんだつせ。可哀さうに。」

「お婆さんにもいろ／＼あるとさ。水々しいのも、干乾びたのも。——ひとつお酌しまひよか。」

三田は思はず聞耳を立てるのだつた。世間擦れた年とつた男と女の、酒にだらけた口を衝いて、聞いてる者が赤面する程の猥談が續出した。

「いや、もういかん、いかん。此の上飲んだら醉ひつぶれてしまふ。」

「醉うたら介抱してあげまつさ。」

「これがもひとつ若けりやあなあ。」

「好かん人。」

どすんと音がして、

「あやまつた、あやまつた。」

と男の聲が聞えたのは、背中でも叩かれたらしかつたが、そのまゝごろりと横になる氣配がした。

ぱりことばななにふらいふらいふらい

離室の方も騷ぎ疲れたのか、女の歌ふ聲はやんで、たつた一人太い男の聲が、惰性で調子はづれに張上げられてゐた。

夜更け迄騷いだ男女は、手をとりあつて歸つたらしかつた。

「おたのしみ。」

「おごつて貰ひまつせ。」

なぞと、女の聲もまじつて、口々にいふのは、門前の往來で別れたのであらう。

「あゝ疲れた、疲れた。」

玄關迄送り出した離室の男は、三田の室の前で欠伸をして引上げて行つたが、直ぐにはげしく

手を叩いて、
「おゝい、お梅さん、此處をかたづけて床とつてお呉れんか。」
咽喉（のど）にからんだ聲を張上げて怒鳴つた。
「へえい、只今。」
梯子段を驅上つて來たお梅は、酒宴の後始末の瀨戸物の音をちやらちやらさせながら、幾度となく離室と臺所を往復してゐたが、やがて用事も濟んだと見えて、三田の室にも床をとりに來た。
「えらい騷ぎで濟みませなんだ。」
叮嚀に頭を下げて詫びた。
「やつとみんな引上げたと見えるね。」
一頁も進行しなかつた本を閉ぢて、三田も大きな伸（のび）をした。
「いゝえ、小指（これ）がゐてはりまつせ。」
水仕事に赤くはれたやうな小指を出して、離室の方を指さしながら、自分自身が羞しさうに笑つた。

三の四

枕に頭をつけてもなかなか眠れなかつた。何時の間にか婆さんもゐなくなつたのであらう、隣室からは高鼾が聞えて來た。

翌朝三田が身支度をして、會社へ行かうと廊下へ出ると、出會頭に厠から出て來た若い女に出つくはした。寢不足の顏に七分三分の束髮の亂れかかつたのが、別段羞しさうな樣子も無く、おちつき拂つて手を洗つて擦れ違つた。小柄の體に男物の浴衣を重ねて寢衣がはりにし、淡紅色の腰紐を胴中の一番細い所にくびれる程堅く締めたのが、裾をずるずる引擦り乍ら、離室の方に上草履を鳴らして行つた。

その夕方には、離室の男はもう立つた後で、會社から歸つた三田は、留守の間に荷物も運ばれてゐて、新しい室の客となつた。おまけに東京へさういつてやつた夜具蒲團も屆いた。づつくの袋に押詰めてあるのを引出して見ると、中には眞新しい座蒲團迄入つてゐた。直ぐに、うすべつたい板のやうな汚點だらけの下宿のやつを次の間にはふり出して、新しいのと敷替へて机の前に坐つて見た。肥つた膝も埋る程、彈力をもつてふくれ上つてゐる、紫地に大輪の白牡丹の浮上つ

てゐる唐縮緬(メリンス)の座蒲團は、暖かく柔かかつた。何時も子供の爲めに心を盡して吳れる母親を想つて、三田は暫時(しばし)うつとりとした。

六疊の室には形ばかりの床の間もあつて、明治天皇の教育勅語の石版刷のものが、表裝をして掛けてあつた。壁も襖も疊も八疊に比べては新しく、おまけに東と南がすつかり硝子の嵌(はま)つた障子になつてゐるので、晴々した氣持になつた。次の間の三疊も嬉しかつた。三田は、生活費の足(たし)にもなり、小遣の源でもある小說を、その晩から起稿し始めた。

滿足に眠つた朝は晴れてゐた。雨戶をあけると室の中には朝日が射して來た。天滿橋のある方の阪下の町の家々の屋根が、光を反映して光つてゐた。日の目も見ない八疊との相違は大したもので、たつた五圓違ひとは思はれなかつた。火鉢にかけた鐵瓶の湯のたぎる音も、近所の屋根や物干で鳴きかはす雀の聲も新鮮に感じられた。

窓際に立つて見下ろすと、全く餘地のないやうに思はれる下宿の裏庭にも、見上げる程の柳や枇杷の木があつて、今は寂しい梢だが、枝は目の前にも延びて來てゐた。境界(さかひ)の黑塀の向ふに、隣の宿屋――御旅館雪本の二階があからさまに見えた。同じやうに手拭をかぶり、お尻をはしよつた女中が二人、そこの緣側を四這(よつんばひ)になつて拭いてゐた。

不圖その一人が立上つて、此方を向いて莞爾した。お早うといふ意味の笑らしかつた。

三田がどぎまぎして、挨拶を返すべきか、返すべきでないかと迷つてゐると、

「あ、違ごてるわ。」

先方もまごついた様子で、もう一人の朋輩をかへりみていふ言葉が聞えた。三田は顔をあらぬ方に向けて、何の氣も付かないやうな振をした。

「何時もの人と違うたわ。」

「あのえゝ男はんは居やはれへんのか。」

はしたない口をきいて、若い女中は聞えよがしに笑つた。

四の一

室が改まつて、其處におちついて來ると、三田の生活は段々機械的になつて來た。朝は別段早くもなく、さりとて勤務の時間に遲れるやうな事も無く、起きると直ぐに向側の湯屋に出かけた。若い娘が平氣な顔をして、裸體の男を番臺から見下してゐるのは面はゆかつたが、同宿の貯蓄銀行員などが、湯船から上つたばかりの裸身から湯氣をたてながら、近々と顔を合せて挨拶したり、

冗談を云つたりしてゐるのを見ると、事毎に平氣な人間が羨ましくもなり、又恥知らずのやうで擯斥したくもあつた。婆さんは寢坊なので、朝の食事は屹度お梅のお給仕だつた。口をきくのがうるさいので、膝の上に擴げた新聞を讀みながら、大概一膳御飯で濟んでしまつた。手早く洋服に着換へると、恰度出勤の時間になるのだつた。

會社の仕事は一層機械的だつた。歐羅巴の戰爭のおかげで物價は素晴らしく暴騰したので、他では大概割增手當を出したが、役人上りの頑固な社長は、何の思ひやりも無く、そのくせ人は金錢づくで使ふのは下々の下で、眞情を以て使はなければならないと云ひながら、實際は無闇にやかましい命令ばかり下してこき使ふので、東京の方もさうだつたが、支店の者もおしなべて氣をくさらしてしまひ、たゞ徒らに慣習的に事務を取扱つてゐるばかりだつた。

日の暮には、先を爭つて歸る社員にまじつて、三田もいそ／＼往來に出る。眞直ぐ下宿に歸れば、金露一銚子を傾け、不味いお茶にへきえきしながらも、膝の上に夕刊を擴げて、默々として一膳御飯を濟ませてしまふ。婆さんのお給仕にぶつかると、相手のおしやべりに壓倒されて、否でも應でも口を開かなければならなくされてしまふが、そんな時にも、三田は短いうけこたへをするばかりで、流石の婆さんも張合ひがぬけて、言葉數は少くなるのであつた。

下宿のお茶に堪へられなくなると、一度同僚に連れて行かれた天神橋の蛸安の味を覺えて、大鍋の前に立はだかり、吉長のこつぷをひかへて、關東煮を晩飯のかはりにしてしまふ事もあつた。何れにしても食事が濟むと、母のなさけの座蒲團に坐つて机にむかひ、夜が更けて十二時一時になる迄、本を讀むか書きものをした。

自分の事は自分でするといふ精神が強かつたばかりでなく、他人との交渉を避ける爲めにも、彼は一度も手を叩いて人を呼ぶ事をしなかつた。下宿の者は「離室のだんまりさん」などゝ蔭口をきくやうになつた。

「御用があつたらお手を鳴らしとくなはれ。貴方さんのやうに手を叩かんお客さん初めてだつせ。」

お梅はさういふ意味の言葉を幾度となく繰返した。用事が無ければ忙しくなくていゝだらうと三田は思ふのだつたが、相手にして見ると、あんまり用事が無さ過ぎるので、氣を惡くしてゐるのではないかと心配するのだつた。

「だつて用事が無いんだもの。」

三田はさう答へる外には爲方がなかつた。

斯ういふ毎日の生活を時折脅かすものは訪問客だつた。

四の二

しげしげ來るのは田原一人だつた。市内の營業所から電話がかゝつて、三田の在宿を確めると、間も無く自動車は城西館に横づけになる。

「三田公ゐますか。」

門をくぐる時分に大きな聲をかけて、靴の踵を敷石に響かせ、お馴染になつたお梅に冗談を云ひながら、家中に聞える高笑ひで上つて來る。自動車に乘つて來る丈でも十分下宿の者の尊敬に値(あたひ)するので、田原が來たといふと、婆さん迄も飛んで出て迎へるのであつた。

「いかん、いかん。婆さんは眞平(まつぴら)だ。お梅ちやんに限るよ。」

本來ひどい羞しがりやで、昂奮して演説口調になる時でなければ、まともの口はきけない質(たち)だから、わざと世馴れたらしい冗談でも云はなくてはゐたゝまれないのである。

「そないに嫌(きら)はいでもよろしいがな。」

「かなはん。かなはん。」

一際大きな聲を立てゝ頭をかゝへて逃げ出すところが、婆さんには又氣に入るのだつた。

「あの社長さんは、貴方と違うて氣さくな方だんな。」

田原がはしやげばはしやぐ程、苦り切つてしまふ三田にあてつけがましく、感嘆して見せる事もあつた。

「あゝして始終自動車に乘つて歩いたら、偉い費用だつしやろ。」

「なあに、會社の車だから平氣で乘廻すのさ。」

三田の云ふ事はほんとでも、婆さんはさうは取らなかつた。此の變物が人樣の事にけちをつけくさると考へるばかりたつた。

「中等學校から大學校一緒に卒業しても、一方は社長さんで、片方は未だ獨身で下宿してはる。働きも働きやろか、これが人の運といふもんやろなあ。」

婆さんは外の者にも話してきかせた。

三田と差向ひになると、婆さんにもお梅にもさつぱり解らない種類の話を、田原は夢中になつて話した。雜駁な智識ではあつたが、多方面の本を讀んでゐる三田をつかまへて、事業組織の根本問題から、彼が最も興味を持つ社員職工の待遇方法などを、自分自身の意見も述べ、相手の説

もきいて論じ立てる。社會主義の思想を多く受入れた學校時代の頭腦で、營利一方の他の重役や株主を向ふに廻して、彼は其の頃理想と實際の板挾みになりかけてゐた。

田原の矛盾を指摘するのが三田の役廻りだつた。友達の一身を思ふと、それが自分の責任のやうにも感じられた。三田に云はせると、田原の腦裡にいゝ事として描かれてゐるのは、殆ど全部が或る社會的變革が行はれた後の世の中か、又はさういふ世の中を理想として描く者の腦裡に於てのみ生々として存在するので、假之學者の議論或は煽動者の主張としては嘘でないが、現在の經濟組織の下に於ては直ちに行はれ難い事である。若しも田原が理想の追及に一身を任せるならば、先づ第一に事業を捨てて街頭に立つ外は無い。その極端を避けて、現在の組織のまゝで、事業の改善を行はうとするのならば、全力を擧げて事業に沒頭すべきである。言葉を換ていへば、儲けて散じる以外の何ものでもない。

「兎に角儲けるのさ。お天氣の挨拶の代りに、何ぞぼろい事おまへんかと云ふ大阪は、その方の檜舞臺だ。儲けよ、さらば與へられんさ。」

新設會社の弱味として、先づ良好な資産狀態を基きあげなければ、待遇の改善も思ふには任せない筈であつた。

「そいつが俺には出來ないんだ。」

「それが出來なければ、結局駄々をこねてゐるに過ぎないぢやないか。ダダイズムといふ奴さ。」

何時も極まつて饂飩とおまんを喰べながら、初冬の夜の終電車の頃迄しやべつてゐた。下宿では、田原の事を社長さんとも呼び、饂飩のお客さんとも呼び、饂飩の社長さんとも呼んだ。

四の三

日曜の朝であつた。玄關に訪ふ人の聲に、廊下の掃除をしてゐたお梅が出て見ると、洋服の男が立つてゐて、

「樟さんゐませんか。」

と云つて名刺を出したのを見ると、新聞記者だつた。

「樟さん。そんな人はゐてはれしまへん。」

「ゐない？　ゐない筈はないがなあ。樟喬太郎つていふ小説家で、つい近頃東京から來たんだ。君の所にゐると聞いて來たんだが。」

「へえ、さうだつか。そんなら一寸尋ねて見まつさ。」

そんな名前の人はゐないとわかつてはゐても、何となく不安になつて帳場に聞きに行つたが、亭主も婆さんも知らないと答へた。
「お隣やないか云うてみなはれ。」
婆さんに注意されて、お梅は又玄關に出た。
「尋ねて見ましたけれどな、皆が知らん云ひますのんで、お隣も雪本いふ宿屋だんが、ひよつとして向ふさんではおまへんか。」
「左様かなあ、確に此處と聞いて來たんだが。」
新聞記者は思ひきり惡く、衣嚢から手帖を出して、手控の頁を探した。
其の時二階から手拭と石鹼箱を手にして、風呂にゆく三田が下りて來た。
「そら此處に書いてあるだらう。城西館權堂ろく方樟喬太郎。」
「へえ。」
お梅は引込まれてその手帖をのぞいたが、さういふ名前の止宿人はゐないので、どうとも返事が出來なかつた。三田はすまして傍を通り抜けて湯屋に出て行つた。
「ゐないとあれば爲方が無い。や、失敬しました。」

一度お梅の手に渡つた名刺を取戻して、記者は未練らしく其處いらを見廻しながら歸つた。

見送り果て、一たん置いた箒を取上げ、再び掃除にかゝらうとすると、今の記者と門前で擦違つた位しか間を置かずに、又一人玄關に人が來た。

「御免なさい。三田先生はお出でになりませんか。」

鳥打帽子をかぶり、毛糸の襟巻を首に巻き、セルの袴を穿いた若い男だつた。

「どなただつか。」

「三田先生です。」

「あゝ三田さんだつか。」

先生と云ふ思ひがけない言葉を、お梅の耳は疑つたのであつた。

「私は草間といふ者ですが、先生にお目にかゝつてお願ひし度い事がありますので……」

「三田さんだしたら今先刻お風呂屋に行きはりました。」

「直きにお歸りになりませうか。」

「はあ、向ひだすよつてな。」

若者は別段遠慮もしないで、お梅に導かれて離室の三田の室に通つた。

「三田さんの事を先生々々いうてるし。」

帳場に下りて來たお梅は、目をまるくしてみんなに話した。

四の四

間もなく三田は茹つた顏をして歸つて來た。てつきり新聞記者に違ひ無いと思つた男が、自分の筆名を言ひ立てゝ、お梅と話をしてゐたが、あのまゝわからずに歸つたらうか――風呂の中でも其の事が氣にかゝつて、故意と長湯をしたのであつた。

「三田さん、お客さん來て待つてはりまつせ。」

梯子段を上つてゆく後から、お梅が追ひかけて來て聲をかけた。

「ちえつ、爲樣がないな。新聞記者は大嫌ひだ。」

何故人の留守に、室になんか通すのだと不滿に思つて、つい咎めるやうな口調になつた。

「あゝ、あの方も新聞記者はんだつか。」

「さうさ、あのきよと〱した目つきと、おちつきの無い態度で直き知れるぢやないか。」

二人の話は全くかけ違つてゐたが、お互に氣がつかなかつた。お梅は先刻何とかいふ人を訊ね

て來たのは新聞記者だつたが、今度のはたゞの書生だと思つてゐた。三田は先刻湯に行く時玄關で見た男が、留守中侵入してゐるのだとばかり考へてゐた。
襖をあけて室に入ると、思ひもかけない若者が、今迄自墮落にしてゐたのを狼狽て、整然と坐り直したところだつた。
「先生でゐらつしやいますか。」
その男は叮嚀に頭をさげた。
「私は三田です。」
先生と呼ばれた丈で客の來意はわかつた。
「私は平生先生の御作を拜見してゐますもので……」
若者のいふ所によると、彼は今大阪の或る商店に勤めて、かつ／＼生活してゐるが、將來文學を以て身を立て、名を成し度いと云ふのであつた。
「大矢北海は先生も御存じでせうが、私の同鄕の者です。」
「知りません。」
三田は不機嫌な顔つきで答へた。

大矢某といふのは、聖書に材料を取つた大部の小說を書いて、忽ち百版を重ねたといふ作家だつた。しかも其の一版といふのは百册を以て數へるので、此の商賣上手はうまうま名を成したといふ不愉快な噂をきかされてゐた。

「兎に角世界に今迄無かつたものださうですな。」

若者は、當然文壇の誰でも知つてると思つた同鄕の先輩を、知らないと云はれたのが心外さうだつた。

「そりやあ無いかもしれませんね。聖書は旣に完成した藝術品だから、單にそれを今風に書直すといふ事は、雜文家の仕事で藝術家のやる事ではないでせう。その意味で世界に唯一のものかもしれません。しかし事實、あゝいふものは外國には澤山あるんぢやないんですか。一體私は、耶蘇だとか親鸞だとかいふ偉い人を喰物にするのは嫌ひです。」

「そりやあ先生とは作風も違ひますし、思想的傾向も別々ですから爲方がありませんが……」

若者は矢張り不滿さうに見えた。

四の五

「實は私も約一年間かゝつて書上げた長篇がありますので、これを出版したら如何かと思つてゐます。」

膝のわきに置いてあつた風呂敷包をほどいて、分厚な原稿を三田の前に押して寄越した。取上げて見ると、『或る泥濘にうごめく人々』といふ題で、一千枚に餘るものであつた。

「或る泥濘にうごめく人々つていふ此の『或る』は、泥濘にかゝるのですか、人々の方にかゝるんですか。」

「さあ、そんな細かい事は考へて見ませんでしたが、それはどつちでも差支へ無いと思ひます。兎に角私は此の社會を泥濘と見て、立派な天分を持ちながら、生活の爲めにつまらん仕事をしてゐる青年の心理を描いたのです。自敍傳と見てもいゝものなんです。」

自分の藝術に對する自信を語るに至つて、此の青年作家は目に立つて昂奮し、雄辯になつた。これ迄に澤山の短篇小説を書き習ひ、新聞や雜誌の懸賞に應じて選に入つた事もあるといふ。つい近頃迄郷里の新聞以外には名の知られてゐなかつた大矢北海が、志を立てゝ東京に出ると間もなく「聖書物語」であてゝ、一躍して原稿成金になつたのに刺戟され、東京に出さへすれば、忽ち文壇の流行兒になれるやうに考へてゐるのだつた。就ては此の長篇の出版を引受けさうな、

本屋に紹介して呉れといふのが要件だつた。
三田はその作品がいゝものか下らないものかは知らないが、近頃の傾向として、質の良否は問題にならずに分量でおどかさうとし、讀者の方も無批判で、本屋の誇大な廣告に引摺られ、眞面目に藝術に精進する者の愈々少くなるのが心外で堪らなかつたから、此の若者がひたむきに、有名になるといふ事ばかりに夢中になつてゐる様子が苦々しく思はれた。彼は腕を組んで、嘆息するやうな心持で、「或る泥濘にうごめく人々」を見て默した。
折柄お梅がばた〳〵馳けて來て、
「三田さん。先刻貴方(あんた)がお風呂へ行きはる時、玄關にゐた人なあ、あれ新聞記者(しんぶんや)はんやさうなが、樟さんたらいふ人を訊ねて來やはつたよつて、そんな人ゐてはれへん云うて歸つて貰うたら、今又見えてなあ、樟さんいふのは貴方の事や云うてはりまつせ。あんた樟さん云ひまんのか。」
疑はしい目つきで三田の顏を見詰めながら、息せはしく云ふのだつた。
「ちえつ、爲様がないなあ。まあ此處に通して呉れ給へ。」
「へえ、さうだつか。樟さんいひまんのんか。」
お梅はつまゝれたやうな様子でつぶやいた。

「やあ、失敬します。」
高調子で挨拶しながら、直に新聞記者が入つて來た。帽子をとり、襟巻をとり、外套を脱いで名刺を出したが、凝然と三田の顔を見て、
「何んだ貴方でしたか。いかんですねえ。非道いぢやないですか。先刻僕が御本名をついきいて來なかつた爲めに、へまをやつたのを、知つて知らん面をして、すまして側を通つて行つたのは人が惡いですな。」
不愉快さうな、その癖それを愛嬌にもしようとする笑聲を立てた。
「私は新聞に出される事が大嫌ひなんです。その爲めには非道い迷惑をしてゐます。でたらめの浮名を立てられた汚名は未だに消えません。」
三田は恰も歐羅巴から歸朝した時、同船の或る若い未亡人との、ありもしない關係を捏造して書かれた事を忘れなかつた。

四の六

その婦人の夫は倫敦に駐在する役人だつたが、精神に異常を呈して自刄した。未亡人は遺骨を

守つて故郷へ歸るところだつた。新派の歌を詠む人で、自ら文學の趣味が二箇月に近い航海の間、他の乘客よりも三田と親しくさせた事は疑ひもなかつたが、どうした事の間違ひか、今でも原因はわからないが、或る新聞の三面に、二人の間にたゞならぬ關係があつて、その背になつた人の死因も、妻の不貞を憤つた爲めらしいといふ事が書かれたのである。幾多の新聞が更に之を形式を變へて轉載した事はいふ迄も無い。其の當時取消を申込み、その後も折につけては口に筆に、無責任なる新聞記事を罵り、人もあらうに夫の死を嘆き悲しむ人の上に、かゝる曲筆を振ふ罪惡を指摘しはしたものゝ、いつたん人々を驚かした好奇的の印象は、遂に消す術もなく、今でも世間は彼を見る時、あらぬ疑ひに目をかゞやかすのだつた。

「私は新聞の効果よりも、寧ろその害惡を著しいと認めるものです。」

三田の口調はどうしても強くならざるを得なかつた。

「それは全く異例の出來事です。僕の方の社ではそんな出所の分らない記事なんか出しません。」

「ところが、それが貴方の方の新聞に出たんですからね。」

「ハ、、、、……こいつはしまつた。」

記者は寧ろ面白さうに笑つた。

「まあそれはそれとしてですな、實は僕の方の社で『一日一人』といふ欄を設けて、旣に十數日續いてゐます。寫眞を出して、あらゆる方面の名士の感想を伺つて書くのですが、大阪は實業家は澤山ゐますけれど、他の方面の人間は少いので困つてゐたのです。ところが折よく貴方が來られたといふので、社の方から指圖されて伺つたんです。長い事は入りませんから、何か感想をきかして貰ひ度いですね。」
「駄目ですよ。私は新聞社の人には逢はない事にきめてゐるのですから。」
「そんな事をいふとお爲めになりませんぜハハ、、、、」
「爲めにならなくても爲方がない。旣にこれ以上の不爲めはないといふ目にあはされてゐるんだから。」
三田は苦り切つて、堅く脣を結んだ。
「それがいかん。それがいかんのです。互に肱をとつて語る態度で行けば、間違つた事なんか書かれやしない。吾々に逢はないなんて、腹をきめてるのは間違ひのもとですよ。」
記者は又體をゆすつて高笑ひした。
長篇小說の作者は、物珍しい光景を熱心に見守つてゐたが、自分が其の場にゐるのが惡いので

はないかとも考へられて、先刻からもぢもぢしてゐたが、話が一寸途絶えたので、
「先生、私は近日又伺はせて頂きませうか。」
と云つて見た。
「ええさうして下さい。原稿は拝見して置きますから。」
引止めるかと思つた三田は、待つてゐたやうにすつぱり返事をした。
「ではお預けして行きますから御覧下さい。」
若者は原稿を包んで來た風呂敷をたゝんで懐に入れて歸つた。

四の七

「今の若い人はお弟子ですか。」
「いゝえ、初めて逢つた人です。此の原稿の作者ですがね。」
「はゝあ『或る泥濘にうごめく人々』か。」
素早く手帖の端に書きとめて、
「傑作ですか。」

「どうですかしら、まだ讀んで見ないのでわかりませんが、當人は傑作だと確信してゐる様子でした。」

「成程。つまり新進作家の力作ですな。」

記者は煙草に火をつけて深く吸つた。

「さて本論に入つてですね、先づ大阪の御感想を伺ひませうか。」

手帖を開いて、短い鉛筆の尖頭を嘗めた。

「大阪の感想と云つて、まだ來たばかりで何にもありません。下宿の不自由に悩んでゐるばかりです。」

「つまり東京に奥さんを殘して來た寂寞ですか。」

「さうぢやありませんよ。私は未だ獨身なんです。」

「はゝあ、さうですか。それではと、如何でせう、大阪婦人に對する御感想は。」

「困りますね、大阪の婦人て、たつた一度宴會で藝者を見たばかりで、奥さんもお嬢さんも知らないんですから、別段の感想のあるわけがありませんよ。」

「いかんなあ、まるで書く事がありやしない。」

一膝乘出して、手帖で疊を叩いた。
「どうです、大阪婦人と結婚する氣はありませんか。」
「そんな突飛な質問では尙更返事が出來やしない。いゝ人でさへあれば東京も大阪も區別は無いぢやありませんか。」
「爲樣がないなあ。まるで材料を吳れないんだもの。」
舌うちして、
「では寫眞丈借りて行きませう。」
「寫眞は大嫌ひで、此の處十年ばかり寫した事もありません。」
「そんなら社の寫眞班を寄越しませう。」
「そいつは許して下さい。私は全く寫鏡(レンズ)の前に立つ時の、取りすました氣持が嫌ひなんです。」
「ちえつ、爲樣がないな。」
もう一度舌うちして、何も書き留める事の出來なかつた手帖を衣囊(かくし)にをさめて、
「や、どうも失敬しました。何れ又何か伺ひに來ます。」
頭を下げて立上つた。

記者をかへした三田はまんまと撃退したやうな滿足を感じてほつとした。
「三田さん、貴方小說の先生だつか。」
好奇心に魂を奪はれたやうなお梅は、閾の上にべつたり坐つて、眞正面から三田の顏をしげしげ見守つた。
「さうは見えないかい。」
「見えしめへんなあ。貴方新聞に書きはりまんの、『珊瑚夫人』やら『黄菊白菊』みなは面白うおましたてなあ。お芝居にもなつたさうでおまんな。」
「駄目だよ。僕のはあんな面白いんぢやないんだ。あゝあ、新聞記者にとつつかまつて氣がくさくさしてしまつた。散歩でもして來ようかな。」
相手の質問がうるささうに、三田は欠伸をしながら立上つて、壁にかゝつてゐる帽子をひつつかんで出て行つた。

四の八

それから二日目の夕方だつた。三田が會社から歸つて來ると、玄關で護謨毬をついて遊んでゐ

た藪睨の女の子が、

「三田さん、おかへり。」

と妙な節をつけて叫びながら奧にかけ込んだ。

「三田さん、貴方の事新聞に出てまつせ。」

婆さんの嗄れた聲が聞えた。帳場の暗い電燈の下で、家中の者に酒屋のお女房さんもまじつて、額を集めて讀んでゐた。

「新聞に出たる。新聞に出たる。」

子供はそれを毬唄にして、飛上り跳上る護謨毬の頭を叩いてうたつた。

三田は何の返事もしずに二階に上つてしまつたが、後からお梅がついて來て、着物を着換へようとする暇も與へず、夕刊を目の前に突つけるのであつた。

三面の上の方の「一日一人」といふ欄で、小說家樟喬太郎氏と大きい活字の横に「是非とも大阪の女を妻にし度い」と小標題を置いてあるのが、先づ第一に三田の眉をひそませた。

旅館城西館の奧座敷、紫檀の机を傍にして悠然と金口を吹かしながら、こころよく記者を迎へたのは、本名三田某では誰も知るまいが、東都文壇の一方に將たる小說家樟喬太郎氏であ

る。氏は最近勤務先なる某會社の支店詰として來阪せられたのであるが、藝術家に特有なる鋭い感受性を利用して、先づ大阪の第一印象を次の如く語られた。

「大阪の誇りはお城の石垣と天王寺の塔に限らない、商業の中心は完全に東京から此の地に移つた。經濟既に然り、やがて一切の文化が大阪を中心として花を開き實を結ぶ事は疑ひも無い。殊に一國の文明の尺度である新聞事業の如きは東京は足下にも及ばなくなつた。發達したる市民生活の表象としては公會堂がある。今や工事中の市役所が落成する曉には東京は益々顏色が無くなるであらう。」氏は如才なく大阪の近時の發展の驚く可きものあるを說いたが、記者は經濟の大阪に就ては他に聽く人甚だ多ければ藝術家としての觀察を望むといへば「ハハハハ藝術家としての觀察ですか」と一膝乘出して「先づ人生の樂みは酒と女といふが藝術家にとつては殊に然りです。その方面から觀ても大阪は又日本一でせう。いや世界一と云つてもいゝかもしれません。酒の話は暫らく措き、大阪の女の美しいのにはつく〲感嘆しました。令夫人も令嬢も、お家内はんも御寮はんも娘はんも、藝者も仲居も女給も、其の風姿こそ各異なれ、何れも魂を奪はなければ承知しない美しさである。かゝる女性を有する大阪の男子は羨望に堪へません。私も今こそ宿屋住居をしてゐますが、近き將來には良妻

を迎へてスウヰート・ホームを形造らなければならないのです。幸に美しい大阪婦人を妻に持つ事が出來れば此の上の喜悅はないと思ひます。アハハハハ」と呵々大笑したが「しかし美しい大阪婦人も、思想的には如何ですかね。」と藝術家らしい皮肉を浴びせたり。
氏は大阪滯在中文藝趣味の鼓吹に努力せん事を誓ひたるが、たまたま席上氏に私淑せる青年文士草間某あり、「或る泥濘にうごめく人々」と題する一千枚の力作をもたらして氏の批評を求めつゝありしが、恐らくは沈滯せる文壇にセンセエションを引起すべき傑作ならんとの事にて、氏は此の祕藏の門弟の爲めに自ら序文を草し近く出版の事に取運ぶ可しといふ。
尙近影一葉を求めたれども「それは美しい新妻を迎へた上の事にしませう」と巧みに避けて笑にまぎらしたり。

四の九

「馬鹿ッ。」
讀み終つた新聞を、滅茶々々にまるめて疊の上に叩きつけた。
お梅は、期待したとはうつてかはつて機嫌の惡い三田の樣子に驚いたが、

「上手に書いておまんがな。」

とりなし顔で云ひながら、その新聞を拾つて叮嚀に皺を延ばした。

三田は机に向つて原稿紙を開いた。卑陋なる新聞記者の勝手に捏造した記事に對して、訂正を申込むと同時に、思ふさま罵つてやり度かつた。そのくせ、許し難い相手の態度を憤る胸には動悸さへ高まつて、文字は思ふ通りにつゞれなかつた。書きかけては破り、書きかけては破る紙屑が、見る間に竹の屑籠にいつぱいになつてしまつた。

「えらいお待遠さん。」

婆さんがお膳を運んで來た。ちえつ、いやな奴が來やあがつたなと思つて、三田は又書きかけの原稿紙を手荒く裂いた。

「さ、ひとつお上り。貴方のおかげで城西館も新聞に出ましたぜ。」

婆さんはお銚子を取上げて、近々と膝を乘出した。

「お會社にお勤めや云はるよつて、小說書く方とは思ひませなんだが、初手から普通のお客さんとはお人柄が違うたると、私は睨んでゐましたのや。」

いかにも新聞に名の出る人間は偉く、その人のおかげで自分の家の名も活字に組入れられたの

か光栄だといふやうな態度は、三田を一層不愉快にした。彼は默つて、つがれるまゝに酒を飲んだ。

「どんな小説書かはるのや知りめへんけれど、貴方私の事書いたら面白いのんが出來まつせ。柄が大きうおましたさかい、十三の年にな、おろくやん嫁さんに來てくれんのやつたら死んだる云うて人を困らせた息子さんもおましてんねぜ。いゝえ、ほんまだつせ。そないむつかしい顔して見んでもよろしうおま。私かて若い時は、それは／＼綺麗におましてんオアハ、、、、」

一人ではしやいで、愛想をいはうとすればするほど三田の額の不機嫌皺は深くなつた。

「樟先生。ひとつ頂かせて貰ひましよか。」

酒ッくらひの婆さんは、目の前で飲まれては我慢の出來ない方で、見栄も外聞もなく大きな手を差出した。三田は默つて盃をその上に置いた。

「濟んまへんが、ついでにお酌もして頂きましよか。若い男はんのお酌は又ひとしほやオアハハハハハハ」

「よしませう。僕はお酌は嫌ひだ。お酌をされるのさへ好きでは無いんだから。」

「へえ、さよか。」

婆さんは多少てれたらしかつたが、まゝよといつた形で、
「そんなら手酌で頂きまつせ。」
とくとくと盃にみたして、仰向いて咽喉を鳴らして吸つた。
「おかへし。」
白けた舌を出して唇をなめ廻しながら返盃しようとした。
「もう入らない。今日はこれから勉強するから。」
「へえ、もう上つてやおまへんの。えらい悪(わる)おましたなあ。」
「なあに、そんなたんぢやないよ。酔拂つては勉強が身にならないからさ。」
「さうだつか。」
流石に婆さんも面白くない様子だつたが、ふてぶてしくさげすみ笑ひを口尻に浮べて、
「そんなら私が頂きまつせ。」
といふかと思ふと、ついでは飲み、ついでは飲み、残つた酒の最後の一雫迄あしたんでしまつた。

四の十

拜啓愈々御隆昌之段奉賀候陳者本日の貴紙夕刊所載「一日一人」なる一文は小生の談話筆記の體裁に候得共實は全く小生の存じも據らざる事柄のみにて甚だ迷惑仕候尤も一兩日前貴社員と稱する破れし靴下より踵をあらはしたる一人物來訪せられ頻に愚問を連發し當方非道く難澁致し候事有之候ひしが其節小生は明白に談話を御斷り致し貴紙載する所の數十行の如き卑陋なる言辭を弄したる事毛頭無之全く彼の破れし靴下より踵(かゝと)を現したる一人物の卑劣なる揑造に外ならず候爲念左に出たらめの條々列記可致候

一、「旅館城西館の奥座敷に紫檀の机」云々と有之候へども小生の下宿城西館の一室には紫檀の机など無之小生のは三越製の西洋栗まがひの安物に候

二、「悠然と金口を吹かし」と有之候得共小生は一切煙草は嗜まず候金口にはあらねど煙を吹きしは破れし靴下より踵をあらはしたる一人物自身に御座候

三、「こゝろよく記者を迎へ」と有之候得共小生は最初より頗るこゝろよからず存居候ひき

四、「大阪の誇りはお城の石垣と天王寺の塔に限らない」以下十數行所謂經濟の大阪觀は彼の破れ

し靴下より踵をあらはしたる手腕家の論說と存候小生の曾て一度も考へし事なき事に御座候殊に大阪の新聞をほめたる箇所有之候が實を申せば小生は東京の新聞が社會の木鐸なりなどと自負し居る間にいちはやく商賣主義を以て大儲をなし殆ど横暴なる勢力を振へる大阪の新聞をこゝろよく思ひ居らざる者に御座候

五、「先づ人生の樂みは酒と女といふが」以下十數行所謂藝術家の觀察も亦破れし靴下より踵をあらはしたる一人物の觀察に相違無之候今にしておもへば大阪の婦人に對する感想及大阪婦人を妻となす意ありや否やの如き突飛極まる質問をうけし記憶有之候が其時の小生の返事はそんな愚問には返答出來ずといふ一言にて候ひき是非共大阪の女を妻にしたいなどゝいふ言葉を口にする事は寧ろ小生の恥る所に候

六、破れし靴下より踵をあらはしたる一人物の手腕並々ならず被存候は最後に「美しい大阪婦人も思想的には如何ですかね」といふ一節にて此の巧妙なる捏造と手痛き諧謔には小生も殆ど敬服仕り候但し小生は大阪の婦人を別段美しいとは存じ不申貴紙上に常にあらはるゝ所謂名流婦人の自己の相貌の個性を沒却したる耳かくしや或は又歐羅巴の賣女の如き洋服姿には密かに公憤を感じつゝあるものに有之候

七、草間氏に關する一節も事實相違に御座候同氏は小生の門人などには無之又その長篇小説が果して傑作なりや否やも未だ一頁も讀まざる小生の知る限りには無之從而出版の事も存じ擄らざる所に候

八、寫眞は嫌ひにて御斷り致候新妻を迎へて云々の如き不愉快なる事は申さず候

九、小生は生來ハハハハハハといふ如き高笑の出來ぬ生れつきに御座候乍末申添候

右の通に候間法の命ずる所に從ひ止むを得ざるに出る取消にあらずして小生の迷惑御諒察の上眞心を以て御訂正相成度切望仕候

四の十一

三田は新聞社へ宛た一文を書終ると、稍溜飲の下つた氣持もし、又その語氣の強いだけ、かへつて昂奮を增したやうでもあつた。狀袋に入れたのを懷にして、直ぐに郵便函に急いだ。

歸つて來ると、待構へてゞも居たやうに、玄關に亭主がゐて、

「おかげさまで私とこも新聞に出ましてな、みなが喜んで居ります。」

と平生の無口に似ず、揉手をしながら愛想笑ひをした。三田は何と返事をしていゝか困つてし

まつて、厭な顏つきで二階に馳上つた。
その晩は机にむかつても、平靜な心持は歸つて來なかつた。本を讀む事も、物を書く事も出來なかつた。半分はやけになつて、机の上にづゝしりと置かれた「或る泥濘にうごめく人々」を開いた。
五枚十枚讀むうちに、まるつきり省略を知らない煩瑣(はんさ)な書方が堪らなくなつて來て、到底一字一句を讀む根氣はなかつた。二枚三枚一時に飛ばしながら進行した。
結局その小說の內容、田舍の文學靑年が都會に出て成功する迄に、經驗する生活と性慾との惱みを描いたもので、工場に働く場面もあり、下宿の女中との情事の光景もあつた。投書家に普通の、自然主義全盛時代に幾つもあらはれた題材で、しかも當時流行の人道主義的感傷癖を多分に含むものである。至る所に出て來る人類の救濟といふやうな文字が、まるつきり無內容に用ひられてゐるのが堪らなかつた。作者の努力が些かも內部に向けられず、徒らに量に於て人を壓倒しようとする野心にみち／＼てゐるのが、その眞實の價値の乏しい丈著しく目立つのであつた。水平線以下の物で、明日(あす)になつたら送りかへさうと思ひながら、三田はそれを枕頭にして眠つた。
翌朝起きて見ると、その分厚な原稿の上に一通の手紙が置いてある。外ならぬ「或る泥濘にう

ごめく人々」の作者から來たのだつた。

先生。僕は隨分感謝してゐます。今日の夕刊を讀んだ時の感激さを察して下さい。實は僕は先生の作品は好きでなかつたのです。耽美派といふんですか、享樂主義といふんですか、藝術至上主義といふんですか、何にしても吾々の胸にはぴつたり來ない或ものが隨分多過ぎます。しかし今は甘んじて門人と呼ばれませう。先生の序文も隨分難有いと思ひます。どうぞ僕の力作を世の中に出して文壇を驚かして下さい。あゝ、僕の作物が本になるんだ。今は昂奮さが餘りはげしくて手紙なんか書けません。先生は此の心持をよくわかつて呉れると思ひます。明晩にもうかゞつて批評して貰ひます。それも隨分樂みです。

ほんとに昂奮して認めたらしい筆勢の手紙を見て三田は當惑した。此の頃の若い文人の鈍感から生れた言葉癖を、そのまゝ眞似した手紙の文言は不愉快だつたが、青年の感激の僞りならぬ事は察しる迄もなかつた。本にする値うちは無いと云ひきかせなければほんとの親切ではないのだが、かう迄本人が喜ぶものなら、何處かの本屋に頼み込んで、無理にも出版させてやり度くもあつた。

何れにしても、かりそめの新聞記事が、人に及ぼす迷惑を考へると、三田は又憤りを新しくし

て、昨夜新聞社に宛て書いた文句の中に「破れし靴下より踵をあらはしたる一人物」などゝ云つたのは少々厭味だつたと今朝は後悔もして居たのだが、そんな事は又忘れて、只管腹が立つて堪らなかつた。

四の十二

會社へ行くと、待構へてゐた同僚は肩を叩いて冷かすのだつた。

「三田君も會社では平の社員だが、あゝして見ると名士だね。」

「どうです。大阪の女がお氣に召したさうですが、いゝのが見つかりましたか。」

口々に面白がつて話かけるので、三田は甚しく赤面しながら、

「冗談ぢやない、あれはみんな新聞記者の出たらめですよ。あんまり根も葉もない事を書いてるから、早速取消してやりました。」

いくら辯明しても、誰一人新聞の記事を疑ふ者はなかつた。三田は支店長の目付を殊に氣にしながら、机の上に背を曲げて、さも忙しさうに事務を執つた。

正午近くの事で、小使が辨當の註文を聞いて廻つてゐる處へ電話がかゝつて來た。

「三田さん、電話ですよ。」

給仕の大きな聲に席を立つて電話室に入ると、受話機を耳に當る間もなく、

「貴方は樟さんですか。僕は新聞社の野田です。此間下宿屋におたづねした野田です。」

といふのは忘れもしない彼の記者だつた。

「貴方は怪しからん手紙を社に寄越しましたね。あゝいふ事を云つていゝと思つてるんですか。あれでも紳士ですか。文學者のなすべき行爲ですか。人を侮辱してゐるぢやありませんか。」

「もし、もし、怪しからないのは貴方の方でせう。人が云ひもしない事を勝手にこしらへて書くのが怪しからないとは思ひませんか。取消して呉れなくては困ります。非常な迷惑です。」

「何ですつて。勝手にこしらへたとは何です。貴方が快活に話をせられんのが悪いのです。だから僕が注意したでせう。此方の質問に明かに返事をせんと爲めにならんといふ事を。」

記者は明かに脅かす調子で一際聲が高くなつた。彼の言ひ分は、あゝいふ亂暴な取消要求の手紙を寄越されては社に對して申譯が無い。紳士としてあるまじき事たから撤回しろといふのだつた。

「第一失敬ぢやありませんか。破れし靴下云々は絶對に許せんです。藝術家にあるまじき事で

す。」
「同じ言葉を繰返して、あく迄も手紙を撤回しろといふ。三田も破れし靴下云々丈は言ひ過ぎた事を認めたが、記者の脅迫がましい調子は一層許し難く思はれた。
「どうです。おとなしく撤回しますか。新聞の悪口なんかいふと爲めにならん事位わかつてるでせう。」
「撤回しろ撤回しろつて、君の方の捏造記事は如何するんです。それを先づ明かに捏造だと告白するのが順序でせう。」
「またそんな事を云つてるんですか。わからんなあ……」
ヂヂヂヂ……と受話機が鳴つて、電話は混線してしまつた。
「もしもし、話中ですよ。」
さう云つても何も聞えなくなつてしまつた。ほつとして、ふだんは癇癪のたねになる電話の故障を、三田は心から感謝した。

四の十三

三田は仕事も何も手につかなかつた。電話をかけて來た新聞記者の口吻では、恐縮して取消すどころでは無く、かへつて仇をしさうに思はれる。それにつけても「破れし靴下」は少し書き過ぎたと後悔した。しかし、あゝいふ無責任を敢てする新聞を、たゞ無闇に怖がつて、勝手な眞似をさせて置くのは、此の社會を益々惡くする所以である。社會人の責任としても、飽迄も正しき事の爲めに鬪はなければならない。構ふもんか、やつつけろときほつた時、

「三田さん、電話です。」

と又給仕が高い調子で呼んだ。

ちえつ、又新聞記者が執念深くかけて來やがつたんだなと思つて出ると、

「おい三田公か。」

と呼びかけた聲は田原だつた。

「なんだい彼の新聞の『一日一人』は。ほんきであんな事を喋つたのか。」

「馬鹿な、誰があんな事を喋るもんか。新聞記者のでたらめなんだ。二度の浮名さ。」

「さうだらう。さうだらうとは思つたがね、社の奴等が田原さんのお友達の面白い話が出てゐますつて見せて呉れたもんだからね。」

「實に困るよ。世間の奴は新聞は嘘を書くとは思つてゐないんだから。しかし手きびしい訂正を申込んでやつた。」

「さうか。そいつは面白いな。いや一寸聲だけでも聞かうと思つてかけたんだ。今晩うちに居るか。遊びに行くかもしれないぜ。」

「あゝ待つてるよ。左樣なら。」

三田は初めて味方の聲を聞いた思ひがして嬉しかつた。此の廣い大阪に、あの新聞の記事のでたらめである事を信じて吳れるのは、たつた一人の田原だと思つた。

その田原の遊びに來るのを樂みにして、退出時間になると、誰よりも先に會社を飛出して、大急ぎで下宿に歸つた。

「三田さんお歸り。お客さん待つてはる。」

門口で遊んでゐた藪睨の女の子が、手柄顏にいふのを聞き流して、田原が來て待つてゐるのだとばかり思つて室に入ると、火の氣の無い火鉢を前にして坐つてゐるのは「或る泥濘にうごめく人々」の作者だつた。

「先生。私は先生に逢はないではゐられなくなりました。心から感謝してゐます。あの長いもの

を、お忙しい中で讀んで下さつた丈でも隨分難有いのに、出版の世話迄して下さるなんて、何とお禮を云つていゝかわかりません。」

此間とはうつて變つて、元氣よく雄辯に話すので、それがかへつて三田の立場を苦しくした。

「如何でせう。彼の作は現在の文壇に出しても羞しいものではないでせうか。出版して、澤山版を重ねる事が出來るものでせうか。」

「さあ、それはわかりませんね。版を重ねるのが必ずしもいゝ作品では無いのですから。若し版を重ねようと思つたら、耶蘇か親鸞か良寛の事でも書けば屹度當りますよ。」

三田は苦々しい心持で答へた。

「しかし先生のやうに二重生活をしてゐる人は別ですけれど、全生活を擧げて作家たらうとするには、賣れる事も必要ではないでせうか。私は、もう僅ばかりの月給をとつて、心にもない仕事をして居る事に堪へられないんです。」

「二重生活？　二重生活つていふのは、そんな外面的の問題ではないでせう。たとへ筆一本で生活してゐても、人氣取り專一、金儲專一の通俗小說なんか書いて居れば、それこそ二重生活でせう。藝術家としての態度が眞摯なら、會社で月給を貰はうが、工場で日給を取らうが決して二重

生活ではない。第一貴方が作家として飯が喰へると思ふのが間違ひですよ。」
自分の態度に觸れて來たので、おもはず知らずむきになつて、三田はおかげで先刻から言はうと思ふ本筋に入る事が出來た。

四の十四

「貴方の作品は拜見するにはしましたが、正直のところ私には價値を認める事が出來ませんでした。實は早速郵便でおかへししようと思つてゐたのです。」
相手は全く豫想外の言葉に驚いて、三田の唇から出る言葉を見守るやうに、ぽかんとして言ふ所を知らなかつた。
「では新聞に出てゐるのは嘘なんですか。傑作だといつたり、序文を添へて出版するといつたりしたのは。」
やうやくの事でそれ丈云つたが、既にその顏には失望と怒の色が現れて居た。
「私は傑作だとも出版するなんて事も云つた覺えはありません。此間の新聞記者が勝手に揑造したんです。私は貴方が眞面目に創作をしようと云ふのなら、出版の事なんか考へずに、もつと勉

強しなければならないと思ふのです。」

三田は新聞の記事に對する辯解から、やがては「或る泥濘にうごめく人々」の批評にうつつて行つた。作者の觀察の幼稚な事、描寫のなつてゐない事、あまりに流行意識に捉はれ過ぎてゐる事、獨創に乏しい事、――さうしてそれ丈の內容ならば一千枚を費す必要はなく、五六十枚で書ける事を諄々と說いて居るうちに、自ら同情も湧いて來て、此の文學雜誌にあやまられたる青年を憐れむ心さへ深くなつた。

「よくわかりました。先生と私とは全く傾向が違ふんだから爲方がありません。最初から見て貰ふ人を誤つたんです。」

相手の耳には三田の言葉は入らなかつた。有頂天になつて喜んだ事が、まるつきり空に等しかつたのを知ると、もう共座にはゐたたまれないらしかつた。

「では新聞に出てゐた貴方のお話は、全然嘘だとおつしやるんですね。」

そんな事があるものかと云ふやうな様子で、もう一度念を押した。

「貴方にも御氣の毒ですが、あゝいふ事を書かれて、私も閉口してゐるのです。早速取消は出して置きましたけれど。」

「左様でしたか。では其の原稿は頂いて歸りませう。大矢北海氏にでも賴んでどうかして貰ふ事にします。」

机の上の一千餘枚の小說を兩手で抱へて歸つて行く姿を、三田は氣の毒に思ひながら、そのくせ如何する事も出來なかつた。

「お邪魔しました。」

皮肉らしく、嘲るやうな調子でいふのを、玄關で見送つて、三田は寂しい氣持になつた。

「三田さん、お客さんお歸りだつか。ほしたら直きに御支度しまつさ。」

「今日は支度はいりませんよ。今に社長さんが來るさうだから。」

「あゝ父饂飩だつかオアハハハハハハハ。」

婆さんに聲をかけられたのを切拔けて、上り口にはふり込んである夕刊を拾ふと、逃げるやうに室に歸つた。

直ぐに開いて取消の記事を探したが、彼が豫期したやうなものはなく、殆ど誰も氣のつきさうもない欄外に、昨日の夕刊の「一日一人」中には多少事實相違の點かあると、談話者から注意かあつたといふ事が、三行ばかり書いてあつた。三田はその新聞を拳骨でなぐりつけた。

待つても待つても田原は來なかつた。空腹をかゝへて待ちあぐねた頃、急用が出來て來られないと、電話があつた。

四の十五

新聞に名前が出たといふ事は、俄に城西館の尊敬を増す事になつた。たゞの會社員よりも、兎に角難しい仕事に思はれる小說家だといふ一事も、何と無く重きを加へた。

「離室の二階のお客さんの話なあ、新聞に出ましたぜ。」

婆さんは他の客の座敷を觸れて廻つた。

「へえゝ、あのむつつりした人だらう。」

一番話の合ふ貯蓄銀行員の處では、お尻を据ゑて話込んでしまつた。

「貴方まだ見やはれしまへんの。こない書いたりまんが。」

帯の間から切拔いたのを取出して見せた。

「一樟さんたらいふあざ名で、小說書きはるのやさうな。何時行つてもきちんと机に向うて勉強してはる。若いのに偉いもんや。」

ゐくに口も利いては呉れない三田に對して、婆さんは全く好意を持たず、一離室のたんまりさん」と密かに稱してゐた位たつたが、急に自慢の種になつて來た。

「なんだと、是非とも大阪の女を妻にし度いだつてハ、、、、。養子ならいゝ口があるかなあ。」

「養子かて構めしめへんのやろ。先がえゝ家やつたらな。」

「えゝ家だとも、身代は五六十萬圓は確にある。もう此の上は金は入らん、養子は何もせんと遊んでゐてくれゝばそれでいゝといふのだ。結構な身分ぢやあないか。」

「へえゝ、そしてお子達はあれしまへんの。」

「娘が一人あるんだがね。顔立も惡くないんだが、どうしたものか生れつき跛なんだ。」

「それ位の事は辛棒せんならん。ありあまる身上やつたら自身働く事もいらんし、片足短いかつて嫁はんの役目つとまらんいふ事あれしまへんやろぉアハハハハハ。」

二人が顔を合せれば、どうで其處に落ちて行く猥談になつて、互に聲が高くなつたが、

「此の話がうまくまとまれば、その家の身代の一割は貰へるんだ。五十萬圓として五萬圓だから惡くないやね。」

突然聲を低く落して、さも他人に聞かれては惡い話のやうに、眞實めかしていふのだつた。

「うまい話やなあ。五萬圓入つたら、半分は私が貰ひまつせ。」
「なあに外の人では無し、お婆ちやんと僕の間だ。お前の物は私の物、私の物は私の物さハ、、、、。」
「オアハ、、、、、、。」
勝手な事を何時迄も喋つたが、婆さんは七分迄は眞面目で、その晩三田に養子の話をした。財産は百萬圓で、一人娘は美人で、たゞ少しばかり片方の足が短いが、それとて大した事は無く、且つ當主のおやぢは病身であまり長生はしまいから、此の上いゝ口はありはしないと、さも自分が先方を承知しつくしてゐるやうな法螺を吹いた。
金露の盃を手にしたまゝ、苦い顔をしてゐた三田は、婆さんの言葉が終ると直ぐに、
「難有う。だが僕は大阪の女は嫌ひですよ。」
と自ら嘲るやうな口調で云つて、一層不機嫌な樣子を見せた。
「あんなわからん人もないもんや。自分から大阪の女子に限るいふさかい、人が親切にいうてるのに。」
婆さんはお膳を下げる途中で、貯蓄銀行員の室に寄つて、お鉢を抱へたまゝ一部始終を話して

憤慨した。

五の一

十二月に入ると、折々雪まじりの雨が降つて、めつきり寒くなつた。一切の物價は底知らずに高くなるばかりで、下宿屋も又々一割の値上げをした。その上に炭などは益々けちにするので、何處の室も寒さは骨身に沁みるのであつた。

離室の上下と、眞中の六疊の客は變らなかつたが、往來に向いた二階の六疊にゐて、病院通ひをして居た串本の網主は、春になつたら又出直すと云つて、故郷に歸つてしまつた。その後には、東京から轉任になつて來た煙草專賣局に勤める夫婦者が入つた。隣の四疊半の方もふさがつて、醫科大學に通ふ學生がゐた。

「あの學生さんなあ、婦人科の先生になるのやいうて、えらい寫眞の入つたる本が仰山あるわ。」婆さんは、なるたけ澤山の人に聞えるやうな聲で、專門のなかに插入してある種々な人體の部分の寫眞を、怪しからず面白いものとして皆に話した。

此間迄三田のゐた中の八疊も、二日三日、長くて一週間位の客の爲めに、絕えずふさがつてゐ

た。年末になつて、此の商業地に掛金を集めに來る商賣人が多いのだつた。
朝も晩も、一時に方々で手が鳴つて、お梅は坐るひまもなくこきつかはれた。片方の座敷にややくお膳が出たと思ふと、
「おゝい、早う飯を喰はさんかあ。」
と外の室から怒鳴られる。
「お待遠さん。えらい濟んまへんな。手が足りまへんので。」
「手が足らなけりやあ、殖やせばいゝぢやないか。」
がみ〱怒る聲が止まなかつた。
さういふ中で、一度も手も叩かず、まして聲を出して人を呼ぶ事もないのは三田だつた。時間のきまつて居る勤なので、朝たて込んで手間どれる時には、飯も喰はずに出て行く事もあつたが、そんな時でも手を叩いて催促する事もなかつた。
「三田さん、一寸待つとくれやす。今直きだつせ。」
靴の紐を結んで出て行く姿を見て、驚いてお梅が後から聲をかけたが、
「いゝよ、いゝよ。別段お腹も空いて居ないから。」

振向きもしないで云ひながら、さつさと往來に出てしまつた。
「どないしたらえゝのやろ。三田さん怒つて出て行かはつた。」
臺所に馳込んだお梅が泣聲で訴へたので、婆さんも亭主も女房さんも一大事とばかり吃驚して、
その日の夕方三田の歸るのを待構へて、玄關に出迎へると、口々に謝まつたが、
「なあに、いゝんですよ。忙しい時には爲方が無いさ。」
意外にも、ふだんは見せない笑顏で答へたので安心した。ほんとに怒つてはゐない様子だつた。
同じ事が二度三度重なるうちに、三田の食膳の遲れるのはちつとも差支へのない事に思はれて來た。お梅が氣の毒がつて裏梯子を上らうとすると、
「三田さんやつたら後でよろしいが。」
とたしなめる事になつてしまつた。朝は喰べそこなふ事が多く、晩は一番後廻しで、おはちの底に冷く殘つた飯粒が、彼の口に入る事になつた。

五の二

三田は他人を煩はす事が嫌ひで、身の廻りの事は、出來る丈自分でする性分だつた。その癖ひ

どく無器用なので、袖だたみにした着物の如きは皺だらけになつてゐたが、それでも宿の者には頓着なかつた。各々がめい〳〵の爲す可き事は、催促されないでもするのがあたりまへだ、無闇に催促するのは失禮だといふやうな感情が、意識的ではなく、生れながらの心持として腹の底にあつた。

その上階級觀念や職業別に據る差別感を持つて居なかつたから、同宿の他の客などが下宿に對して要求する事は、殆ど念頭に浮ばなかつた。たゞ親切は欲しかつた。どうかしてもうちつと下宿の者が親切だつたらと、それは始終考へる事だつた。

一度も手を叩かず、一度も小言を云はない客に對して、下宿の方では別段感謝してゐなかつた。寧ろ馬鹿にした位だつた。

「あんな怖い顏してはつても、三田さん程おとなしい人も無いもんや。」

と、客の前には顏を出さない女房が、ほめたさうな口ぶりで云ふと、

「向は變りもんやもん。」

婆さんは傍から一言の下に片づけてしまふのだつた。

或時は、斯ういふ出來事もあつた。

朝、婆さんが三田の室の掃除をしてゐると、塵拂の先が觸つて、机の上の陶器の西洋人形を叩き落した。おや、と見る拍子に、可愛らしい花賣娘の首がぽくりと折れてしまつた。流石の婆さんも狼狽てゝ、右の手に首を持ち、左の手に體を持つて、雙方から押つけて見たけれど、如何にもならなかつた。婆さんは先づその胴體を机の上の元の位置に立たせ、そつと首を上にのせて見た。折れ口はかくせなかつたけれど、左の腕は籠を提げ、輕い足取りを見せた娘の、頭巾をかぶつた顏は靨を浮べて笑つてゐた。婆さんは一先づ安心して、足音を忍んでその室を出た。

自分の落度をかくしながら、その成行は矢張り氣にかゝるので、其の晩婆さんは三田のお膳を持つて行つて見た。

「お待遠さん。」

聲をかけながら襖をあけると、三田は机の前に坐つて、右の手に人形の首を持ち、左の手に身體を持つて、雙方から押つけてゐるところだつた。婆さんはぎよつとした。早くも氣が付いたなと思つたが、それよりも、先刻自分が塵拂にかけて首を折つた時、卽座に首と胴とをつながうとしたのと同じ形で、三田の工風してゐる姿が胸を打つた。誰しも同じ事をするものだなと、心密かに考へた。

「お人形さん、どうしやはりましたんな。」

婆さんは素知らぬ顔を差寄せてのぞき込んだ。

「首がとれてしまつた。可哀さうに。」

獨言のやうにいひながら、又しても婆さんが爲たと同じやうに、先づ胴體を何時もの位置に置き、その上に首をのせた。

「和蘭(オランダ)の旅の記念なんだが……」

何かいふのかと思つたら、それつきり默つてしまつた。

婆さんは長い年月(としつき)の經驗で、かういふ場合には屹度誰のしわざかと訊かれるものと思つてゐた。勿論その時は知らないと答へるばかりだと腹はきめて居たが、相手が何も云はないのは全く意外だつた。

「餘程變つたるわ。」

感謝するよりも、くみし易い氣持の方が働いた。小說家なんて云つたつて、どんな小說家なんだかわかるものかと、新聞に記事の出た二三日とはうつて變つて、尊敬の念は日に日に薄らいでしまつた。

五の三

さういふ三田をうつちやらかしにして置くのは平氣だつたが、外のお客は、うつちやらかしては置けなかつた。手が鳴つて直ぐ行かないと、忽ち小言を喰はなければならなかつた。萬一婆さんに向つて小言でもいふものがあると、其の場は百方詫言を並べながら、帳場に下りて來ると盛んに毒口をきいたあげくが、弟夫婦に鉾先を向けるのだつた。

「かなはん、かなはん。毎日々々朝から晩迄叱られ通しや。給金は一文も貰はいで、こない働いてやつたらどないして呉れるのやろ。」

臺所の板の間で、晝飯の後始末をしてゐる二人を尻目に見ながら、煙草の烟を大きな鼻の穴からゆる／＼吹いた。うつかり取りあつては損だと知つて居る弟夫婦は、婆さんには知れないやうに顏を見合せて、お互に默つてゐるといふ合圖をして、さも忙しさうに皿小鉢に拭巾をかけてゐた。

その態度が婆さんには、はつきりわかつてゐた。

「うちもなあ、長い事女中も置かいで私とお梅が働いてやつてるのやが、此の節季の忙しない折

に、二階を上つたり下りたり、あつちやでもこつちやでも何たら彼たら小言ばかり聞かされてゐたら、壽命が縮まるやうな氣がするわ。口入屋にでも頼んであるのやないのんか。」
白ばつくれたつて問詰めないでは置かないぞと、意地惡く高調子でたゝみかける。えゝ又始めよつたぞと、女房の方に目くばせしながら、亭主は何とか返事をしなければならなくなつた。
「女中の事だつか。そんなら方々に頼んだるがな。」
「頼んであるいうて一人も來んのはどないしたのや。」
「催促てはゐるのやけれどなあ。」
どうせ喋りつこでは敵はないとあきらめて居るので、ふだんから無口なのが、殊更口數は少いのだつた。
「一體あんたたちが横着なんや。」
婆さんは力強く烟管をはたいて、唇をなめながらまくし立てた。第一自分は樂寢をして居られる筈なのが、見るに見兼て手傳つてやつてゐるのだが、それをいゝ事にして自分達は足腰を延ばしてゐる。お客が手を叩いても、立つて行くのは自分である。小言も聞いてやつてゐる。それなのにお梅にこそ相談づくで少しばかりの給金かはりの物をくれてはゐるが、自分には何の御禮も

しないではないか。さういふ意味の事をしちくどく繰返して、合間々々には口汚く二人を罵つた。
「おらくさんもおらくさんや。子供ばかりこしらへてゐるのが能やないぜ。宿屋のおかみさんやつたら、おかみさんらしう働いたらえゝやないか。」
「私かて働いてゐまんが。」
女房も默つてはゐられなくなつて、白眼勝の目で睨んだ。
「へえ、あんたが働いたる。働くいふのはな、晝日中聟はんと二人で炬燵に入つとる事やおまへんぜ。お客さんの前に出て、お給仕もせんならんし、ねまのあげおろし、拭掃除な、毎日々々私のするのを見るがえゝわ。」
「あんたのは好きでしてはんね。頼まれもせえへんのに。」
「何や、頼まれもせんのにいうたな。そんな事がよう云へたもんや。阿呆らしい。私が助けてやらなんだら、此の家の商賣は出來るもんか。」
「あんたがする事なら私がしまつさ。」
女房は眞青な顔をしていひ切ると、手荒く汚れ水を流場にあけて、
「あゝあ、うるさい、うるさい。」

つぶやきながら、子供の寢かしてある奥の室に行つてしまつた。亭主もそれを見ると、いゝ機會にして裏の物置の方にかげをかくした。

「何ぬかす。阿呆。」

婆さんは癇積聲をふりしぼつて、あらゆる憎しみを相手の後姿に投かけた。

五の四

いつたん喧嘩をすると、あく迄も忘れないのが婆さんの根性だつた。その晩は意地惡く長火鉢の側を離れず、何時もは好きで出たがる客の室へも、遂に顏を見せなかつた。お梅一人が泣き出しさうな顏をして立働いてゐるのを、忌々しく横目で見ながら、晩酌の一本を、長い間かゝつてなめてゐた。

うちの者の食事も濟み、臺所の始末もどうにか片附くと、女房は子供を寢かしつけに奥へ引込んだが、亭主は帳場の電燈の下で帳面と首引きで算盤を彈いて居た。婆さんは矢張り火鉢の上にのしかゝるやうにして、滿腹の後の煙草をさもうまさうに吸つてゐた。

其處に、茶道具などを片附けて、お梅も二階から下りて來た。

「おゝしんど。」
べつたりお尻を下して、婆さんと差向ひに長火鉢に寄りかゝつて坐つた。
「今夜程忙しい事も珍しいな。一寸も休むひまあれへんのやもん。」
「ほんまにいな。まあ、ちつとあたんなあれ。」
婆さんは弟に聞えよがしにねぎらひながら、火箸を手にして炭をつぎたした。
「えらい寒なつたなあ。私の手、こないなつてしまうた。」
くり／＼した二皮眼をみはつて、皹の切れた両手の甲を、婆さんの眼の前に突出した。
「ほんになあ。」
さも／＼同情したやうな聲を出しながら、婆さんは算盤を弾いてゐる弟の方に横目を走らせた。
「此の家でよう働くのはお前一人や。朝から晩迄つかひ通しにつかはれて、女中並の給金も呉れへんのやからかなはんなあ。」
さう迄云つても、顔も上げずに、わざと忙しく指さきを動かしてゐる相手を見ると愈々小面憎かつた。
「なあ、私がせんどから度々云うたお梅の給金――給金いふ事もあれへんけど、まあ給金みたい

なもんや。」
婆さんは弟に聲をかけて、又談判を始めるのだつた。
「あれなあ、もちよつとふやして貰はん事には、着るもん一枚こしらへる事も、ようせんで。雜用が高うなつたさかい、五圓や六圓のはしたがねは鼻紙の足しにもならへん。」
「さうぽんぽん云はんかてよろしい。その事やつたら今考へたるのや。」
たうとう默つては居られなくなつて、亭主も額に皺を寄せながら、うるさくて何も手につきはしないといふ様子を見せて、膝の上の算盤を音をさせて疊に置いた。
「考へたる、考へたるいふばかりで、何時になつたらえゝ考へが浮ぶのやわからん。私の方の分もせんどの話のやうにお正月から上げて貰ひまつせ。」
その方が本來婆さんの腹にこだはつて居る問題で、月々の取分を、増さなくてはならないとは、これ迄にも執拗く申出た話だつた。
「そやけどなあ、かゝりもえろなつたよつてんな。」
婆さんは物價騰貴を名にして收入をふやさうとし、亭主は同じ物價騰貴を楯にして逃れようとするのだつた。

「かゝりがえらうなつたいうても、宿料も高うなつたやないか。以前として見ると下宿料は二倍も二倍も高うなつた。私の取分丈かふえんいふ道理がないやないか。」

「けれども物が高いさかい……」

亭主はたゞみかけて來る相手の口先に壓倒されて、同じ事を繰返す外に爲方がなかつた。

「物が高かつたら又宿料をあげたらえゝやないか。此の景氣になんぼあげたかて何も苦情いふものあれへん。」

「さうはいふがなあ、つい此間あげたばつかりで、さうもいかんな。」

「それが商賣下手いひまんのや。あげる時にしつかりあげんからどもならん。」

婆さんは繰返して、自分の取分の增額を強要したが、亭主の方も口でこそ對等には相手になれないが、腹の中では馬鹿にして、何だ彼だといひながら、何時迄たつても埒があかなかつた。

長火鉢のふちに額をつけて、お梅は微かに鼻を鳴らしながら居睡りしてゐた。

五の五

二三日は婆さんもふてくされて、客の前には出なかつたが、もともと頼まれた仕事ではなく、

若夫婦は主人顏してのさばられるのを寧ろ迷惑に思つてゐるのに、當人が一人でじつと坐つてはゐられず、相手を見つけて喋るのが何よりといふ性分なので、何時となく又幅廣の薄黄色い顏を、到る處に押出すやうになつてしまつた。

桂庵から寄越した女中も來るには來たが、四五日居たばかりで逃げてしまつた。德島縣の田舍から出て來た其の女は、三田の室に給仕に來た時、

「此のうちは御飯をお腹いつぱい喰べさせてくれへんのんだつせ。」

とこぼしてゐた。その話によると、女中の御飯も婆さんがよそつて呉れて、おかはりをすると、

「よう喰べるなあ。」

と一度一度驚いた風をして見せるさうだつた。

「そんなにされては誰かて喰べられしまへんわ。」

眞白に肥つた大女は、泣面をして話したが、その翌日は居なくなつてしまつた。

「あんなしよむない女は居えへんかてよろし。お給金はたんとやる約束したが、當人は何一つ出來へんし、毎日々々茶碗や小皿を缺きよつた。」

忌々しさに堪へない口調で、婆さんは方々の室を一巡觸廻つた。

亭主は何時も臺所で、飯もたけば料理も一手でやつた。女房は、漸くまる一年の誕生日を迎へた頭の大き過ぎる女の子が餘り丈夫で無いので、其の方にばかりかゝりあつて居た。その上甲斐々々しく體を働かせる性質ではなかつたし、近頃氣分が勝れないと云つて寢てゐる事も多かつたから、時折廚を清める位が仕事で、大概は奥の一室に引込んでゐた。

「甲斐性無しめが、又樂寢してくさる。」

婆さんは年中弟の嫁を罵つてゐた。

「なんし、おかみさんがかいもく働かん人やもんで、こんな婆がえつさえつさ上つたり下りたりせんなりまへん。」

客の前でも惡口をいひながら、その賓方々の室で、面白さうな高笑ひをして居るのだつた。

客好きの婆さんも、三田に對しては好意が持てなかつた。むつつりして居て、洒落や輕口を云つても、解つたのか解らないのか、笑ひもしないのが忌々しかつた。

それから又女の客も、女連の客も嫌だつたから、夫婦者の所へは成可くお梅をやる事にしてゐた。

「御夫婦揃うて飯喰べたる前に、ちんと坐つてお給仕するのは、けなるうてかなはん。」

誰憚らずそんな事を云つて、結局繁々行くのは貯蓄銀行員の室だつた。其處からは時々花骨牌を切る音も聞え、銀行の同僚の集まつて居る時もあれば、表二階の醫學生と婆さんと三人の時もあつた。互に口やかましくいひ合ふ中で、高笑ひの聞える時は婆さんの勝つた時で、聞えない時は負けた時たつた。

五の六

暮の二十五日には、賞與金を貰つた勤人の樂しい心持が、此の下宿にもあらはれた。三田は田原に呼出しをかけて、何處かで飲まうと思つたが、會社の決算期に當つて多忙を極め、此の頃はちつとも姿を見せない友達は、其の晩も忘年會があると云つて斷つて來た。たつた一人、お馴染の蛸安で飲んで歸つた三田は、來年の三月頃から大阪の新聞に出す約束になつて居る、長篇小説の書きかけを前にして机に對つた。

眞中の八疊の客はゐなくなつたので、今晩は其處に貯蓄銀行員と醫學生と婆さんが出開帳で花合に夢中になりながら、酒の後の高調子で喋る聲が、三田の室をも襲つて來た。殊に婆さんの得意の猥談は、かげで聞く者さへ思はず顏を赤らめるやうな事が多かつた。けれども夜の更けるに

従つて、婆さんの聲は段々聞えなくなり、反對に貯蓄銀行員がはしやぎ出した。それは明かに勝負の結果を物語るものに違ひ無かつた。

ほんとに婆さんは、最初の景氣に似氣なく、結局散々負けてしまつた。饒舌も乾いて動かなくなつたのだつた。

「今日は如何なる吉日にて――賞與は入る、お花は勝つ、これでえゝ女子に惚れられたら太閤様や。」

からかひ面で云はれゝば愈々苛々して、

「あかん、あかん。まんの悪い時は手役がついたかて、どもならん。この猪の面が好かん。」

めくつた札を、婆さんは手荒く叩きつけた。

「えゝ、やめた、やめた。寝酒なと飲んで寝てこまそ。」

遂にあきらめて座を立つた。

「寝酒か。悪くないなあ。済まんが僕にもつけてくれんか。肴は何もいらんから。」

室の外に出て行く婆さんの後から、貯蓄銀行員が聲をかけた。

「祝盃といふ奴さ。アハハハハハハ」

「好かんたらし。」

婆さんはつぶやきながら下りて行き、醫學生も表二階に引上げ、貯蓄銀行員が六疊の方へ戻つて、一人でうたふ鼻唄が聞えた。家の内が靜かになつたので、三田は頭が冴えて、なほ一心に稿を續けた。

階下に下りた婆さんは舌打ちしながら漬物を切り、海苔をあぶつて膳立てをして、それ迄居睡りしてゐたお梅を喚起し、お銚子を二階に運ばせた。何時もなら自分で出かけて相手をするのだが、負腹の蟲が承知しないので、自分は自分で長火鉢の銅壺に一本つけた。

二階に行つたお梅はなか〳〵下りて來なかつた。何かくど〳〵喋つて居る男の聲の絶間に、微かに聞えるお梅の笑聲が婆さんの氣に入らなかつた。

「お梅、お梅。」

奥には弟夫婦や子供達も寢て居るのに、そんな事には頓着なく、大きな聲で呼んでみたが返事はなかつた。平生うるさくお梅に冗談をいふ男の樣子が、はつきり目の前に浮んで、折柄妙にひつそりと、物音も聞えない二階の一室が疑はしい景色に想像された。耳を傾けたが矢張り物音は聞えなかつた。手にした盃を下に置くと、婆さんは忍び足で梯子口迄行つて、一層耳に注意を集

中した。

五の七

何の物音もしない。婆さんは、もう一度呼んでやらうかとも思つたが、何故か聲が出なかつた。二三段忍んで上つた時、體の重みで段梯子のきしむ音が、足の裏を脅かすやうに響いた。
とたんに、頭の上の六疊で、醉つた男の聲で、
「もう一本つけておくれ。お梅ちやんのお酌たと、ひとしほうまいや。」
「まだあかりまんの。もうやめにしてやすんたら如何だす。」
「いや、もう一本きりだ。一人で寢たつてつまるもんか。」
「あれえ。」
お梅の悲鳴と共に、どたんばたん音がして、障子をあけて廊下に飛び出して來る姿が見えた。
婆さんは狼狽して長火鉢のところ迄逃げかへつて、何も知らない顔で、銅壺の湯加減を見る振をしたが、取つくらふ暇がなかつたので、半分立てた膝小僧が亂れた着物の間から顔を出して居た。
「えらいわるさ。」

銀杏返の髮の亂れを氣にしながら、お銚子を片手にお梅が下りて來た。顏は上氣して、呼吸(いき)ははずんでゐる。

「お酒おかはりだすと。」

不平さうにつぶやくと、婆さんの目の前を通つて臺所に行かうとした。

「お酒やつたらもう斷(ことわ)つときなはれ。」

婆さんには、お梅の姿が自分の目を憚かるもの丶やうに見えた。

「そいでも、もひとつ吳れいうてき丶はれへんのやもん。」

「きかんかて構めへん。十二時にも一時にもなつて、酒飲むお客さんてあらへん。お茶屋とは違ふのやぜ。」

自分の飲んでるのは、此の家の主人だからお客とは違ふのだと、腹の中で辯解しながら、初めて氣がついて、むき出しの膝頭をしまつた。

「お前が何時迄も、じやらじやらしてるよつてあかんのやで。外のお客さんの手前もあるやないか。男と女が酒飲んでるのやつたら、何したるのか大概わかつてゐさうなもんや。」

婆さんは嵩(かさ)にか丶つて、自分の懸けた疑ひを口に出さないでは居られなくなつた。

「私何もお酒飲んだり爲えしまへん。」

空つぽのお銚子を持つたお梅は、ぺつたり其處に坐つてしまつた。

「飲んだかて飲まんかて、どつちやみち、夜さり男の室にゐたら、誰かつてをかし思ふがな。」

勝はこつて烟管を取上げて、深く烟を吸つた。

「そんな事何も知らん……」

涙ぐんだ顏をして、默つてうつむいて居たお梅が口惜しさうにつぶやいた。

「自分こそをかしいくせに。」

「何、何云うた。も一ぺん云うて見い。」

吸ひかけた烟管を握りしめて、婆さんは聲を震はせて立ちかけた。お梅は凝然と相手を見上げたが、直に權幕に壓倒されて伏目になつてしまつた。

折柄二階で手が鳴つて、

「おゝい、酒持つて來んかあ。」

と尻長に引いて怒鳴るのが聞えた。婆さんもお梅も、ばつの惡い顏を見合せた。

「おゝい、酒持つて來んかあ。」

同じ言葉を、前よりも細かい節をつけて怒鳴つて、ぱちぱちぱちぱち手を叩く。いゝ機會にしてお梅は立上らうとした。

「何しに行く。」

はげしい勢ひで、婆さんは烟管の手を延ばして引戻したが、引かれまいとして膝を折つたお梅の手の德利は、長火鉢の角に當つて缺けてしまつた。

「阿呆め。」

その場の勢ひで、婆さんは癇癪まぎれに烟管を振上げて相手の背中を打つた。雁首が飛んで、向ふの隅の壁に當つた。

ひいいと噛しめた聲でお梅は泣出した。

「おゝい、酒持て來んかあ。」

二階では意地になつて手を鳴らした。

五の八

翌朝お梅の姿は何處にも見えなかつた。昨夜の事件の後、突伏したまゝ何時迄もすゝりあげて

泣いて居るのを横目で見ながら、もうひとつ、こつぷ酒を飲んで、その勢ひで寝てしまつたが、それつきり婆さんは何も知らなかつた。夜の間に出て行つてしまつたのか、今朝になつて逃げたのか一切わからなかつた。弟夫婦は事件のいきさつを知つてゐて、婆さんを非難する爲めにも、一大事らしく騒いで見たかつた。

「ひよつとして短氣な眞似でもされたらどないしよう。あて等知らん事やけれど。」

女房の方は殊に日頃の鬱憤を晴らし度い爲め、ほんとに身を投げてゞも呉れゝばいゝと思つてゐた。

「なあに、そんな事出來る女やあれへん。ほつといたら戻つて來るわ。」

親許に逃歸つたに違ひ無い。その外には行く處はないと、平氣を装つてうち消しはするものゝ、婆さんの心の中にも心配ははびこるのであつた。何喰はぬ顔をして郵便局に行つて、吉野山の麓の村のお梅の實家に電報を打つた。

家内のごたごたを客に知られるのは面白くなかつたので、婆さんも弟夫婦も口をつぐんでゐたが、藪睨の女の子は、子供に特有の好奇心を大人に傳へ度くて爲方が無かつた。

「お梅ちやん、いんでしもた。」

玄關で遊びながら、二階から下りて來る客を見ると、待構へて居て云ふのだつた。
「なに、お梅ちやんがいんでしもた。何處にいんだんだい。」
貯蓄銀行員は事件を知つて居るので、婆さんの耳を憚つて、子供の顏に近く口を寄せて聲をひそめた。
「何處や知らん。お婆ちやんにいぢめられていんでしもた。」
「ふうむ。」
事態容易でないと思つて眉をひそめたが、かゝりあひになるのを怖れる風で、さつさと銀行に行つてしまつた。女の子は頗る物足りなかつた。もつと大人にとりあつて貰ひ度かつた。
間も無く三田が下りて來た。上り口に腰かけて、編上の靴を穿いてゐる肩につかまつて、
「お梅ちやん、いんでしもた。」
又同じ言葉を繰返した。三田には何の事だかわからなかつたので、ふりかへつたばかりだつた。
「お梅ちやん、いんでしもた。お婆ちやんにいぢめられて。」
女の子は相手のわからないのが、もどかしさうに、藪睨の目を大きくみはつて說明を加へた。
「お婆さんにいぢめられて行つてしまつたつて。」

三田の強い聲がきゝ返した。
「何處や知らん。いんでしもた。」
相手の心を動かした事を感じて、子供は滿足して二度三度頷くやうに首を振つた。
「さうか、いつてしまつたのかい。」
三田は苦笑して嘆息したが、直ぐに、何でも無いぢやないかと云つた風な大胯で、靴の音高く出て行つた。
正月も目の前に迫つて、何となく人の心も忙しい折柄、お梅のゐなくなつた事は下宿にとつても打擊だつた。案の定、親許に逃歸つたので、無事だといふ返事が來ると一安心したが、婆さんはその儘默つてはゐなかつた。
「これ迄えらい世話になつて、此のまゝ逃げよと思ても逃がすものか。」
今日迄に幾枚着物をこしらへてやつたとか、たゞ喰べさしてやつたとか數へあげ、罵り立てたが、遠方に離れてゐては如何にもならないので、ぶつ〳〵口小言を云つて忌々しがりながら、自分自身吉野迄連れ戻しに出かけた。

六の一

大晦日の夜行で東京に歸つた三田は、松の内を遊び暮らして、十日近くに再び大阪へ立戻つた。鞄をさげて下宿に歸り、玄關に上ると、狼狽て出迎へたのはお梅だつた。

「三田さん。お歸り。」

「おや、君も歸つて來たの。」

「へえ、暮のうちにな。」

ばつの惡い笑ひを浮べて、頰邊を赤く染めながら鞄を取上げたが、何となく落つかない樣子で、づんづん二階に上つて行く三田を後から呼止めた。

「濟んまへんが一寸待つとくれやす。」

取上げた鞄を下におろして、逃げるやうに奥の室に馳込んだ。

樣子がわからないので、暫時は梯子の中段に佇んだが、薄暗い足だまりの惡い處なので、三田は上にあがり切つてしまつた。

不意に歸つて來た爲め、屹度室がかたづいて居ないので、まごついてゐるのだらうと輕く考へ

て、離室へ續く廊下を進んで行くと、意外にも自分の室の方で、婆さんとお梅と、もう一人誰だかわからない太い男の聲が聞えるのだつた。
「えらい濟まん事でおまんが、此のお室のお客さんが歸つて來やはりましたよつて、あつちへ移つて頂かんなりまへん……」
「そりやあ元々先客があるのは知つてるんたから、其の人が歸つて來たのなら爲方が無いが、それ程早く歸る筈ぢやあなかつたぢやないか。」
「へえ、二十日頃迄は歸れへんいうて行かはつたので御座りますが……」
婆さんは出鱈目な事を云つて、
「えらい濟んまへんなあ。」
と同じ言葉を繰返すのだつた。
三田は廊下に佇んではゐられなくなつて、おめおめ引返すのはみつともないとは思ひながら、わざと足音荒く梯子段を下りて、玄關に殘されたまゝの鞄に腰かけて待つてゐた。洩れ聞いた言葉を綜合すれば、三田の留守中彼の室に、新來の客を入れ、しかもその人には、當分動かないでも濟むやうに云つて置いたが、突然彼が歸つて來たので、狼狽て裏梯子から馳上つて、室を空け

させようとするところに違ひなかつた。善意であざむかれてゐた人は、自分に對していゝ氣持を感じないに違ひ無いと思ふと、三田は甚だ不愉快だつた。朝の空氣は冷く、靴下のさきから體中に沁みて來た。

「三田さん、えらい濟んまへんだした。」

餘程たつてから、何と詫びていゝかわからない樣子のお梅が、二階から馳下りて來た。

「寒うおましたやろ。」

何かしら云はないでは申譯が無いので、ちひさい聲でいひながら、鞄を持つて先に立つた。

「ようお歸り。お目出度うさん。」

二階の廊下には婆さんが立つてゐて、相手の不機嫌を取返し度い心持から、殊更笑顏を見せて挨拶した。

「今朝程お歸りとは知りまへなんだので、お室をちらかしたまゝにして置きましたさかい、狼狽てゝ掃き出したりしましてな、えらいお待たせ致しました。」

何も三田は知らないのだと思つて居るので、外のお客を立退かせる爲めに手間取つたのだとは、おくびにも出さなかつた。

「貴方はん、えらい御ゆつくりだしたなあ、三箇日が濟んだら戻つて見えるやう云うてゐやはりましたが、東京のえゝ人に引張られて、かへられしめへんのんだしたんやろオアハハ……」

そらぞらしい事を喋る相手を睨むやうな顔をして、苦り切つてゐる三田の口を開かないうちにと、高笑ひをきつかけに、婆さんはさつさと引上げて行つてしまつた。

六の二

留守の間に見も知らない男に占領されて居たと云ふ事が、何と無く室の居心地を惡くした。机の位置を直し、無慘に横倒しになつて居る首と胴の別々になつた花賣娘の人形を直立させ、インキ壺や洋筆の置場所も以前の通りにしたが、ふと氣がつくと、机の方々に鉛筆を削つた痕が著しい。抽斗をあけて見ると、書きかけの原稿も、いろんな人から來た手紙も、亂雜に入れて置いたのが、その儘になつて居たのはよかつたが、自分の知らない人間から、自分の知らない人間に宛てた手紙や葉書や、商店や飲食店の受取證などがまじつて居るのを發見した。それは留守中此の室を占領した男のものに違ひ無かつた。用の無い時の室を貸すのはまだしもだが、机迄もそのまゝお役に立てるのは怪しからない。その男は此の机にもたれて幾日かを過したのであらうが、旣

に他人の机の上で無遠慮に鉛筆を削り、他人の机の抽斗に手紙を入れる位だから、抽斗の中の他人の手紙も平氣で讀んだに違ひ無い。三田はすつかり曇つた心持になつてしまつた。母のなさけの座蒲團も、此の分ではその男の尻に敷かれたであらう。大輪の白牡丹の花瓣(はなびら)には煙草の吸殻でも落したらしい燒焦(やけこげ)があつた。

間も無く茶道具を運んで來たお梅の目の前に、三田は他人の所有に屬する手紙や葉書や受取證(うけとり)を、一束にして默つて押してやつた。

「まあ、こんな物が殘つてましたんの。濟んまへんなあ。」

耳の根もとから襟首の中迄も眞赤になつて詫びた。お梅のたどたどしい話によると、三田が東京に立つと間も無く、師團に勤める軍人が室を借りに來たが、たつた一間空いてゐる八疊は氣に入らないので、三田の歸つて來る迄といふ約束で此處に入れたといふのだつた。

「士官さんでな、面白いお方だつせ。」

氣のいゝ女は、三田の不機嫌をとりなす積りで、そんな事もつけ加へた。

「それぢやあ其の人は結局氣に入らない八疊に入れられてしまつたわけだね。」

未(ま)だ當分はあいてると嘘をつかれて此の家に靴を脱いだ軍人も、矢張り下宿屋の餌食になつた

のだと思ふと、止宿人の共同の利益の爲めにも公憤を感じた。
「いゝえ、八疊やつたら氣に入らんよつて、出て行く云ははるよつて、お婆ちやんは、表二階の書生さんが歸つて來やはつたら、室をかへ事して貰うたらえゝ云うてはります。」
「ふうむ。」
三田は全く不愉快になつて、默つて相手を注視した。何時迄も彼の瞳は動かないので、お梅もうつむいて疊ばかり見詰めて居たが、何處かの室で手の鳴るのをいゝ事にして、もう一度、
「えらい濟んまへんでしたなあ。」
と繰返して、膝の前の軍人宛の手紙やなんかを手につかむと、逃げるやうに廊下に出て行つた。

六の三

暮の忙しい最中に親許へ逃げ歸つたお梅は、直ぐに婆さんが追かけて行つて、人のいゝ妹をだましすかして連戻つたが、女房さんは此頃體の具合が惡くて一層甲斐性が無くなつたので、前にも増して人手は足り無かつた。何處でも手の入る正月の事で、おまけに方々の桂庵から、幾度世話して貰つてもゐつかない爲め、すつかり愛想をつかされてしまつたので、女中を雇入れる望は

全くなかつた。身寄知己（しるべ）に頼んでも、口先ばかりで同情してゐて、ちつとも本氣にはなつて呉れなかつた。あの婆さんがゐてはといふのが、誰の頭にも第一に浮ぶのだつた。

「にない忙（せは）しかつたら、正月やかてお芝居ひとつ見られへん。」

婆さんは弟夫婦の耳に、毎日々々同じ言葉を、幾度となく吹込んだ。或日も執拗（しつこ）く愚痴と厭味を並べ立てゝゐると、折柄遊びに來た酒屋の若いおかみさんが、

「私（あて）の親類の者で一人奉公に出し度い娘があるのやけどな。」

と、耳寄りな話をしながら、どうしたのか語尾を濁して小首を傾けた。

「へえゝ、おそのさんの親類で。なんぼ位の娘はんだ。」

忽ち婆さんは逃（のが）すものかといふ形で膝を乘出した。

「まだ十四……いゝえ、あけて十五だんが。小柄な可愛らしい顏つきしてんのやがな。」

又しても口籠つて、

「矢張（やつぱ）り、あかんわ。」

「あかん事があるものか。十五やつたら恰度よろしいが。」

「そやけどな、もひとつ面白（おもしろ）無いやうな氣もするのやわ。」

「何で。」

「何でいふと……」

うすいそばかすの見える目のふちを赤くして、

「手癖が惡いのやもん。」

「えゝ。」

流石に婆さんも思ひがけなかつたか、煙草の烟を長々と吹いて考へた。

「去年の春頃から、二三べん他所へ手傳にやつた事もあるのやけれど、時々惡い根性出しては歸されてしまふ。小學校も級長をつとめて御褒美貰うた位よう出來たし、平生は悧巧な娘やがなあ。

「生れつきやなあ。」

「ほんまに生れつきや。」

二人とも同時に嘆息した。

「けれども、うちも人手は無し、ちよつと位手癖が惡いいうたかて、こつちで氣いつけてたら物の無いやうになる事もあるまいし、どんなもんやらう、ひとつ連れて來てもろたら。」

婆さんは充分未練があつて、先刻から傍で話を聞きながら、わざと知らない振をして新聞を讀んでゐる弟の方に聲をかけた。

「さうやなあ、手傳うて貰うたら結構やが、お客さんの物に間違ひでもあつたら困るな。」

「そんな事云うて外に心當りでもあるのんか。私やお梅ばかりせつせと働いて、肝心のおらくさんが愚圖(ぐづ)愚圖してるのやつたらかなはんがな。」

婆さんは弟の無關心な態度がひどく癪に障つて、又しても弟嫁の惡口に鉾先を向け、つばきを飛ばして辯じ立てた。結局弟は又新聞を取上げて沈默する外爲方がなくなつたが、

「そんなら、貴方(あんた)の好きなやうにしたらえゝやないか。」

と捨白(すてぜりふ)を殘して立上つて、女房の寢てゐる奥の室に引込んでしまつた。

六の四

三四日たつと、酒屋のおかみさんは從妹(いとこ)にあたる小娘を連れて來た。少しばかり猫脊の氣味あひの、ちいつぽけな體つきだつたが、色の白い目の悧巧に働く可愛らしい顔だちで、最初から人みしりをしないで、さも物馴れた樣子で客の給仕に出た。婆さんの敎へる數々の事は直ぐ飲込ん

で、その次からは指圖されないでもちやんと爲てのけた。
「ほんまに悧巧な娘やなあ。お梅等ねきいよりつかれへん。」
婆さんも驚嘆して、手癖の惡いといふ事などは、殆ど問題にもならなくなつてしまつた。
そのかはり下宿にとつては、飯を喰ふ口がひとつ殖えたのと、悧巧者なら悧巧者丈に、それ相當の給金をやらなくてはならなかつた。婆さんと亭主は此の事で又言ひ爭つた。
亭主に云はせると、暮に取極めた約束で、正月からは婆さんの取分もお梅の貰ひ物も增したので、それ丈自分達の懷に入る高は減る勘定になる。出來る事なら女手は殖し度くないと思つて居たが、婆さんが無理にも小娘を連れて來させたので、いはゞ爲方なく使ふ事になつたやうなものだから、充分の事は出來兼る。若し婆さんとお梅へやるものが去年通りなら、世間の女中並に出してもいゝといふのだつた。
婆さんは婆さんで、自分は元來働かないでもいゝ身分なのに親切で働いてやつてるので、若し自分が氣を配つてやらなければ、此の家の商賣はあがつたりだ。女房さんがくる／＼働くなら、それで安心してもゐられるが、それは甲斐性無しで、おまけに女中らしい女中がゐなくては、いくら辛棒強いお客でも逃げ出してしまふに違ひ無い。自分達の取分の殖えたのは當然で、それと

これとは話が違ふといふのだつた。

「此の頃の此の景氣で、月々の儲けは以前の二倍三倍やないか。あて等もつと貰うたかてびくともせえへんやないか。」

「貴方の云ふやうなもんやあれへんぜ。雜用は高うなるし、税は高うなるし……」

何時も二人が繰返す水かけ論が終る時を知らなかつた。

「そやさかいにあてが云ふ通り、宿料をもちつと上げたらえゝのんや。世間の景氣がようなつたら、お客さんの懐かて都合がえゝわけや。」

「そないいうたかて、暮に上げたばかりやよつてな。又上げるといふのも面白うない。」

「面白うないいうて、どないしても儲けるのが商賣の道やで。一ぺんにうんと上げんかてよろし。又お米があがつたさかい、五分か一割あげても誰がぐづ〳〵いふもんか。」

「さうもいかんよつてなあ。六疊のお客さんや、離室の階下のお客さんは算盤が細いよつてなあ。」

「そんならやかましい人は少しあげて、やかましい事云はん人は、うんとあげたらえゝやないか。離室の變人さんなら默つて承知するに違ひ無いわ。」

「三田さんか。」
亭主は長く喋る根氣がないので、婆さんと向きあつて話をしてゐれば、結局その云ふまゝになるよりほかは道がなかつた。それでも矢つぎばやの値上げは穩當で無い氣がするし、人を選んでお人よしには割増の高を多くするのは愈々ひどい氣もしたが、又ひとつの名案でない事もないと思つた。
「まあ、もひとつ考へさせて貰はう。惡いやうにはせん積りや。」
さう云つて話を切上げてしまつた。
「考へる考へるいうて、何時までたつても埒のあかんのがいつものこつちや。」
婆さんは、何時に變らぬ弟の煮え切らない態度に憤慨した。

六の五

亭主はつくづく考へて見た。石鹼屋の販路擴張係をやめて、自分で貯へた小金と今の女房の身についてる金とを合せて資本にして、姉の商賣を借りて下宿を引繼いだ頃とは違つて、思ひもかけなかつた好景氣が多分の收入を持つて來た事は、いかにも婆さんの云ふ通りだつた。けれども

折角の其の儲けを、些かたりとも目に見える事で減らしてしまふのは惜しかつた。收入の殖えた事は自然に思はれ、支出の殖える事は、それが必要缺く可らざるものでも、不自然に思はれた。婆さんやお梅の取分を增した上に、又小娘に給金を出すのは理窟が合はないとさへ考へられるのだつた。そこで自分の收入を五十錢でも一圓でも減らさずに、婆さんやお梅を滿足させ、且小娘の餘計な給金迄支拂ふには、如何しても唯一の收入の道である宿泊料の値上げか、客に喰べさせる物を、もつと粗惡にする外は無い。

その二つの中で、喰べ物の方は以前から、自分でも氣のとがめる程思ひ切つて粗末にしてある上、近頃は炭も茶も室々に備へては置かないで、客が手を鳴らして要求する時持つて行く事にしてゐる位で、此の上どうにもする餘地が無かつた。つまるところ宿料の値上げが殘された方法だつた。けれども、其の値上げも暮に實行したばかりなので、又しても一律にやる事は出來なかつた。彼はいろいろ考へたあげくに、暮の値上げの後で來た客と、婆さんの暗示に從つて、苦情をいひさうも無い客は、夫々宿料を引上る事にした。さう腹はきめたが、流石に何となく心がとがめて、一日二日愚圖々々してゐると、氣の短い婆さんの方から、どう考へをきめたかとせつついて來た。

「私も充分思案してな、ちよつとでも値上げして見る事にした。」
「それ見た事か。初手(しよて)からあてが云うた事やないか。」
婆さんは滿足して、勝ほこつた色を見せた。
「いんえ、私のは貴方(あんた)のとは違ふ。」
一々人のいふ通りにばかりなつては居ない。自分には自分の考へがあるといふ所を見せ度くもあつて、さも名案があるのだといふ風に、わざと言葉を切つてしまつた。
「へえヽ、どない違ふのや。」
「どない違ふいうて、貴方の云ふやうに、二月續けて値上げするやうな事は私には出來(でけ)んさかい、今年になつて見えたお客と、三田さんはうちで一番えゝ室に入つてはるし、貴方も案じる事あるまい云はゝるよつて、此の月から少し増す事にきめた。」
「ふうむ、それが貴方の考へか。儲かる事に遠慮せんかてよろしい。萬遍なくあげたらえゝやないか。けふ日(び)は何處も滿員で、他所の下宿(うち)に移る事も難しいのやもん、誰が何云ふもので。」
婆さんは自分の折角の入智恵に、多少なりとも變更を加へられたのが氣に喰はなかつた。
「私は貴方のやうな因業な事は出來ん。」

亭主は、自分の處置はひどく寛大なもの丶やうな氣もして得意だつた。
「まあ、え丶わ、え丶わ。わがの損いふ事に氣が付かんのやさかい。」
婆さんは婆さんで、度し難いものは弟の愚圖だと思ふと腹も立つが、自ら自分の優越を感じて胸を靜めた。

六の六

値上げの問題はきまつたが、來月を待たないで、半は過ぎた其の月から――うまく行けば月始めに溯つての事にし度いと思ふので、話をする相手は差當り三田と八疊の軍人の二人きりではあるが、亭主も流石に氣のとがめる節もあつて、切出す迄にはかなり心配もした。先づ軍人の室に行つて、物價の高くなつた事から、商賣の引合はない事をくどくど述べて、どうしても宿料の値上げをしなければ、自分達は飢死するやうなせつぱ詰つた話にして承諾を求めた。
「冗談を云つてはいかんね、冗談を。」
若い士官は帽子のひさしの蔭だけ白く、その外は眞赤に日燒けのした顔をふり向けて、號令をかける時のやうな高い強い聲でいひながら、膝の前の疊を拳固で叩いた。

「最初我輩が此の家に來た時に、あの婆さんは何と云つたかね。離室の二階が當分空いてゐるから其處にゐて構はん。其の室の客が歸つて來る迄には外のいゝ室が空くと云ふから、なあに別の宿屋に行つてもいゝのだと思ひながら、ついだまされて此處に落ちついてしまつた。然るにだね、離室の客は意外に早く歸つて來る。我輩はこんな室に移轉を命ぜられる。まるつきり話が違ふのだ。見給へ、欄間には障子も無い。火鉢には火が無い。食物は喰ふに堪へる物も無い。軍人と雖も忍べんではないか。」

其處で又膝の前の疊を拳固で叩いた。亭主は肥つた膝頭の、頭を出しさうな着物の前を氣にしながら恐縮してかしこまつてゐた。

「然るにだれ。今にして又値上げをしようといふのは冗談だらう。冗談でなければ云へない筈だ。」

軍人は三度疊を叩いて詰つた。

「まことに相濟みまへん。萬事不行屆で。」

幾度も頭を下げて揉手をしたり、手の甲で額をこすつたりしたが、

「何分どうも雜用が高こなりましたので。」

と最初に切出した話にかへつて、同じ言葉を繰返し始めた。
「わかつた、わかつた。君のいふ事はわかつてゐる。」
軍人は手をあげて制した。
「しかし我輩は斷じて値上げを不當とする。君の方で上げると云つても我輩の方は不承知だ。」
「でも商賣で御座りますので、いやだと仰しやられたら、出て頂く外は無いやうなわけで……」
亭主の方もねちねち根強くいひながら、矢張りはみ出して來る膝頭を氣にしてかしこまつて居た。
「何ッ。出て頂く。よろしい。如何にも出よう。誰が居るもんかアハハハハハ」
何と思つたのか軍人は胡坐の兩膝を抱へて高々と笑つたが、そのまゝ仰向に寢轉んで、頭の上の新聞を取つて讀み始めた。亭主は暫時の間その横着な姿を下眼をつかつて見てゐたが、何時迄たつてもきりが無いので、しびれのきれた足を引擦りながら、音も無く廊下にすべり出た。
次には三田の番だつたが、流石に今の一場面で不愉快になつたので、亭主は浮かない顏付で帳場に下つてしまつた。

六の七

次の晩亭主は意を決して三田の室を訪れた。最初のうちこそ誰も彼も、怖らしい顔つきの無口の三田をおそれてゐたが、此の頃では段々馴れて、婆さんの如きは彼のお人善しにつけ込んで馬鹿にもし、亭主もそれに連れてくみし易く思つて來たが、いざとなると、腹の底に何か潛勢力を貯へてゐるやうな氣心の知れない所があつて不氣味だつた。胸をどきんどきんさせながら襖をあけると、三田は机に嚙りつくやうな格好で、しきりに洋筆を動かして居た。

「何時も御勉強で。」

「えゝ、いゝえ。」

曖昧な返事をしながら、三田は原稿の手を止めて振かへつた。用があるなら早く云へといふやうな其の樣子が、亭主に勇氣をつけた。彼は又物價騰貴から說起して、如何しても再び宿泊料を上げなければならない事、それは自分の不本意とする所だが事情詮方無い事を、同じ文句を繰返して述べ立てた。

「暮に上げて、又上げるいふ事は、まことに濟まん事で御座りますが、何分雜用が高いもので。」

最後にはもう一度出發點の物價騰貴に返つてしまふのたつた。
「わかりました。」
亭主の言葉の切れるのを待つて、三田は持前の切口上で云つた。
「私も樂な生活ではないのです。宿料の上るのは大問題だが、正當の理由があれば爲方がありません。今度も亦組合の決議とでもいふのですか。」
「へい、まあ左様云うたわけで御座ります。何分雜用が高こなりましたので。」
あく迄も諸式の高い事を繰返す外は道が無かつた。又面倒な事になつたかと思ふ不安で、亭主は愈々かたくなつた。
「暮にあげたばかりで、又値上げといふのは酷し過ぎるやうだが、一般にやるのなら爲方がありません。組合つてものは有害無益なもんですね。」
意外にも三田の調子には、些かの惡意も認められなかつた。
「へい、まことに濟まん事で。」
亭主は安心して頭を下げたが、それを見ると三田の方も用事が濟んだのを喜ぶやうに机に向つた。亭主はもう一度頭をさげて引上げたが、相手に感謝する心よりも、手輕に承知した先方を、

小馬鹿にしたいやうな得意で胸がいつぱいだつた。

二三日たつと、軍人の方は、突然近所の下宿屋に空間を見つけたと云つて、隊から連れて來た兵卒に荷物をかつがせて引越してしまつた。

「えらさうに云うても、三圓五圓宿料が上つて逃げ出すやうでは、たいした事もないなあ。」

「そらさうや。貧乏少尉、やりくり中尉、やつとこ大尉いふ位やもん。士官いうても少尉や中尉やつたらすか見たいなもんや。」

うちの者は口を揃へて惡口をきいた。

「あゝして見ると三田さんはえらいなあ。何もやかましい事云はんと、うむ左様かよしよし云うてはつた。」

平生は無口の亭主も、軍人に罵られた鬱憤から、無理にも三田をほめて見度かつた。

六の八

月末の勘定書を三田の室に持つて行つたのはお梅だつた。此の頃は何時でもさうだが、三田は机にむかつてきちんと坐つて、しきりに書き物をしてゐるところだつた。何を書いてゐるのかわ

からないが、あんまり一生懸命なので、口をきいても惡からうと思つて、ちひさい盆の上に載せた書つけを、机の脚の側迄押やつたばかりで、そのまゝ行つてしまはうとした。

「何？　何か用？」

「へえ、いんえ。」

突然三田に聲をかけられて、襖の際で立止つたお梅は曖昧な返事をしながら、閾の上に坐つてしまつた。

「あゝお勘定か。」

半分體を捻りながら手を延ばして盆を引寄せ、無雜作に勘定書を披いた三田の額には、見てゐるうちに立皺が深く刻まれた。

その不機嫌は、略お梅にもわかつてゐた。婆さんや亭主のやり方が間違つてゐるのは知れてゐる。今にも三田の怒つた聲が頭の上に聞えさうで、お梅は身を縮めて疊の芥を拾つてゐた。

「これは間違つてゐやあしないかしら。何時だつたか御亭主が、又値上げをするとは云つて來たけれど、月極めの下宿なら當然來月からの話だらうと思つてゐた。さうでないにしても、正月元日迄溯る事はない。おまけに暮から十日迄東京に行つてゐて居なかつたんだから割引がある筈だ

ね。」
三田は穏かな調子で云ひながら、元の通り勘定書を盆に載せて、お梅の方に押戻した。
「忙しいので間違へたんだらう。」
さうは云はれたが、計算違ひで無い事はわかつてゐた。慾張りから出た仕事なので、お梅は恥ぢてうつむくばかりだつた。
「まあ階下に行つてさう云つて見給へ。間違ひはあるものだよ。」
そのまゝ父机の方に向いて、肩幅の廣い後姿で、洋筆を取上げた。
お梅はほつとためいきをして立上つた。階下に下りると、婆さんも亭主も女房も、帳場の電燈の下にかたまつて、無駄話をしてゐるところだつた。
「あのなあ、此のかきつけなあ、間違うたらへんか云うてはりまつせ。」
「誰か。」
「三田さんたんか。」
「へえ、三田さんか。左様か。」
さも待構へてゐたやうに、婆さんは平然として煙を吹いた。

「間違ひやおまへん云うたらえゝのや。」
「私にはそんな事よう云えまへん。値上げは來月からが當り前で、その上に東京へいんだ間の割引がある筈やと、こない云うてはるのやもん。その通りやないか。」
「何んぬかす。お前らの知つた事ぢやないわ。帳場で訊ねましたが間違ひはおまへんと、こない云うて來たらよろしい。」
怖い顔をして睨まれて、お梅は思はず知らず後退りをしながら、途方に暮れて、亭主の方に救を求める樣子をした。亭主は明かにその心持を察したが、取合つては損だと思つて、婆さんの喋るのをいゝ事にして、知らん顏をしてゐた。
「さつさと行て來い。それ位の事が云へえでどないするね。」
婆さんは癇癪聲を振りたてゝ、烟管を固く握り直した。

六の九

すごすご二階に上つたお梅は、暫時の間廊下に佇んで躊躇したが、思ひ切つて又襖をあけた。三田は矢張り机に噛りついてゐた。爲方が無いので、閾の側に膝をついて、口をきかうかきくま

いかと迷つて、もじもじして居た。
「どうしたい。矢張り間違ひだつたらう。」
三田はいゝ機嫌になつて、目尻に深い皺を寄せてふりかへつた。
「へい、いゝえ。」
お梅は唇が乾いて口がきけなくなつた。
「階下に行つて訊ねましたかなあ、間違ひやないと云うてはります。」
「間違ひぢやあないつて。」
三田の聲が心持高くなつたので、お梅は胸がどきどきした。
「さうか。それぢやあ其處に置いといて呉れ給へ。」
いふかと思ふと机の方に向をかへて、それつきり取つき場がなくなつた。
來た時よりも一層悄氣て、お梅は足音もさせずに階下に下りた。
「三田さん、どない云うてはつた。」
婆さんは待構へてゐて、姿を見ると直ぐに聲をひそめて聞いた。
「私が間違ひやない云うたら、そんなら其處に置いとけ云ははつた。」

「ふうむ、そしたら拂はん積りやろか。そんな事もあるまいがなあ。」
流石に婆さんも不安になつて、一段と聲を低くした。
「そんな事になると思うた。最初から私は來月から値上げする方が無理が無うてよろしいと思うたのに、貴方(あんた)達がきけへんので面倒な事になつてしもた。」
下の子供のぐつすり寝込んだのを膝に抱いてゐる女房は、白い眼を斜(なゝめ)にして、婆さんを非難した。今度の事の一切が婆さんのさしがねで、お人善しの亭主は何を云はれても、へいへいしてゐるのだと思つた。
「何も面倒な事あらへん。お米も炭もどえらい値上げやもん。下宿かて上げん事には暮らしがたゝん。理窟があつてする事が何で惡い。」
平生から仲の惡い婆さんは、相手が女房(かみ)さんだと思ふと、俄に聲を高くして喰つてかゝるのだつた。
「そんな理窟は世間には通らん。貴方一人の得手勝手や。」
「何ぬかす。わがの亭主と相談してきめたのやで。」
「まあま、そない爭はんかてよろしい。みとむないがな。」

口爭ひでは我が女房の歩が惡いと思つたので、亭主が横合ひから仲に入つた。

「私が行て、充分納得させせて來るわ。」

其の場の喧嘩を逃れるやうに、重たい體を持上げて、亭主は梯子段を上つて行つた。一段々々踏む度に、みしり〳〵鳴るのを聞きながら、婆さんと女房さんは、怖ろしい眼付で睨み合つて居た。

六の十

「えゝ今晩は。一寸寄せて頂きます。」

襖の外で聲をかけながら、電燈の光に押かぶさる大兵肥滿が、のつそりと室に入つた。

「御勉強中で御座いますが、お悔が失禮申し上げましたさうで、まことに申譯も御座りません。」

おそろしく叮嚀な口をきゝながら、揉手をしたり、頭を掻いたり、膝頭を撫でたりする相手を不愉快さうに見ながら、三田は洋筆を置いて坐り直した。

「えゝ甚だ申し惡い事では御座りますが、實は御勘定の事で御座いまして、先日御承諾願ひました通り、今月から少々値上げさせせて頂き度う御座いますので……」

如何いふ順序で話したらいゝのか、生來の口下手は、幾度となくつかへて唾を飲込んだ。

「そりやあ違ふでせう。値上げは爲方が無いとしても、月の始め迄溯るつていふ理窟は無ささうですね。來月からが當り前ぢやあないかしら。」

三田は意外に物柔かな調子で云つた。

「それで御座います。お願ひ致しますのは。」

早くもしびれの切れて來た足を、もてあましながら、

「何分雜用が高うなりましたので……」

「いや、その話はわかつてるんです。私のいふのは値上げは値上げで構はないが時期の問題ですよ。それから最初の約束でもあるし、廊下にも貼出してある通り、一週間以上留守にした場合には、多少の割引がある筈ぢやあないんですか。」

生れつき金錢の事を口にするのを非道く羞しがる性質だつたが、此の場合默つて居るのは、甘んじて馬鹿にされるのと同じだと思はれて、三田は顔を赤らめながら、云ふだけの事は云つて見た。

「へい、そない仰しやられると、まことに申譯も御座りませんが、値上げの方は先日御願ひ致し

ました時、勿論月の始めからの事と自分では思うて居りましたが、何分口不調法なもので御座りますので、其處のところを十分にわかつて頂く事が出來なんだのかと存じます。えらい濟まん事で。」

亭主は太い腕を曲げて、蓬々延びた頭髪を搔いた。

「それから、割引の事で御座いますが、此の方は前以て手前共へお話が御座いません事には、今日は歸つて見えるか、明日はお歸りに違ひ無からうと、毎日それ丈の用意をして置かんなりませんので、豫めお話のない時には、何分にもお差引き出來んやうな次第でして……」

心の卑しい人間に特有の、やましい事のある時に浮べる一種の愛嬌笑ひを憎みながら、三田は亭主のあだ白い顏を見守つた。默つて見詰めてやつたら、少しは恥るだらうといふやうな無効果な事を考へてゐた。

「まことに相濟まん事で。」

結局は同じ言葉を繰返して、何時迄たつても相手はその卑しい微笑をやめなかつた。

「濟むとか、濟まないとかいふ話ではない。貴方の方の間違ひでは無く、請求するのが正當だと云ふのなら拂ひますよ。」

「濟んません。」
「つまり此間の値上げの話は月始めからの筈だつたのを、私が誤解してゐたといふんですね。」
「濟んません。」
「それから、一週間以上留守ではあつたが、東京に立つ前に、はつきり日數を云つて行かなかつたので、毎日三度々々のお茶もこしらへて待つて居たから、割引けないと云ふんですね。」
三田はたゝみかけて訊いた。
「つい、まあさう云つたやうなわけになりますので。」
「わかりました。それぢや拂ひませう。」
舌うちするやうな語氣で云ひながら、三田は机の抽斗から財布を出して、無雜作に勘定して亭主の目の前に置いた。
「濟みません。御氣の毒さんに御座ります。」
頭を掻いた手をそのまゝ差延し、叮嚀に札を數へた。
「おほきに。」
胸を撫でおろすやうな形で懐に納めた。

「えらいお邪魔致しました。」

棒になつて曲らない兩脚を引摺りながら廊下に出た。

階下では待ち構へてゐた婆さんが、

「長いなあ、どない云うたるのや。」

と聲をかけたが、

「なあに、何でもあらへん。理窟はこつちやにあるのやもん。」

亭主はそれつきり相手にならないで、火鉢の側にゆつたりと胡坐をかいて、今受取つた幾枚かの札を、俺の腕はこんなものだと云ふ風に一枚一枚ゆつくりと數へて見せた。

七の一

三田が長篇小説の完成を急いで居る一方では、田原は押迫つて來た株主總會を前にして、年度決算報告の作成に苦しんで居た。歐羅巴の戰爭のおかげで、新設の車輛會社も成績は惡くはなかつたが、何分創立後日が淺いので、最初大株主連中で少ととも四五年間は無配當で押通して、資産の堅實をはからうと申合せた通り、今期も株主配當は見合せるのが至當だと田原は考へて居た。

若し決算の結果多少でも剩餘金があつたら、先づ使用人の爲めに養老疾病積立金の制度を設け度い、ゆく／＼營業狀態がよくなつて、株主配當も相當に出來るやうになつたら、其の利潤の一部は職工達にも配分し度い――それからそれと考へを進めて行くと、現在三朱や四朱の配當をする事などは、殆ど問題にもならないちいつぽけな事で、差迫つて行ふ可き重要な事は外に澤山あると思はれるのだつた。

けれども有力な株主側には、今度こそはどんなに些少でもいゝから、配當をして貰ひ度いといふ希望が段々強くなつて來てゐた。經濟界の好況で、昨日迄はつぶれかゝつてゐたぼろ會社さへ二割三割の配當はする。ましてや成金會社になると、十割二十割も樂々とやつてのけるのだから、おのづと金錢に對して氣が荒くなつて來るのは自然だつた。

「うちもちつと儲けさして貰はんなりまへんな。」

大株主の中の大株主で、息子を常務取締役に据ゑて居る大藤五郎兵衞は、田原の顏を見る度に、此の言葉を冒頭にして、ねちねちと說いて止まなかつた。

「しかし會社將來の大成を期する爲めには、數年間の無配當は覺悟の前で、最初から皆さんとの申合せではありませんか。」

田原は直ぐに眞赤になつて、正面から論爭調子でぶつかつて行く。

「ハハ、、、、田原さんも未だお若いな、申合せは申合せでも、こないなどえらい景氣にならん前の申合せですぜ。よう見て御覽。今日世間の儲頭や云はれてる人の誰か此の景氣を豫想しました。誰一人もありませんわ。つまり此の景氣といふものは、海の向ふで鼻高さんが喧嘩を始めたおかげだつせ。戰爭大明神樣の御利益や。神樣のお授けになるものを受けんといふ道理はおまへんぜ。」

これが大阪切つての商人で、會社屋で、口きゝなのかと思ふと、既に田原は公憤をさへ感じるのだつた。

「けれどもうちの會社は先々順調に行つてるといふ丈で、一割二割の配當をする程儲けてはゐませんから……」

「それそれ、其處が經營者の手腕の見せどころや。本來四朱五朱の配當がぎりぎりでも、無い所から儲けをしぼり出して、一割にし一割五步にするのが當節ですぜ。私は決して無理は云はん。不景氣時代やつたら爲方も無いが、此景氣はまだまだ續きまつせ。」

「しかし蛸配は……」

「そのしかしが貴方の玉に疵だんなハハ、、、」
世間でいふ大五の大將は、酒さびの出た赤ら顏を崩して腹を抱へた。
「人間はそないな堅苦しい事ばかり云うとつては世間は渡れへん。今夜は私が案内するさかい、ひとつ景氣よう飲みましよか。」
まるつきりかけ違つた二筋の道を、かけつこしてゐるやうな張合ひの無さに、要領を得ずに終る事が多かつた。

七の二

田原は外の株主を動かして、自分の主張を通さうとも試みたが、誰に逢つて見ても云ふ事は同じで、蛸配當でもなんでもいゝから、是非とも配當して吳れなくてはやり切れないと云ふのだつた。押問答をしてゐるうちに決算は濟んで、總會に提出する利益金處分案の作成が、力量に餘る田原の仕事だつた。彼は結局苛々する腹の蟲を押殺して、二つの案を立てた。一つは自分のおもふ通りのもので、彼は理想案と呼んだ。もう一つは有價證券の評價などに細工をして――自分が進んでしたのではないから、細工をするのを默認してといふ方が至當かもしれない――五朱の配

當をする事にした。これを妥協案と呼んだ。
重役會の席上では、大五の息子を中心にして、みんなが理想案を時宜に適しないものとして排斥し、妥協案に更に修正を加へて、配當率を六朱にしようと主張した。それに對して田原は、自ら密かに得意とする熱辯を振つて、目前の小利益の爲めに行動する事は眞の事業家の爲すべからざる事であると力說したが、多勢に無勢で敵し難く、遂に配當の實行は可決された。但し配當率に就ては意見區々で、その日は最後の決定を見ず、再開を約束して散會した。
自分の思ふ事の通らないむしやくしや腹で、田原は一直線に自宅へ歸らうと、机の上の書類をかたづけ、外套を着て身支度をしてゐると、
「專務さん、電話です。」
と給仕が呼びに來た。
「あゝ、もし〳〵、貴方田原さんですか。」
おもひもかけない大藤五郎兵衛の皺がれ聲が、受話器を通してづきん〳〵響いて來た。毎日々々會社の用事で寸閑もない勞苦をねぎらふ爲め、且又時事問題についての高說も拜聽し度いから、北の新地の或る茶屋へ來ては吳れまいかと云ふのだつた。

「粗末な食事を差上る丈です。貴方もさう毎日奥さんの御機嫌うかゞはんかてよろしいが、ハハハハハ。さいなら、待つてまつせ。」

こつちには口を開くひまも與へず、電話をさそくに切つてしまつた。

「困つたなあ。」

田原は一人で舌うちしたが、これもつとめだと思ふ心もあつて、指定された場所に進まない足を運んだ。

彼は元來茶屋酒を好まなかつた。酒の弱いせいもあつたが、持つて生れた道德と、切つても切れない羞しがりで、はれがましい場所は禁物だつたのだ。時たま三田に誘はれて、あと引上戸の相手もする事はあるが、そんな時も二人で勝手に喋つてゐた。女氣は無い方が多かつた。あかるい軒燈の並んでゐる新地に足を踏入れた丈で、既に動悸が高くなつた。

門を入つて、敷石に靴の踵のこつこつ鳴るのを氣にしながら玄關にかゝると、

「お越しやす、お待兼でいらつしやいます。」

出迎へた仲居は名前もきかずに、帽子を受取つてさつさと先に立つて案內した。二つ三つ折曲つた廊下の奥の座敷の、あまりにあかるい電燈の下には、大藤五郎兵衛一人かと思ひの外、たつ

た今迄重役會の席上で議論をたゝかはせた連中が、ずらりと顏を揃へてゐた。

七の三

「さ、ずうつとこつちやへおいで。」

すつかり舞臺（いた）について、まるで自分の家にでもゐるやうな樂な顏をして居る大五の隣席（たり）に、田原は否應なく坐らされてしまつた。直ぐにお膳が出て、客の數よりも多い藝妓や舞妓（まひこ）が、立つたり坐つたり、人れ替り立ち替り、座敷の内外（うちそと）を動き廻る。そのごてごてした衣裳や化粧の色彩たけでも、田原は醉つ拂つてしまつたらしい。一座の中でたつた一人、自分を除いた他の者が、いかにも場馴れた樣子で、馴染の女と目や口で、話をしたりふざけたりしてゐるのが、憎らしい程羨しかつた。女と口をきいてるのが羨しいといふよりも、自分とは違つたおちつきを見せてゐるのが羨しかつたのだ。それ程彼は面喰つてゐた。

「田原さん、ひとつ貰ひましよか。」

多勢（おほぜい）の女を前に集めて、猥談の合間々々に高笑ひの聲を響かせてゐた大五が、先づ人の惡い微笑を浮べながら、獻酬を強ひると、後から後から一座の者も、わざわざ立つて來て盃をさすのだ

つた。
「僕は駄目です。許して下さい。もう目がちらちらして來ました。」
紅生薑のやうに眞赤な顔をして田原は途方も無い大きな聲で、ひつきりなしに集つて來る盃を拒んだ。
「まあ、そない云はんかてよろし。貴方やつたら介抱し度い女子が仰山ゐまつせ。」
無理に盃を押つける大五の言葉につれて、
「私介抱させて貰ひまつさ。」
「介抱さして欲しいわ。」
右左から若いのが臆面も無く黄色い聲を張あげた。
「ほんまにえゝ男振りやなあ。私がもひとつ若かつたら、外の人には指も觸れさせはせんのやがなあ。」
生際のまるつきり抜上つた婆さんは、眞正面からしげしげ見ながら、それが全く心からの嘆息に聞える驚く可き技巧を以て、一層場面を賑かにした。
「いや、かなはん、かなはん。婿さん一人に嫁八人や。」

「お互年寄はあきまへんな。よう嚙みしめたら、えゝ味がするのやがなあアハハ、、、、」

誰が喋つてゐるのかわからない程、田原はすつかり醉つてしまつた。妙にほめられる羞しさと、冷かされてゐる腹立たしさの入りまじつた頭腦の中は、酒が泉になつてもく／＼湧き上るやうに、づきん／＼響くのであつた。

「どうだ、お前も田原さんに岡惚れしか。私の方がよからうが。」

太い聲に氣が付いて、崩れた膝を坐り直した田原の前に、お銚子を持つて來た若いすぐれて綺麗なのの腕をつかんで、大藤五郎兵衛は引寄せようとした。

「あれえ。」

力任せに引かれて、堪へればかへつて倒れさうなので、おとなしさうな女は、兩手にお銚子を抱へたまゝ、ずるずる膝で疊をすべつて、大五と田原のお膳の間に、危く體を置く丈の位置を見付けた。

「滿更いやではあるまいが。」

いゝ年をしたのが、ちつとも醉つてゐないくせに醉つたふりをして、相手の首に手をかけた。

「いやあ、かんにん。」

身をもがいて逃げようと半分立ちかけたが、滾すまいと兩手でお銚子を抱いてゐる上半身の中心がとれないので、裾がからんでがつくり膝頭をついた拍子に、前のめりに田原の胸に倒れかゝつた。

「あれえ。」

といふ聲の下から、とくとくとくといゝ音をさせて、強い香と共に酒は容赦なく德利の口からあふれ出した。

七の四

「えらい濟んまへん。堪忍しとくれやす。」

田原の胸から膝へかけて、ぐつしより濡らして湯氣を立ててゐる酒を、半巾で拭きながら、泣き出しさうな顏をして詫びた。

「いかん、いかん。どえらい粗相しよつて、口先ばかりであやまつたかて許しはせんぞ。心からあやまつた證據には此のこつぷで一杯飲め。」

大五は手近にあつたこつぷを取つて、若い妓の手に無理に受取らせた。

「えゝ男に見とれて、思はず知らず倒れかゝつたんやろ。」
「罰杯だ。罰杯だ。」
あつちからもこつちからも面白半分にからかふのであつた。
「さあ、早う飲んで、堪忍して貰ろたらえゝやないか。」
婆藝者は面白づくの大五に媚びて、若いのが膝の上にもてあましてゐるこつぷに德利の口をさしつけた。
「姐ちやん、あて飲まれへんわ。」
なさけも無くなみなみと注がれたこつぷを電燈に透かして、若いのは力の無い聲で嘆息した。
「そんなに云はんと飲みなあれ。」
「半分は田原さんがすけて呉れるさうだ。お前とならば何處迄もつてねアハヽ、、、、……」
女も男も、一座の者は無責任な口をきいて笑つた。田原は醉が頭に上るのを感じながら、人の惡い、下素な奴等に對して義憤を發してゐた。
「さ、早う飲まんか。飲まんと田原さんが堪忍せん云うてはるぜ。」
大五は自分の云ひ出した事をきかない女が癪に觸ると云ふ風で、怖い顔をして、聲が高くなつ

た。

「そんなら私飲みまつさ。あんたはん半分助けとくれやす。」

女は觀念して、もう一度こつぷを透かして見てから、田原の方に顏を傾けた。

「よう、よう。えらもてやなあ。」

誰かゞいちはやくはやし立てたので、酒は澤山飲めないからと、斷らうと思つてゐた田原が口を出すひまも無かつた。

「ほんまに助けとくれやす。」

此の外には賴む人はないと云ふやうな氣勢を見せて、女は田原に力強い目ざしを投げると、何の躊躇も無く振仰いだ。

「しんど。」

一息に飲み干しさうな勢だつたが、半分にも及ばないうちに參つてしまつて、苦しい息をついた。

「なんや、も一息やないか。」

又傍から意地の惡い聲をかけられたので、女は再びこつぷを口に持つて行つたが、一寸臭ひを

かいだばかりで胸がつかへてしまつたらしく、直ぐにこつぷを膝におろした。
「あんたはん、助けておくんなはれ。」
思ひあまつたやうな樣子をして、田原の方に向き直ると、眞正面からこつぷを目の前に差出した。田原は目が眩む程酒の臭ひに鼻をつかれた。
「田原さん、こりや男として、あんたも飮まんなりめへんで。」
「矢張り若い人がもてまんな。」
俄に一座は陽氣になつて、口々に勝手な事を喋るのが聲と聲とぶつかつて、一際田原の頭をかき亂した。
「よし、飮んでやる。」
其の場にゐるすべての人間に對する癇癪まぎれに、彼は何かしら荒つぽい事がしてのけ度かつた。女の手からこつぷを取ると、もう目が見えない程醉を感じた。しくじつたかなと、一瞬間思ひはしたが、えゝ畜生と思ひ直すと、高く捧げたこつぷの酒を飮み干した。
「美事、美事。」
「えらいぞ、大將。」

又ひとしきり、はやし立てる聲も、何を云つてるのかわからなかつた。田原は鼻をつく酒の臭ひにひとたまりもなく咽せかへつた。

七の五

夜中に氣のついた田原は、馴れない蒲團の肌觸りに驚いて、ものうく疲れた目をみひらいた。薄紫の覆のかゝつた電球の鈍い光の中でも、それが席貸の奥の小部屋だと云ふ事は直ぐ分つた。骨も筋もなくなつてしまつた體は、ふかぶかとかけた夜着に壓されて、今でも酒に濡れてゐるやうに汗ばんでゐた。無闇に咽喉が乾くばかりで、五體には知覺さへないやうな氣持がした。暫時は身動もしずにぼんやりと電燈に目を据ゑてゐたが、乾きは益々ひどくなつて、呼吸も苦しくなつた。枕頭の水瓶を求めて、やつとこさで半身を起した時、彼は始めて背中合に寢て居る女のあるのを知つた。酒の醉が又もりかへして來てくら〳〵目が廻つた。彼は枕に額をつけて突伏してしまつた。

「貴方、どないしやはりましてん。」

身じろぎに目を覺ましたのであらう、女は素早く起返つて、田原の肩に手をかけて覗き込んだ。

熱い息が襟首にかゝつて、愈々咽喉が詰つてしまつた。
「水を呉れないか、水を。」
又吐氣を催して、田原はうは言のやうに叫んだ。
「お冷たつか。」
女の起上る氣配に續いて頭の上で、水瓶からこつぷに酌ぐ水の音が、待ち切れない程なつかしく聞えた。
「はいお冷。」
田原は振仰いで喰ひつくやうにこつぷに口をつけた。冬の夜の水の味は、固く鋭く咽喉を通つた。
「難有う。」
がつかりして又枕に頭をつけて目をつぶつた。女の長襦袢の緋の色が、目をつぶつても瞼のうらにこびりついて居た。ふと我家の事を考へたが、それを追及する丈の氣力は無く、再び睡りに落ちてしまつた。
一度死んだ者が蘇生したやうな、昨日だか今日だかわからない氣持で、翌朝田原が頭を持上げ

た時は、何時の間にか緣側の雨戶はすつかりあいて、障子には朝の日が白々とさして居た。あんまり明るく照らされてゐる腑甲斐なさを腹立たしく思つたが、夫よりも頭の痛むのは堪へ難かつた。同じ夜着の中に寢て居た女の姿は見えなかつたが、枕頭には金盥があつて、昨夜吐いたものであらう、どろどろに澱んだ物が、腐つた臭ひを漲らして漂つて居た。その臭ひが鼻を刺すと、又しても咽喉元迄むかむか込みあげて來た。脣を嚙んで堪へながら目をつぶつた。ひどく疲れてゐるので又睡つてしまつた。

微かな物音に誘はれて薄目をあいて見ると、目の前に昨夜の女が坐つて居た。

「まだ具合惡うおまつか。」

綺麗に化粧の出來上つた顏をさし寄せて聞いた。田原は口をきく元氣がないので、頷いて見せる積りだつたが、それさへ首が自由には動かなかつた。彼は自分を憐れむやうな笑を浮べた。昨夜は氣がつかなかつたけれど、一重瞼のはれぼつたい娘らしい顏立ちの女で、左の目尻にちひさい黑子があつた。

「もちつと寢てはりまんの。ぢきにおひるになりまつせ。」

「おひるに。もうそんなかい。」

反問して見たけれど、さりとて體を動かす力は無かつた。

「もう少し寢かしといて呉れ給へ。」

「さうだつか。そんなら私あつちで遊んで來ても大事おまへんか。」

惡氣の無い調子できかれて、田原は笑ひながら、やうやく顎で返事をした。女はそのまゝ立上つて、室の外に出て行かうとした。

「君の名は何ていふの。」

「えゝ私だつか。」

呼止められて振返つて、

「紫牡丹いひまんね。けつたいな名前だつしやろ。」

笑顏で答へて、そのまゝ襖の外に消えた。

七の六

田原は午後になつて漸く床を離れた。

「昨晩はえらいお苦しさうにおましたなあ。」

大丸髷の仲居は湯殿に案内しながら、如何に田原がもがき苦しんだかを、身振を入れて面白さうに話した。

楊枝を使ふのさへものうく、浴槽の中に身を浸して居ると、そのまゝ深い水の底に沈んで行く氣持がした。自責も悔恨も何も無かつた。もつともつと體を横にして、ほしいまゝに安逸を貪り度かつた。

湯から上ると、別の廣い座敷に通された。糊の匂のぷんとする湯上りの上に丹前を着て、座蒲團の上に胡坐を組んでは見たが、體の中心がとれないで、引くりかへりさうな氣持がした。

「お早うさん。」

夙くにゐなくなつたらうと思つてゐた葉牡丹が、にこにこしてやつて來た。

「おや、君はまだゐたのかい。」

「へい、お目覺を待つてゐましてん。」

側に來てきちんと坐つて、たつた一晩で筋肉のたるんでしまつた田原の顔を、甘つたれるやうなからかふやうな目ざしで見た。

「なんぞ召上るものは。」

「とても駄目だ。腹は空いてるんたけれど喰べれば屹度又やるね。」
田原は想像する丈でも、胸を壓される感じがした。
「それよりもそろそろ歸らなければならない。」
「まあ歸りはりまんの。」
「あゝ、君には大變世話になつたね。何時かお禮をしよう。」
彼は眞面目に感謝した。醉拂ひの介抱をさせたのが、自分の醜體を恥る氣が強い丈、ひとかどの大役のやうに考へられるのだつた。
「お世話も何もあれしまへん。私先きにやすんでしまひましたわ。」
「いゝや醉拂ひつて奴は手がかゝるからね。ほんとにお禮をしなくちやあ濟まないよ。」
「お禮なんていうたら笑はれまつせ。それよりも、もつとゆつくりしてゐておくんなはれ。」
田原には相手の舌たらずのやうな口のきき方迄が善良に聞えて、とりとめもない事を話してゐるのが悪い氣持では無かつた。けれども段々元氣が回復して來ると、昨夜からの不始末と、現在自分が如何いふ位置にゐるかといふ事が、やうやくはつきりして來た。飲めもしない酒を強ひられて、よせばいゝのにしまひにはこつぷ酒迄飲んだ光景が、苦々しく目の前に復活して來る。同

時に今迄まるつきり忘れてゐた會社のことが、突然意識にのぼつて來た。さうだ、會社に行かなければならなかつたのだと、後悔の念は此の時著しく勢力を増して迫つて來た。妻の顏も子供の顏も、大藤五郎兵衞や會社の給仕の姿と一緒にちらちらした。

「貴方(あんた)、何考へてはりまんの。えらいしゆんではりまんな。」

葉牡丹に聲をかけられてはつとした。

「しゆんでもゐないが一寸社にも顏を出さなければならないし、そろ〳〵歸らうかと思つてね。」

さう云ひながら、どうしても體がだるくて立上る勇氣は無かつた。どの面さげて今頃會社に行かれるものか。曾て一度も他所に泊つた事の無い自分を、妻と子供はどう思つて居るだらう。毎日夕方會社から歸る父親を待佗て、玄關に駈出して來る女の子の姿が今の田原には觸れ度(た)ないものに思はれた。行く所も、歸る所も無い一身をもてあました時、彼はふと友達を思ひ出した。今迄全く忘れて居た友達が無上になつかしかつた。

「あのねえ、東の〇〇〇番に電話をかけて、三田さんといふ人を呼出して呉れ給へ。田原が是非あひ度いから、歸りに此處に寄つて下さいつて。」

「三田さんいひまんの。」

「あゝ是非來てくれつてね。」
うなづいて立つて行く葉牡丹の姿が見えなくなると、彼は又疊の上に腐つた體を横倒しにした。

七の七

夕方、三田がやつて來た時、華美な友染縮緬のかけ蒲團をかけた置炬燵の中に眠つてゐる田原の傍に、たいくつさうな顏をして、葉牡丹は獨骨牌をして居た。
「貴方、起きとくんなはれ。お客さん見えましたぜ。」
狼狽てゝ骨牌を寄集めて、田原の肩に手をかけて搖振つた。
「大した景色だね。」
やうやく目を開いて、大儀さうに身を起す田原を見下して、三田は皆目様子が解せなかつた。
「三田公。」
田原はきちんと坐り直して、感慨に堪へない心持で友達を見た。その手を取つて抱きついて、力になつて貰ひ度かつた。目には涙さへ浮び兼ねなかつた。
「俺は駄目だ。すつかりやられちやつた。まるでなつてゐないのさ。」

昂奮して、そのくせ體にも心にも緊張を缺いて悄氣て居るのが、ふだんの元氣のいゝ高調子とはうつて變つた力の無い聲で、昨夜からの顚末を話した。重役會の事、大五に誘はれた事、此の家に來た事、酒を飲まされた事、飲めもしないのに飲んだ事、結局吐いて吐いて吐き倒れた事、そのまゝ一夜あけた事、今日は終日頭が上らないで寢てゐた事、それからそれと話をしてゐるうちに、味方を得た嬉しさを感じ始めて、彼も元氣を回復して來た。

「ふうむ。盛りつぶされたのか。古い手だなあ。」

三田は聞き終つて嘆息した。年が年中、口を開けば世間の惡を攻撃しながら、しかも世の中に氣を許し切つてゐる善良な友達に同情した。こんな男をつかまへて、陥穽に引擦り込む奴等を憎んだ。

「馬鹿だなあ、君も。」

「俺か。とても馬鹿だよ。」

田原は始めて聲を出して笑つた。

「おい、お酒を貰つて來て與れないか。三田公は酒飲みだからね。それから誰か、君の仲よしでも呼んで貰はうかな。」

「えらい元氣だんな。」

二人の話を默つて聞いてゐた紫牡丹も、所在なさから逃れる事が出來て、氣輕に立上つた。

「あれは何だい、矢張り陷穽かい。」

廊下の足音が遠ざかると、三田は笑ひながら云つた。

「冗談云つちやあいけない。」

「たつて昨夜からつきつきりなんだらう。つまり一緒に寢たんだらう。」

「夜中に目が覺めたら並んで寢てゐるんで驚いちやつた。」

羞しかりやの田原は、血の氣の拔けた靑ざめた顏を染めて答へた。

「しかし大丈夫だよ。」

「そりやあさうだらう、君の事だから。けれども誰が大丈夫と思ふものか。少くとも大藤五郎兵衞は大丈夫とは思はないね。」

「そいつあひどいぞ。」

「ひどいつたつて爲方があるもんか。飲めもしない酒なんか飲まされるからいけないんだ。」

三田は疊みかけて詰つた。しつかりしろと氣勢を添へてゐるやうな調子だつたが、田原は全く

沈默してしまつた。道徳家の彼に取つて、それは手痛い事だつた。明日(あす)は顏を合せなければならない同僚の思惑が氣になつた。それよりも、妻も自分を疑ふだらうかといふ考へが田原を苦しめた。

それでも酒が出て、三田がうまさうに飲んでゐるのを見ると、何事にも誘はれ易い性質で、つい自分も盃を手にし、迎酒に元氣を得て、朝からの空腹と疲勞に、饂飩を喰べて蘇生のおもひをした。

七の八

溫良な妻は、納得したかしないか心の底は疑はしかつたが、兎に角一夜の外泊の一部始終を話して、表面丈は無事に濟んだ。

疲れ切つた體には、我家程氣樂な處は無かつた。何から何迄聞き度がる妻の質問を避ける爲めにも、田原は睡つてしまはなければやり切れなかつた。

ぐつすり寢込んだ翌朝(あくるあさ)、何時もの通り起されて、顏を洗ひ、食事をし、洋服に着換へる迄はそれ程でも無かつたが、愈々出かける時間になると、どうしても氣が進まないで、面白くも無い新

聞を、讀みもしないのに讀んでる恰好をして開いて見てゐた。彼は會社に行つて常勤の取締役に顔を合せるのが厭だつた。

「もうお出かけにならないといけませんよ。」

さう云つて促す妻の言葉は、今迄にも度々聞いたのだが、その朝に限つて、ひどく意地悪く聞えた。

「行く時になれば行くよ。」

突慳貪な口をきいて、やつとの事で尻を持上げた。

何も自分には後暗い事は無いのだと思ひながら、會社の門をくぐるのが怖いやうな氣持がした。門衛の禿頭の爺の目尻の下つた目つき迄、たゞならず自分を見てゐるやうで、先方が帽子を取るのに先達つて自分の方から挨拶した。

毎日々々、一日の大部分を其處で費す事務室の大机を前にして、廻轉椅子に腰を下したが、たつた一日缺勤した丈なのに、彈機のはいつた椅子の坐り心地さへ、不馴れなもののやうに感じられた。しかし、朝の日光のさしてゐる中庭を距てた向ふの工場から聞えて來る機械の音は、矢張りたつかしいものであつた。彼は此の二三日の事は一切夢だつたのではないかと思ひながら、茫

然として頰杖をついてゐた。

「お早う。」

後から聲をかけて、柔かに肩を叩いたのは同僚の大丘の息子たつた。

「昨日は見えませんでしたね。引きとめられて流連の、と云つたわけですか。ハハハハ……」

提琴で日本の音曲を弾いて、藝者の三味線と合せるのが何より自慢の若大將は、持前のいやにねばつこい物腰で、田原の顏をのぞき込んだ。

「冗談ぢやない。そんな事があるもんですか。」

口ではきつぱり云つたけれど、耳の根迄も赤くなつて、田原の胸は高く波打つた。

「えらいもて方だつたさうぢやありませんか。おやぢが歸つて來て云つてゐましたよ、若い人にはかなはないつて。」

相手が面白がれば面白がる程、田原は全く不機嫌になつて、返事もしずに座を立たうとした。

「あ、一寸々々。」

呼びとめて、追かけて來て、

「昨日は御出でがなかつたのですが、あんまり長引かしても置けないので、例の決算報告の件で

すね、あれを今日の午後片づけてしまひ度いと思ひましてね、實は皆さんに集まつて頂くやうに取計らひました。どうせ今日はお見えになると思ひましたから。御異議はありますまいね。」

早口に喋る相手を見返つて、田原は無言で頷いたまゝ、何の目的も無いのだつたか、急いで工場の方に立去つた。

午後から集まつて來た重役の一人々々が、同じやうな言葉で田原を冷かした。

「どうも先夜はすつかり見せつけられましたな。」

「今度めは田原さんにおごつて貰はんならん。」

口々にいふ中で、

「大五の大將も例の箸まめで、密かにねらひをつけといたのに、葉牡丹ですかな、若い可愛らしいのを、まんまと田原さんに占められた、年はとり度ないものやつて大笑ひでしたぜ。」

誰憚らぬ高調子で喋る一人につれて、一座の者が一齊に笑つた時は、田原は憤りに堪へられず、目頭に涙を浮べて、唇を嚙んだ。

それつきり彼は口をきく氣持を失つてしまつた。重役會の重要案件である配當案は、誰一人不贊成を唱へる者もなく、大五一派の希望通り、年六朱と決定した。

八の一

からッ風が吹き、寒い雨が降る冬の間、隙もる風の容赦なく吹込む下宿の建てつけの悪い室(へや)に、火の氣も乏しく暮したが、何時の間にか裏庭の柳の梢にもうぶ毛のやうな新芽の頭が出て、机を据ゑた窓の外の景色も段々春めいて來た。三田が新聞に出す長篇小説も、其の頃漸く前篇の終りに近くなつてゐた。

その新聞の夕刊に現在出てゐる小説は、近頃賣出の作家の作品だつたが、宗教を表看板にして、實は性慾を取扱ふのが特色で、學生――殊に女の學生に多數の讀者を持つてゐて、あつちこつちの雜誌から引張凧になつてゐる爲め、一回々々書いて送る新聞の方は、兎角原稿が間に合はず、體裁許り氣にして嘘をつくのは當然と心得てゐる新聞も、最初のうちは作者を病人にしてごまかして居たが、紙面の配列にも困るので、三田の小説が出來たらば、その方は中絶にしてしまひ度いと云ふ意嚮(いかう)だつた。

三田にとつても原稿を金にかへる事は必要だつた。暮の賞與金で一息つくにはついたけれど、それも世間並はづれて少なく、長く懷(ふところ)に殘る筈はなかつた。その上毎月の月給では、どうしても

收入より支出の方が多くなる勘定なので、不時の稼ぎがなくてはやり切れなかつた。彼は新聞社の催促に餘儀なくされたやうな顏をしながら、自分でも完成を急いでゐた。夜は大概一時頃迄筆を放さず、頭が疲れて捗らなくなると、雨の降る日でも往來に出て近所を一巡して來た。日曜も祭日も、殆ど机に噛りついてゐた。

「何してはるのやろ。えらい勉強やなあ。」

婆さんも感心して、その勉強が何であるかはわからなかつたが、外の室に行つても話の種にしてゐた。

「三田さん、貴方何書いてはりまんの。」

しまひには好奇心が動いて、本人にも聞いて見たが、

「無駄書です。」

といふ簡單な返事で二の句がつげなかつた。小説を書くといふから小説に違ひ無い。小説とすればどんな小説たらうと想像すると、一度は覗いて見度かつた。或晩三田が散歩に出たのを見計らつて、机の抽斗をあけて見たが、ばら／＼の原稿紙に讀惡い釘のやうな字で書いてあつて、殆ど讀むに堪へなかつた。婆さんは忌々しい物を見たやうな氣持がして、舌うちをして元にかへし

た。その時、その抽斗の中に、確に金の入つてゐる財布と蟇口が、無雑作に、はふりこんであるのを見た。金を大事にする婆さんは、自分自身が粗末に扱はれたやうな氣持がして腹が立つた。こんな事をして置いて、盗られたつて知るものかと、口に出して云つてやり度い氣持だつた。おのれの心の上に絶大の魅力を以て壓迫る金は、原稿よりも遙に婆さんの興味であつた。あたりを憚りながら、財布と蟇口をあけて見た。意外に兩方とも中身は少かつた。婆さんはその中身の少いのに安心して、元通り抽斗に納めて室を出た。

八の二

日曜の朝であつた。三田は目が覺めると直に、向の湯屋に出かけた。何時も抽斗に入れて置く蟇口の中には湯錢丈の小錢が無く、一番細かいのは五十錢札二枚だつた。石鹸箱と手拭と、その一枚を一緒につかんで出た。番臺に坐つてゐる娘の、眞白に塗りつぶした顏には、明かに釣錢を出すのを厭がる表情が浮んだが、別段何もいはず、汚ならしい十錢札に銅貨をまぜて呉れた。

浴槽の中に首迄つかつて、今日一日で何枚位書けるだらうと、又しても原稿の事を考へて居ると、

「お早う。」
と聲をかけて、同宿の貯蓄銀行員が入つて來た。
「近頃はえらい御勉強ださうですが、何か洛陽の紙價を高めるといつた傑作でも御出來ですかな。」
口先も氣分も重い三田は、平生同宿の人とは口をきいた事も殆どなかつたので、話かけられると、どぎまぎしてしまつた。
「いゝえ、つまらないものなんです。」
「結構なおなぐさみですな。しかも近頃は原稿成金といふのもあるさうぢやありませんか。資本無しで儲けるんだから、これ程ぼろい商賣はありませんな。」
三田はそれには構はずに、流場に出て頭からやけに水をかぶつて居た。夜もろくに眠らないで苦心して居る創作を、ぼろい商賣だと一口にいはれたのが腹立たしかつた。
「おさきに。」
話しかけられる話を逃げて、さつさと上つてしまつた。
下宿に歸つて、梯子段を上り、暗い廊下を離室の方へ歩いて行くと、その足音に驚いたやうに、

自分の室から出て來た人の姿があつた。酒屋のおかみさんの連れて來た小娘のおれんだつた。ちらと三田の方を見たが、狼狽へて廊下に置いてあつた水手桶を持上げると、物も言はずに擦れ違つて行つた。拭掃除の雜巾の漂ふ濁つた水は、だぶだぶ波打つて、ふちを溢れて廊下を濡らした。三田は爪先を立てゝ歩いた。

机の前に坐ると直ぐに、袂の中に入れて置いた釣錢をしまはうと、抽斗の中の蟇口を取出した。銀の金具をぱちんとあけると、先刻あつたもう一枚の五十錢札が無い。直覺的に、彼の頭腦には、おれんの姿がひらめいた。念の爲めに抽斗の中を覗き込むやうにして掻き廻しても見たし、ありつこないと知りながら袂の中も探つたが、探しながらも其の在所は、おそろしく目差の悧巧な、少し猫脊の小娘の帶の間の外には無いと考へられた。困つた事になつたぞ、と思ふと旣に動悸が高く打つた。

この場合、三田は盜まれた事を、惜いとも殘念とも思はなかつた。たゞ迷惑だと思ふのだつた。默つてゐれば、盜んだ奴が馬鹿にして、益々増長するだらう。盜まれたといつて事を表沙汰にすれば、盜んだ奴は糾問され、ひどい目に逢はされて、かへつて根性を曲げるだらう。どつちの道を擇ぶにしても、結局自分は迷惑な地位に陷らなければならない。三田は自分の不決斷が腹立た

しかつた。つまらない事におもひ迷ふ自分よりも、平氣で他人の物を盜む事の出來る人間の方が、一層偉いとさへ思はれた。

八の三

三田が前後の處置におもひ迷つて居るところに、朝のお膳を持つてやつて來たのは婆さんだつた。決し兼ねた心の中を見透されるのを怖れるやうに、三田は狼狽へて蟇口を抽斗の中に投げ込んだが、相手はそれを見逃さなかつた。

「貴方まあ、そないな處に財布やら何やら入れてはりまんの。」

ちやんと承知して居たがら、さも初めて氣が付いたやうな樣子で、驚いて見せた。

「若し失つたらどないします。」

たとへ他人が他人の物を取扱ふにしても、それが金錢なら粗末にさせては置けない性分だから、自ら詰責する調子だつた。忌々しくて堪らなかつたのだ。

「實はもう失つてしまつた。」

三田は苦笑をして答へた。いはうかいふまいかと迷ふ暇も無く、誘ひ出されて白狀した形だつ

た。しかも重荷を下した氣持がした。
「えッ、財布が無うなりましたのん。」
澤山は入つてゐない事を知りながらも、婆さんは思はず大きな聲を出した。
「なあに、五十錢一枚なんだ。」
あんまり一方が乘り出して來るので、三田はいはなければよかつたと後悔しながら、まぎらかしに箸を取上げた。
「今朝お湯に行く前に蟇口の中にあつたのが、歸つて來るとなくなつてゐるのさ。もともと鍵もかゝらない抽斗の中に放り込んで置く方が惡いんです。」
「さうだつしやろ。そやさかいに……」
それだから危ないと思つてゐたんだと口に出かゝつたが、自分が一度その抽斗を開けて、財布も蟇口も中身迄あらためた弱味があるので、氣が付いて口をつぐんだ。
婆さんの頭腦にも、直ぐさまおれんのこまつちやくれた姿が浮んだ。酒屋のかみさんが最初から連れて來るのを躊躇し、危ぶんだ手癖が出たなと思つた。くるくる働いて、年こそ行かないが、お悔などよりも萬事の飲み込みがよく、教へないでも一人前の事をするのが氣に入つてゐたのだ

か、流石にこれには婆さんも弱つた。
「うちで物がなくなつたといはれたら、ほんまに申譯がおまへんが、三田さん、貴方お勘定違ひおまへんか。」
「いゝえ、五十錢札が二枚あつて、その一枚を持つてお湯に行つたんだが、歸つて來てお釣錢をしまはうとすると、もう一枚の奴がなくなつて居るのさ。しかし兎に角此方の不注意です。自業自得だ。」
三田はもう面倒な問答は打切にしたかつた。これだけいへば、盜まれて默つてゐて馬鹿にされる不愉快は、旣に免れたと思つた。それで十分だと思つた。彼は殘りの御飯にお茶をかけて、一氣に流し込んで箸を置いた。
「いゝえ、お客さんの物が無うなつて、そのまゝにしとかれしめへん。私の家で起つた事やさかい、調べるだけは調べん事には申譯が立ちまへんわ。」
なるべく強くいふのが、自分の身の潔白を示す樣な氣がした。
「まあ、うつちやつといて下さい。たつた五十錢の事だから。」
「いゝえ、五十錢でも、たゞの五錢でも私のうちで失せ物があつたら隅から隅まで尋ねんなりま

へん。」

三田は寧ろ迷惑に思つて、いきなり手近の新聞を擴げて讀み始めた。

「よろしうおあがり。」

お膳をさげて行く迄、婆さんは繰返して、必ず探索して見せると誓つた。

八の四

婆さんは、此の事件を弟夫婦には知らせともなかつた。人手をふやす事を嫌つて、おれんの來たのを喜ばない弟は、酒屋のかみさんの話を聞いて、手癖の惡いといふのをいゝ口實にして、ともすると婆さんの所置を非難しようとした。若しも顚末を知つたなら、それ見た事かと云ふに違ひ無い。婆さんは第一にそれをおそれた。

右の手にお膳を持ち、左の手に飯櫃を抱へて、何となく足音も忍び度い氣持で二階から下りて行くと、日の下の玄關の日向で、當のおれんと藪睨の女の子が聲を合せてうたつて居た。

牡丹に唐獅子竹に虎

虎追うてはしる和藤內

わとうないかたに智恵かそか
ちゑの中山せいがん寺
せいがん寺の和尚さん坊さんで
坊さん蛸喰てへどついた

悪い根性なんか微塵もない子供々々した聲でうたつてゐるのが、かへつて面憎かつた。婆さんは怖い眼で睨みながら通り過ぎた。

臺所では、亭主がお膳の後始末をしてゐるばかりで、女房もお梅も見えなかつた。婆さんは帳場の長火鉢の前に坐つて一服くゆらしたが、何としても黙つては居られなかつた。

「おれん――おれん。」

あたりを憚りながら呼んで見たが、

ちゑの中山せいがん寺
せいがん寺の和尚さん坊さんで
坊さん蛸喰てへどついた

と幾度繰返しても元にもどつて繰返してゐて、聞えたいのか、返事をしない。

「おれん。」

閾の側迄行つて、うたひやめて振向いたところで、一寸といふ格好をして手で招いた。

「何だッ。」

直ぐに立上つて來る後から、女の子もついて來た。

「お前はあちらへ行つて遊んどいで。」

「何で。私おれんちやんと一緒に遊んだるねん。」

女の子は鼻聲で不平がましく訴へた。

「おれんちやんには一寸用事がある。あちらへ行け云うたらいんだらえゝ。」

「いゝ。」

下頤をつき出して反抗の氣勢を示しながら、やうやく玄關に引かへして行つた。

「何や。ひんがらめ。」

二つ三つ足踏みして脅かしたがきゝ目はなかつた。

「いゝ。」

上り口で下駄をはきながら、もう一度みそつ齒をむき出して、ばたばた往來に驅け出した。忌

々しがつて凝然と見送つて舌うちした婆さんは、腰をおろすと直ぐさまひそめた聲に底力をこめて、

「おれん、お前惡い癖出したんと違ふか。」

鉤なりに右の人差指をまげたのを袖口からのぞかせ、臺所の方に氣を配りながら、おしつけるやうに訊いた。

吃驚して婆さんの顏を見上げるおれんを、婆さんの方も鋭く見下した。

「かくさんかてよろしい。私は何でも知つてるのやで。誰にも云へへんよつて、さ、此處に出してみなはれ。」

大きな手の平をひろげて、盗つた金錢を出せと云ふのだつた。

八の五

蒼白い顏に緊張した表情を見せたおれんは、きれのいゝ目をみはつて、一瞬間思ひ迷つたが、直ぐに平靜な樣子にかへつた。

「お婆ちやん、何だんの。」

白ばつくれて、差出したその手は何だと詰る調子だつた。よく通る聲が高いので、婆さんの方がびくびくして、

「そない大きい聲するのやない。皆に知れたらようないで。」

臺所に居る弟を氣にして振かへつた。

「お前なあ、今朝三田さんのお室に行つたやろ。」

短兵急に口を切つたが、相手はちつとも動じないので、おもひ直して柔かに云つた。

「へえ、掃除に行きましてん。」

「その時になあ、三田さんの机の抽斗を開けて見はせなんだか。」

自分も一度はあけて見た覺えがあるので、流石に婆さんも氣がとがめた。

「いんえ。」

輕く頭を振つたばかりで、決心を示す唇は一層固く閉ぢられた。

「かくしたら爲めにならんぜ。三田さんの机の抽斗の財布の中のお金錢が無うなつたんや。」

「あて知りまへん。」

「知らん事があるものか。お前の手癖の惡い事は、おそのさんからも聞いてる。」

「そない云うても知らん事は知らん。」

何と云つても駄目だぞと、心を決めたやうな返事のしかたが、婆さんをむかつかせた。

「何。知らん事は知らんだと。よろし。よう云うた。」

前後に氣を配る事も忘れて、膝でずり出しておれんの手首を固くつかんだ。

「私がかうと睨んだ以上は、白狀せんかて白狀させたる。」

ぐいと引寄せて、いきなり懷に手をつつこんだ。

「あれえ。」

ひとたまりもなく前のめりに倒れかゝつて、手足を一度にもがきながら、必死になつて懷に突込まれた手に喰ひついた。

「畜生ッ。」

おもひもかけない抵抗に、婆さんも夢中になつて手を引いたが、逃出さうとする相手を見ると、いきなり襟首をつかんで引戻して、横面をひつぱたいた。はげしい物音に驚いて、臺所からは亭主が馳けつけ、奥の室からは女房も出て來て、雙方とも間に入つて引分けた。

「何すんのや。荒ぽい事して怪我させたらどないする。」

「お婆ちやん、まあ何事ですの。」
亭主は大きな體で婆さんの前に立ちふさがり、女房はおれんを片隅に連れて行つてかばつた。平手のあとが赤く殘つて居る頬ぺたを濡らして、おれんの目からは大粒の涙が溢れて來た。
兩手で前かけを顏に押當てると、ひとたまりも無くすゝりあげ始めた。
「おれんが何ぞ惡い事したのかしらんが、えゝ年して亂暴する人があるもんか。お客さんの手前もあるやないか。」
いきり立つて、やいやい云つてゐる婆さんの肩を押へて、いきさつを知らない亭主はしきりになだめた。
「畜生め、こない喰らひつきよつた。」
前齒の痕の半月形についた手首を忌々しさうに見せながら、幅の廣い舌を出してなめた。

八の六

「一體全體おれんが何したのや。」
亭主も其處に腰を下して、婆さんをとがめる調子で訊いた。

「何も彼もあらへん。盗みしよつた。」
ほんとなら弟には知らせ度ない話だつたが、かうなつてはかくしても居られないので、唾を飛ばしながら罵つた。
「ふうむ。やりよつたか。」
待構へてゐた事のやうに、亭主は太鼓腹の底から聲を出した。
「離室の變人さんの財布からちよろりと一枚抜きよつた。」
「ふうむ、三田さんのか。なんぼ程。仰山か。」
「いゝえ、五十錢一枚には違ひないが、金高の多い少いにはかゝはらんわ。その根性をため直してやらんならん。」
「五十錢か。」
金額の少いのが亭主の張つめた氣をゆるませた。
「そやさかいに、私は最初から手癖の惡い娘やつたらあかんよつて、止めにして欲しい云うたやないか。それを貴方が……」
「えゝい、そないな事云うてる時やないわ。」

重たい口でくどくど云ふ弟を叱りつけて婆さんは無理にも弱味をかくさうと思つた。
片方ではおれんが、泣いてゐるのか、泣き止んだのか、わからなかつたが、顔に前かけを押當てた姿勢を崩さず、壁にへばりついて動かなかつた。何時來たのか、玄關にはお梅も佇んでゐて、往來で遊んでゐた女の子も、その袖につかまりながら一座の景色を珍しさうに覗いてゐた。
「お婆ちゃん叩いて泣かしたんやろ。」
藪睨の目を雙方に働かせながら、遊び友達のおれんに同情して、婆さんには白い目を見せた。
「阿呆、引込んでえ。」
婆さんは大人氣(おとなげ)無く、又むかつ腹を立てゝ、烟管をつかんで立上つた。
「怖いよう。」
お梅の腰にしがみついて、女の子はひとたまりも無く泣き出した。
「えゝ、しやうむない人達やなあ。」
亭主は舌うちしながら圖(づ)でかい體を起して、
「さ、お前達はあつちやへ行つとれ。おれんには後(のち)にきく事があるが、そないな所に何時迄も泣いとつたら見とむなうてしやうがない。」

大きな手を擴げて、追ひ立てるやうにしながら、女房に目くばせした。きちがひじみた婆さんにかゝり合つて居ては限りが無い、兎に角一度は座をはづせと云ふ意味を、女房も直ぐに受取つた。

「何時迄も泣いとるのやない。こつちへ來なさい。」

顔にあてゝゐる手を取つて引立てると、おれんは又すゝり上げながら、そのまゝ連れられて奥に引込んでしまつた。女の子も泣きじやくりながら、お梅のお尻にしがみついたまゝ、その後に續いた。

「ほんまにお金が失せたのかどうか、一寸三田さんに尋ねて來んならん。」

自分もいゝ加減に逃出さうと、ひとり言をつぶやきながら亭主も閾を越えて出た。

「阿呆め、盗んだ奴をほつたらかして、盗まれた者に尋ねて何になる。」

見送り果てゝ、婆さんは噛んで吐出すやうな調子で罵つた。

八の七

「えゝ、御勉強中を御邪魔致します。」

襖をあけて入つて行くと、何時もの通り三田は机に嚙りついて思案に耽つてゐた。思ふやうに原稿が捗取(はかど)らないで、一字一句に難澁してゐる處だつた。見るからうるささうな顔付で、振向いてから洋筆(ペン)を置いた。

「只今一寸伺ひましたが何か間違ひが御座りましたさうで、まことに申譯のない次第で御座いまして。」

それが癖で、おそろしく叮嚀な口をきゝ、揉手をしたり、頭を掻いたり、膝頭を撫でたりしながら、うんともすんとも云はない三田に對して、亭主はしきりに詫びるのだつた。苦り切つてゐる相手は盜難の爲めに怒つて居るのだと思つた。

「あのちつさい女(をなご)が居りまつしやろ。あれは惡い癖がありますさうで、萬一お客様の物にでも手をかけるやうな事があつたら申譯ないと思ひまして、私はそんなもんはうちには置けんと申しましたので御座りますが、何分人手が足りませんのと、酒屋の方の親戚に當りますので、つい心を許したといふわけにもおまへんのやけれど……」

だらだら長く喋つてゐられるのが、三田にはひどく堪へ難かつた。

「さうするとあのおれんつていふちひさい娘が取つたとわかつたんですか。」

矢張り想像通りだつたのかと思つた。彼はがまんしきれなくなつて、手早く解決をつけたかつた。

「へえ、まああれやらうと思ひますので。婆さんもそない申しますし、外には氣心の知れた者ばかりで御座りますので。」

「そりやあ亂暴ぢやありませんか。取つたか取らないかはつきりわかりもしないのに、犯人だときめてしまふなんて。」

意地の惡い婆さんや、ねち〳〵虐めさうな亭主に責め問はれては可哀さうだと思ふと、たしかにおれんに違ひないと考へはするけれど、寧ろかばつてやり度かつた。

「左樣では御座りますが外にはその樣な大それた事をする者は一人も居りませんし、元々手癖の惡いといふ事は知れて居りましたので、只今階下で婆さんが糺問して居りましたところで……」

「益々いけないなあ。ちひさな者を糺問するなんていふのはよくありませんね。第一机の抽斗に錠口を入れて置くのは、置く方が惡いんです。別段大金を盜まれたわけでもなし、今後は私も氣を付けるから、まあ此の儘事を荒立てないで呉れませんか。」

すつかり怒つてゐる事と信じてゐた三田の意外な言葉に、亭主は多少面喰つた形だつた。

「さう仰られますと却つて恐縮致します。たとへ一錢でも五厘でも、お客様の物に間違があつたとなりましては、手前どもの家の名にかゝはりますので、どうにも一度は責めて見ん事には申開きが立ちません。何というても未だほん子供の事で御座いますから、脅すかすか致しましたら直きに白狀する事とは存じますが、一應御挨拶申して置かん事には氣が濟んまへんので……」

又長々と喋りさうなのを、三田は再び遮つた。

「斷じてそれはよして下さい。脅したりすかしたりして白狀させるのなんか氣持が惡い。私自身の重大な不注意なんだから今度は此のまゝにして、今後はお互に氣をつける事にして貰ひませう。」

大女の婆さんと、大男の亭主に折檻されて、白い手足を苦しみもがく小娘の姿がいた／＼しく想像された。そのあげく犯人の帶の間からでも、たつた一枚の五十錢札が出て來られては、愈々不愉快だと考へた。

「もう此の話はうち切にしませう。つまらない事にかゝりあつてゐると、頭のまとまりが惡くなつて爲方がない。」

彼は苦笑にまぎらして、早くも半身机の方に向きをかへた。

「恐れ入りました。失禮ながらお若いには似合はん御ふんべつで。では折を見て意見をしてやる事に致しまして、御言葉通り今度は此のまゝ許してやる事に致しませう。」。

亭主はさう云つて心底から安心して席を立つた。その實おれんをつかまへて、どうしても白狀させてやらうと思つてゐたが、頭ごなしに叱られるかと思つた三田の前を、無事に引下る事の出來る機會を逃すまいと、すつかり感服した樣子を見せたのだつた。

八の八

帳場では婆さんが佛頂面をしてやけに煙草を吹かしてゐた。自分から見れば、遙に智慧の足りない弟が、さも一家の主人らしく、事を捌く態度で二階に上つて行つたのが氣に喰はなかつた。挨拶もろくに出來もしない癖に、のこのこ出て行つて、下手な事を喋るに違ひ無い。あゝいふ鈍た男は、矢張り臺所で、茶碗を洗つて居ればいゝのだと、事件の中心人物が自分でなくなつた不平もまじつて、顏を見ても口をきく氣にはならなかつた。

弟の方では、氣心の知れない三田の言葉ではあつたが、兎に角覺悟をして行つた豫想に反して、一言も怒られもせずに話を濟ませて來た得意が十分だつた。口先ばかり達者でも、婆さんなんか

には、斯う圓滿に事を運ぶ力量は無いのだと、すくなからず鼻が高かつた。

亭主の重たい體が、づしんづしん底響をさせて梯子段を下りて來たので、女房もお梅も女の子も、事の成行を心配して又ぞろぞろ出て來た。

「三田さんどない云うてはつた。」

流石に女房は亭主の安否を氣づかふやうな熱心な様子で訊いた。

「何もやかましい事云うてあれへん。理窟はよう解つてはるさかい、天下の通用を机の抽斗に放り込んどいた自分の方に罪がある、盗んだ者があつても止むを得ん、うつたり叩いたりする必要は無いと、こない云うてはるのや。」

さうおとなしく云はせたのは自分の腕なのだぞといふ腹で、女房に聞かせるふりをしながら、實は婆さんの耳に入れ度かつたのだ。

「へえゝ、よう理窟の通つたお人やなあ。」

女房は心底から感心したが、傍で聞く婆さんは一々片腹痛い事だらけだつた。さも得意さうに話してゐる弟も、弟の相槌を打つ女房も馬鹿にしてやり度かつたが、それよりも肝腎の三田の態度が一層歯がゆかつた。金錢を盗まれたと云ふから、目星をつけて探索してやらうと云ふのに、

生温い事を口にしてゐるのは、ぐうたらとも意氣地なしとも罵つてやり度い程だ。えゝ、構ふもんか、もつと盗まれろと思ひながら、婆さんはなほしきりに烟を吹いて、たゞ一人そつぽうを向いてゐた。

あけ放した襖の向ふの奥の室に一人殘されたおれんは、鋭い耳を聳立てゝ、みんなの話を一言も洩らさず聞きながら、先刻疊に突伏したまゝの姿で、涙の乾いた顔をそつと持上げた。度々その爲めにはしくじつたので、隨分自分でも惡心をたしなめて居たのだつたが、ふらふらと癖が出て、三田の抽斗の蟇口から抜いたたつた一枚の札を帶の間にかくした。後では矢張り心がとがめて、出來るものならこつそりと、元に返してしまひたかつたが、そのひまも無く婆さんに襟首をつかまれてしまつたので、如何ともする事が出來なくなつた。かうなつてはかくし通す外は無いと決心した。おれんはそつと帶の間に手を入れて、皺くちやの札を引出したが、直ぐに腰あげの中にまるめて突込んだ。それで大變氣が樂になつたが、矢張り疊に平べつたく嚙りついて動かなかつた。

八の九

亭主は、婆さんの手荒な折檻は見ても居られなかつたし、そんな事にも暴威を振はせるのを嫌つたが、元々自分の不承知にも拘らず連れて來たおれんには同情が無かつたから、たしかに盜んだに違ひ無いものを、のめ〳〵見逃しては置けないと思つた。

何氣なく座を立つて來て見ると、おれんはちひさな體をうつ向に疊の上にうづくまつてゐて、めりんすの紅い帶の色ばかりいき〳〵として、本人はみじめな態に見えた。

「おれん、どないした。」

少し心配になつて、肩に手をかけて引起してみると、ひつゝめに結つた髮の垂れ下つたのが、涙で濡れて頰邊にへばりついた顏をあげて、膝頭のはみ出した着物の前を搔合せながら坐り直した。

「叩かれて何處ぞ痛みはしないか。」

先づ柔かくいたはつて置いて、それから段々問ひたゞしてやらうと思つた。おれんは横に首を振つた。長い間同じ姿勢で、たつた一人倒れてゐた退屈を免れた安逸が、乾いた涙でぴか〳〵光つてゐる顏に、自ら現れてゐた。

「婆さん、無茶しよつたな。」

お前に同情してゐるのだと知らせる積りで云ふと、おれんはそれを受け入れてそつと笑つた。

「お前ほんまに盗まへんなんだんか。」

そろ／＼本筋に入つてもよからうと思つた。

「一寸した迷ひで惡い氣が起きたのやつたら、今のうちに私にうちあけた方がえゝで。誰にも告げずに無事に濟ましてやる。お前の親達にも、おそのさんにも何も知らせはせえへん。私一人で聞いて、此の腹の中にしまつとくわ。」

だぶたぶの太鼓腹を叩いて笑つて見せたが、相手は目元で微笑をかへすばかりで、堅く結んだ唇を開かうともしなかつた。

「ほんまの事を淸く云うたがよい。下手にかくしたりすると、警察の手を借りても調べて貰はんならん。」

脅かした方がきゝ目があるかなと思ひながら、怖い顏付をして見たが、矢張り目元で微笑してゐるばかりで、手ごたへが無い。その人を馬鹿にしたやうな微笑が亭主を短氣にした。

「おい、何とか返事をせんか。」

聲を太くして擦り寄ると、細い手首をぐつと握つた。婆さんがやつたと同じく、彼もおれんの

懐に、むくむくと肥つた手を突込んだ。心持身を固くして防禦の形を見せたばかりで、おれんは冷然として動かなかつた。今度は帶の間を探つて見たが、汚ならしい鼻紙が出て來たばかりだつた。兩方の袂にも、袂糞の外には何も無かつた。

「こら、何處にかくした。白状せんとえらい目にあはすぞ。」

愈々力を込めて手首を握りしめた。おれんは痛さを堪へて體を斜に捩りながら、

「私、何も知らん。」

と意外に強く云ひ切つた。

「何ッ。何も知らんだと。」

亭主は相手の太々しい様子にかつとして、思はず聲が高くなつた。

「貴方何してはる。ひどい事したらあきまへんで。」

次の間から驅込んで來た女房に、言葉せはしくたしなめられて、やうやく吾にかへつて握りしめた手を放した。おれんは手首をさすりながら、涙をいつぱいためた目で怨めしさうに睨んでゐた。

九の一

三月の中旬には、三田の小說「世相」も新聞に掲載され始めた。すつかり出來上つたわけでは無かつたが、其の前に出てゐた流行作家の原稿が中絶してしまつたので、狼狽してしまつた新聞社の懇請に否み難くなつて、幾日分かの原稿を送つたのだ。

その小說は二人の主人公を持つてゐた。一人は一生を事業の爲めに捧げて、幾多の艱難を切拔けた老實業家で、齡既に古稀に達し、そろそろ爲事を後進に讓つて退隱しようと考へてゐる矢先に、絶大の金力を持つ赤の他人に、彼の一生涯の記念であつた會社を乘取られる。もう一人は其會社の給仕から仕上げて、漸く一人前になつた若い社員で、實直に且機敏に働いてゐたのが、新しく入つて來たタイピストに戀して、段々爲事もおろそかになり、身も持ち崩したあげくに惡い事をして免職される。此の二つの出來事を綯ひまぜにしたのが大體の筋だが、それよりも其の背景になる現代の世相に作者は多くの力を盡した。三田はかなりの自信を持つて、日々の夕刊に出る自作を待つてゐた。

何事に限らず、正當の理解は無くて、只管話の種の殖る事を喜ぶ會社の同僚は、いちはやく噂やかげ口の材料にした。

「三田君もかうして算盤を持たせると吾々同樣不器用だが、その道では樟先生で通るんだから

ね。」

机を並べてゐる係長が先づ口をきると、

「一體近頃は原稿料はいくら位呉れるもんです。」

すぐに商賣人根性を出すのか出て來る。

「私なんか駄目なんです。ほんのおしるししか貰へません。」

「おしるしだつて結構ぢやありませんか。なぐさみに書いたものが金になるんだから。」

「ほんとにいゝ道樂だね。」

口々に云ふ言葉に惡意は無くても、餘りに無理解なのが腹立たしく、三田は返事もしずに座をはづす事が多かつた。

下宿でも同宿の貯蓄銀行員が眞先に氣がついて、給仕に出てゐたお梅に話した。

「離室の先生の小説が新聞に出てゐるぜ。」

「へえ、三田さんのだつか。よう出來てまつか。」

「いゝか惡いかわからないが、矢張り、幽芳や浪六にはかなはないね。何となく野暮つたらしくていけない。」

「へえ、左様だつか。」

幽芳が誰だか、浪六が何だかお梅にはわからなかつた。野暮つたらしからうが、無からうが、兎に角毎日顔を見てゐて、不思議な人間だと思つてゐる三田の書いたものが、平生偉いものだとも怖いものだとも思ふ新聞に出たと云ふ事が大きな出來事だつた。

「あのなあ。三田さんの書かはつた小說が夕刊に出たるさうや。」

お膳を下げて階下に下りると、皆に聞えるやうに云つた。

「へえ、左様か。どんな事書いてはるのやろ。誰ぞ讀んでしまうた人に借りてんか。」

婆さんが第一に乘氣になる。弟夫婦も共々に、好奇心を動かした。

「何やら野暮くさい氣がすると、六疊のお客さん云うてはつた。」

「ふうむ、さうやろ。野暮なお人が書かはるのやよつて、野暮臭いのは當り前や。」

すつかりその小說の値うちはわかつてしまつた氣がしたが、それでも矢張り手に取つて讀んで見たかつた。

九の二

最初の五六回は、一生かゝつて完成した仕事に滿足し切つて居た老實業家が、商業道德を無視した金力の暴威に始めて失意の歎きに陷り、今日迄得意の念を以て顧みた過去が、殆ど全く後悔の堆積としか考へられなくなつた心的苦惱が、隨分しつつこく克明に書いてあつた。

「何やらしち難かしい事ばつかり書いてあるな。これでも小說と云へるのやろか。」

昔讀んだ小さん金五郎などゝ引比べて、婆さんは其のつまらなさにあきれたが、それでも家中の者を集めて、妙な節をつけて讀んで聞かせた。誰の頭にも變な人として映つてゐる三田の書いたものだと云ふ事が、特別の好奇心を起させるので、お梅やおれんはまだしも、藪睨の女の子迄、おとなしく膝に手を置いて朗讀を聽いてゐた。

「矢張り學問のある人の書くもんは違ふわ。」

別段面白いとは思はなかつたけれど、あんまり皆がわからない顏をしてゐるので、亭主は一人わかつた樣子をしてつぶやいた。

「そやけれど、もひとつおもしろい事ないな。」

婆さんは讀み終つて新聞を疊んだが、何も頭に殘つては居なかつた。

それでも自分のうちの止宿人が、偉い新聞に續物を書いて居ると云ふ事は、隨分大きな誇たつ

た。近所の床屋、煙草屋、駄菓子屋の店頭に立ちどまつて、時候の挨拶が濟むと直に、其の自慢をした。

向側の湯屋に行つても、番臺に坐つて居る女房に話し、次の日には娘に話し、その外顔を合せる近所のかみさん達にも話した。

「小説書かはる人どんな人やろ。」

何時も銀杏返で、襟つきの着物を着て、眞白に白粉を塗つて番臺で講談本を讀んでゐる娘は、直ぐに好奇の目をみはつた。

「毎朝起きぬけに來るお人や。大きいかたらの、眉のこんな眼の玉のこんな……」

婆さんは太く釣上つた眉毛を兩方の人差指で描き、大きな眼を二つ輪にした指で示した。

「あゝ、あの髯のあとの青いお人か。」

「そやそや、怖い顔しただんまりさんや。」

その怖い顔しただんまりさんか、小説を書く時は幾時間でも机にむかつたきり動かず、お茶も飲まず煙草も吸はず、物を食べる事さへ忘れて、夜も遲く迄勉強してゐるのだと、平生は面白くたい人間だと思つてゐるのだが、話の種にする時は、何から何迄自慢にして、聽手に感動を強ひ

た。

そんな事とは露知らない三田は、朝は何時もの通り起きると直ぐに湯に行くのだつた。湯錢をうけとつた娘は、何か用事ありさうに狼狽しく番臺を下りて、奥に駈込んだが、間もなく母親を引張つて來た。恰も三田は着物を脱いで素裸になつたところだつたが、親娘の視線は容赦なく全身にそゝがれ、母親の方は袂から取出した眼鏡をかけて見るのだつた。ふと氣が付くと、その手には彼の小説の出てゐる新聞を持つてゐた。三田は毛もくじやらの手足を氣にしながら、逃げるやうに浴室に入つた。

九の三

一巡知つた顔に觸れ廻つた後にもなほ長々と續く小説「世相」の主人公の老實業家の述懷に、婆さんを始めとして、下宿の者はあきてしまつて、近頃は家中が寄集つて朗讀を聽く事もなくなつた。ところが或日酒屋のお女房さんが來て、

「あんたとこの三田さんの小説、えらい面白うなつて來たなあ。」

と話のついでに云ひ出した。

「ふうむ、私とこでは此の二三日讀んでへん。なんとか云ふおやつさんの泣言にもあいてしまうた。」
婆さんは一見識見せた積りで答へた。
「そのおやつさんの話はもう濟んでしもた。一昨日からは若いお勤人が、同じ會社に勤めてはる女子はんに惚れて大騷ぎしてるのや。」
さも實際の出來事のやうに話して聞かせた。男と女の間の話たと聞くと、婆さんも又乘氣になつて、早速二階から借りに來て其場で讀んだ。新しく來たタイピストに目をつける多くの若い社員の中の一人が、美文めかした文體の艶書を送るところが婆さんの氣に入つた。
「へえゝ、三田さんみたいな人に、ようこんな事が書けたもんやなあ。」
殊の外感心して、繰返して皆に讀んで聞かせた。
小說の筋が多少いろつぽくなると、敢て下宿の婆さんばかりで無く、一般の讀者にもうけがよくなつたらしい。作者へ宛てゝ感想を寄せる愛讀者も二三には止まらなかつた。中には艶かしい女の手紙もまじつてゐた。桃色の封筒に紫インキで糸蚯蚓のやうな字の書いてあるのが、机の上に載つてゐるのを見た時は、今迄にも一度や二度はあつた經驗から、誰も見てはゐないのだが、

上氣するやうな心持で、あたりを憚かりながら開いた。

先生！　先生と呼ぶ事を御許し下さいませ。定めし先生は此の御手紙をお開き遊ばして、處女にあるまじき不謹愼者とおさげすみになり、お怒りになる事と存じますが、何卒そのやうな酷な目を以て御覽下さいませんで、あはれな少女よと御思ひ遊ばして下さいませ。

あゝ不思議！　不思議！　不思議と申しませうか運命と申しませうか、若し此の世に神と云ふものがあるのなら、神のたはむれで御座いませうか、ひとたび先生の御高作「世相」を拜見致しまして、私は全くチャアムされてしまひました。血潮は胸に高鳴り、涙は止度なく流れ、かよわき少女の身も魂も震へました。あゝ此の胸の苦しさ、心臟の惱み……

先生！　名も無き一少女が、此のやうな事を申上げましたらお怒り遊ばしまして？　でも私を泣かせ、苦しませ、血を吐くおもひをおさせ遊ばしたのは、先生のお美しき御文章の罪で御座いますわ。私かかげながらお慕ひ申して居る位はお許し遊ばしてもよろしいでせう。

まあ飛んだ失禮な事を申しまして、私如何致しませう。御免下さい。

まだ一度も御目もじは致しませんが、私實は先生には夢で度々御目もじ申上げて居りますの。御看病もさせて頂きました。誰にも祕めて語らぬ過去のお話も聞いて頂きまして、溫かい溫

かい御同情の御涙さへ頂戴致しました。最後にはお兄様とお呼びする事も許して下さいました。あゝ、これが夢で無く、ほんとの事で御座いましたら、私どんなにどんなにお嬉しう御座いませう。先生！　どうぞ一度の御目もじ御許し遊ばして下さいませ。一生のお願で御座いますから。

未だうら若き處女が、恥を忍び、良心とたゝかひ、泣いて泣いて病の床でしたゝめました此の文を、無慘にも御嘲笑遊ばしたり、御燒捨て遊ばすやうな事がありましたら、私はどうなる身なので御座いませう。生きては居られまいと存じます。勝手かもしれませんが、一滴の御涙に浴し度いので御座います。斷じて御取上げ賜らぬとならば、朝夕に身も細り行く苦しい思ひに殉じ、どうぞ先生の御寫眞一葉と、成るたけ御尊體に近くおつけ遊ばすもの――おはんけちなりと御惠み下さいませ。その賜物に對し、私は女の最も淸く尊き犧牲を捧げる事を喜んで致します。あゝ、今宵は殊に熱も高まり、堪へられぬおもひに枕を濡らして居ります。

九の四

所番地も明かに書いて、松宮花代といふ名前も本名らしかつた。追而書には、父母や兄の目を忍んで書いたのだから、返事を呉れる時には是非共女の名にして出して呉れと注意してあつた。

讀終つて、三田は一層動悸が高くなつた。餘りに紋切形ではあつたか、若い女のどうにでもなる肉體が目の前に横はつてゐるのに等しいのだから、勝手極まる想像の止まる處を知らない程次から次と湧いて來るのも當然だつた。處女だ、處女たとさも自慢さうにいふ所から押しても、處女らしくはなかつたし、おもひに惱んで病床に在るなどゝ見え透いた事を書いたり、最も清く尊きものを捧げるとあからさまに餌を見せびらかす態度などは面憎かつたが、矢張り破いて捨てる氣にはならなかつた。二度三度繰返して讀んだ後で、机の抽斗の一番の奥底にしまつた。

二日三日、天王寺に住むといふ女の事は、絶間なく三田の空想に浮かんで、多少の不安をまじへながら、十分彼を樂しませた。必ず返事を呉れとあつたけれど、どうでも好きなやうにして呉れと體を投出して來た相手に易々と乘せられては、いゝなぶりものになるばかりだ、不良少女なんかにかゝはつてたまるものかと思つて、そのまゝうつちやつて置いたが、それつきり交渉が無くなつては惜いやうな氣も勿論あつた。もう一度位は手紙を寄越すだらうと、猾い事も考へてゐた。

或日曜の朝であつた。前の晩に遲く迄原稿を書いてゐたので、すつかり疲れて寢坊した。何時の間にか、誰かゞ雨戸をあけたので、頭の上の障子には、春めいて來た日の光りが暖く漂つてゐた。目は醒めたが、床の中でぼんやりして、起きようか、もつと寢てゐようかと迷つてゐるところに、狼狽しくお梅がやつて來て、來客だと告げた。

「女の人かい。」

咄嗟に三田は手紙を寄越した女に違ひ無いと思つた。

「いゝえ、未だほんの若い書生さんです。」

「ふうむ。」

なあんた面白くもないと思ひながらも、急いで夜着をはねのけた。階下の汚ならしい洗面場で顏を洗ふ間も、どんな人間が尋ねて來たのか考へても見當はつかなかつた。

濡手拭をぶらさげて室に歸ると、お梅が床をあげたあとに堅くなつて坐つてゐる十七八の少年があつた。

「先生ですか。」

敷いてゐた蒲團から滑り下りて叮嚀に頭を下げたが、想像して來た人間とは違つたぞといふ度

いやうな表情がありありと見えた。

「私は三田です。」

先生と呼びかけられた丈で、三田にはこの少年が何の爲めに自分を訪問したか、彼が如何なる種類の人間であるかゞ直感された。こいつは迷惑な奴に襲はれたぞと思ふと、數分間前、手紙の女かと思つて胸をとゞろかした事が愈々馬鹿々々しくなつて、彼は不機嫌な態度で相手を見守つた。五分刈の額の白い愛くるしい顔たちで、紺がすりの着物に紺がすりの羽織で、姉か妹か編んだらしい海老茶の毛糸の羽織の紐が、まるつきり子供らしかつた。

九の五

「先生、私を弟子にして呉れませんか。」

暫時無言で對座して居たが、少年は稍恥らひながら、色の白い耳朶迄赤くして口を切つた。彼の話によると、今中學の五年になつたばかりで、來年は卒業の筈だが、學校で教へる事にはちつとも興味が無く、あと一年の辛棒が到底も出來ない。父親は死んでしまつたけれど、父が生前殘した事業があつて、中學を卒業すれば、自然其處で働かなければならない。姉妹はあるけれど男

の兒は一人の事だから、母親は大概の事は云ひなりになつてゐるか、息子が小説家になる事丈には怒つたり泣いたりして反對する。それにもかゝはらず此の少年は嫌ひな學校をやめて、直ぐにも小説家になり度いのだつた。たまたま三田の小説の新聞に出たのを讀み、前々から雜誌でも名を知つてゐたし、大阪には外に知名の作家も少いので、新聞社で下宿を訊ねてやつて來たのだ。

「小説家になるのに學校なんぞ役に立ちませんな。」

話をしてゐるうちに羞しかりもうすらいで、彼は同情を求めるのだつた。

聽いて居る三田の目の前には、その年頃の自分自身の姿が浮んで來た。學課は怠け放題で、小説本ばかり耽讀してゐたのだから、苦も無く目前の少年の心持になり切る事が出來た。しかし長い間の歳月は、彼を臆病な大人にしてしまつたので、此の場合相手の一本調子に、うつかり相槌は打てなかつた。三田は早くも自分の立場を警戒し始めた。

「矢張り學校はしつかりやつた方がよござんすよ。學問の根柢があると無いとでは、作家として立つ上にも非常な相違がありますからね。」

直接小説を書くのに特に必要な智識は與へないにしても、此の人生を見る上に、深味を増すに違ひ無いと、學問の功德を說いた。

少年は不滿さうな顏をして聽いて居たが、
「それぢやあ學校はつゞけてもいゝんですが、私見たいなもんでも小説家になれますかしら。」
と話題を變へて來た。
「そりやあ勉強次第でせう。素質による事は勿論だが。」
「では先生の弟子にして書方を教へて吳れませんか。」
「教へるなんてものぢやありませんよ。自分で勉強する外はありますまい。それに貴方のお母さんは小說家志願に反對なんでせう。」
「反對したつて構はん。うちのお母さんは頭が古くてかなひませんわ。」
強い語調でいひ放つた。
少年は平生崇拜してゐる作家の名を擧げて感激の心をもらし、好きな作品に對する批評めいた事も云ひ、藝術家らしい生活に憧憬して、商人の家に生れた不平を述べた。その言葉の端々には、屢々文學青年の間にみる如く、藝術家の生活とは、必然酒と女に關係のあるものとして、それをはなばなしく空想してゐる傾向が見えた。
三田は又しても大人の臆病心に襲はれて、その考への間違つてゐる事を、訓戒めいた口調で說

いた。それは、若し少年が推測するやうに、酒と女にばかりかゝりあつて居たら、時間と精力を消耗してしまつて、創作なんか出來なくなる。第一流の作家の生活は、極めて眞面目なものだと云ふ意味の事だつた。

話は兎角途絶え勝だつたが、かなり長い間話込んで、歸り際には何だかもじ／＼してゐたが、思ひ決したやうな調子で、

「先生、下手なんですけれど私の書いた小説を見て下さいませんか。」

と云ひたから、懐から原稿を取出した。さうして、次の日曜には又來るからと云つて、やうやく歸つた。

九の六

少年が置いて行つた小説は二つあつた。極端に幼稚な字で書いた、假名づかひも文法も滅茶々々の文章でひどく讀みにくいものではあつたが、題材はぼん／＼に似合はず、苦勞人の見た世の中らしく、かなり深刻に觀察して、一種重苦しい氣分を起させるものであつた。色の白い、どつちかといへば女性的の顔立の少年が書いた物とは思はれなかつた。しかし二つの小説の二つなが

ら、性慾の壓迫に惱んでゐる男や女の事が描いてあるのが、矢張り生若い書生らしさを現して居た。年上の船長の妻に可愛がられる少年の事を描いたのは、自傳らしくも思はれた。三田は存外感心して讀み終つた。

二三日たつと、その少年は又やつて來た。

「こんどの日曜に來ようと思つたのですけれど、昨晩ひとつ小説が出來ましたので持つて來ました。」

直ぐに懷から二三十枚の短篇を出して坐り込んだ。三田は「世相」を是非共四五日中に切上げてしまひ度いと思つてゐたので、度々訪問されては迷惑だつた。

「今晩は、私は是非とも勉強したいと思つてゐるんだが、其處いらを一緒に散歩してお別れにしませうか。」

長々と話し込まれては堪らないと考へて、自分の方から進んで戸外(おもて)に出た。中之島の公園を歩きながら、前に讀んだ少年の二作について批評をし、いゝ所はいゝといひ惡い所は惡いと、明かに指摘した。

「兎に角面白い事は面白かつた。しかし文字や假名づかひにも、もう少し神經を働かした方がい

ゝでせう。第一讀みにくゝつて爲樣が無い。」

細かい點迄注意したが、相手は自信のある態度でいつた。

「字なんか、どないだつて構やせん。先生は割合に古いですな。」

「そりやあ古いさ。」

三田は外に答へる言葉を知らなかつた。

一廻り歩き廻つて、難波橋の際の珈琲店に入つた。其處で乾いた咽喉を濡らして別れようと思つたのだ。硝子障子の外に水の見える卓につくと、

「今晩は。お久しうおまんな。」

白粉を厚く塗り立てた給仕の女が、少年を見て挨拶した。

「あんた此頃はちつとも見えてはおまへんな。南地にばかり行つてはるのやろ。」

遠慮氣なく口をきかれて、先生の手前困つたらしく眞赤になつてしまつたが、話をそらす爲めに、

「××は來ないか。」

などゝ友達の名前をいつて訊いた。

「今先刻迄見えてゞした。」

「○○は。」

「貴方の方がよう知つてはる筈やわ。」

何か樂屋落のありさうな話をして、女は手をあげて少年の背中を叩いた。

三田は麥酒をあつらへたが、

「強い酒でなければ醉はんからつまらん。」

と駄々子らしい事をいつて、彼はアブサンを命じた。さういふ風にするのが藝術家なんだといふやうな、文學青年らしい樣子が見えた。三田は又しても責任を感じて、しきりによき藝術家の生活は、遊蕩には縁遠い事を繰返して聞かせた。

九の七

土曜の晩に書終る豫定だつた長篇「世相」の最後の句讀點を打つたのは曉方近かつた。數箇月の間、一生懸命でやつた仕事を終つたので、重い責任を果たした滿足で熟睡した。三田は正午頃迄寢込んでしまつた。

はればつたい目には痛い程新鮮な窓の外の景色は、既に全く春になつて居た。手を延ばせば屆くところ迄、枇杷の枝が來て、梢は若い葉が勢ひよく重なり合つてゐる。その隣の柳の枝垂れた枝は、境の黑塀を越して御旅館幸本の庭に忍び入つてゐる。時折、花合の客の集まる外には連込みの宿らしい其の家も、二階の緣側の欄干に、艷めかしい友染の夜具を干し、障子はすつかりあけつ放しで、惜氣も無く日の光が流れ込んでゐた。暫時その春の色をうつとりと眺めながら、仕事を終つた氣安さと、日曜の長閑さを痛感した。何處かに遊びに行かうかなとも考へたが、小說家志願の少年古林豐太郎が來る約束になつて居るのを思ひ出した。

湯屋に出かける時、梯子段で擦違つたお梅は、

「お風呂たつか。えらいお早うおまんた。」

と笑顏を傾けた。

「直ぐ歸つて來るけれど、お客が來る筈になつてるから、來たらあげて待たして置いてくれ給へ。」

さう云つて彼は下駄を突かけて出た。散步した晩に受取つた少年の第三の作は、どんな寛大な檢閱官でも發賣を禁止しさうなものだつたが、出來榮は一段勝れて居た。異常なる慾情の好奇心か、彼の觀察を鋭くしたのではないかと思はれた。人生の危機にある少年に對して、三田は同情

を持つて居た。
相も變らず素裸の全身に番臺の娘の視線を浴びせられて、三田は眞赤に茹つて歸つて來た。
「三田さん、お客さん來てはりまつせ。」
玄關で誰かの靴を磨いてゐたおれんが、仰ぎ見て云つた。
「えらい別嬪たんな。」
何も云はない三田の後から、重ねて聲をかけて、こまつちやくれは面白さうに笑つた。
「何を云つてやがるんだ、月並だぞ。」
古林少年が待つてゐるのだとばかり思つてゐる三田は、おれんがかつがうとするのだと取つて、腹の中でさうつぶやいた。勢ひよく梯子段を駈上り、どすんどすん廊下を踏んで室の襖をあけたか、思はず知らず後戻りしさうになつた。直ぐ目の前に紫矢絣の羽織を着た小柄な娘が坐つてゐたのだ。三田の胸は高く早く波打つた。これこそ、女にとつて最も清く尊きものを、一枚の牛けちに皆へようといふ少女に違ひ無いと思つた。
三田は濡手拭を欄干に掛け、思ひ決したやうな態度で机の前に位置を占めたか、女は素晴しく大きな廂髪に幅廣の淡紅色のリボンの目立つ頭をうつむけたまゝ、眞白に塗つた襟首を見せて動

かない。長い間動かない。三田は自分の方から口をきくきつかけも無いので、默つてその廂髪を見下してゐたが、餘り強情に相手が動かないので腹が立つて來た。彼は、わざと手荒に机の上の新聞を取つて擴げて讀むやうなふりをした。そんな芝居がかりのだんまりの相手になんかならないぞと云ふ所を見せる積りだつた。

「先生。」

果して女は狼狽して、普通よりも半音階位高い細い聲で呼びかけた。

「先生、おわかりになつてゐらつしやるでせう。」

白粉の濃い顏をあげて、正面から大きな目に笑を含ませて凝然と見た。

九の八

額をかくすやうに突出した廂の下に、黒目の部分の多過ぎる程黒い目をみはつて、その目元と口元に微笑を湛へてゐるのを、もてあました形で三田は見守つた。

「先生、お怒りになつてゐらつしやいますの。」

今度は首を傾けて、下から覗き込むやうにして訊いた。三田は勝負に負たやうな心持で目をそ

らした。
「貴方は御病氣ぢやあないんですか。」
「まあ、先生！　おほゝゝゝ」
まづい事をいつたなと思ふひまもなく、相手はリリリリリと響く聲で、體を二つに折つて、笑つて笑つて笑ひ止まなかつた。
「ほんとに先生は、私が想像して居た通りの方でゐらつしやいますわね。おほゝゝゝ」
すました顔をして物を言つて置いて、又堪性も無く笑ふのだつた。三田は苦い顔をして見てゐる外は爲すべき事を知らなかつた。おもひに惱み、病床に涙に濡れてゐると書いてあつたのとは反對に、陽氣な顔立ちの、小柄ながら健康さうなのが、聲にも態度にも現れてゐた。三田は怒る事も笑ふ事も出來ないで、如何處置をしていゝか、只管當惑するばかりだつた。
「先生、お驚きになつたでせう。」
何かいふ時には、屹度冒頭に先生と呼びかけたが、別段何も取りとめた話には及びさうも無く、たゞ珍しい人間を訪問するのが面白いといふ風に見えた。三田は種々に空想した手紙の主が、決して自分の腦裡に描いた紅葉時代の小說の女主人公では無いのを知つて、少からず物足りなかつ

た。

「お作は毎日愛讀致して居りますわ。」

などゝいひもしたけれど、別段文學に深い興味を持つて居る樣子にも見えなかつた。從つて最初のうちこそ、何かしら胸の騷ぐ氣持に惱まされた三田も、段々馴れるにつれて平氣になつた。彼は空腹と退屈を感じて來た。

女は、病氣の爲めに去年の春女學校を中途でよして、今は好きな音樂――マンドリンの稽古をして遊んでゐる。父親は或會社の重役で、兄と自分を生んだ母は死んで、今のは繼母だといふやうな身の上話を、自分自身が面白さうに話してゐた。その話が途絶えては又續いてゐるところへ、おれんに案內されて古林少年が入つて來た。三田はその姿を見ると、救はれた氣持でほつとした。

「こちらは古林さんです。」

紹介すると、

「私は松宮花代と申します。どうぞよろしく。」

名告りながら、色白の少年の顏に、大きな黑目勝の眼をうつした。

「先生、こないだのはあきませんでしたか。」

その目に見据ゑられて眞赤になつた少年は、救を求める樣子で、原稿の事を口にした。

「あれは發賣禁止ですね。よく描けてはゐるけれど、とても印刷にはならない。」

三田の言葉に一層赤くなつて、堅く膝を締めてもじ／＼してゐるのが、矢張り一人の女の存在の爲めのやうに見えた。

「まあ、この方も小說をお書きになるんですか。」

女は好奇心の爲めに愈々大きく開いた目を、少年の顏からそらさなかつた。

「えゝ、なか／＼うまいんですよ。」

三田は自分よりも尙更意氣地の無い者を見出した安氣な氣持で、始めて冗談らしい口をきけた。

「拜見致し度う御座いますわ。」

さういつて女は膝を乘出して來た。

九の九

机の抽斗から三田の取出した原稿を受取つた女は、直ぐに膝の上に開いて讀み始めた。「體驗」と題する其の小說は、人間——殊に藝術家を完成せしむるには體驗が豐富で無ければならないと

信じ、且つ公然主張して居る眉目秀麗の青年の肉體の經驗を描いたもので、主人公の際どい冒險は、到底中學の生徒の作り出したものとは思はれなかつた。善良なる風俗を亂すものとして、廣く人の目に觸れる事は許さる可くもなかつたし、作者自身も自分の好奇心を滿足させ、慾情の昂ぶりに耽る興味から描いたので、外に目的は無いらしかつた。三田は、人を人とも思はない女が、如何いふ態度でそれを讀むか、少からぬ惡戯氣分で見守つた。

當の作者の少年は、作品の内容がたゞならないものなので、原稿が女の手に渡ると、すつかり上氣してしまつたが、讀む方は存外平氣で、微笑を浮べながら一枚々々めくつて行つた。

「これ貴方がお書きになつたんですつて。まあ、隨分大膽だわねえ。」

讀終つて、原稿から顔をあげた女は、直接少年作者に讃嘆の聲を送つた。大きな目は、特殊の感激に輝いてゐた。少年は眞赤になつてうつむいたまゝ、返事も出來ない樣子だつた。

「つまりこれは作者の體驗なんで御座いますか。」

明かに少年の羞しがつてゐるのを面白がる不良な態度で膝を進めたが、作者は益々恐縮して、

「いゝえ、左樣いふわけではありません。」

と低い聲でつぶやくやうに答へたばかりだつた。

「おかくし遊ばさなくてもよろしいぢや御座いませんか。おほゝゝゝゝゝ」

リリリリリと響く聲で笑つた。三田はあつけにとられて、その場の景色を傍觀してゐた。朝も晝も食事をしない空腹の爲めにぼんやりした頭腦は、現實に目の前に展開されてゐる世の中の一部だとは考へないで、夢のやうな責任の無い場面としか思はなかつた。見ず知らずの自分に手紙を寄せ、想ひに惱むといふ意味の言葉を盡した女が、此のはでな、明い、無邪氣なのか圖太いのかわからない女なのかと思ふと、愈々夢の心持だつた。彼は密かに處女と處女でない女とを、その姿態と容貌で見分ける事が出來ると信じて居た。ところが今目の前に坐つて居る女は、肉體の何處にも弛んだ處がなく、まるつきり子供らしい格好の肩つき腰つきであるが、その態度には到底もむすめらしさは殘つてゐなかつた。それにひきかへて、此間の晩の難波橋際の珈琲店に於ける景色や、創作「體驗」によつても想像される早熟の少年の方は、どう考へても經驗家らしく思はれるのに、堅く膝を締めて坐つたきりで、何を云はれても上氣して返事も出來ないところは、かへつて清純を保つてゐるやうに見えるのである。よく世間で、貞潔を守つてゐるかどうかは、鼻の頭を押へて見ればわかるといふが、ほんとかしら――三田は不圖途方もない事を考へた。いきなり二人の襟首をつかんで引寄せて、柔かさうな鼻の頭を、力任せに押して見度かつた。

何のとりとめた話も無く、二三時間も坐り込んでゐたが、突然女が暇乞ひして歸ると、間も無く少年も近日の訪問を約して歸つて行つた。

九の十

松宮花代は再び三田を訪れもしなければ、手紙さへ寄越さなかつた。涙にくれて認めたといふ思慕の情をつくした最初の手紙を、時折取出して讀みかへして、三田は苦笑を禁じる事が出來なかつた。どう辯護しようとしても、自分は落第したのだと想ふ外に途がなかつた。屢々文學少女の中に見るやうな、青春の惱みに堪へられず、誰でもいゝから相手になる人間を求め度いと思ふ矢先に、文筆の士は近寄り易く、射落し易く考へられたであらう。兵隊のやうに頑丈な醜男とは知らないで、色の白い優男とでも想像したのであらう。それが事實は無愛想な書生に過ぎなかつたので、最も淸く尊きものを捧ぐるに値ひしないと考へたのであらう。三田は危きに近寄る好奇心が、現實暴露の悲哀に終つたのを、流石に口惜しくも思つたのである。

古林少年は一度顏を見せたが、それも何と無くおちつかない様子で、長くは居たかつた。

「此間の女の人は、あれは先生の弟子ですか。」

彼は歸り際に突然そんな事を云ひ出した。その口調には、早くから聞き度いと思ひながら切出せなかつたらしい陰影があつた。

「弟子つていふんでもないな。」

「そんなら友達ですか。」

「さうさ、友達といふ程でもないんだが。」

三田は此の少年の前で、最初艶めかしい手紙を女が寄越したのだとは云ひ度くなかつた。

「先生も隅に置けませんな。」

云ひながら自分自身の方が赤くなつた。

「そんなんぢやないよ。」

三田も赤面した。實は嫌はれたに等しい結果なんだと腹の中で思つたのである。しかしさう云ふ弱味も、此の少年には見せ度くなかつた。彼は話を別の方角に持つて行つて、やがて相手が歸つた後まで氣がとがめた。

それつきり少年も姿を見せなかつた。

一週間ばかりたつた或日、三田の勤務先の會社へ面會人があつた。

「三田さん、面會。」

給仕の差出す名刺を見ると、××興信所と社名入で、松宮欣造と書いてあつた。

「手前は花代の父で御座います。」

應接室の椅子にかけた、蒼黑い顏色の、如何にも世渡りにあくせくしてゐさうな男は、三田を見ると叮嚀に挨拶して、金緣の眼鏡の奥で探るやうな眼付をした。

「早速で御座いますが、花代は貴方樣の所へ伺ひは致しませんでしたらうか。實はお宿の方へ今朝程一寸伺ひましたのですが、こちらへお勤めと承りまして……」

揉手をしたり、齒の間に呼吸を吸ひ込んだりする樣子は、會社の重役だと娘の云つたには似ず、どうしても永年の月給取で、且一生月給取で終りさうな人物にしか見えなかつた。云ふ所に據ると、娘は昨日の午後近所に買物に出たきり歸つて來ない、心當りを探してもわからない、ついぞ今日迄浮いた樣子もなかつたので、まさか色戀の沙汰ではあるまいと思ふが心配であると、妙に話上手な父親は、聲に充分の抑揚をつけて云ふのだつた。

「ところが當人の手文庫から、貴方樣から頂いた手紙が出て參りましたので……」

さう云ひながら、鼠色のモオニング・コオトの内懷に入れてある一通を取出して、卓子の上に

置いた。薄紫の西洋封筒の裏には城西館の町名番地の下に、三田と書いてあつた。

九の十一

手紙の文句は簡單だつた。

此間はほんとに嬉しかつた。城西館の二階の一室に感謝する。其處に美しき友を見出さうとは想像もしなかつた。ましてや、先に歸つたと思つたその人が、天滿橋のねきで待つてゐようとは。運命なんて古臭い言葉は使ひ度くない。戀を享樂するのに人間の力である。僕は手紙でセンチメンタルな事なんか書くのは嫌ひだ。それよりも逢つて生きた聲をきゝ、生きた情熱に接しなくてはならない。それで吾々の生活を最も豐富に幸福にする事である。何時？何處で？　直ぐに返事を下さい。　　T　生

松宮欣造の話すところに依ればそれが唯一の手がかりで、相手の住所と姓名はわかつた積りで、直さま飛んで行つたのが今朝の事だつた。若しかすると、三田といふ男の家に花代を見つけ出す事が出來るかもしれないと思つた。大體見當をつけて行つた近所で尋ねても、三田といふ家は見つからなかつたが、番地を辿つて行くと、手紙の中に名の出てゐる城西館にぶつかつた。それで

下宿屋だとわかると、愈々花代は此處にゐるのに違ひ無いと思つた。しかし取次に出た者の話で、三田は勤人で、晝間は會社の方にゐると聞かされ、又眞直ぐに此處に驅けつけたのだつた。

「實はまだまだ若い學生さんか何かと思つてゐたので、御目にかゝつて不思議に感じて居りますが、矢張り貴方樣がその三田さんで……」

他人の機嫌を兼る事が多年の習慣になつてゐるのであらう、娘の行方を探す父親らしく無く、何か商品を賣りに來た商人の態度で、揉手をしながら疑はしい顏付をした。

目の前につきつけられた手紙を讀んで不機嫌になつてしまつた三田は、その手紙のぬしに對し、花代に對し、且又花代の父だといふこの貧弱な會社員に對して、徹頭徹尾許し難く思つた。寄つてたかつて自分一人を馬鹿にしてゐるのだとさへ感じた。

「えゝ私は三田です。三田には違ひ無いんですが、こんな手紙を書いた覺えはありません。私は貴方のところのお孃さんに最初手紙をつけられた男なんです。」

相手が自分を疑ひながら、しかもはきはき口をきかないのが腹立たしく、彼の物言ひはつけつけしてゐた。この返答を解し兼て、松宮欣造は愈々疑はしい目付をして見守つた。三田は苛々しながら、そもそもからの事の起因を説明しなければならなかつた。

彼が樟喬太郎の筆名で小説を書く事、その小説を讀んで手紙を寄越す人がある事、花代もその一人だつた事、間もなく下宿に尋ねて來た事、席上でこれも小説を機縁にして出入する少年古林と落合つた事――娘を連れ出したのは三田だと思つてゐる呑み込みの悪い相手を納得させる爲めに、幾度も駄目を押ながら一部始終を説き明した。

「へえ、さう致しますと貴方は小説家で、その小説家の貴方に手紙を差上げたのが手前共の娘で――はゝあ成程。」

松宮欣造は一々大仰にうなづいた。

「ではこの手紙は誰が書きましたもので御座いませう。その古林とやらで御座りませうか。」

「さうでは無いかと心配してゐるんですがね。」

それに違ひない事は筆蹟でもわかつてゐるのだけれど、三田は目前にゐない人間の事を兎や角いひ度くないと思つて言葉を濁した。

「いやどうも申譯の無い事で。實はそのやうな悪い奴があらうとは存じませんで、この手紙を見た爲め、てつきり貴方樣に違ひないと睨んだので御座いますが、松宮欣造一生の失敗でした。」

髪の毛の薄い頭を掻いて、彼はてれかくしに苦笑した。

九の十二

三田は不快で堪らなかつた。

彼の說明を聞いて、ひた謝りに謝つて歸つた松宮欣造の姿が、事務室の机の上にも、帳簿の上にも陰影を殘して行つた。念の爲めに訊ね度いといつて古林の家の番地を聞いて行つたから、今頃はもう先方に着いたであらう。連れ出したのが古林少年か、連れ出されたのが古林少年か、何れにしても彼の二人が、手に手を取つて身をかくした事は明白だつた。紺がすりの羽織に海老茶の紐を結んだ少年と、紫矢がすりの少女との密會を想像すると、或種の祕密繪が描き出す濃厚な色彩が彷彿としてあらはれる。その忌々しい想像を追拂ふやうに、三田は幾度となく舌打ちした。

餘程たつてから、松宮欣造から電話がかゝつて來た。三田の會社を辭して、その足で古林の家に行つて見ると、此處でも同じ時から息子が見えないので、母親は夢中になつて心當りを探してゐるところだつた。其處で三田から聞いた話をして、雙方とも娘と息子は何處かしらに一緒にゐるに違ひ無いといふ事丈は了解したが、扨て何處にゐるのか、無分別な事をして呉れはしないかといふ心配に惱まされてゐるのだつた。

「おふくろさんといふ人はえらく我の強い御方でしてな、自分の所の息子が人の家の娘をだまかして逃げたくせに、私をつかまへて、貴方の所の娘さんがうちの悴を連れ出したのだといつてきゝませんのです。いやはや、どうも。」

松宮欣造は電話口で、再び髮の毛の薄い頭を掻いて恐縮したらしかつた。さうして、若しも何か三田の方に手がゝりがあつたら、直ぐに自分に知らして呉れと、しつゝこく繰返して賴んだ。

下宿に歸つても、三田は矢張り不愉快だつた。長い間苦しんだ長篇小說を片づけた安樂な心持で、その小說の執筆中は、手に取るひまも無かつた雜誌の積みたまつたのを、無責任に寢轉んで讀まうと、ひとつの樂みにしてゐたのだが、思ひもかけない事に亂された氣分は、なかなか靜まつて呉れなかつた。彼は疲れた體を倒して、開いた雜誌は讀みもせずに、一人前の大人にもならない男女が、いち早く知つた祕密の世界に、不覺な想像を誘はれ勝だつた。男同士口をきくのにも、色白の頰邊を染める羞らひ勝な少年が、自分の名前をかたつて出した手紙の意氣の鋭さは、意外といふよりも出しぬかれたといふ形だつた。あの手紙によつて想像すれば、この下宿に落合つた二人は、一足先に歸つた女の方が天滿橋で待つてゐて、そのまゝ手取早い戀を語合つたものらしい。最初の手紙でも不良らしく思はれたには思はれたが、女のしうちも、あまりに人を馬鹿

にし過ぎてゐる。徹頭徹尾、三田の役廻りは悪かつた。何處に姿をかくしてゐるのか――大阪かしら、京都かしら、若しかして身の處置に困つて無分別な事をしはしないだらうか……

「三田さん、お客さんだつせ。」

それからそれと止度なく小説らしい筋道を辿つて考へてゐる折柄、がらりと襖をあけられて、彼はあわてゝ飛び起きた。

お梅の後から入つて來たのは、何處にかけ落したかと想像してゐた古林豐太郎だつた。

九の十三

古林少年は何時もの通り、紺がすりの着物に紺がすりの羽織で、海老茶の羽織の紐をいぢりながら、持前の羞しがりの樣子を見せても、別段惡びれもしずに、三田の前に坐つた。かへつて三田の方が、不意の侵入に度膽を抜かれた形で、稍暫らくは何と口を切つていゝか見當もつかず、徒らに胸がわく〳〵した。直ぐにも引つかまへて白狀させ、親達に引渡してやらうかとも思ひ、何も知らない顔をして、相手が如何いふ態度に出るかを見てやらうとも思つた。互に押默つたまゝ樣子を探りあつて居た。

「先生。今晩はお願ひがあつて伺ひました。」
沈默の對座に堪へられなくなつて、少年は白い顏をあげて口を切つた。
三田は相手が口を開くのを待つてはゐたのだが、いざ先方が先に沈默を破つたとなると、先手を打たれたやうな胸騷ぎがして、これはしまつたぞと思つた。愈々花代とのいきさつをうちあけて、戀のとりもちを頼むのであらうと考へたのだ。
「隨分づうづうしい話なんですけれど、私の原稿を買つて頂けないでせうか。」
意外な少年の要求に、三田は又驚かされた。
「先生が買つたつて役に立たない事はわかつて居るんですけれど、今金錢が無いと困るんです。お母さんにいうても出來ん事はないのですが、先生だと一倍都合がいゝのです。先生は又それを雜誌なり新聞なり、引取る所へ賣れば御損は無いかと思ふんですが……」
思ひ決して言ひ出しはしたものゝ、流石に言葉はこんがらかつて滑かには續かなかつた。聞いてゐるうちに、三田は漸く何の爲に彼がやつて來たか見當がついた氣がした。
「君の原稿を買ふのか。」
あんまり虫のいゝ小商人じみた相手の申出でに憤慨して、多少皮肉に出てやり度かつた。

「いえ、買つて頂かんでも、少し金錢を借して頂けばいゝんです。」
少年はあわてゝ申譯をした。
「つまり、金錢が入用なんだね。しかし其の金錢は何に使ふ積りです。」
「友達が困つてゐるものですから。」
存外落ちついて少年は答へた。畜生嘘をつくなと、嘘をつかれる事の大嫌ひな三田は、物を言ふ時には自然に顏面に紅味がさして、さも內氣らしく、羞らひ勝に見える相手の綺麗な顏を、面憎く思つた。
「どんな友達が、どんな風に困つて居るんです。」
思はず知らず底意地の惡い詰問をしてしまつて、口に出してから自ら恥ぢた。
「そんな嘘はよしたまへ。何も彼もわかつてゐるんだ。」
三田はあわてゝ取消して、單刀直入に、事件の眞相を打ちあけてしまへといふ態度に出た。相手はびつくりして、やゝ暫らく三田の顏色をうかゞふばかりだつた。
「一體何處にかくれてゐたんです。色戀沙汰も止むを得ないが、他人の名前をかたつたり、金がなくて嘘をつくやうな根性はよろしくない。僕は、さういふ事が大嫌ひだ。」

たゞうつむいて恐縮してゐる相手に對して、三田は眞正直に憤慨した。

九の十四

「先生、えらい濟みませんでした。」

餘程たつてから、少年は思ひ決した態度であやまつた。うなだれた細い首筋を見て居ると、全く參りましたと觀念したものゝやうに見えた。さう思ふといゝ氣持だつた。三田は、自分の力で惡行を改心させたやうな氣持がした。

「一體全體どうしたんです。君のうちでも、松宮のうちでも、可愛い子供がゐなくなつたんで大騷ぎをしてゐるし、僕にしても下らないかゝりあひにされて大迷惑だ。何でもいゝから殘らず喋つてしまひたまへ。」

「えらい濟みません。」

もう一度頭をさげて、稍暫く躊躇してゐたが、三田の追窮に逃れられず、最初此の下宿で花代と落合つた日の馴染から、今の今迄のいきさつを、殘らず打あけなければならなくなつた。

あの時三田のところを辭した少年は、電車の停留場迄急いで行くと、一足先きに歸つた花代が、

何氣ないふりをして佇んで居るのを見た。どうしても、自分を待つて居たものとしか考へられなかつた。挨拶をして並んで電車を待つたが、お互に相手の心持がわかつたので、遂々電車には乘らずに、何時かの晩三田と歩いた同じ道を中之島公園の方に行つた。

その晩は千日前の活動寫眞を見て別れたが、直ぐに手紙で示し合せて又逢ひ、更に又逢ひ、――その中に、たゞ散歩したり活動寫眞を見たりしてゐるばかりでは面白くなくなつたので、お互にいくらかの金を持出して、和歌の浦か、京都か、も一つ思ひ切つて東京にでも行つて見ようと約束して、無造作にうちを飛出した。

「ところが先生、私はうちでお金が貰へなかつたので、向ふが持つて來るだらうと思つてゐたら、向ふは向ふで、私をあてにして一文も持つてゐないんです。困つちまひました。」

少年はさも困つたと云ふ形で、頭を掻いて苦笑した。肝腎のそれから先の話を期待してゐたが、少年は一先づ口を閉ぢてしまつた。

「ふうむ、其處で僕のところに噓をついて借りに來たわけなんたね。」

「噓をつくつて事もないんですが、でもあんまり變ですから、つい……」

狼狽てゝいひわけして、又頭を掻いた。

「つい嘘をついたのか。しかし嘘はよくない。ほんとの事を云ひたまへ。」
三田は相手が頷くのを待つて、一膝乗出した。
「ところで今は何處に居るんです。別段惡いやうにはしないから明白に云ひたまへ。今更かくしたつて爲方が無いや。」
「えゝ、もうかくしたり嘘をついたりはしません。」
さうは云ひながら矢張り羞しさうにうつむいて、羽織の紐をいぢつてゐた。
「大阪の市内にゐるのかい。」
「えゝ。」
「市内は何處です。早く云つちまふさ。」
「北區です。梅田の方の宿屋にゐるのです。汽車で京都にでも行かうと思つて停車場迄行つて、切符を買ふ時になつて初めて兩方ともお金を持つてゐない事がわかつたのです。」
「さうか、そんなところに居たのか。」
あんまり間近にゐたのが、一層人を馬鹿にした所爲に思はれた。扨て居所はわかつたが、これから如何したらいゝのだらうと、三田も些か當惑した。

九の十五

「兎に角一度めいめいのうちに歸つて、それから先の相談にしたら如何だらう。」

斯ういふ場合にのぞむ年長者の心持で、わけ知りらしい口をきくのが、不思議に得意な氣持もした。

「雙方が好き合つたものなら、僕から君のお母さんや、松宮のうちの方にも、よく呑み込むやうに話してやつてもいゝ。」

「いゝえ、何も話して頂く事なんかありません。あれは不良少女です。」

少年は、羞しさうに赤い顏をしながら、意外にきつぱりと斷定してしまつた。其處には何の未練も執着も殘つてゐない語調だつた。

すべてが三田には想像の外だつた。古めかしい人情本や家庭小說の筋書が先入主になつてゐる頭腦で、若い二人は夫婦になり度がり、その親達は承知せず、一悶著起る仲に入つて、雙方から賴母しがられるのが自分の役だと、內々考へないでも無かつたから、斯う簡單に見きりをつけられては、張合ひが無かつたのである。

「君だつて不良でない事もないぢやないか。」
彼は中腹で相手をたしなめてやつた。
「いやあ、やられたなあ。」
少年は無邪氣な笑聲を立てゝ頭をかゝへた。
「さうか、そんなのか。僕は後始末の面倒に迄引つかゝらなければならないかと思つて心配してゐたんだが、それなら問題は簡單だね。」
眞面目に惚れたり、惚れられたりするのよりも、不良同志のいたづらの方が、かういふ時には拘はりが無くて結構だと思つた。
「簡單ですとも。宿賃さへ拂ふ事が出來れば、それでいゝんです。」
氣難しい三田の様子が、多少なりともくだけて來たので、少年も安心した様子だつた。
「よし、よし、僕が拂つてやらう。」
寧ろいゝ御機嫌で、三田は懷中の財布の重さを考へた。長篇小說を新聞社に賣つた代金が、未だ手つかずにあるのだつた。
「しかし宿賃は拂つてやるかはりに、今晩にも別れて、めいめいのうちに歸るんだぜ。それが條

件だ。」
「えゝ歸りますとも。金は無いし、何時迄宿屋にゐたつて面白い事もないから、もう自分一人でもうちに歸つてしまはうかと思つてゐました。」
少年の言葉は愈々三田を驚かせた。見かけによらない太い奴たなあと思ふと、こんな奴等の清純をたぬす爲めに、鼻の頭を押へて見度く思つた自分の人のよさが馬鹿々々しかつた。
「では一刻も早い方がいゝ、一緒に行つてかたをつけてやらう。」
三田は直ぐにも兩方の親達に引渡して安心させてやり度くもあつたし、又二人がどんな樣子で、どんな所に泊つたかも見てやり度かつた。殊に自分が出かけて行つたら、花代はどんなに驚くだらうと考へると、少からぬ興味もあるのだつた。
「先生も行くんですか。」
少年は迷惑な樣子で、不平らしい顏さへ見せた。
「行くとも。君の方では金だけ貰へばいゝんだらうが、さうはいかないよ。何から何迄結着をつけてしまふんだ。」
云ひながら彼はもう立上つて帶を締め直した。

九の十六

戸外はおあつらへ向の春の夜だつた。町の上にかゝる靄の中に、無數のあかりがきらめいてゐるのを見下しながら、阪道を下りて行つた。並んで行く少年は何を考へて居るのか知らないが、三田は宿屋に行つてからの自分の任務を思ひ、又如何云ふ態度を執らうかと考へると、なかなか安心は出來なかつた。

淀屋橋から大江橋を渡つて、梅田新道近くなつた時、古林少年は不意に立どまつて、

「先生、私一人で行かして貰ふ事は出來ませんか。」

もう一度嘆願して見ようと云ふ樣子で、下からのぞき込んで訊いた。

「今更そんな事を云ふものぢやない。覺悟が惡過るぢやないか。」

少年は叱られて、頭を掻きながら電車道を横切つて細い横町に入つた。薄暗く靄の漂ふ空地の角を曲る時、三田の腦裡に過ぎた日の景色が判然と蘇つて來た。去年の秋大阪に着いた翌日、下宿探しに歩いた場所に相違なかつた。

「先生、此の家なんですが……」

案内役が佇んだ格子戸の上には杉の家と白字を抜いた赤硝子の軒燈が出てゐた。曾て三田が、室(へや)を求めて見に來た事のある連込み宿だつた。ちひさい瓢箪池のある中庭の向ふの小座敷から、寢衣のまゝの男女がもつれ合つて出て來た記憶は未(いま)だに新しかつた。

「なあんた、こんな所に居たのか。」

「先生知つてるんですか。」

「知つてるつて事もないけれどね。色の白い大柄の丸髷のおかみさんが居るだらう。」

俺の目の屆かない所は無いんだぞと云ひ度いやうな心持だつた。

三田は逡巡して居る少年を顧みながら、自分が先に立つて格子を開けた。飛石を踏んで玄關にかゝると、少年は狼狽てて擦りぬけて、馳込むやうに障子をあけて上つた。

「お歸りですか。」

果して色の白い大柄の丸髷の女房が出迎へた。一人だと思つた少年の後に、大男が立つてゐるので、判斷に苦しんだ樣子だつたが、

「お越し。」

と輕く頭を下げて、上眼づかひにじろじろ見るのだつた。先方では覺えて居ないらしかつたが、

三田にとつてはまぎれも無い去年の秋の一日の記憶に浮ぶかみさんだつた。

廊下を少年の後からついて行くと、夜だから金魚の姿は見えないけれども、中庭の池は薄あかりに光つてゐた。恰も彼の時の男女の居た室に、此の二人も泊り込んで居た。少年は障子に手をかけて、又ためらつたが、如何にも爲方が無くなつて開けた。

「あら歸つたの。隨分遲かつたわねえ。」

ものうい聲は花代だつた。此の間と同じ矢がすりの對の着物と羽織で、室の眞中に腹這ひになつて、菓子鉢の中に殘り少い煎餅を喰べながら、雜誌を讀んでゐた。

「今晩は。」

三田はいきなり聲をかけて室の中に入つた。

「あら……」

全く思ひもかけない侵入者に驚いて起上つたが、紅い𧘕袢の下からはみ出して居る膝つ子にも氣のつかない程狼狽ててゐた。

九の十七

八疊の室は亂暴に取散らしてあつた。宿の浴衣や丹前は、亂箱にも入れないで、一隅に脱ぎつぱなしにしてあるし、何時喰べたのか芭蕉(バナナ)の皮は、新聞紙の上に黒く腐つてゐた。今迄寢轉んでゐた花代の頭のあつた邊には、サイダアの瓶も轉がつてゐた。煙草の煙か白粉の香か、人間のいきれもまじつて、むつとする程空氣は濁つて居た。三人は稍暫く、めいめいの立場を互にやり切れ無く思ひながら向ひ合つて坐つてゐた。その間花代は屢々豐太郎の方に目を使つて、どうして三田が現れたかを問ひ糺し、咎めだて度い樣子だつた。少年はその樣子を知つて知らないふりをして、ついぞ三田と差向ひの時にはふかさなかつた卷煙草を吸つて横を向いてゐた。丸髷のおかみさんがお茶を運んで來ると、始めて救はれたやうな顔をして、

「先生、麥酒でも貰ひませうか。」

と存外物馴れた口をきいた。

「いや、それには及ばない。何も欲しくない。」

手を振つて斷つて、かみさんの立去るのを見極めてから、

「そんな暢氣(のんき)な事を云つてる時ぢやない。早く勘定をして引上げよう。」

と腹立たしさうに云つた。一文も無くて自分の所に借りに來た奴が、洒々(しやあしやあ)として麥酒を命じよ

うといふのが小面憎くかつた。
「直ぐに勘定書を貰ひ給へ。」
「では一寸帳場に行つて來ます。」
手近に呼鈴があるにも拘らず、其場を逃げるやうに立つて行つた。
「まあ、彼の人先生の所へお金を借りに伺つたんですか。」
黒目の部分の多過ぎる程黒い目をみはつて、花代はばつの悪さを媚笑にまぎらしながら親しげに口をきいた。
「私、こんな所に連れて來られるなんて思ひもかけませんでしたわ。一日京都に遊びに行かうつて誘はれたものですから、晩にはうちに歸れると思つて、つい出て來てしまひましたの。するとて彼の人お金が無いもんですから、私に汽車賃はあるかなんて云ふんでせう。私もあいにく持合せがありませんので、それぢやあ一休みして、それから友達に借りて來るつて、こんなうちに連れて來られたんです。」
自分の罪では無いと云ふ事を呑み込ませようと、早口に雄辯に喋つたあげくに、
「彼の人不良少年ですわ。」

と聲をひそめてつけ加へた。三田はあつけにとられて女を見守つた。厚白粉の斑になつた顔に、花代はあらん限りの媚を浮べて、ぢいつと見返した。

「貴女だつて不良で無い事もないでせう。手もなくこんな所に泊り込むなんて。」

三田は苦々しげに、ぶつゝけに云つてやつた。

「あら、先生ひどござんすわ。お金が無くては勘定が出來ないから歸れないつて彼の人が云ふもんですから、仕方なしに泊つたんですけれど、私處女のほこりは捨てはしません。それ丈は先生に誓ひますわ。」

熱心に身の潔白を信じさせようと、一膝乘出した處に、古林少年は勘定書を手にして歸つて來た。

九の十八

一夜の宿泊料の外に、無闇に間喰ひをした勘定書を見て、

「それでは之で勘定をして、相當の茶代も置いて來給へ。僕は此の人を天王寺迄送つて行くから。」

三田は懐中から財布を出して、相當の金額を古林少年に渡した。なるべく早く此の二人を引離してしまはなくては安心出來なかつた。
「さ、行きませう。僕はたゞ貴方がた二人を引離す役廻りだ。小言はてんでにうちに歸つて聞き給へ。」
斯うなつたら早いに限ると思つて、彼はいきなり立上つた。
「先生一寸待つて頂戴。」
もう如何してても連れて行かれる身だと思つたのであらう、花代は手早く懐中鏡と白粉刷毛を取出して、鼻の頭や襟首を叮嚀に塗直し、亂れた髮を搔上げた。
「では、私先生と御一緒に行くわ。」
三田の目の前で、どんな態度を取るのが穩當だらうと氣を揉んで居る樣子は明かだつたが、それを押切つて少年の側に寄つて、機嫌をうかゞふやうな口をきいた。少年は眞赤になつて、人前でそんなにされては困ると云ふ風で、花代には答へずに、逃腰になりながら、三田の方に向いて頭を下げた。
「先生、どうもいろいろ濟みませんでした。」

「ほんとに濟まないと思ひ給へ。さうして君も直ぐうちに歸つてお母さんに安心させ給へ。左様なら。」

花代をせき立てるやうに、三田はさつさと廊下に出た。

「それぢやあ、私行くわ。」

女はもう一度同じ事を繰返して念を押して見たが、少年はたゞ頷いたばかりだつた。

「左様なら。」

「左様なら。」

こんな場合に芝居ならば、とつついたり引ついたり、互に手を取つて別れともながるんだらうがと三田は廊下に佇んで暢氣な事を考へてゐた。しかし實際は、何の愁嘆も無く、さばさばした顏付で、若い二人は彼の後について來た。

「まあ、お歸りで御座いますか。おかまひも致しませんで。」

足音を聞きつけて、おかみさんも驅け出して來たが、少年に何とか說明を聞かされたと見えて、別段不審な顏付もしてゐなかつた。

「おや、お天氣が變りますかしらん。」

玄關の障子を開けて、半分體を外に出し、二人の穿物を揃へながら、愈々霧の深くなつた夜の空を仰ぎ見た。

「曇つてゐるんぢやないでせう。朧月夜といふやつですよ。」

三田は捨ぜりふを殘して出た。

「又おこしやす。」

といふ聲を後に聞いて往來に出た。歩き出すと、花代は直ぐに外套の袖に縋るばかり、ぴつたりと身を寄せて來た。誰が見ても、二人の間には特別に親しい關係がありさうに思はれさうで、

三田は無闇に電車道に急いだ。

「先生送つて下さいますの。」

花代はほんとに外套の袖に手をかけて訊いた。

「えゝ不安心ですからね。」

その手を振切るやうな勢ひで、三田は折よくやつて來た電車の方にかけ出した。

九の十九

何時もこみ合ふ電車は、其の晩もこみ合つて居た。僅の隙間に小柄な花代を割込ませて、三田は稍離れて釣革にぶらさがつてゐた。三つ四つ停留場を過ぎるうちに、具合よく花代の隣の男が降りる爲めに席を去つた。

「先生、こちら。」

二三人、その席をねらつて運動を起したものもあつたが、いち早く花代の半音階高い聲が響いたので、みんな一時に躊躇した。

「先生、おかけ遊ばせ。」

もう一度呼びかけられて、三田は並んで腰かけはしたものゝ、先生々々と云はれる爲めに、あたりの者の視線を一身に浴びて閉口してしまつた。左隣には脂肪肥りにふとつた婆さんが、大きな風呂敷包を抱へて、腰かけの上に横向に坐つてゐて、三田の脇腹にお尻がつかへてゐた。彼は體を成るたけちひさくしてゐたが、右からは花代が、人の見る目も憚らず倚りかゝるやうに體をもたせかけるので、外套を通し、着物を通して、柔かい女の肉體の、溫度も肌觸もひしひしと迫つて來る。此の生溫かい體は、未だ發育し切らないやうな相手の手の中にあつたのかしら——三田はふと、古林少年と花代が過した一夜の景色を想像して、むらむらと不愉快になつた。

電車を降りたところで、花代は家も其處から遠くは無いから、一人で歸れると云つた。
「ほんとに難有う御座いましたわ。私彼の人につかまつて、これから如何なるのかと心配して居りましたの。」
夜目にも眞白く塗つた顏を近々と差寄せて云つて、叮嚀に頭を下げた。しかし、三田はそのまゝ手放すのが危險な氣がして爲方が無かつた。若しかすると、惡智慧の發達した奴等は素早くしめし合せて、うちには歸らずに又一緒になる工風をしてゐるかもしれない。うつかり逃してはならないぞと、自分自身を警めた。
「兎に角私は貴方の家迄行きませう。無理にも送り屆けます。御宅の方に逢つて、又面倒な挨拶なんかされるのはいやですが、門口迄は何と云つても行きます。」
「まあ、先生、おほゝゝゝ」
あんまり眞面目な三田の樣子に、花代は體を二つに折つて笑つた。往來の人が振かへつて見て行く程、響く笑聲だつた。
「それでは送つて頂きますわ。」
迷惑だが爲方が無いと云つた調子で、花代は先に立つて歩き出した。あんまり來た事の無い方

角で、おまけに夜の事たから、三田はさつぱり見當が付かなかつた。二度三度折曲つて、段々細い路に入つたが、或る町角の郵便函の所で花代は足を停めた。

「難有う御座いました。あそこに格子が見えませう、あれが私のうちで御座います。」

指さす向ふにさゝやかな家が見えた。

「一寸でよろしう御座いますから、お寄り下さいませんか。先生に救はれて無事に歸つた事を父にも話し度う御座いますわ。」

「まあ止めませう。貴方が格子戸の中に入るのを見屆ければ、それで安心です。私は家庭のいざこざにかゝりあふのは御免です。」

「では爲方が御座いませんわ。先生、いづれ改めて御禮にうかゞひます。難有う御座いました。」

又叮嚀に頭をさげて、二三歩行きかけたが小走りに戻つて來て、

「先生、私ほんとに處女のほこりは捨てなかつたんで御座いますよ。それだけは御信用なさつて下さいまし。ね、先生。」

外套の袖に縋つて、接吻を迫るやうな格好たつた。三田はまるつきり信用してゐないので、餘りの馬鹿々々しさに返事も出來なかつた。

「先生、疑つてらつしやるの。非道いわ。」

恨みがましく云つたけれど、矢張り三田は答へなかつた。

「先生、これだけはほんとで御座いますわ。指切り。」

いふかと思ふと、いきなり三田の外套の下に手を入れて、指に指をからんだ。

「では、左様なら。」

その指に力を込めて振つて、やうやく放すと、空氣草履の音を立てゝ馳け出して、今しがたさし示した格子戸の前で一度止つて、頭をさげて、直ぐにその家に姿は消えた。見送り果てて、三田は暫時佇んだが、後は如何ともなるやうになれと思つて歩き出した。

大空の雲が切れたのであらう、横手にそそり立つ天王寺の塔の上に、靄にかすんだ春の月がぽつかりと浮んでゐた。

十の一

歐羅巴の戰爭のおかげで、諸物價の高くなるに連れ、原稿料も以前とは比較にならない程よくなつた。三田は、長篇「世相」に對する報酬として、意外に多額の金を受取つて俄に氣が大きくな

つた。平生不自由をしてゐたから、身に着ける物も不足だつたが、そんな必要品よりも、もつと贅澤につかひ度かつた。ひとつ思ひ切つて、大阪の有名な料理屋を順々に喰べて廻らうかとも考へたが、一流のところでは適當な紹介者が無ければ座敷にも通すまいし、一人つきりで床の間をしよつて坐つてゐるのも窮屈だらうし、それよりも身分相應な所で、田原でも引張り出していつぱいやる方がましかしらん――とりとめも無く空想する丈でも、懷中の豐な事は樂しかつた。田原がいゝ、こんな時には彼の男に限ると思つてゐると、久しく顏を見せなかつた友達が、先方でも逢ひ度くなつたと見えて、或晩、會社の歸りに遊びに來た。

「實は原稿料が入つたもんだから、近日君に御馳走してやらうと思つて居たんだ。」

「僕も蛸配當のわけまへにありついたから、君に御馳走してやらうと思つてゐたんだぜ。ふうむ、お互に成金たなあ。」

田原は自分の意見が通らないで、大株主の思ふまゝに蛸配當をした事を、何時迄も不快に思つてゐた。そんな不淨な金は、さつさと費消してしまふに限ると思つてゐた。

蛸配當に端を發して、田原は自分の意のやうにならない會社の近狀を慷慨悲憤の調子で話し出した。前々から職工の待遇については、人一倍意見を持つてゐる田原の理想論は、なかなか實現

されさうも無かつたが、それよりも急を要するのは、此の頃の急激な物價騰貴に對應する丈の割増賃銀の支給と、西洋の事情に刺戟されて次第に堅い要求となりつゝある勞働時間の制限だつた。慾に目の無い株主や重役側は、此の好景氣に乘じて手取早く儲けようとするばかりで、一つとして使用人の要求を聽かうとはしなかつた。しかし之等の要求は、雜誌や新聞で原稿料を稼ぐ經濟學者だの、社會主義者だのの意見の發表に勢ひを得て、流行感冒の如く瀰漫した。田原の會社でも、賃銀割増と、八時間勞働並に夜業廢止の要求が、萬一拒絶すれば同盟罷工（ストライキ）だぞといふ脅（おど）しと共に提出されて、未だに解決がつかないのであつた。彼はその爲めに日夜奔走して寸暇もなく、三田に御無沙汰勝なのも其の爲めだといふのであつた。

「どうしても一度は同盟罷工（ストライキ）をやつて呉れなくちやあいかんよ。」

　此の重役は、寧ろ其の同盟罷工の先達になつて活動し度い血と熱とを持つてゐた。

「へえ、事態切迫だね。其處に行くと僕なんかは艶（なま）めかしい事件にかゝづらつて寸暇も無しといふ有樣なんだぜ。」

　三田は机の抽斗を探つて、松宮花代から寄越した手紙を取出して見せた。

「ふうむ、怪しからんもんだなあ。」

田原は世の中には斯うした大それた娘もあるのかと驚いた様子で、誰が見ても、纏綿たる情緒を蘊したものとしか思へない手紙を嘆息して讀んだ。
「私は女の最も清く尊き犧牲を捧げる事を喜んで致します――か。怪しからんなあ。」
その手紙の主が下宿にやつて來た事、古林少年の事、二人が何の道行も無く握手した事――一場の喜劇の顚末を、三田は事細かに話して聞かせた。
「なあんた、結局樟先生は逢引宿の支拂をしよつた丈の役廻りか。馬鹿々々しいなあ。」
田原は腹を抱へて笑つた。實際、天王寺の塔の上の春の夜の月を仰ぎ見た時が最後で、花代も古林少年も姿を見せず、その親達も挨拶にも來なかつた。恐らくは奸智に長けた二人は、親達には三田のみの字も聞かせなかつたものであらう。
夜の更ける迄田原は上機嫌で喋つて、次の日曜の會合を約して歸つた。

十の二

約束の日曜には、三田は朝のうちに身支度をして待つてゐた。時間はきめはしなかつたけれど、午後になれば田原の方から誘ひに來て呉れる事になつてゐた。待たれるよりは少しはましだけれ

ど、待つのは氣がおちつかなくて、いゝものでは無かつた。爲様事なしに、眞青に晴れた空が、あけ放した窓に近く輝いてゐるのを見ながら、寢轉んで居るうちに、日ざしも斜になつてしまつた。

今日は田原を何處に引張つて行かうかしら、思ひ切り贅澤をして見度いな――ついぞ持つた事の無い金が懐に入つて以來、屢々浮ぶ妄想を淺ましく思ひながら、矢張り何時の間にかその中に引入れられてしまふのだつた。彼は財布の中の札の束を取出して數へて見た。眞新しい十圓札は、新聞社から貰つた時より三四枚減つただけで、皺も寄らずに揃つてゐた。それ程の金を持つてゐるといふ自覺と、それを幾度も數へる自分の心の卑しさに、三田は人知れず赤面した。

「三田さん、お電話たつせ。」

襖をあけて、半分顏を出したおれんに呼ばれたので、三田は一層どぎまぎして、瞼も耳も熱くなつた。狼狽てて財布の中に札を突込んで、立上つた。

直ぐに廊下に飛び出して、梯子段の下の電話口にかけつけた。づきんづきん響く程高い調子の相手は田原だつた。

「濟まん、濟まん。長尻の客が來て歸らないものだから、ひどく待たせてしまつた。」

彼は先づいひわけをしてから、下宿に來る約束ではあつたが、そんな事で時間が遲くなつたので、てんでに落合ふ場所に行く事にし度い。其の場所も顏を合せてから相談する筈たつたが、實はかねがね一度は行かなければならない所があるので、今日は自分を主人にして御馳走させて與れと云ふのだつた。

「先づ僕の不淨金を散じ、此の次には君の辛苦の稿料に及ぶ事にし度いんだ。」

長々と喋る相手に對して、三田はおちつきを失つてゐた。今の今狼狽てて机の上に置いて來た財布と、自分を呼びに來たおれんとが結び付いて、心配の種になつた。盜癖のある者の目の前に、財布を置きつぱなした自分の不注意は許せない氣がした。どうか無事でゐて與れと念じながら、彼は田原のお喋りを憎んだ。

「わかつた、わかつた。君のいふ通りにするから其の場所と時間を云ひ給へ。說明は不必要だ。」

「それがね、北の新地なんだが構はないか。」

「北だらうが南だらうがお構ひ無しだ。はきはき云つてしまやあいゝぢやあないか。」

三田は相手が何かしら逡巡してゐるので、かへつて苛々して來た。

「あの何時かの晩來て貰つた處があつたらう。僕が醉拂つて醜體を演じた處さ。」

田原にとつてはそんな事も云ひ悪(にく)いらしく、わかり切つた事を引張つてゐる。

「わかつた。葉牡丹に逢ひ度くなつたんだな。」

「さういふわけぢやあないんだが、勘定もその儘残つてゐるしね……」

「いゝよ、わかつたよ。それではもう三十分もたつたら雙方あそこへ行く事にしよう。左様なら。」

三田は手早く片づけて、受話器をかけると、足音を忍んで二階に戻つた。どうか事が無ければいゝがと念じながら、その時の心持では、足音を忍ばなければならなかつた。

十の三

電話を取次いだおれんは、いきなり飛出して行つた三田が、狼狽てて札束を突込んだ財布を机の上に放り出したのを見て、胸が冷くなつた。如何(どう)したらいゝだらう、早く此の場を遠ざからなければならないと、薄々は感じながら、何時の間にか其處に膝をついてしまつた。朝の間に三田が脱ぎ捨てた着物のあるのを幸ひに、それを疊みながら、早く三田が戻つて來て呉れゝばいゝと念じてゐた。

あいにく三田はなか／＼戻つて來ないで、電話の應對の大きな聲が、間ぬけに聞えて來た。おれんは全く盗る氣は無かつたが、どうしても財布の中は見度かつた。思はず知らず手を延した時は、もう目がくらんだやうになつて、既に札の束は手の中にあつた。直ぐにその中から一枚だけ拔いて、懷に突込んだが、其の時電話の話聲がはたと止んだ。

いけない、いけない、そんな事をしてはいけないと、ちひさい胸を抑へるものがあつた。おれんは震へる手でいつたん懷にかくしたのを取出して、素早く元の財布の中の札束の間に戻さうとした時、三田の足音が微かに聞えた。狼狽てて財布の中に押入れて、机の側を飛退くと、疊みあげた着物を持つて立上らうとした。三田が襖をあけて入つて來たのは其の時だつた。

異常な意氣ぐみの三田を見ると、おれんは自然と膝をついてしまつた。耳のうしろから首筋にかけて、火照るやうな氣持がして、平氣をよそほふ積りでも、動悸が高く打つて爲方が無かつた。すましこ立たうと思つても、足が震へるやうな豫感があつて、どうしても立てなかつた。

三田は眞直ぐに机のところ迄行つて、いきなり財布を取上げると、立身のまゝでなかみをあらためた。一々札を勘定する迄も無く、きちんと端の揃つてゐたのが不揃になつてゐて、おまけに、他のは二つ折なのに、一枚は不規則に折られて皺くちやになつてゐた。彼は幾枚拔かれたかを問

題にするよりも、盗まれたといふ事を考へる丈で口惜しかつた。しかし觀念した姿で坐つてゐる相手を見ると、哀れにも思はれた。三田は暫時の間、默つて考へてゐた。

「おい。」

思ひ切つて詰問してやらうと思つたが、咽喉が乾いて、樂には聲が出て吳れなかつた。斯ういふ不愉快な場面に自分を見出す事がなさけなかつた。何となく、涙が鼻につまるやうな氣持もして來た。

「何も云はないから返しておくれ。一錢でも二錢でも、盗られるのはいやだ。これはお前にやるから、そつちのは返しておくれ。」

三田は皺くちやになつた十圓札をおれんの目の前に突きつけて迫つた。いくら盗まれたのかは知らないが、盗まれた事は疑ひも無いと思つてゐた。

思ひもかけない三田の言葉に、おれんは吃驚して恥と苦痛に蒼ざめた顏をあげた。

「机の上にお金なんか出しといたのは此方も惡かつた。しかしさういふ事はおよし。そのかはり之を上げるから。」

彼は又皺くちやの十圓札を突きつけた。

「私、そんな事しはしません。」
うらめしさうな顔つきで、おれんは目頭に涙を浮べて云つた。
「かくしたつて駄目だよ。ちやあんと揃へてあつた札がこんなに皺くちやになるわけが無い。」
「でも私盗つたりなんぞしはしません。」
おれんの目からは、容赦なく涙が出て來た。
「よし、どうしても盗らないつて云ふんだね。」
畜生、どうしてくれようと思ひながら、三田は一枚々々札を勘定し始めた。

十の四

勘定した札は、不思議にも、一枚も減つてはゐなかつた。先刻一人で、人知れず數へた時と同じだつた。間違ひでは無いかと思つて、もう一度やり直して見たが、矢張り前と同じだつた。
「ふうむ。盗りはしなかつたんだね。たゞ觸つて見ただけなのか。」
三田は歎息した。何かしら怖ろしい見えない力が、此のちいつぽけな小娘に、屢々出來心を起させるのであらうと想像した。いつたん盗んだ物を、又元に戻したのに違ひ無いと思ふと、他人

の心ではあるが、何とも云へない重苦しさで胸を壓して來るものが感じられた。三田の心は全く寂しくなつてしまつた。
「御免よ。盜つたに違ひ無いと思ひ込んだのは僕が惡かつた。」
唇を嚙んで、泣くのを堪へようとして居る相手を見ると、愈々弱い心になつて、其の場にゐるのも氣がとがめるのであつた。
「これは君に上げよう。」
皺くちやの十圓札をおれんの膝の上に置いて、三田は壁にかゝつて居る帽子をひつゝかむと、逃げるやうに廊下に出た。
殘されたおれんは、其の札を汗ばんだ手の中に握つたまゝ、前かけに顏を埋めて泣いてゐた。どうなる事かと思つて居たのが、今日迄に每度同じやうな場合に出つくはした責め折檻とは違つて、全くわけのわからない相手の態度が、いちじるしく心に泌み込んだ。何時でも惡心を起した後では、心を苦しめる事が多かつたが、今日は特別に感動して、せぐり上げる涙にむせびながら、永い間其の場に突伏(つゝぷ)してゐた。
「おれん、おれん。」

階下の方で、婆さんの呼び立てる聲に驚いて、いつたんは廊下に出たが、直ぐに戻つて來て、皺くちやのまゝ涙に濡れた十圓札を三田の机の抽斗に入れて室を出た。

往來に出た三田は、自分の爲た事がいゝことか惡いことか思ひ迷つた。何となく芝居がゝつてゐるのが氣になつて爲方が無かつた。苛々した心持で、道端の石塊を蹴飛ばしながら田原と約束した場所に急いだが、新地に曲る角のところで、青黑いまるまると肥つたころあひの石を見つけて、力任せに蹴飛ばした拍子に、下駄はぽつくり缺けて、親指のあたる邊に力が入らなくなつた。風邪を引いたやうなうそ寒さを足下に感じながら、三田は自分自身のしわざに腹を立てゝ、親指を蝮にして歩いた。席貸の門を入つて、敷石の上を跛を引きながら、歩く時は愈々腹が立つた。

「お越し。お久しうおまんな。」

三田の方では覺えてゐなかつたが、先方ではよく承知してるやうな樣子で、中凹の顏に白粉の濃い仲居が出迎へた。

「おやまあ、新しい下駄をこないしやはつた。」

仰山な聲で、その缺けた方の下駄をつまみあげて、三田の目の前で振つた。

座敷には田原が待つて居た。卓の上に竹の皮包のまゝの今川燒が山盛りになつてゐて、彼はそ

の一つをまるごと頬張つたところだつた。
「う、うむ、うまいぞ。三田公ひとつ喰へよ。たつた今往來で買つて來たんだ。」
極端な羞しがりやの田原は、羞しくはないぞといふ所が見せ度くて、竹の皮を抱へて此の家に入つて來たのに違ひ無かつた。そんな事をして、逆手をうつた積りの友達のやり口が、三田はひどく不愉快だつた。
「どうしたんだ、遅かつたぢやないか。」
奴さん御機嫌斜だぞと思ひながら、田原は探りを入れて見た。
「うむ、途中で下駄が缺けたので、縁起が惡いなと思つたら、果して今川焼が待つてやあがつた。」
三田は厭味をいひながら坐つた。自分でも自分の不機嫌なのがよくわかつた。それは今川焼の爲めでは無く、下駄の爲めでもなく、矢張りおれんに十圓札をやつたのが、安つぽい「白樺」末期の小説好みで不快だつたのだ。

十の五

酒が出ると、田原は直ぐに眞赤になつて、平生からの高調子が、一層高くなつて來た。下座敷には大藤五郎兵衞か來てゐると仲居が敎へたが、そんな事には頓着無く、その大五の大將を攻擊して止まなかつた。現在の勞銀の安過ぎる事、勞働時間の不規則に長過ぎる事、懷を肥す事の外には何も考へない株主の横暴――彼はこの頃每日會社で論じ立てゝゐる自分の意見に、親しい友達の贊成を得度かつた。

「俺は自分の地位を賭しても職工の要求を通させてやる。」

平生からのお喋りを、酒の醉がおだてるので、羞しがりの一面は段々に影をかくして來た。それにひきかへて、三田は其晩は心が浮かなかつた。自分自身でもとがめる程、事每に田原の所作が氣に入らなかつた。大道演說なら往來に出ろと、怒鳴りつけてやり度いやうな氣持で、しかもそれだけの事を口にするのさへ面倒たつた。奴さん御機嫌斜だな――田原はさう氣は付いたが、何故不機嫌なのか想像もつかなかつた。自分の酒の飲み振が悪いのかしらとも思つた。本來は氣の弱い質なので、威勢よく喋りはしても、絕えず心に懸るのだつた。

「三田公。お前もちつとは喋ろよ。」

「まあ默つてこの酒を味はつて見ろ。お客や藝者に飲ませるには惜いやうないゝ酒だ。」

三田は盃の中の酒の色に目を細くして、心底から讃美した。
「えらい云はれやう。」
先刻から手持無沙汰に堪へ兼ねてゐた怖ろしく脊の高い、三十格好の、青白い顔の女が、いゝ機會をつかまへたといはんばかり、膝を乗出して來た。客の一人はのべつに喋り、もう一人は默つて酒ばかり飲んでゐるのを、悧巧な目で見てゐたのだつた。
「お客さんや藝者に飲ませるのが惜かつたら、誰に飲ませまんの。」
「下宿で一人で飲み度いんだ。」
さもうるさゝうに三田は答へたが、一座は一齊に陽氣な笑聲を立てた。さうして、この思ひもかけなかつた笑聲の爲めに、室の中は俄に明るく、賑かになつた。藝者も口をきく機會が出來た。盃のとりやりも始まつた。就中田原は救はれた氣持で、一層はしやぎ出した。三田公は矢張りいゝ奴だなあ――彼は友達の手を取つて叫び度いやうな氣がして、とても默つてはゐられなかつた。何のきつかけも無く、突然大きな聲で、聲色をつかつてやつた。
「扨どんじりに控へしは、潮風荒き小ゆるぎの、磯馴の松の曲りなり……」
「高島屋あ。」

廊下から聲をかけて、葉牡丹が現れた。

「今晩は。」

何處かで飲まされた酒の色のあからさまなのが、美しい顏を一層艶めかしくして見せた。

「遲いなあ。待たせるぢやあないか。旦那でも來てゐたのかい。」

田原は傍にぺたりと坐つた相手を見て、それが一生懸命の冗談をいつた。

「田原さんの逢狀貰うて驅け出して來よう思ひましたけれどなあ、こつぷのお酒を飲まん事には歸つたらあかんいはゝつてなあ……」

其のこつぷ酒を飲んだのであらう、帶の間から拔き出した小扇を胸のあたりで動かした。

「ふうむ、こつぷで飲まされたのかい。」

田原はひどく感激した物の言ひ方をした。

「あ、けなり。」

怖ろしく脊の高い三十女は、二人の樣子を見てからかつた。

「あんなん見せつけられたらかなはん。藝者に飲ませたら惜いお酒を、私もこつぷで飲み度うなつた。」

手を叩いてこつぷを取寄せて、手酌でなみなみと湛へたのを、悧巧さうな眼で電燈の下で透かして見たが、長い首を稍仰向に口をつけると、たゞ一息に飲み干した。
「あんたは頼母しさうな顔してはる。ひとつあげまつさ。」
いきなり其のこつぷを三田の前に差しつけた。

十の六

「いやだ。僕は酒は飲むけれど、こつぷ酒は嫌ひだ。」
三田は苦々し氣に顔をしかめて手を振つた。
「そんなむつかしい顔せんと飲みなれ。」
こつぷ酒を飲んで一層蒼白くなつた女は、琥珀の波を打つのを、三田の鼻さきに押つけて強ひた。
「ちえッ、うるさい蟒だなあ。」
一張羅の胸から膝にあふれさうなのを恐れて、三田も爲方無くこつぷを受けた。
「見事、見事。あんたの飲み振よろしいな。」

負けない氣に癇癪氣味もまじつて、ぐつと干した三四を、蜂は正面からほめた。

田原は田原で、ちつとばかりの酒に銘酊して、前後左右に體を動かしながら、外には藝が無いので、無闇に喋り續けてゐた。

「君にはほんとに逢ひ度かつたよ。逢つて何時かのお禮を云ひ度かつた。隨分手數をかけたからねえ。」

正直者の田原は、會社の連中に盛りつぶされて、吐いたりもがいたりした時の事が、絶えず頭腦に殘つて居た。其の晩介抱して吳れた紫牡丹に、出來るものなら相當のお禮がし度かつたが、如何いふ風にして禮をしていゝものかわからない。金をやつていゝものならやり度かつたが、そんな事をすると相手が氣を惡くしはしまいかと、心配だつた。彼は醉つたまぎれにそんな事を繰返して喋つてゐた。

「ほんとにお禮をし度いんだがなあ。お金を貰つては吳れまいし……」

「何で私がお禮を頂きまんの。お客さんが醉うたのを介抱するのは藝妓の役目だんが。」

紫牡丹も過した酒に調子づいてゐた。

「あの二人は先刻から何云うてんね。お禮をするとか、貰はんとか。あんたも吳れるといふのな

ら貰うといたらえゝやないか。」
「あら、姐ちやん。」
事情を知らない蜂は押問答をしてゐる他人が小じれつたかつた。
「そないな事云はんと飲みいな。」
半分ばかり殘つてゐたこつぷの酒を飲み干して、田原の前に差しつけた。
「よせよ。もう總會も濟んだんだから、今更田原を醉はしたつて爲方が無いや。」
三田は蜂の傍若無人なのが面憎くかつたと同時に、又田原を醉ひつぶすのは見るに忍びなかつた。
「おい、こつぷなら僕が引受けるよ。そつちは浮名を立てた同志だ。何時迄もいちやつかせて置くさ。」
彼は食卓の上に半身乘出して、田原の前のこつぷを取つた。
「しかし田原位果報な奴も無いよ。たつた一杯か二杯のこつぷ酒を飲んで、ぶつ倒れて吐いたおかげで、葉牡丹さんには徹宵介抱して貰ふし、蛸配當にはありつくし……」
いゝ機嫌なのか怒つてゐるのか、三田は毒口をきゝながら、一寸苦い顏をしたが、思ひ切つた

形で、又しても一息にこつぷを干した。
「えらいやつちや、えらいやつちや。」
蟒は悦に入つて、三田がこつぷを下に置く間も無く、又とく／＼と德利の口を鳴らして酌いだ。
「なんでえ、なんでえ。藝の無い奴が酒ばかり飮んでゐやあがら。俺だつてこつぷ位平氣だぞ。」
田原はもう呂律が廻らなくなつてゐたが、こつぷを取らうとあせつて手を出した。
「よせつたらよせ。いくらこつぷで飮んだつて、上半期の蛸配には間があるぜ。」
「なんたと。」
田原は何と思つたか、危ない體つきで立上つた。
「やい三田公。晦日に月の出る廓も、闇があるから、覺えてゐろ。」
「橘屋あ。」
細長い脛を出して、大きく疊を踏む積りだつたが、體の自由が利かないので、空を踏んで前のめりによろけかゝつた。
「あれえ。」
二三人の金切聲がきつかけで、田原は投出された形で、廣い座敷の眞中に倒れた。

「うむ、もう目が見えない。」
それつきり鼾をかいて寝てしまつた。

十の七

夜が更けるに從つて、蜂は益々こつぷ酒をあふり、あふればあふる程顏色は蒼ざめて、誰が何と云つても、自分の云ふ事の外はきかなくなつてしまつた。
「おい三田公。もつと飮みませうよ。あんたが一杯飮んで、私が一杯飮んで、又あんたが飮んで、私が飮んで……」
「駄目だよ。僕はもう飮めない。第一こつぷ酒はうまくないや。」
「あんたはうまく無くても私はうまい。さ、男らしう飮みなはれ。」
何時迄も何時迄も、しつつこくこつぷ酒を強ひるばかりだつた。外にも入替つて二三人の藝者が並んではゐたが、みんな此の蜂の暴れ廻るのに辟易して、一人減り二人減り、やがて一人も姿を見せなくなつてしまつた。葉牡丹の膝を枕に、大の字になつて寝てゐる田原の鼾ばかりが、際立つて高く聞えた。

「さ、飲めというたら飲みなはれ。私は飲まん人は嫌ひやわ。」

酒が無くなると手を鳴らして呼んで、蜂は闘武々々に醉ひながら、すつかりいゝ氣持で落ついてしまつた。

「よし、それぢやあお互に一杯づゝ乾杯して納めよう。君の方は兎に角、僕は明日の勤のある體だ。」

かなり酒には強い三田も、幾杯と無く飲まされたこつぷ酒が身内に溜つて、蒸されるやうに暑く感じて來た。ぢつと坐つて居ればたけれど、若しも立上りでもしようものなら、田原と同じ運命では無いかと思はれて不安心になつて來た。

「へえ、あんたみたいなしよむ無い人にもお勤おまんのか。あつたかてかめへん。飲みなれ、飲みなれ。」

又してもこつぷを三田の鼻先に押しつけて、無理にも飲ませようとするのだつた。

「それぢやあこれでおしまひだよ。」

念を押して、三田は目をつぶつて飲んだ。

「よろしい、流石は三田公や。其處で今度は私の番だつせ。」

「妃ちやん、もうやめんとあきまへんぜ。」

眠さうな顏をして、膝の上に重たい田原の寢顏を羨しがつてゐた葉牡丹も、見るに見兼ねてとめてみたが、蜂は一層勢ひづいて、

「私と三田公は夜あかしで飲みまんのや――暑い、暑い。足袋脫いだろ。」

流石に酒氣に堪へ難くなつて、長い足を横に投出すと、ひとつづゝ足袋を脫いで、座敷の隅を目がけて投げた。男の穿きさうな大きな足袋は、人氣の無い一隅に、はなればなれに飛んで落ちた。

「ついでに帶も取つてやろ。」

坐つたまゝで、ずるずる解いて、細長い胴中に喰ひ入つてゐる伊達巻ひとつになつた。

「お尻もからげたろ。」

見上げるやうな脊の高いのがふらふら立上つて、着物をくるりとまくると、腰から下ははでな長襦袢になつた。

「さてこれから夜あかしで飲みまんのや。」

目の前のこつぷに酒をみたすと、咽喉を鳴らして干した。

十の八

「僕はもう歸るよ。」

最後に三田が、強ひられるこつぷを振拂つて立上らうとしたのは、十二時を過ぎた頃だつた。

「歸つたらあかん。私が寂しうなる。」

蟒は素早く三田の胸ぐらを兩手でつかんで引据ゑた。

「今夜は夜あかしやいうた以上は男らしう夜あかししたら如何だつか。それともあんた飲み負けたのか。」

「あゝ、負けたよ。蟒と競爭する氣は毛頭ない。第一夜あかしだ、夜あかしだと怒鳴つてゐるのは君だけで、僕は勤のある體だから、うちに歸つて寢たいんだ。」

「あかん、私が歸さん。」

「歸さん云うたかて歸る。」

三田は蟒の我儘な、傍若無人の醉振に、少しの厭味もまじつてゐないのが存外氣に入つて、しつつこく引留められてもいゝ機嫌で、下手な大阪言葉を眞似する丈の氣持は殘つてゐた。

「おい、三田公。歸るのか。」
何時の間にか目をさましてゐたと見えて、田原がむつくり頭を持上げて、大きなあくびをした。
「あゝ歸るよ。一緒に歸らう。」
「あかん。歸さん云うたら歸さん。」
「歸るいうたら歸る。」
「そんならもう一杯飮んでお歸り。」
たつた今三田が振拂つた拍子に疊に落ちて轉がつたこつぷを拾つて、蜉は其處いらに林立してゐるお銚子を、一本々々逆さまにして、やうやくいつぱいにした。
「よし、面倒臭いから飮んでやる。そのかはりこれつきりだぞ。」
三田はいきなりこつぷを口に持つて行つた。
「一寸待つて。あんたが一人で飮んだら寂しい。私も一緒に飮みまつさ。」
手を叩いて女中を呼ぶと、餘り度々の事なので、氣を利かして兩手に一本づゝ德利を持つたおちよぼが、眠さうな顏をしてやつて來た。
「さ、よろしいか。乾杯だつせ。」

二つのこつぷをふれ合せて、三田も蜂も先を爭つて飮干した。
「左様なら。おい田原歸らう。」
こつぷを下に置くと、三田は傍にあくびばかり連發してゐる友達を促して立たうとした。
「歸つたらあかん。」
又しても蜂は三田の胸ぐらを取つて引据ゑた。
「まだ此處に一本殘つたるやないか。も一度乾杯せん事には氣色が惡い。」
「そんな事を云つては切りが無い。最後だつていふから今飮んでやつたんぢやないか。もう何つたつて飮まない。」
あんまりしつつこいので三田も腹が立つた。此處いらで意地張らなくてはみつともないといふやうな氣もした。
「もうい丶加減に許してやれよ。餘りくどいと三田公が癇癪起して亂暴するからね。あいつは糞力があつてあばれると始末が惡いんだ。」
田原も早く引上げ度いので、立つて來て、蜂の肩を叩いた。
「うるさい。あんたみたいな男に用はない。私の相手は三田公や。なあ、三田公。」

まるつきり蒼ざめて、目は坐り、口はしまりが無くなり、體は自由が利かなくなつてしまつた。
「姐ちやん、そない飲みはつたら毒だつせ。」
葉牡丹も寄つて來て引留めたが、
「うるさい。」
と叱りつけて、蜂は三田の胸にかけた手をはなさうとはしなかつた。

十の九

「おい、此の手を放して呉れ。飲み過ぎてゐるところを、押へられては堪らないや。」
三田は力任せに女の手を胸から引放した。
「いつたん飲まないと云つた上は斷じて飲まない。なんてつたつて飲むもんか。」
「よろしい。どうしても飲まんのやつたら、此のお酒をあんたの頭からぶつちやける。」
力づくではかなはないとは知つてゐても、負け度くないのが此の女の性分らしかつた。いきなり德利を引つかむと、さもぶつかけさうな勢ひで立上つた。何てつたつて負けるもんかと云ひ度さうな其様子が面憎くゝて、三田は蜂を突飛ばしてやらうかとも思つたが、まさか亂暴もしまい、

かけるならかけて見ろと云つてやつたら、かへつて手のやり場が無くて困るだらうと、横着な事を考へてゐた。

「さ、飲むか。飲まんと頭からぶつちやける。」

足下がきまらないので、自分の裾を踏むまいとすればする程ふらふらする大女を、三田はからかひ面で見守つた。

「何てつたつて飲まないよ。ぶつかけたつて飲むもんか。」

言葉が終るか終らないうちに、三田の頭から熱い酒が容赦なく落ちて來た。浴びせられながら、三田は醉眼を閉ぢて腹をきめた。なまじ騒ぐのはみつともない、思ふさま酒びたしになつてやらう。此の場合おちつき拂つてゐる事が、ひどく立派な態度らしく考へられた。

「まあ姐ちやん。どないしたらえゝのやろ。」

葉牡丹は泣出しさうな顔をして、袂から手巾(ハンケチ)を取出して立騒いだが、間も無く酒は雫も殘さず、すつかり三田を濡らしてしまつた。

「ひでえ事をしやあがつたなあ。」

田原があきれてつぶやいただけで、座敷の中はひつそりした。蜂は思ひ切つてやつた仕事に、

何の反應も無い手持無沙汰に惱んで、呆然と立つてゐた。
「もう歸つても文句はないだらうね。」
暫時たつて三田が云つた。蟒は何とも答へなかつた。
「おい、歸らう。」
三田は田原に目くばせして立上つた。襟首から背中に傳はつて入つた酒が、氣味惡く襦袢を肌に吸ひつかせ、胸から膝はぐつしより濡れて、むんむと蒸る酒の臭ひが、目を刺すやうに立昇つた。しつかりして居る積りだつたが、立上るとひどく醉つてゐるのがわかつた。三田は自分の足につまづきさうな足取りで廊下に出た。
「三田さん、私も一緒に行く。」
突然蟒は後から追ひ縋つて、梯子段の所で三田が外套をはつてゐる袖を捉へた。
「姐ちやん、危ないわ。」
取縋つた方も縋られた方も、體中に廻つた酒に絶えず足をすくはれ通しで、滑かに拭き込んだ廊下は危險だつた。
「ほんとに危ないから放して呉れ。」

口では優しく云ひながら、三田はもう一切が面倒臭くなつてゐた。力任せに女の手を振切ると、葉牡丹の手の帽子を引つゝかんで段梯子を下りた。一段下りたと思つた時、

「私も一緒に行く。」

振放されて廊下に膝を突きさうになつた蜂が、又しても負けん氣を出して、猛然として外套の肩をつかんだ。

「危ないつたら。」

殆どそれは同時だつた。三田は蜂の足が裾を踏んでゐるとは知らないで、又一段下りる積りだつたが、足は自由に延びないで、空を踏むと、しまつたと思ふ間も無かつた。後の女も裾を踏んでゐるとは氣が付かなかつたから、いきなり前に出られたので中心を失つた體全體で、三田を賴みに縋りついた。づうんと頭のしんが冷くなつた。たつた一瞬間の事だが、夕方此處に來る時、新地の曲角で靑黑いまるまると肥つた石を蹴飛ばした景色が目に浮んだ。

落ちて行く、落ちて行く、さう思つただけで、梯子段にぶつかりながら、ひしと女と抱合つたまゝ墜落した。三田はそれつきり意識を失つてしまつた。

十一の一

城西館では、ついぞ外泊した事の無い三田が、翌朝になつても、晝が過ぎても歸つて來ないので不思議がつてゐたが、其の晩夜食の後始末も濟ませて、みんながあかりの下に集まつてゐるところへ、酒屋のおかみさんが夕刊を持つて驅け込んで來た。

「えらいこつちや。あんたとこの三田さんが、えらい怪我さゝれはつた。」

おかみさんは驅出して來たので、息が苦しくて言葉を續ける事が出來なかつた。

「何でえな。」

婆さんが夕刊を引たくつて擴げると、亭主も女房もお梅もおれんも、藪睨の女の子迄首を差延ばしてのぞき込んだ。

「現代式曾根崎心中」といふ大標題の横に、「小說家樟喬太郎茶屋の二階より蹴落されて瀕死の重傷」と二行に割つた小標題が、又一同を驚かした。

月も朧の春の夜は、隣家の玉も裏の三毛も、相手欲しさに浮かれ歩く、ましてや人間の中でも常日頃、色と戀とを賣物の小說商賣、たゞ一管の筆先で、噓八百を並べ立て、稼ぎためた

原稿料で、ぽかぽか懐が温たまれば、新地あたりの白粉の香に慕ひ寄るのも無理はあるまじ――と書いても誰の事かわかるまいから、デモクラシイの世の中だ、現代式に手取早く底を割れば、目下菜紙に長篇小説「世相」を執筆してゐる樟脳太郎が、昨夜曾根崎新地のさる席貸の二階から突落されて瀕死の重傷を負つたと御承知あり度い。しかも一人では無い。すべての事件の裏面には女がゐるといふ諺の通り、××席の葉牡丹と云ふ開花正に闌なる美妓と抱合つて轉んだ――否蹴飛ばされたのだからお安くない。卽ち記者が現代式曾根崎心中と題した所以である。……

「へえゝ、三田さんがお茶屋の二階から落ちて怪我しはつたのんか。」

のぞき込んで聽いて居た亭主が、意外な事だといふやうにつぶやいた。

「落ちはつたんや無いのやぜ。他所の男にどづかれて落されたんやさうな。」

酒屋のおかみさんは自分の智識をほこり顔に訂正した。

「まあ默つて聽いてたらえゝ。」

婆さんは聲を立てゝ讀んで居るのを邪魔されたのが不平で、たしなめた。

さて蹴飛ばされたのは小説家先生と、其の馴染の女とわかつたが、然らば蹴飛ばしたのは誰

かと云ふに、驚く可しこれが樟の學校友達で、今は某車輛會社の重役某氏に外ならないのだから、其處には何か人知れぬ、いはれ因縁が無くてはならない。いざや之より戀愛三角關係を說き明かさん。……

「あてはなあ、その重役さん云ふ人が、よう三田さんとこに見えた社長さんやないかと思ふ。」

酒屋のおかみさんは默つて聽いては居られない程、好奇心にみちみちてゐた。

「左様(さよ)か。あのやうに仲善うしてゐやはつたがなあ。わからんもんやなあ。」

宿の女房は直ぐに同意して、感慨深さうに云つた。

「其處が女(なたご)の事やもん。親子兄弟でも喧嘩になるのやよつて。」

亭主も言葉を添へて、新聞の記事が人間の世の中をそのまゝ見せて吳れたやうな氣持で、何の疑ふところもなかつた。

話半途(なかば)におもてにけたゝましい自動車の音が聞えて、誰か來たなと思はず一同が顏を見合せた時、

「今晩は。」

と大きな聲で玄關に立つたのは、今の今噂にのぼつてゐた田原だつた。帳場の者は、緊張した

心持で、もう一度顏を見合せた。

十一の二

婆さんに目くばせされて、取次に出たのはお梅だつた。

「お越し。」

これが三田を二階から突落した人間かと思ふと、隨分馴染になつてゐた田原ではあるが怖ろしかつた。

「一寸お使に來たんだが、三田公の着換と、寢巻と、外に身の廻りのものを少し欲いんだ。僕を三田公の室に通して吳れば用は濟む。通つても構ふまいね。」

田原はおちつきの無い性急な口をきいて、既に下駄を脫いで上つてゐた。お梅は何と返事をしたものか、愈々怖くなつてもじもじするばかりだつた。

「今晩は。社長さんだつか。」

帳場で樣子をうかゞつて居た婆さんは、お梅ではいけないと見て取つて、讀みかけの新聞を手に持つたまゝ出て來た。

「三田さんどうぞしやはりましたんか。」

「いや、別段の事も無いんだが、一寸加減が悪くて病院に入つたんだ。それで賴まれて入用の物を取りに來たんだが……」

「へえ、病院に。さうだつか。」

婆さんは眼鏡の下で田原の様子をつくづく觀察しながら、

「實はなあ、夕刊にえらい事が出て居ますよつて、えらい心配して居りましたわ。」

「夕刊にどんな事が出てゐる。」

田原は一層せき込んで訊いた。

「これ、此の通り出てまんが。」

「ふうむ。」

手に取つて一目見て、田原は顏の色を變へて嘆息した。

「畜生。でたらめを書きやあがつたな。」

讀終つて震へる程怒つた聲で彼は云つた。

「噓だ。全く噓だよ。新聞屋の畜生、ひどい事をしやあがつた。」

「へえ、ほしたらほんまの事やおまへんのか。」

「出たらめさ。」

田原は叩きつけるやうな勢ひで新聞を婆さんの手に返した。

「それよりも直ぐ用事を濟ませ度いんだ。上りますよ。」

さう云つてどん〳〵二階に上つて行つた。婆さんはもつと詳しい事を訊き度いので、あたふた後にくつゝいて行つた。

田原は三田の大鞄を押入から引出して、身につける物を風呂敷に包み、机の抽斗をあけて、萬年筆や原稿紙や半紙などを、其のまゝ外套のかくしに突込んだ。

「おや、こんなものが入つたる。」

側に立つて見て居た婆さんは、抽斗の中の紙片の間に、皺くちやになつた十圓札を見つけてつまみ上げた。

「まあ、お札だつせ。用心の悪い。」

金錢に對して異常な熱情を持つて居る婆さんは、その金錢が粗末にされるのは默過出來ない性分だつた。

「十圓のお札をこないにして。どないしまひよ。」

叮嚀に皺を延ばして、田原の前に差出した。

「抽斗に突込んどけばいゝよ。」

そんな事にかゝはつてゐられるものかと云つた様子で、田原は風呂敷包を抱へて室を出て行つた。

「そんなら三田さんは……」

婆さんは吃驚して、後から追かけて梯子段を下りた。

「一週間もたつたら歸つて來るでせう。回春堂病院だからね。用があつたら電話をかけ給へ。」

歩きながら大きな聲で云つて、門を潜つて姿が見えなくなると、ぶぶぶぶうと響く自動車の爆音が聞えて、直ぐに遠ざかつた。

婆さんは何故ともなく、吐息をついて、手の中に固く握つた十圓札を帯の間にしまつた。

十一の三

自動車の中の田原はおちつかなかつた。大通の電車交叉點で車をとめて、呼賣の夕刊をあるだ

け買取つた。のぼせた頭では、相手はたつた一人の夕刊賣なのに、持つてゐる丈買占めれば、それで此の手酷い新聞記事は世人の目から遠ざかるやうな氣がしたのだ。其の馬鹿な考へは、買つたと同時に彼にもわかつた。田原は苦笑しながら數種類の新聞を開いて見た。幸に色の赤い新聞に出てゐる丈で、外のには出てゐなかつた。

北の新地の席貸の並んでゐる繁昌の通りを一寸横に曲つた裏町の、さゝやかな病院に三田は運び込まれてゐた。回春堂病院と赤字の軒燈の出てゐる前で自動車を下りて、田原は風呂敷包と新聞を兩脇に抱へて病室に急いだ。電燈の暗い八疊の疊を敷いた一室に、三田は自由にならない體を横たへてゐた。

彼はその朝擔架に乘せられて、此處に運ばれて來た。二階から落ちた時打つた肩や腰や首の骨が、づきんづきん痛んでしかたが無かつた。仰向に寢て居ると背骨が痛く、横になると腰の骨がうづいた。打身の爲めか、風邪でも引いたのか、高度の熱もあつた。

うとうと眠つてゐた三田は、田原の足音に目をさました。

「おい、如何だい。ちつとは樂になつたか。」

田原は風呂敷包と新聞紙を下に置いて、枕もとに坐つた。

「先づ會社に行つて事務を見て、君の會社にも電話をかけた。三田公は風邪を引いて私のうちに寢てゐます、用があつたら電話をかけて下さいと云つて置いた。うまいもんだらう。」
平生の底力の張切つてゐるやうなのとはうつて變つて、氣力の無い友達に元氣をつけようと思ふと、田原はわざとらしい程大きな聲で頓狂な事を云つてしまふのだつた。
「それから蜂姐ちやんの屋形を訪問したが、行きがけに待合で、蜂のうちは何處だいと聞いただけで、名前をきくのを忘れちやつたものだから、格子をあけて入つたのはいいが何と云つていゝかわからない。取次の婆さんに、御主人の御容體は如何ですとやつたが、われながら拙かつた。何故姐さんと云はなかつたかと後悔したが、藝者の屋形なるものを訪問したのは始めてだからなあ。」
三田は額に載つてゐる氷嚢を動かして笑つた。笑ふと胸が痛んだが笑はないではゐられなかつた。
「その蜂は存外元氣で、田原さんですかと云ひながら、奥の襖をあけて顔を出したが、可哀さうにお凸を打つたと見えて繃帶で顔もろくに見えない位だつた。しかしあいつは君にしがみついて、つまり君の方が下敷になつたんだから、その外膝つ子を擦りむいた位で、二三日たつたら歩けるだ

らうつて云つて居た。」

田原はさも愉快さうに話したが、

「しかし君はあの女の名前を知つてるかい。」

自分はそれを知つてるぞといふ得意の調子で訊いた。

「知らない。つい蛛で通してしまつた。」

三田は力の無い聲で答へた。

「暢氣な奴だなあ、名前も知らない奴と抱合つて二階から落こちるなんて。ありやあ、お葉つていふんだよ。本名小早川靜は凄いだらう。」

田原は其の屋形の軒先きにかゝつてゐた表札で覺え込んだ知識をほこつた。

十一の四

「それから君の下宿に行つて、使命を果して歸つて來たが……」

田原は新聞の事を話さうとして躊躇した。平生から新聞紙の虚僞と無節操を痛罵してゐる三田を、此の場合眞劍に憤らせるのはよくないと思つたのだ。

「下宿で何か云つてたかい。」

三田は、一人で喋つてゐる友達に氣の毒になつて、何氣なく自分も口を開いたのだが、田原はそれに誘はれて、もうかくしては居られなくなつた。

「ところが行つてみて驚いたのは、君が二階から落ちた事を下宿の奴等も知つてるんだ。馬鹿にしてるぢやあないか、赤新聞が書きやあがつたんだぜ。」

喋つてゐるうちに、自分の聲にも感激して、田原は束で買つた新聞の一枚を取つて開いた。

「『現代式曾根崎心中』頭腦(あたま)の悪い題ぢやあないか。つまりね、君と僕とが一人の女を張合ふ、僕は會社の重役で旦那の役、君は小說家で二枚目さ。ところが立女形(たておやま)が葉牡丹だから氣の毒だね。何處で噂を聞込んだのかしらないが、あとはすつかり都合よく揑(でつ)ちあげたんだから堪らない。ひとつ讀上げて見ようか。」

田原は成るべく三田を怒らせまいとして、冗談めかした口をきゝながら、腹の中では飽迄も新聞記者の不德を憤つてゐるので、

月も朧の春の夜は、隣家の玉も裏の三毛も……

と讀んでゐるうちに昂奮して、愈々聲は高くなつた。

……今宵も二人は諜し合せ、小說家先生から云へば友をあざむき、女から云へば旦那の目を忍び、蜆川の流今はなけれど、名に聞えたる曾根崎の、茶屋の二階の一間のうち、双蝶花に戯れて芳香に醉ひ、痴態の限りを盡す折柄、流石にお人よしの重役殿も、兼々怪しと睨んでゐたので、前觸れも無く自動車を乘つけると、急ぎ二階に驅上り、二人がひそむ一間の障子、がらりとあければ案に違はず、取亂したる男と女。

「こいつは面白いや。まるで阿呆陀羅經ぢやないか。」

田原は憤慨しながら讀んでゐたが、あまりに調子づいた時代錯誤の惡文に失笑して、暫時は讀みつゞける事が出來なかつた。

「其處で旦那と色男、卽ち僕と君とが格鬪して、金と力の無い君の方が、二階から蹴飛されてしまふんだ。」

……力任せに發止と蹴れば、あなやといふ間も泣くばかり、お前とならば何處迄もと、取縋りたる葉牡丹もろとも、十數段の段梯子、眞逆さまにぞ落ちにける。氣の毒な事には二人とも瀕死の重傷で、附近の病院にかつぎ込まれたと、曾根崎あたりの評判々々。

田原は讀み終つた新聞を放り出して、自棄な高笑ひをした。

れた靴下を穿いた貧相な一人物の姿が、熱のある目の前にはつきりと浮んで見えた。

と、憤らないではゐられなかつた。いつぞや下宿に訪ねて來て、出たらめの記事を書いた踵の破

身動きの出來ない三田は、天井を見詰めたまゝ苦笑した。畜生、卑劣な復讐をしやあがつたな

「それでおしまひかい。」

十二の一

三田の身内の痛みは日一日と薄らいで行つたが、熱はなかなか下らなかつた。鯰髭をはやした若い院長は、しきりに首を捻つて考へ込んで居たが、やがてそれは外傷から來た急性肋膜炎だと云ふ事がわかつた。

十日ばかりの間、毎日上つたり下つたりの熱で絶對の安靜を保たなければならなかつた。田原は毎日見舞に來て、一切の事務を處理した。朝會社に行く前に來る事もあり、夕方ひけてから立寄る事もあり、時には半日休んで來る事もあつた。新聞に大袈裟な記事を出されたので、それからそれと噂が高まり、病院の場所も直ぐにわかつて、勤務先の會社からも、同僚が見舞に來た。

「瀕死の重傷だなんて出てゐたものだから驚いて來たんだが……」

氷囊は額と胸に乘つて居たが、怪我としては大した事もないのを誰しも意外がつた。さういふ噓を新聞が書く事は知りながら、最も人々の好奇心を動かした女出入はまるまる噓とは考へて呉れないで、如何かして其の眞相を探らうとする意地の惡い目つきを見せた。三田は見舞に來る人間を殊の外嫌つた。

新聞の記事が出たらめの捏造だと云ふ事を知る者よりも、知らないで面白がつてゐる者の方が遙に多かつた。曾て歐羅巴から歸る時同船の若い未亡人とのありもしない關係を書き立てられた浮名が漸く消えかゝつたのに、又しても、新しく惡い噂を身に浴びるのは、隨分腹の立つ事だつた。常に正義を說きながら、何等の道念も無い新聞紙を、三田は身を震はして憎んだが、困つた事には前の事件とは違つて、今度のは捏造は捏造でも、醉つて二階から落ちた事丈は事實なので、自分を責める心も十分あつた。世間體と出世ばかり考へてゐる會社の支店長は、自分の部下に斯う云ふ男を出した事を、東京の本店に對しても、世の中に對しても、さぞかし氣にし、外聞惡がる事であらう。

さうだ、會社なんか止めちまはう――と三田は不圖想ひ浮んだ此の考へに昂奮もし、又安心もしたのである。兎や角心配してゐる支店長の前に、潔く辭表を出してやつたら、さぞかし内心喜

ぶ事であらう。折も折とて肋膜の疾患もあるのだから、假令急性のもので、見る間に本復してしまふだらうとは思ふが、後の養生の必要もある。暫時海岸にでも行つて、溫かい砂の上に寢轉んで暮さう。さうして更に力を込めて又新しい創作を仕上げよう。——此の考へは、次第に日が經つて、熱が下ると共に、かへつて動かし難い決心になつた。

「僕は當分靜養の必要もあるし、これを機會に月給取は廢業する積りだ。」

平熱に復して、追々食慾もついて來た頃は三田は口に出して云ひもした。

「ふうむ。それもいゝかもしれないな。」

三田の性質をよく知つてゐる田原は、別段とめもしなかつた。

月を越えて約一箇月の病院暮しのあげくに、三田が退院を許された時、彼の心は全くきまつて居た。

十二の二

三田は自動車をおごつて下宿に歸つた。道々通る往來の、目に觸れる景色も一變して、空も土も草木も、人間の裝ひ迄初夏の色になつてゐた。川水のぎらぎら光る反射は、病後の眼には堪へ

難い刺戟だつた。氣の早い男のかぶる夏帽子には、知らない世界にぶつかつたやうな新鮮な氣持もした。

下宿では、前の日に電話で知らせて置いたので、自動車がとまると直ぐに、お梅とおれんと、藪睨の女の子が飛んで來て、荷物を受取つて吳れた。

「三田さんお歸り。」

その女の子が歌をうたふやうな節をつけて、皆に知らせようと叫ぶのを聞くと、矢張り我家に歸つたやうな一種の感慨があつた。

「まあま、三田さん、あんたえらい災難におましたなあ。」

婆さんは玄關に立つてゐて、仰山な表情で挨拶した。三田は何と返事をしていゝかもわからないで、赤面して二階に上つてしまつた。ひとつ事件のもと末を、殘らず訊いてやりませうと待構へてゐた婆さんは、愛想の無い三田の後姿を、憎惡の目で見送つた。

室の障子はすつかりあけ放してあつて、目の下の町の家々の屋根にも初夏の力が漲つて居た。手を延ばせば屆く所迄、枇杷の枝も成長し、塀の向ふの隣の庭は、燃えるやうな綠だつた。三田は羽織を脫いで、疲れた體を窓にもたせかけてうつとりした。

先づ二三日は、何のわづらひも無く、一年中で一番氣持のいゝ此の五月の日光を浴びて靜養しよう。それから思ひ切つて會社に行つて、辭表を出して來よう。朝は必ず九時に出勤して、夕方の四時迄は機械のやうに働く生活に別れたら、ひと思ひに遠方の、人間の數の少い海邊でオゾーンのたつぷりある空氣を呼吸し、魚や草木を友達にして暮さう。淡路島がいゝかしら――何時も海岸線を走る汽車の窓から、遙に紫の山の姿をのぞみ見て、なつかしんだのを思ひ出した。其の島に關する傳説を、雜誌などで讀んだ記憶も辿つて見た。恐らくは他の土地の話だらうが、美しいお姫樣の出て來る傳説などは、みんな淡路島の事のやうに想はれた。

三田は他人に顏を見られるのが堪らなくいやになつてしまつた。如何しても此の我利々々の資本家と、それにも增して我利々々の勞働者が、絶えず喧嘩をしたり、公正な考へなんか微塵も無いくせに、立派な事を並べたてる政黨が、勢力を張る事にばかり腐心して、汚らはしい爭ひを續けてゐたり、多數者に媚びるばかりで、自己の藝術境の開拓には努力しない藝術家なんぞがうようよして居る眼前の世の中を、遠ざかるにしくはないと思ふのであつた。昔の歌や傳説によつて、美しく描かれた世の中が慕はしくなり、そんな世の中が今も尙ほ、何處かしら遠くの方に存在してゐる氣がして、それを探し出す希望さへ湧いて來た。三田の空想は止度なくつゞきさうだつた

が、梯子段を上つて來る足音が聞えて、襖の外の廊下に近づく人の氣配に驚いて吾に歸つた。

十二の三

出がらしのお茶を半分ばかり湛へた茶碗ののつて居るお茶盆を持つて入つて來たのはおれんだつた。つんつるてんの着物の下にむき出しの汚れた足を氣にして、遠くの方にぺたりと坐つて、三田の前にお盆を押して寄越した。何となく恥入つてゐるやうな樣子が哀れに思はれた。何時かの十圓札の事を氣にしてゐるんだなと思ふと、其の時の自分のやり口が、些か面白くなかつたやうに回想された。三田は、てれかくしに茶碗を取つてぐつと飮んだ。

用事を濟ませて膝を浮かせ、直ぐに階下に行きさうに見えたおれんは、又もじもじして膝をついたが、懷から別の小形の丸盆を出して、

「別段急がしまへんので……」

半分は口籠つて其處に置いた。一片の紙ののつて居るのは、勘定書に違ひ無かつた。

「あゝ、勘定かい。」

三田は何心なく手にとつて開いて見た。三週間あまりも病院で暮らして留守だつたのに、請求

金額は例月とちつとも違つてゐなかつた。この正月にも松の內一週間以上東京で過して、下宿の規定でも當然割引くべき筈なのを、愚圖々々にして支拂はされてしまつたが、又してもあの手を繰返す積りなんだなと思ふと、三田は頭に血の上るのを感じた。

「これはいけないよ。階下に行つてさういつて吳れ給へ。今月の分は今月の末の問題だが、先月も半分も留守だつたんだから、規則通り引くのがほんたうだつて。餘り慾張つてはいけませんといつて吳れ給へ。」

三田は病氣あげくの體に、再び發熱しさうな氣持のする程、眞劍に腹が立つた。おとなしくやさしく、大樣にしてゐれば、何處迄もつけあがる根性は許しては置けない。先方の出樣ひとつで、今度は飽迄も戰つてやるぞと、いきり立つた。三田の樣子がたゞならないので、おれんはおどおどしながら、押戾されたお盆を持つて立去つた。

暫時たつと、

「御免下さいまし。」

何がなし、人と口をきく時は引呼吸になつて、さも恐縮したやうな樣子を見せる亭主が、重たい體でやつて來た。

「えゝ承りますればとんだ御災難で、お怪我をなさいましたさうで……」

揉手をしながら長々と挨拶を述べてゐるのが、心の底から出る言葉らしく無く、三田は聞くに堪へなかつた。おまけに彼は、又しても今度の怪我の事をくどくど云ひ立てられるのが、胸の痛みに觸られるやうな氣がして、相手の如何にかゝはらず避け度いのだつた。

「いゝえ、大した事はないんです。新聞がでたらめを書いたもんだから……」

苦り切つて額に深く竪皺を刻みながら、三田は蟀谷がひきつるやうな苛立たしい氣持だつた。

「それよりもですね。君がやつて來たのも其の事と思ふが、今持つて來た勘定書は、あれは如何したものなんです。しつつこくは言ひ度くないが、あんまり馬鹿にされたやうな氣がして……」

「飛んでもない、貴方様を馬鹿にするなどと云ふ事は決して御座りません。」

三田が癇癪を制御しきれなくなつて、思はず知らず聲高になつたのを、亭主はあわてゝおさへるやうな手つきをした。

十二の四

「それにつきまして、一寸お願ひに出ましたので御座ります。」

亭主は一生懸命になる時、かへつて頭を掻く癖を出して、一層大きな體をもてあましながら、諄々とやり始めた。

要するに何時も同じ申譯で、物價の法外に高くなつた事、物によつては二倍にも三倍にもなつたので、下宿料を二割や三割引上げても到底も追つかない事、さりとて此の上宿料を上げれば、お客の數も減り相なので、さうもなり兼ねる事、現に表二階に居た醫學生も三田の留守中に他へ轉宿し、八疊の室もあいた儘で、何れも二週間近く其のまゝになつて居る事を、いろんな例を考へ考へ、妙に物柔かな言葉で說いて、つまるところ下宿商賣が、他所見とは違つて儲からないものだと云ふ事を、納得させようと努めるのだつた。

「そのやうな内情で御座りますので、此の度の事も貴方様には御氣の毒さまで御座りますが、其處の處を平生御寛大な方でいらつしやるから、押切つてお願ひして、何とか御承知を願ひ度いと存じまして……」

愈々言葉がもつれゝばもつれる程固くなつて來た。聞いて居る三田はじれつたくて爲方が無かつた。彼はふだんから、人と人とが對談する時に、相手の顏を正視しないで喋る人間を好かなかつた。さう云ふのは、心の正しくない人間の證據のやうな氣がするのだつたが、今眼の前の亭主

が、人一倍大きなづうたいをしながら、頭を掻いたり膝を撫でたり、揉手をしたりしながら、目は絶えず疊の上に落して、三田の方には正面を見せないのが疚しい心の現れなのだと考へられた。三田は默つて居た。いやにおだてるやうな事を云はれるのが不愉快だつた。

「何分どうもかゝりがえらい事になりましたので……」

又しても元に戻つて始めさうなので、三田は一層苛々した。

「しかしそれは別問題ではありませんか。物價が高くなつたから宿料をあげると云ふのはわかつて居ます。止宿人の方から見れば、上げ過ぎてゐるやうに思はれるが、それは爲方がないとして、一週間以上留守にすれば割引すると云ふ規定は、玄關にも廊下にも貼出してゐながら、こんなに長く留守にして、其の間一度も食事もしないものを、ふだんと同じ料金を取らうと云ふのは亂暴だ。それを貴方は正當だと思つてゐるんですか。」

脣が乾いて、うまく喋れないのを氣にしながら、これでもかこれでもかと云つた調子でたゝみかけた。

「いや、まことに御尤もで御座ります。」

さも參りましたと云ふ風に、亭主は頭を下げた。

「私共でも實は相濟まん事だとは思うて居りますのですが、外ならぬ貴方様の事で、失禮ながら他人様とは違うて、細かい事を兎や角云はるゝお人では無し、何とかお願ひして見たらと、こない考へましてな。何分雜用が高うなりましたよつてに……」
「それだからお人善をつかまへて埋合せをしようと云ふんですか。」
三田はほんとに腹が立つて、調子をはづした高聲になつた。

十二の五

「ど、どう仕りまして。決して其のやうな不埒な事は御座りません。つゞまりお心安だてにお願ひ致します次第で、なんの貴方、お人よしなどと……」
「だつてそれに違ひ無いぢやありませんか。お人善でなくて誰がそんな不當な要求に應じるもんか。」
「相濟むまへん。實はこのお正月にも無理なお願ひを致しましたので、今度もきいて頂けるやらうと……」
「冗談いつちやいけない。正月の事はその時限り、特別に承知したんだが、そいつをいゝ事にし

てつけ上るなんて。」

「めつさうも無い。つけ上るなどと、もつたいない事で。」

亭主は低く頭を下げて一息ついたが、如何しても三田が承知しさうもないと見てとつて、今度は態度を變へて來た。

「さうぽんぽんおつしやられますと、私共の方でも、いはんでもよからうと愼んで居ります理窟も申上ん事にはどもなりまへん。」

餘程決心したやうな語調だつたが、矢張り疊の上のあらぬ方を見詰めてゐて、正面は向かなかつた。

「この事は以前にも申上げた筈で御座りますが、たとへ一週間以上お留守に致しましても、前以ておつしやられませんと、手前共では毎日々々、今日は歸らはるか、明日は見えるかとお待ちして、お室もふさがず、お食事の仕入もせんなりまへんので、宿にゐてはる時と何の變りも御座りませんので……」

「わかつた。」

三田は憤に震へる聲を漸く抑へて、相手の言葉を遮つた。

「それが理窟だといふなら文句は無い。怪我をして病院に入つてゐる者のためにも食事の用意をする程親切な下宿とは知らなかつた。では、君の方ではそれが當り前だといふのだから飽迄も宿料を請求し給へ。但し僕の方も飽迄も拂は無いと決心したから。」
「それは又餘りきびし過ぎまんな。」
冗談だと思つたのであらう、亭主はお愛想と、てれかくしのまじつた笑方をした。
「冗談ぢやありません。僕は斷じて拂は無い。警察に屆けるなら屆け給へ。訴へられても如何しても拂はない。」
「御冗談を。そのやうな事をおつしやりますと御身分にさはります。」
亭主は矢張り冗談にして片附けてしまひ度かつた。強ひて笑顔を作つても見たが、三田は柔かい表情の全く消えてしまつた怖い顔で眞正面から睨みながら、唇は堅く閉ぢてしまつた。氣まづい沈默が室内に充滿した。
「おい、ゐるかい。」
襖の外で聲をかけたのは田原だつた。何時もの通り廊下を踏鳴らして來たのだが、熱し切つてゐる三田は氣が付かなかつたのだ。今その聲を聞いて、彼は救はれた氣がした。

「なんだ、お客か。」
一足踏込んだが躊躇した。
「いえ、手前で御座ります。さ、どうぞこちらへ。」
亭主も救はれた氣持で、いゝ機會にして逃出さうと思つた。
「あ、一寸待つて呉れ給へ。」
廊下へ出ようとする幅廣の背中を、三田が呼止めた。
「今いつた事は今いつた通りで、僕は明日他所へ引越しますから豫め御斷りして置きます。」
亭主は何かいはうとしたが、折が惡いと思つたらしく、まごついた顔付きで振かへつたばかりで、づしんづしん重たい體を運んで立去つた。
「どうしたつていふんだ。」
「あゝあ、久しぶりで心底から腹が立つたよ。まあ斯ういふわけさ。」
三田は味方を得た嬉しさに、一部始終を詳しく話した。
「ふうむ、怪しからん奴だなあ。越しちまへ、越しちまへ。明日は僕が荷造り萬端引受けた。」
事を好む田原は元氣のいゝ聲でいつて、誰か役者の眞似であらう、大仰に胸を叩いた。

十二の六

翌日は日本晴だつた。約束通り田原は、朝早くからやつて來た。
「おい、ほんとに引つ越すんだらうなあ。」
「ほんとともᅳ。」
三田は全く腹をきめてしまつたので、おちついて答へた。一時の怒りに任せて出てしまふのでは無くて、幾度も反省して、矢張り出なければならないと思つたのだ。根性の惡い奴等に對して、寛容は善事では無い。手酷しい目にあはしてやるのがいゝ事なのである。多少でも良心をよびさましてやる事が出來れば尙更いゝ。三田はそんな風に考へてゐた。
「行く先はきまつてゐるのか。」
「きまつてゐない。」
「暢氣な奴だなあ。」
田原はあきれ果てた顏をしたが、三田は平氣だつた。何處に引つ越すといふ事は大した問題でなく、何が何でもこの家を出るのが第一の事だつた。

「隣も宿屋だから、面あてにあそこに引つ越してやらうかとも思ふんだが、あいにく連込み専門らしいし……」

「さうか、そいつは惜いなあ。隣だと面白いぜ。荷物を持つて玄關を出る。見送りに出た此處の奴等の見てゐる前で隣に入つて行く。あら／＼といつてゐるうちに、あの二階から此方を見下してやる――こいつは愉快だがなあ。」

田原は事件の中の一人として活躍し度いので、いろんな想像をたくましくして悦に入つた。

「しかし行く先をきめなくては駄目ぢやないか。」

「うむ、又停車場の前の宿屋に行かうかとも思つてゐるんだ。少し騒々しいけれど。」

どうせ明日にも辭表を出して、この大阪にもおさらばだと思ふので、停車場の近くは何より都合がいゝのだつた。

「さうきまつたら早い方がいゝぜ。だが、ほんとに此處の宿料は拂つてやらないのかい。」

田原は多少心配らしい調子で聞いた。

「拂ふもんか。」

たゞ一言、唾棄するやうに三田は答へた。

「ようし、さう來りやあ占めたもんだ。あの慾張り婆や、デブ公も、さぞかし驚きやあがるだらうなあ。」

相好を崩して喜んで、勢ひよく立上つた。

「事は迅速に限る。荷造りを始めよう。といつたところで、例の古鞄と机と夜具の外には何も無いんだらう。」

「外には本が少しある。」

三田も誘はれて立上つて、押入れを開けて見せた。

「よし〳〵、これつきりなら僕一人でやつてやる。御病人は日向で見物してゐろ。」

田原はさういひながら、いきなり大鞄を引擦り出し、戸棚の夜具も下した。

「御免やす。」

咽喉に絡んだ太い聲をかけて、婆さんが襖をあけた。室内の景色にぎよつとした色を浮べたが、

「三田さんのお嫌ひな婆が、一生のお願ひに參じました。オアハハハ……」

この手でひとつ行きませうといふやうな、わざとらしい高笑ひをしながら、三田と向あつて座を占めた。

十二の七

「何ぞうちの若い者がしくじりましたさうで、えらいお腹立やとこない云ひますよつて、なんの三田さんはそのやうな些細な事で怒りはるお人やない、心の廣い、見たところはこはい顔してはるけれど、見かけによらない優しい方や――オアハハハハハハ」

婆さんは齒ぐきをさらけ出して笑つた。

「失禮な婆だつしやろ。けれどもほんまに、さう云ひましてん。」

親しさを見せる爲めか、あけすけな事を云つて、多少得意の樣子だつた。

「何せ、學問をたあんとしたお方故、筋の通らん事を申上げたらあかん。そのかはり事をわけてお願ひしたら、うんよしよしと納得してくれはるに違ひ無い。私が行つてお話して來ませうと、こない云うてお邪魔に上りましてん。」

目の前で、大鞄の詰かへをしてゐる田原の方をじろじろ見ながら、婆さんはしつつこい調子で辯じ始めた。

三田の宿料の割引は、しないでもいゝと最初に云ひ出したのは、實は婆さんだつた。相手は世

間見ずのお人善だから、一言二言苦情は云つても、下手から出ておだてれば如何にでもなると思つてゐた。ところが意外にも旋毛を曲げて、勘定は拂はない、宿は引越すと、むきになつて怒つてゐると聞いて吃驚した。それでも弟の口のきゝ方が拙い爲めに話がこじれたので、自分が出れば解決はつくと云ふ自信は持つてゐた。けれども二階に來て見ると、もう荷造りに迄取かゝつて居るので、婆さんはいちはやく讓歩の腹をきめた。

先づ口を極めて弟を惡くいひ、商賣の道を知らない馬鹿者だと罵つた。さう云へば三田も喜ぶに違ひ無いと思つたのだ。しかし、みす〳〵多分の割引をするのは馬鹿々々しいので、顏色をうかゞつて、隙があつたら三田の方にも讓歩させようといふ考へは捨てなかつた。其處で、少しは弟の立場も辯護して置かなければならなかつた。

「何云うても物の値段は上る一方で、下宿屋の方は、それ程上げる事も出來へんのんで、ついつい詰らんお願ひもせんならん事になりまんねぜ。其處は可哀さうやと思うて貰はんなりまへんな。オアハハハハハ……」

婆さんの云ふ處も、聲と言葉が違ふ丈で、亭主の云ふのと何の相違も無かつた。物價騰貴で儲けが少いので、自然何とかして埋合せをつけなければ、商賣は續けて行かれないと迄云つた。

「そやけれどなあ、事と人によりまつさ。あんたにむかつて、そないな事を云ふ阿呆がありますもんか、なあ三田さん。ほんまにあの男は阿呆だんな。」

いくら同情を引きさうな話をしても、三田は默然として腕組をしたまゝ、苦い顏をしてゐるばかりなので、いゝ加減にあきらめて、引越しだけでも思ひ止まらせようと思つた。

「其處で此の婆が一生のお願ひに上りましたのは、決して慾張つた事は申しまへんよつて、此度の事はきれいに忘れて頂いて、これからも永らく此の婆を可愛がつてお貰ひ申し度いので。」

婆さんは懷に用意して來た割引無しの勘定書を取出して、三田の見る前でずた〳〵に裂いてまるめた。

「田原さん、あんた何してはんのや。そんな爲様むない事せんかて宜しい。社長さんの爲さる事とは違ひまつせ。オアハハハハハハ……」

腹をゆすつて、男のやうな高笑ひをした。

十二の八

三田の額の不機嫌皺は愈々深くなつた。何とか口をきかなければならないのが、堪らなくいや

つてゐるんだと考へた。

「話はよくわかつてゐます。しかし、何と云はれても宿料は拂はないし、引越は中止しない。警察にでも訴へたらいゝでせう。僕の方も宿屋の不都合を其筋の人間に知らして置き度いんだ。」

警察々々と云ふ度に、相手のびくびくする態度はよくわかつた。三田は意地悪く苛めてやり度くて爲方がなかつた。

「あんさん、まあ何いうて。」

流石に婆さんも、もてあました形で、仰山に驚いて見せた。

「今も申上げます通り、ちやあんとお留守の間だけは差引く事に致しますよつて、そない云はんと勘忍して貰ひまひよ。」

「いゝえ、今では差引くも差引かないもない。どつちにしたつて拂は無い。」

「そないな無理云はゝつて、御身分にさはりまんが。」

「身分なんかあるもんか。又あつたにしても、その身分にさはつたつて構は無い。不正を許して置くよりは遙にいゝ。」

「まあ、どないしたらよろしいのやら。」
婆さんも困り切つて、思案に耽つた。
二人の問答を聞きながら、密に痛快がつて居る田原は、大鞄を整理し、蒲團をづつくの袋に押込んで締めあげた。
「おい、こつちはもう濟んだぜ。あとは机だけだ。」
「御苦勞さま。それぢやあそろそろ出かけるかな。」
一刻も早く婆さんの歎願から逃れ度いと思つて、三田は田原に目くばせした。
「ぢやあ、車をよばなくちやあ。」
田原もうなづいて見せて、
「ついでに一走り行つて來るか。阪の下にあつたつけねえ。」
さう云つて彼はさつさと廊下に出た。
「社長さん、まあ一寸待つとくんなはれ。御用やつたらうちの女をやりまつさ。貴方にもきいて頂く事がおまんがな。」
婆さんはすつかり狼狽して、裾を亂して追かけた。

「いや、自分で行くよ。」

逃げるやうに、田原は急に梯子段を驅下りた。その梯子の下には、女房とお梅とおれんと女の子と、その外に酒屋のおかみさんも加つて、事の成行を氣づかつてゐた。

「田原さん、一寸待つとくんなはれ。」

婆さんも危ない足取りで驅下りたが、既に田原は下駄を突かけて、返事もしずに歩き出し、直ぐに門の外に消えてしまつた。

「畜生め。」

婆さんは口の中でつぶやいて、いま〳〵しがつた。

「お前達何んで留めへん。いくつもいくつも顏を並べて居る丈で、何してんのや。阿呆。」

怖しい顏をして其處にゐる者を睨みつけながら、婆さんは帳場に行つた。亭主は暗い顏つきで、心配さうに待つてゐた。

「どないした。」

「どないもこないもあるものか。あの變ちきちん、えらい事云うたる。警察に突出したらえゝやろなんて、無茶云ひよる。」

さも口惜しさうに、言葉を極めて三田を罵つた。
「ふうん、どないしたらえゝのやろ。」
亭主は全く弱り切つて吐息をついた。

十二の九

間も無く田原は、荷車を一臺雇つて來た。
「御苦勞だが、足袋を脱いで上つて呉れないか。」
年をとつて、力の無ささうな車夫(くるまや)は、云はれるまゝに後について通つた。二人がかりで大鞄(トランク)を下し、蒲團を下し、机を下して車に積んだ。
婆さんと亭主は、額を集めて善後策を相談したが、俄に如何する事も出來なかつた。其のうちに、田原と三田は連立つて梯子段を下りて玄關に來た。
「永々お世話になつたけれど、急に引越す事になつてしまつた。」
三田はお梅やおれんにいゝ機嫌で口をきいた。相手は何と云つていゝかわからないで、その癖何と無く下宿の一員として、三田の方が正しく、婆さんや亭主の方が悪いのだと思ふ心がとがめ

るので、恥入つた氣持でうつむいた。

「濟まないが僕の靴を新聞紙にでも包んで呉れないか。」

さう云はれて、お梅とおれんは先を爭つて下駄箱から、穿物を出し、云はれた通り新聞紙で包んで、荷車の上の荷物の間に押込んだ。

「これは少しだけれど君達へお禮だから。」

三田は二階で用意した紙づゝみを、お梅とおれんの手に無理に握らせた。

「おかみさん。私は停車場の前の××館に越すんだから、何か談判にでも來るつもりなら何時でも來るやうにさう云つといて下さい。」

婆さんも亭主も、まだ評議がきまらないで、互に相手の煮え切らないのを憤慨しながら、爭つてゐて顔を見せないので、ぽかんとして佇んでゐる女房にさう云つた。

「濟むまへん。」

女房は思はずもべつたり膝をついて、頭をさげた。自分の亭主のやり口は、どう考へても間違つてゐるやうに思はれたのだ。

「では左様なら。御機嫌よう。」

三田はみんなに挨拶をして、田原の後を追つて往來に出た。荷車は行先を聞いて、もう曳出されてゐた。

「三田さん、三田さん。」

五六間行つた頃、後から轉がるやうな格好をして、亭主が追かけて來た。肥り過ぎてゐるので、それ丈でも息を切らして、はあはあ云つてゐた。

「今更何とも致し方が御座りませんですが、ひとつ此の計算でお拂を願へませんで御座りませうか。」

手に持つて來た勘定書を見せて、亭主は頭を掻きながら、しきりに低頭した。

「これならば規則通り、お留守中のお食事代を差引きましたので……」

「くどいなあ。僕は何と云はれても拂ひませんよ。」

三田は足も止めないで、づんづん歩きながら答へた。

「そこの處を何とかして。」

亭主も止むを得ず、後にくつゝいて歩いて來る。繰返し繰返し、自分達の不心得だつた事を詫びるのが、恥も外聞も無く大きな聲でやるので、往來の人も、兩側の家々の人も、何が始まつた

のかと不審がつて、一齊に視線を向けるのであつた。流石に三田もこれには弱つた。田原は第一に閉口して、歩調を早めて二三間先を、さも他人のやうな風をして歩いて行く。だらだら阪を下りて、橋を渡つて、最も人間のこみあつてゐる三越の前を通つて堺筋(さかひすぢ)の電車路(みち)に出た。交叉點で交通を整理してゐる巡査もいぶかしさうに見守つた。

「全く手前共の不心得で御座りまして、何とも申譯も御座りません。」

額の汗を拭きながら、大の男が泣き出しさうな聲で歎願してゐるのを見ると、三田は自分がそんな事件の主人公だと云ふ事が、甚だわづらはしく感じられた。

「ちえつ、面倒臭いなあ。」

彼は相手の幅の廣い横面(よこつら)を張飛ばしてやり度いやうな氣持で、懐から財布を出すと、往來の眞中で、勘定をしてやつた。

「まことに難有い事で。これで手前共も助かります。」

乞食のやうに頭を下げてゐる大男を尻目にかけて、三田はさばさばした氣持で田原の後を追かけた。

「どうした。流石の俺もあいつについて來られるのは弱つた。」

田原は振かへつて腹を抱へて笑つた。

「あんまりうるさいから拂つてやつた。」

自分の意地を最後迄通さなかつたのは多少不愉快だつたか、三田は大男を追拂つたので氣が輕くたつた。二人は何といふ事も無く、顏を見合せて、滿足して笑つた。

荷車は遙に先に行つてしまつて、かげさへ見えたくなつた。二人は日の光の強い町を、ぶらぶら歩いて行つた。川水はぴかぴか照りかへし、大空は眞青に完全に晴れてゐた。

淀屋橋を渡る時、大阪中を震はして午砲が鳴つた。（大正十一年十一月十九日）

大阪の宿

一の一

夥しい煤煙の爲めに、年中どんよりした感じのする大阪の空も、初夏(はつなつ)の頃は藍の色を濃くして、浮雲も白く光り始めた。

泥臭い水ではあるが、その空の色をありありと映す川は、水嵩(かさ)も増して、躍るやうなさざ波を立てゝ流れて居る。

川岸の御旅館醉月(すゐげつ)の二階の縁側の籐椅子に腰かけて、三田は上り下りの舟を、見迎へ見送つて居た。目新しい景色は、何時迄見て居てもあきなかつた。此の宿に引越して來て二日目の、それが幸(さいはひ)なる日曜だつた。

三田は、大阪へ來て、まだ半年にしかならない。其間(そのあひだ)、天滿橋(てんまばし)を南へ上(あが)る、御城の近くの下宿に居たが、因業貪欲吝嗇の標本のやうな宿の主人(あるじ)や、その姉に當る婆さんが、彼のおひとよしにつけ込んで、事毎に非道を働くのに憤慨し、越して行く先も考へずに飛出してしまつた。大きな

旅鞄と、夜具蒲團と、机を荷車に積み、自分で後を押して、梅田の驛前の旅人宿に一時の寢所を定めたが、宿の內部の騷々しさに加へて、往來を通る電車のきしり、汽車の發着每にけたゝましく響きわたる笛の音、人聲と穿物の三和土にこすれる雜音などが、外部からひた押に押して來て、部屋の障子が震へる程で、机にむかつて本を讀んだり、かきものをしたりするおちつきを與へて吳れなかつた。それでも半月は辛抱した。人にも賴み、自分でも會社のゆきかへりに方々見て廻つたが、扨て恰好のうちは無い。氣に入つたところは宿料が高く、安いところは氣に入らなかつた。つい氣のおちつかないまゝに、夜は宿を出てうろつき廻つた。

そんな時に足をやすめる場所は、關東煮がおきまりだつた。懷中の都合もあり、カフヱは虫が好かないので、自然と大鍋の前に立つて、蛸の足を嚙りながら、こつぷ酒をひつかける事になる。天神橋の蛸安は、前の下宿時代からの深い馴染だつた。

「何處かに、安くて居心地のいゝ下宿屋は無いかしら。」

いつぱい機嫌でゝ、若い主人に訊いて見た。

「安うて居心のえゝ宿屋だつか。」

眞面目にとりあつてゐるのか、ゐないのか、腰の煙草入から烟管をぬいて、悠々と烟を吹きな

から、お義理らしい小首を傾けた。

「大将。」

先刻から大分酩酊して、居睡（ゐねむり）をしさうになつて居た汚ならしいぢいさんが、いきなり横あひから聲をかけた。

「安うて居心のえゝ宿屋やつたらな、土佐堀の醉月や。」

厚ぼつたい唇をなめながら、鍋の上につんのめりさうな形だつた。少し舌が長過（すぎ）るのか、醉つて居る爲めにもつれるのか、ぢいさんのいふ事は聞取りにくかつたが、要之（えうするに）その醉月といふ宿屋は、きれいで靜で安くて、食物（たべもの）は上等で、おかみさんも女中も親切で、これ程居心地のいゝうちは無いと云ふ意味の事を繰返して喋つて居るのだつた。

三田は酒のみの癖に醉拂（よつぱらひ）が嫌ひなので、何を云はれても取合はなかつたが、醉月といふ名を忘れなかつた。そして翌日會社の歸りに土佐堀の川岸（かし）を順々に探して行つて、此の家を見つけたのである。

普通の宿泊料ではやりきれないので、男のやうな口のきゝ方をする大柄のかみさんに談判して、月極（つきぎめ）にして割引いて貰ふ事にした。

「よろしゆおまッ。うちは儲けようと思うて御商賣してるのとは違ふさかい、まあ來て見とくんなはれ。」

活氣のある聲でからから笑つて、先方から話をうち切つた。

次の日、三田は又大鞄と夜具と机を積んだ荷車の後を押して引越して來たのである。

一の二

昨日は荷物を部屋に運び終ると、直ぐに御影に住む友達、田原の家によばれて行つた。酒倉のうちつゞく濱端の一地點に建てられた二階家の、欄干に近々と浪が寄せて、潮の香の鼻をつく座敷で、夜の更ける迄酒を飲んだ。大阪に歸つたのは十二時過ぎで、引越して來た最初の晩に、宿のおもての戸を叩かなければならなかつた。

それにも拘らず今朝は早く起きた。雨戸の無い家はあけ易く、緣側の玻璃戸の內側に引いてある白いカアテンは、川水に光り躍る朝日を反映して、まぼしかつた。深酒の翌朝の早起は、自分自身に對しても負嫌で押通す三田のならはしだつた。

梯子段をづしんづしん踏鳴らしながら降りて行くと、

「お早う御座います。」

「お早うさん。」

二三人女の聲が、臺所と帳場から、いちどきに挨拶した。新來の客を珍しがる視線を避けるやうに、彼は地下室へ急いだ。

暗い湯殿に續く洗面場には、ひゞの入つた姿見がかゝつて居た。三田はその前に立つて、これが一生の面倒に思はれる無類の濃い髯を剃つてゐた。安全かみそりの齒の音が、心地惡く響いた。

「旦さん、えら早よおまんなあ。」

湯殿の洗場をごしごし洗つて居たぢいさんが、後から聲をかけた。

「お早う。」

半分は石鹼のあぶくだらけの顏で振向いて返事をしたが、

平べつたい顏を見ると、おもはず驚きの聲が出てしまつた。

「おゝ。」

「何やら見覺えのあるお方のやうに思うてましたが、旦さんでしたか。先夜はえらいひつれいしました。」

しまりの無い口のきゝ方に特徴のあるぢいさんは、此間天神橋の蛸安で、安くて居心地のいゝ旅館醉月を、教へて呉れた醉拂ひだつた。

「なあんだい、君は此のうちの人なのか。」

「へえ、時折手傳うてゐまんのや。」

ぢいさんはにたにた笑を浮べて、寧ろ得意さうに答へた。

顏を洗つて二階へ戻ると、きれいに寢床はかたづいてゐて、緣側のカアテンをしぼり、玻璃戸をあけ放したところに、籐椅子が据ゑてあつた。それに腰かけて、朝日のさす對岸の家や、川の流や、上り下りの船を見て居たのである。

しばらく辛抱してゐた天滿橋を南へ上る、御城の近所の下宿に比べて、月に十圓違ひではあるが、その差は十圓以上に思はれた。最初にあつたおかみさんのからりと晴れた態度と、因業貪欲吝嗇の内心を、ねちねちした御世辭で包んだ先の下宿の人間に比べて、いかに心地よく思はれたか。あの下宿では、女中に給金を拂ふのを惜んで、何時も手不足で困つてゐたが、此の宿には女手も相當にあるらしい。獨身者のならひとして、その女中がきれいであつてくれゝばいゝかと、虫のいい事も願つて居た。

斯ういふ明るい部屋ならば、屹度物を書くのにもいゝに違ひ無い。かねて腹案は熟し切つて居る長篇小說を、いつそ今日から書始めようかしら。會社から貰ふ月給だけでは、宿料を拂つて餘裕が無いのだから、小說を完成させるのは、財政上からも必要に迫られて居るのであつた。彼は、自分自身を鞭撻するやうに、初夏の靑空に向つて深呼吸をした。

一の三

「お待ちどうさま。」

廊下の方から、上草履の音をさせて女中が御膳を運んで來た。

「うちの御客さんは皆さん寢坊なのに、あなたは御早いんですねえ。」

「月給取はふだん寢坊して居られないので、つい癖になつて、折角の日曜にも早く目が覺めてしまふんですよ。」

三田は籐椅子から腰をあげて、部屋のなかの膳についた。

「昨夜は大變遲かつたんですねえ。御友達のところに行くといつてらつしやつたけれど、女の御友達のところで引とめられて御歸りになれないのぢやあないかと思ひました。」

「あゝ、おもての戸をあけてくれたのは君だつたかねえ。」
それをきつかけに、分厚な膝の上に御盆をのせてひかへて居る相手の顔を見た。ひどい癖毛を銀杏返に結つた、面皰の痕の滿面にはびこる、くりくり肥つた、二十六七には確かになる女だつた。何處にひとつ取柄の無い女だが、その面皰面が始終にこにこ笑つてゐる。いかにも人がよさゝうで、且きりやうのよくないのが、面とむかつて居てもひけめを感じないで、氣安かつた。
「東京はどちらです。あたしも東京に叔母さんがあつて、行つてた事があるんですよ。」
「僕は麹町。」
「あたしの叔母さんは本所。もつとも今では荻窪とかに越しちまつたさうだけれど。」
三田は齒が惡いので、米の飯を喰ふ事は不得手だつた。相手はもつと口をきいて貰ひ度いらしいのだが、彼はうつかり口をきくと飯粒がこぼれさうなので、一生懸命でもぐもぐ嚙んでゐた。
「あたし、生れはいちごなんですよ。」
きかれもしないのに、生れ故郷まで持出して話をつゞけた。
「へえ、越後かい。だうりでいとえの區別が無いと思つた。」
「あらやだ。すつかり直つたつもりでゐたけんど、矢張いけないかねえ。」

みそつ齒の口を惜氣も無くあけて、たまらなく面白さうに笑つた。
「東京に二年、伊豆の方にも行つてゐたし、靜岡にもゐたし、大阪にもこれで滿一年半になるんですよ。女中奉公はしてゐるけれど、それでも國になんか歸り度いとは思ひませんねえ。田舍はふんとにやだやだ。」
「そんな事を云つたつて、國には君の歸るのを待つてる人があるんだらう。」
「あらやだよ。あたしなんか家を飛出して來ちやつたんですからねえ。」
たうとうおもふつぼにはまつたと云ひ度さうな滿足の顏色をして、身の上話を始めた。
酒こそ飮むけれどおやぢは善人で、酌婦上りの後妻の尻に敷かれ、その後妻は一家の權力を握つて横暴の振舞ひが多く、殊に繼子の自分を邪魔にしていぢめるので、ゐたたまれなくなつて逃出したといふのである。
よくあるやつさといひ度さうな、興の乘らない相手の態度には頓着無く、額際を汗ばませて喋つた。
元來無口の三田は、つとめて相槌を打たうとは思ふのだが、結局つきあひ切れなくて、默々として二ぜんめの御飯を丹念に嚙んでゐた。

「もうよろしいんですか。」
「僕にはどうしても飯粒の味がわからないんだ。」
一仕事濟ませたやうな顏つきで箸を置いた。
「飯粒だなんて、罰が當りますよ。」
睨んで置いてから、又みそつ齒をあからさまに笑つた。
「よろしゆおあがり。」
わざと大阪言葉を眞似して、眞赤な舌を出した。

一の四

女中が行つてしまふと、思ひ立つたが吉日だと、三田は直ぐに机にむかつて、新しい原稿紙をひろげた。彼は會社員として衣食して居るので、ほかの作家のやうに十分時間を持つて居ないから、止むを得ず眞夜中にも筆を執らなければならないのであるが、ほんとは朝の光が好きなのである。眞白い肌に艶を持つて、ほのかに脂肪の浮いてゐるやうな紙の上に、一字一字自分の文字の並んで行くのは氣持がよかつた。此の分だと、一日十五枚といふ今迄の最高記錄（レコード）を破つて、二

十枚三十枚四十枚も書けるかもしれない。それを新聞社に賣つて受取る金高迄、浅ましくも想ひうかべた。

けれども、その進行は間も無く妨げられた。川にむかつた緣側と、その反對側の廊下を女中達が掃除し始めたのである。騷々しくばたばたする上草履の音は、高々と端折上げて太股もあらはに四這になり、頭よりもお尻を高く持あげて眞一文字に廊下を蹴つて行く姿を、まざまざと想像させる。

「御免やす。」

不意に目の前に、想像通りの姿が現はれた。やさしくて、ほがらかな聲だつたが、濡雜巾を手にして立上つた姿は、たつぷり上脊もある肥大なものだつた。あんこの澤山入つてゐる大束髮を手拭でつゝんでゐるが、その手拭の下に僅かにあらはれてゐる細い目と、低い鼻と、不釣合にちひさい口が、一齊に笑つてゐた。淡紅色の腰卷の下から、ずんどの足がぶよぶよと波を打ちさうに見えた。しかし、その皮膚は、小田原蒲鉾に似て、氣味の惡い位白かつた。

「あんさん、うちのおつさんに聞いて御越しやしたんやつてなあ。今、階下で話してはりましてん。天神橋の蛸安で逢うたんやと、こない云うてなあ。」

これも人のよさゝうな笑顔で、へだての無い口をきいた。
「おつさんていふ人は、あれは此のうちの何をして居る人？」
三田は止むを得ず洋筆（ペン）を置いて、成る可く淡紅色の腰巻より上に視線を保ちながら、相手に對した。
「おかみさんの御母さんの兄さんかいな。弟さんかいな。」
獨言のやうにいひながら、首をかしげて考へてゐた。
「ふうむ、あれが。」
あんな汚ならしいぢいさんが、此のうちのおかみさんの兄弟かと、意外に思つた。
「あのおつさんべろべろに醉拂つて、土佐堀の醉月の廣告をしてゐた。うちが綺麗で、靜かで、女中さんは親切で別嬪だつて。」
「しやうむない。おつさんは御酒（ごしゅ）あがつたらわややわ。」
口ではさう云つたけれど、矢張笑つてゐる。笑の外に表情の無いやうな顔であつた。
「あんさんもたんと上つてだつか。」
「先づたんとの方だらうねえ。」

「ほしたら御晝に一本つけましよか。」

「晝は喰べない。僕は二食だ。」

「へえ、二食？」

聲たけは驚いても、矢張表情は笑つてゐた。

「そんなら晩に御酌させて貰ひまつさ。」

「僕は御酌されるのは嫌ひだ。手酌で無いと折角の酒がうまくない。」

三田は正直にほんとの事を云つたのだけれど、相手は冗談として受取つたらしい。

「おやおや、えらい嫌はれ様。」

目も鼻も口もいつしよにして笑つたが、ばたりと雑巾を縁に落すと、四這になつて、小田原浦鉾の足を忙しく動かしながら、するすると遠くへ行つてしまつた。

一の五

「おい、人が寝てゐるのに、ばたばたしてやかましいぢやないか。」

突然、一間置いた向の部屋から、冗談らしく怒鳴る聲がして、障子のあく音が續いた。三田の

部屋が東の端とすると、その部屋は緣つゞきの西の端になる。
「えらい濟ませんなあ。」
と正直に詫びてゐるのは、優しくてほがらかな聲だつた。
「なあんだ、おつぎさんか。氣がきかないぢやあないか。犬に喰はれて死ぬがいゝや。」
わざとでは無いかと思はれる程太い聲の男は、緣側に出て來た氣配だつた。
「えらい惡おましたなあ。」
もう一度詫言葉を繰返したが、今度のは相手の調子に合せた冗談めかしたものだつた。
「大貫さん、あんた何時か知つてはりまんの。」
「九時頃かい。」
「阿呆らしい。十一時だつせ。お日様が笑うてゐやはりまんがな。」
からかひながら、一段と上草履をばたつかせて、もう一度三田の部屋の方へ、四這になつて拭いて來る。
「なんだいその恰好は。さかりのついた豚みたいだ。こう、まるでかうだぜ。」
「いやあ、大貫さん」

悲鳴をあげて、三田の鼻さき迄逃げて來た女の足下(あしもと)に、薄禿の頭を突出して四這になつて居る男があつた。浴衣の尻をくるりとまくつて、越中褌をまざまざと見せたのが、ひよいと顔をあげると三田の視線にぶつかつた。

「いや、こりやあ失敬。」

あわてゝ立上つて、頭を掻きながら姿を消した。

「なんだい、お客さんがゐるのか。昨日迄あいてゐたぢやあないか。」

と、負惜(まけをしみ)らしく誰かに云つて居るのが聞えた。

「さあ、大貫さんも顔でも洗つてらつしやい。お客さんは、階下(した)で御化粧最中ですよ。」

と云つてるのは越後女の聲だつた。

男は顔を洗ひに行つたのであらう、直ぐに越後は縁側へ出て來て、誰憚らぬ聲でおつぎに話かけた。

「いやんなつちやふねえ。さつさと起きて呉れればいゝのに、何時迄たつたつて片づきやあしない。あの看護婦さんも看護婦さんぢやあないか。よく羞しくないもんだねえ。」

これも裾を端折つて、赤いものを見せた姿で、はたきを手に持つて居る。

「ほんまにいやらしいなあ。」
おつぎは相變らぬ笑顔で受けた。
「あんな部屋の掃除なんかしてやらないからいゝや。」
「あんた燒いてるのやないのんか。」
「何いつてるのさ。」
舌うちして、まるまると肥つた低いのが、背延びをして大女の背中をどやしつけた。そして二人とも、止度無く笑つた。
笑ひ止むと、二人が交々に、向の部屋の有樣を、三田に話して聞かせるのであつた。

一の六

三番の御客大貫さんは、市内の某病院の醫員だつたが、院長の娘といゝ仲になつたのでずるずるに養子になり、副院長として納まつて居たが、生來の女好で、患者に對して怪しからない振舞があつたとか、看護婦にも手を出したとか、面白くない噂があつて、年中風波の絕間が無かつたが、最近に及んで又々二人の看護婦とくつつき、今度のは相手がえら物なので騷動が大きくなり、

養父の院長がかんかんに怒つてしまつたので、たうとう病院を飛出してしまつた。自分は醉月に宿をとり、保險會社の診査醫になり、女は派出看護婦會に入つて働いて居るが、時々斯ういふ風に逢ひに來て、泊つて行くのだと云ふ話だつた。

「それに、をかしいのは奥さんだねえ。あんなやくざな亭主に未練があつて、親達にかくれて逢ひに來るんだから。」

越後は三田の机のそばに坐り込んで、夢中になつて喋つた。

「それがなあ、晝日中でも、ちやあんと寢床とらせて、やすんで行かはりまんがな。」

おつぎは自身羞しくなつて、まつかになりながら、一大事らしくつけ加へた。

「看護婦さんも看護婦さんだよ。女の癖によくも平氣で居られるもんだねえ。何時だつて、十二時頃迄あれなんだもの。あれで大貫さんみたいなのが色魔つていふのかもしれないねえ。男ぶりは惡いし、のんだくれだし、怒つぽいし……」

「禿ちやびんだし。」

かけあひで惡口を云つて、えへらえへら笑つた。

「叱つ。看護婦さんが戻つて來やはつた。笑うたらあかんし。」、

笑ひ止まない朋輩に手を振つて見せたが、肝心の自分は顏中笑つてゐる。
「あんた、一寸見て御覽なさい。」
越後は三田にさゝやいて、身を乘出して向の方をのぞいてゐる。
十分好奇心はあるにはあるのだが、顏を突出してのぞく丈の勇氣は無かつた。
「別嬪かい。」
と、てれかくしに云つてみた。
「さあ、別嬪いふ程の事もおまへん。なあ、おりかさん。あてやつたらお米さんの方がえゝ女子やと思ふが。」
「大貫さんに訊いて見なけれやわからないよ。兩手に花だもの。どつちもいゝつて云ふかもしれない。」
「大きい聲したらあかん。」
おつぎも大きなからだを部屋の中に運んで來て、暑苦しく雙方から押合つて、二人は聲を忍びながら、全身を動かして笑つた。
もしもし龜よ龜さんよ

世界のうちでお前ほど
あゆみののろいものは無い
どうしてそんなにのろいのか

突然、縁側に出て居る看護婦であらう、讃美歌をうたふのにふさはしい細い聲で、幼いものゝ歌をうたひ出した。

「あなた、龜の子がゐてよ。」

「なに、龜がゐる。」

太い男の聲が部屋の中から應じて、これも縁側に出たらしい。

その聲に誘はれて、おつぎとおりかが馳出して行つた。

「あらあら泳いでゐる泳いでゐる。」

「あんた、來てごらんなさい。大きな龜が泳いでゐるんですよ。」

おりかは三田のところへ戻つて來て、促し立てる。龜の子よりも人間の方に興味を持つて、彼も誘はれるまゝに縁に出た。向ふの端の部屋の前に、先刻の男と並んで、宿の浴衣の胴中に、ちぎれる程伊達巻の喰ひ込んだ後姿を見せて、小柄な女が立つてゐた。欄干につかまつて半身乘出

して見ると、目の下の川波にゆられながら、大きな泥龜が悠々と泳ぎ廻つてゐた。

一の七

三田の勉強心は妨げられてしまつた。ひとつ置いて向の部屋にゐた男女の、みだりがましい姿を想像すると、心はおちつきを失つてしまふ。最初の勢に似もやらず、夕方迄かゝつて十枚にも及ばなかつた。その癖すつかり疲れて、部屋のなかば迄もさし込む西日に辟易しながら、ぐつたりと疊の上に寢ころんでゐた。

「えらいお待遠さんで御座いました。」

夜食の膳を持つて來たのは、又別の女中だつた。三田は起上つて、大きな伸をした。長い間机にむかつてゐたゝめに、肩が凝つてゐた。

「折角のお休に大層御勉強ですな。」

小ぢんまりと悧巧な顏つきの、十八九に見えるのが、素早く机の上の原稿紙へ目を走らせて、御愛想をいつた。

「濟まないが一本つけて來て下さいな。」

「御酒だつか。」
凝つた肩を拳骨でやけに叩きながら、三田のうなづくのを見てとつて、素早く立つて行つた。ほつそりと姿のいゝ、川魚の感じのする女だつた。

間も無く酒が來ると、

「どうか置いて行つて下さい。僕はうまれつき獨身者の性分と見えて、手酌か一番勝手がいゝ。」

と三田は眞面目な顔つきで、賴むやうにいふのである。

「あてのお酌ではあきまへんか。」

「決してそんなわけでは無いけれど、お酌をされると、どうしても勤氣が出て、何ていつたらいゝかなあ、つまりもひとつ味ないんだよ。」

「よかつたな。」

むつつりと愛嬌氣の無い三田の口から、大阪言葉を眞似したのが出て來たので、しんからをかしさうに笑つた。笑ふと金歯がきらきらした。

三田は親讓の酒飲で、これなくしては食慾の乏しさに惱む位だつた。まゝにならない下宿住居でも、晩酌だけはうまく飲み度いと念じて居た。何事につけても、他人に強ひられる事の嫌ひな

性分で、お酌をして貰ふのを窮屈がるのも、彼にとつては切なるものであつた。
しかし相手は全く冗談だと思つてゐて、默つて引さがりはしない。
「まあ、そないな事云はんと、もひとつお酌させて貰ひまつさ。」
さういはれると、口數が少なく、且同じ事を繰返していふ事をしない三田は、つがれるまゝに飮む外は無かつた。
「あの越後の人はおりかさんで、もう一人の人はおつぎさんだね。君は何ていふの。名前を覺えて置かないと不便だから。」
「あてだつか。米と申します。」
わざと切口上で答へて、叮嚀に頭をさげた。
「年齡は？」
「もうおばあちやんだつせ。」
輕く首を横に振つて答へない。さういふ細かいところに、外の二人とは違つて、客商賣に馴れた人間の風情があつた。
「お米さあん。おゝい、お米さあん。」

ひとつ置いて向の部屋から、大きな聲で呼んだ。
「看護婦さんが歸らはつたので、御機嫌がわるおまんねぜ。」
くすつと笑つたが、もうひとつお酌をして置いて、
「一寸御免やす。」
といふと、なほしきりに呼び立てる三番へ、小走にかけて行つた。
三田はとり殘されて始めてゆつくりした氣持になつた。前の下宿とは違つて、手綺麗な料理で、酒も意外に結構だつた。手酌で飲んで、さつさと飯も濟ませてしまつた。
日が暮れると、對岸の家々の燈火が水に映つて、あたりの景色は一段と立勝つた。川風の涼しい縁側の椅子に腰かけてゐると、三番でお米を相手にくどくどと管を卷いてる男の聲が聞えて來る。
「あれえ、わるさしたらあかん。」
どたんばたん揉あふ物音につゞいて、陽氣に笑ふ聲も聞えた。
三田は夜の空を仰ぎ見ながら、旅愁を感じてゐた。

二の一

御旅館醉月は嬶天下だつた。亭主はおかみさんよりも年下で、或る工業會社の事務員を勤め、宿屋の事には一切口出しをしなかつた。朝は早く出勤し、夜はおかみさんの相手をして晩酌の盃をなめるが、到底太刀打の出來る柄では無く、女房の酒の濟むのを待つて飯を喰ふと、少しの分量でも長く醉を保つ酒に負けて、ごろりと横になつていゝ氣持でうたゝ寢をする。極端なだんまりやで、止宿人と顏を合せても、輕く頭を下るばかりで、口をきく事は殆ど無い。會社の同僚とのつきあひも無く、飲んだり喰つたり、見たり聽いたりの道樂も無い。たつた一つ、此の人にしてと意外に思はれるのは花合で、三百六十五日札を手にしない日は無い。その方の仲間が集つて來ると、夜どほし勝負を爭ふ事もある。さうで無いと、帳場をしまつて、湯に入つて、からだの樂になつたおかみさんと、さしで遊ぶのがおきまりだ。

「あんた、二三年いきましよか。そないして居たら風邪引きまつせ。」

とおかみさんに揺り起される迄は寢てゐる。それから差向で十二時近く迄やつて居るが、亭主の方は勝つても負けても、うんともすんとも云は無いで、念入りに考へて札を打つ。おかみさん

の方は勝つても負けても、一人ではしやいで喋つてゐる。猪の出るのは五段目やとか、ありがた山の時鳥とか、いづれあやめとひきぞわづらふとか、坊主まる儲けとか出まかせな駄洒落を、年中繰返して居る。

おかみさんは、肉體的にも亭主を壓倒する力を持つて居た。胃弱者に見るやうな蒼黑い顏つきの、細つこい亭主にひきかへて、がつしりと恰幅のいゝ、顏色も艶々して、造作もはつきりしてゐるし、男性的の聲はあけつ放しの性質そのまゝであつた。若い時には何處とかの新地に出て居たとかいふ事で、その面影は多少殘つて居た。宿屋を始めたのは餘程前で、世話になつて居た人が死んでから、止宿人の一人と一緒になつた。それが今の亭主である。

おかみさんには子供が無かつた。女の子を一人貰つて育てゝ今は十五になるが、後々呂昇はんのやうな娘義太夫にすると云つて、文樂の男太夫に本式の稽古をして貰つて居る。きりやうはよく無いが、おかみさんの實の娘だと云つても通りさうないゝ體格で、流石に咽喉の太さが目につくのであつた。おかみさん自身もなかなか顏を見せなかつたが、娘は絕對に客の部屋には出さなかつた。

おつさんおつさんと呼ばれて居るのは、おかみさんの母親の弟で、何をしても物にならず、身

内の者に迷惑をかけながら六十近くなつてしまつた人間で、醉月にころがりこんでからでも數年になる。川岸を利用した上方風の、地下室とでもいふ可き風呂場をうけ持つて居る丈で、小遣錢を貰つた時は何處かに飲みに行くし、まるつきり懐中の空つぽの時でも、何處といふあて無しにうろついて居るやくざで、其の日其の日をもて餘し切つて居た。

外には若い料理人が一人と、おつぎおりかお米の三人の女中が居た。

「うちの女子衆は蟹みたいなもんや。ひつくりかへして見ん事には、雄やら雌やらわからへん。」

と、それがおかみさんの得意の冗談だつた。

二の二

客室は六つあつた。二階の川に臨む方に三つ、反對の往來の方に向いて二つ、階下に一つで、三田の占領して居る川を見下す六疊が一番、其隣の十疊が二番、大貫の居る八疊が三番、三田の部屋と廊下をへだてた八疊が四番、それと襖一重の六疊が五番、階下の六疊が六番だつた。

いつたいに夏場は閑散なので、時折一晩二晩泊る人があるばかりで、今では月極の三田と大貫の外には客が無かつた。

日がたつても、氣安く口のきけ無い三田は、宿の者に不思議な人間と思はれて居た。朝、會社に行つて、夕方歸つて來ると、湯に入つて一本飲んで飯にして、それから机にむかふと、そのまゝ十二時一時になるのが通例で、その間にお茶を飲む事も無く、手を叩いて人を呼んだ事は一度も無い。時々は他所で食事を濟ませて來る事もあるし、夜更に戸を叩くやうな事もあつて、そんな時には屹度深酒の香がしたが、別段足下もふらつかずに、さつさと二階に上つて行く。醉つても醉はなくても、だんまりむつつりで、味もそつけも無いのが、みんなにとつて氣づまりだつた。小言もいはず、注文もない、凡そこれ程手のかゝら無い客は曾て無いのだが、それがかへつて窮屈だつた。

「大貫さんみたいな好かん人無いわ。」

「醉ひたんぼで、いやらしい事ばかりいうて。」

と口々に惡くいひながら、三田などゝは比べものにならない程人氣があつた。醉ふと必ず手を握つたり、抱きついたり、引倒したりするし、夜更でも手を叩いて水を持つて來させたり、茶をいれさせたりするし、用事が遲いと怒鳴りつけるし、おまけに月末の勘定も溜つてゐるのだが、それでも會社の診査用で地方へ出張でもして、數日歸らない事があると、

「大貫さんは何時戻つて見えるのやろ。」
と誰かの口から、さも待佗るやうな言葉が漏れるのであつた。
「あて、三田さん何やらこはいやうな氣がしてかなはん。」
新客好きで、未だ見ぬ客の前に膳を持つて行く事の好きなお米さへ、三田の御給仕は二三度で懲りて、成る可く外の者に讓る事にしてゐる。
「あの眼がこはいのや。あて、あのやうに目ばたきせん眼を見た事無いわ。」
おつぎも多少同感で、直ぐに相槌をうつた。
「けつたいな人いうたらあれへんなあ。何いうても、ふんふん云ふだけで、あれで何が面白いのやろ。」
「用事があつたら何なりというて下さいと云つても、用事は無いよと、こない云はるのや。」
「かなはんなあ。」
と投げたやうに云ふものもあつた。
「あれでも女子を見たら、何とか思はるやろか。」
「阿呆らしい。女子の嫌ひな男つて見た事無いわ。」

勝手な評定をしては笑草にしたあげくが、「けつたいな人」だといふ結論を繰返すばかりだつた。

二の三

何時迄も三田が「けつたいな人」の域を出ないのにひきかへて、彼の友達田原は、時々遊びに來ては、人氣を一身にしよつて行つた。

田原は三田と同窓であるが、持つて生れた熱情と、生一本の正直がわざはひして、方々の會社に勤めは勤めても、上役と衝突したり、職工の味方になつて株主攻撃の演説をしたりして、紡績會社でも、汽船會社でも、電力會社でも永續しなかつた。れつきとした父親と、親類うちに立派な政治家や事業家のある御蔭で、今は阪神間に在る車輛會社の常務取締役を勤めて居る。到底下役はつとまらないから、いつそ重役にして見ようといふ一門の考であつた。

「匙を投げた結果が重役か。」

と口の悪い三田は友達をいやがらせた。

始めて田原が醉月にやつて來た時は、素晴しく立派な會社の自動車で乘りつけた。

「三田公ゐますか。」

と玄關に立はだかつて、大きな聲で云つた。

「三田さんですか、ゐらつしやいますよ。」

飛んで出たのはおりかだつたが、おもてに待つて居る自動車を見ると、叮嚀に膝をついて改めて頭を下げた。

「ゐるなら上るよ。」

いふかと思ふと靴を脱いで、梯子段を先に立つて上つた。

「あら、そちらではありません。そつちははゞかりです。」

うしろからついて來たのが、あわてゝ注意すると、

「あゝさうか、失敬々々。」

とざんぎりの頭を掻きながら眞赤になつた。誰憚らぬ高調子だが、その實ひどいはにかみやで、羞しがる度に白皙の面が眞赤になる。

「おい、靜かにしないか。外のお客さんの迷惑だ。」

友達の聲をきゝつけて、苦り切つた三田が部屋の中から廊下に出て來た。

「外に御客なんかゐさうもないぞ。なあ、姐さん。」

負惜を云ひながら、田原は早くも女中に親しさを示した。

「よう、素晴しい部屋だなあ。おまけに姐さん達が別嬪と來てるから、お城のねきの高等御下宿とは比較にならんぞ。三田公の月給では、月末が心許ないなあ。」

狹い部屋のなかを、洋服の長い脚で歩き廻りながら、床の間の松に鶴のかけものを、わざと叮嚀に見たり、縁側に出て川の景色を眺めたりした。

「まあ坐らないか。騒々しくて爲方が無い。」

「いや坐らないよ。三田公の新居検分も濟んだから、これから新地へ御ともを仰せつける。たまにはうまい酒も飮ましてやらないと、東京にゐる三田公のお母さんに濟まないからなあ。姐さん、こいつのお母さんがねえ、田原さんせがれが大阪に參りましたら、ようく監督して下さい。どうぞ一人前の人間になれるやうに目をかけてやつて下さいと、涙を流して賴んだものだ。こんな強突張でも、我子となると可愛いんださうだ。」

「いゝ加減にしないか。暑苦しいふざけ方はよしてくれ。折角湯から上つたところなんだ。」

おりかが腹を抱へて笑ひこけてゐるので、一層三田は不機嫌になつた。

「よし、それでは支度しろ。自動車が待たせてあるんだ。」

「いやだ。今日は此處でうまい酒を飲ましてやらう。おりかさん、此の社長さんにお膳を出してやつて下さい。」

「さうか。こいつはいやだと云ひ出すと始末の悪い奴なんだ。よしよし、社長さんも下情に通じとく必要があるからなあ。」

田原は淡白に同意して、廊下に出て行つたと思ふと、梯子段のところから階下に向つて、大きな聲で叫んだ。

「おゝい、小笠原。自動車歸つてよおし。」

二の四

階下に下りて來たおりかは、帳場にゐる者に面白いお客さんとして田原の事を紹介した。

「立派な自動車に乘つてゐらつしやつたが、社長さんだつて事ですよ。」

「へゝえ、社長さん？　三田さんの會社の社長さんか。」

おかみさんも乘出してきいた。

「その癖ちつともたかぶらない、面白い事ばかり云つてゐて、三田さんの事でも三田公三田公だ

つてさ。」
おりかは苦虫を嚙みつぶしてゐる三田の様子迄も想ひ出して、外の者をうらやましがらせる程笑つた。
お膳が揃ふと、
「あても行つて見よ。」
お米もおりかの後(うしろ)について、一つ宛運んで二階に上つた。
「いよう、こいつあ驚いた。俺も此のうちに宿替しよう。」
田原は仰山に後へ身を反(そ)らした。羞しさをまぎらす爲めには、どうしても冗談口をきかなくてはゐたゝまれないのであつた。
「なんですの。あての顔になんぞ書いておまつか。」
自分のきりやうに十分自信のあるお米は、うつすり化粧した顔をあかりの方へ向けた。
「書いてあるとも。シヤンと書いてある。」
「いやあ、悪いお方。そないな事いはれるのやつたら、あつちへいにまつさ。」
わざと立上らうとするのを、

「ううう、待つてくれ、待つてくれ。もう何も云はんからお酌お酌。」
拜むやうな手つきをして引とめて、盃を取上げた。二人の女は、それが社長さんだと思へば一層をかしくて、脇腹を抑へて笑ひ倒れた。
三田は額に八の字を描いて、默々として盃を重ねてゐた。彼は友達の肚の底迄知り盡してゐた。此の男は、正面の切れない人間なのだ。てれかくしに下手な輕口を叩いてゐるうちに、止度が無くなつて、自分でも困つてゐながら、きれいに切上るうでが無い。その弱味をかくす爲めに、又ふざける。俺のやうな重苦しい根性もよくないが、此の男の態度も面白くない。——彼はそんな事を考へてゐた。
「三田公、此の酒は飲めるよ。お前の宿だから、どうせ高等御下宿程度だらうとたかをくつて來たが、こいつあ掘當てたぞ。實際いい酒だ。」
「そんならもう一つ。」
「いかんいかん、俺はお米さんのお酌でなければ飲まないよ。おりかさんは三田公の方についでやつてくれ。」
「あらやだ。社長さんはそんな惡口なんかいふもんぢやありませんよ。」

「あんた、三田さんとこの社長さんだつか。」
どうも様子が社長らしく無いとも思はれるし、社長だとするとお酌甲斐があるやうな氣もして、お米は膝を乘出した。
「うむ、三田公んとこの社長さ。こいつの首を切らうとも、月給をあげてやらうとも、此の胸三寸にあるんだ。」
　上着をぬぎ捨てたホワイト・シャツの胸を叩いて見せた。
「ほんまだつか、三田さん。」
「ほんまだ。」
　三田は面倒くささうに首を縱に振つた。
　豪酒の三田は何時迄も盃を放さなかつたが、田原は忽ち醉つてしまつた。
「さあ、外にも別嬪がゐるなら連れて來い。お家内はんも御寮さんも娘はんも呼んで來い。何んでえ。何んでえ。三田公。下らねえ面あしやあがつて、眼玉ばかり光らせてやあがら。」
　わけのわからない事を、本性たがはない生醉ひで、持前の甲高い聲で怒鳴つてゐたが、夙に分量を過した酒に脊骨がしやんとしなくなつて、いきなり眞後にぶつ倒れたまゝ、鼾をかいて寢て

しまつた。

二の五

田原が三田の勤務先の社長で無い事はわかつたが、立派な車輛會社の重役だといふ事で、少からず宿屋の尊敬をうけ、そんな地位の人があゝ迄砕けてゐるといふのが、一段と人氣を集めた。その御陰は三田もかうむつた。車輛會社の重役で、自動車を乘廻す人を友達に持ち、對等のつきあひをして居るといふのが、何となく重味をつけ加へる事になつた。

「社長さんどないしてはりまんのやらう。面白い方だんな。」

徹頭徹尾、別嬪でシャンだトテ・シャンだとおだてられたお米は、殊に田原贔負だつた。

「ああ見えて、あの男程眞正直な人間も少いし、あれ程內氣な奴も無いんだぜ。」

當の本人のゐない時は、三田はしきりに其ひととなりをほめたが、その批評は女達には信じ兼る事ばかりたつた。正直だとか、內氣だとか、涙脆いとか、人がよすぎるとか、品行方正だとかいふのは、みんなの期待する事では無かつた。それよりも、氣さくだとか、さばけてゐるとか、冗談ばかりいふとか、面白い人だとか、さう云ふ美德であり度かつた。

「いつしよに學校を出やはつたのやさうやが、矢張出世する人は何處か違うたるなあ。」

帳場にゐるおかみさん迄も、三田と比べて田原の性質をほめ度かつた。

その田原が二度目の訪問は、全くみんなの待遠しがるところだつた。

或晩遲く、田原から三田に電話がかゝつて來た。

「もしもし、僕三田です。」

「あんた三田さんだつか。えらいお久しおまんなあ。」

と答へたのは女の聲だつた。

「田原さんでは無いのですか。」

「田原さんも此處にゐてはります。あんた、あてだんが。」

北の新地で蟒とあだなを取つた女だつた。田原の會社の取引先の宴會で、これから二次會といふところだが、つまらない連中だから逃げ出して、外のうちでゆつくり飲むから、出て來いといふ電話だつた。

「今晩は駄目だ。僕は書物が忙しいから失敬すると田原に云つてくれたまへ。第一もう十時過ぎだぜ。」

「十時たつて十二時たつてかめしまへん。三田公とも云はれるものが出て來んなんて卑怯たつせ。」

何時もの事たが、蟒は十二分に醉拂つて居るらしい。

「あゝ卑怯だとも。さよなら。」

三田は面倒くさくなつて、さつさと電話を切つてしまつた。部屋にかへつて書きかけの原稿を續けたが、間も無くおもてに自動車がとまつて、田原の高調子が筒ぬけに聞えて來た。

「やあ、今晩は。いようお米シヤン。相變らず綺麗やなあ。」

どたんばたん梯子段を上る入りまじつた足音がしたが、襖をあけて先づのめずり込んたのに、蟒たつた。

二の六

人にすぐれて脊の高いのが、ぐでんぐでんに醉拂つて、長々と疊の上に身を横たへた。田原も酒でくたびれて、床柱に上半身をもたせかけ、兩足を前に投出して、今にも舟を漕ぎさうな有様だ。

「姐ちやん、お酒おくんなれ。あつうくして。」
「いけないよ。此處は待合ではないんだ。こんな夜更に醉拂が飛込んで來る丈でも迷惑なんだ。」
三田は洋筆を置いて、手のつけられない相手をたしなめてみた。
「えらい濟んまへんなあ。そやけどなあ、そないえらさうに云はんかてよろしゆおまつしやろ。夜更でも夜あけでも、人を泊めるのが宿屋の商賣だつせ。」
「そりやあ人を泊めるのは商賣だらうが、これから酒を飲むのは營業妨害だよ。外の御客に申譯が無い。」
「かめへん、かめへん。あんたは飲まんかてよろしい。そんな卑怯もんはほつといて、あては車掌さんと飲むのや。姐ちやん、一本二本飲んだかてかめしめへんなあ。」
「えゝえゝ、どうぞたんと上つとくれやす。」
お米を始め三人の女中は、廊下に立つてあつけにとられて居たが、うなづきあつて階下に下りて行つた。
酒が來ると、蟒はコツプを求めて、
「さ、三田公。むつかしい顏せんと飲みなれな。あんたのえゝところは酒の飲つぷり丈や。外に

木は無い、え丶箍ばかり。こりやこりやと。」
ぐぐぐつと半分ばかり飲んだのを、三田の鼻先へつきつけた。
「おい、田原。寢ちまつちやあ困るよ。」
果してこくりこくり居睡を始めたのをよび覺まして、
「爲方が無いから此のコツプは飲むが、飲干したら歸つてくれ。人騷がせは嫌ひなんだ。」
とまだしも正體のある友達の方にいひきかせて、蜂の手からコツプを受取ると、一息に干してしまつた。
「あかんあかん。そんな半分しかない酒なんか飲んだら、三田公の名折れだつせ。」
蜂は手を叩いておかはりをいひつけて、又なみなみとついだのを強ひた。三田は何もいはずに、それも亦一息に飲んでしまつた。
「さ、田原。約束通り歸つてくれ。」
「歸る。おい歸るよ。」
田原はふらふら立上つて、一人で部屋を出て行つたが、蜂はおちつき拂つて、手酌でコツプ酒を浴びて居る。

田原は危ない足どりで梯子段を下りて行つた。

「社長さん、お歸りだつか。あんたの御つれさんは？」

「あいつは三田公に惚れてやあがるんだよ。うつちやつとけ、うつちやつとけ。」

女中達に見送られて、待たせてあつた自動車で行つてしまつた。

「えらいげいこはんがあるもんやなあ。」

「あの人ほんまに三田さんに惚れてゐやはるのやろか。」

「えゝ取組やし。」

勝手な事を云つてゐたが、すつかり好奇心をそゝられてしまつた。十二時を聞いて大戸をおろした時、おりかは足音を忍んで二階に上つて行つた。三田の部屋をひそかにのぞいて見ると、女は疊の上に眞うつむけに寢てゐたが、三田は机にむかつて、何かせつせと書いてゐた。

翌朝早く、おりかは目が覺めると直ぐに、再び三田の部屋をのぞいて見た。ほのぼのと朝の光のさし込む部屋のなかで、女は三田の男枕をして、足の方には夜着をかけて熟睡してゐたが、三田は昨夜（ゆうべ）と同じ姿で、机にむかつて書きものをつゞけて居た。

三の一

例年よりも、一層堪へ難い夏だつた。一番の部屋も、朝のうちこそ川風が涼しいが、夕方三田が會社から歸つて來る頃は、西日の眞盛で、川水もどんよりと澱み、部屋いつぱいに差込む日脚を除ける爲めにカアテンを引くと、風は少しも通さない。西日の室のやうな部屋に歸るのは氣が進まなかつたが、會社に居る時間も辛かつた。心懸が惡くて、未だに間着の紺サアジを着て、汗みどろになつて居たのである。

嚴格な家に育つて、學生時代は、どんな儀式があらうとも、薩摩絣の着物に小倉の袴ときめられて居た。大學を卒業した時、始めて世間並の春夏秋冬の衣類を一通こしらへて貰つたか、其後月給取になつてからは、全く親の扶助を絕たれてしまつたので、自分の取高では、到底着物なんか出來るわけが無かつた。卒業の時にこしらへて貰つた着物が、年々着古されて行くばかりで、新しいものは一枚も殖えなかつた。元來衣類には無頓着だつたから、盆暮の賞與が手に入つても、着物をこしらへる考にはならないで、みんな酒になつてしまつた。

夏になると、勤人は一齊に、白いずぼんに白い靴、アルパカか何かのぺらぺらした上着を着て、

涼しい顔をして居るのが普通だが、三田は四月頃から引續いて、たゞ一着の紺サアジだつた。

今年こそは盆の賞與で夏服をつくらうと、豫々望んでは居たのだが、洋服に廻す丈の餘裕が無く、結局我慢してしまつた。どうもあのぴかぴか光るアルパカや、縫ぐるみの狐のやうな白ずぼんに白靴も、いゝ好みでは無いと、負惜みはいふものゝ、紺サアジの色の褪せた間着姿も、決して見た目のいゝものでは無かつた。どうしても原稿を稼ぐ外に途は無いと決心だけはしたものゝ、一篇の小説を組立るのは、なかなか容易の事で無かつた。毎晩々々机に嚙りついて、全身汗になつて苦勞してゐるうちに、何時しか七月もなかばになつた。

毎日紺サアジを氣にしながら、會社に出ると、一齊に上着を脱いで仕事をしてゐる事務室の中で、たつた一人自分丈が、白鷺の群にいぢめられる鴉のやうだつた。

洋服が汚なく、且時候違ひであるばかりで無く、靴もひどかつた。かけがへが無いので、ぱくぱく口の開いたのを我慢して穿いてゐたが、全く絶望になつたので、此の方は金高も洋服に比して遙かに少いので、何時も會社のゆきかへりに前を通る靴屋で、半靴をあつらへた。

一週間たつて、宿へ屆いた靴を穿いて見ると、まるつきり大きさが違ふ。

「これはをかしい。これでは歩けやあしない。」

宿屋の土間で、引摺るやうな足取で二三歩運んでみた。
「あらやだよう。なんて間抜な靴屋なんだらう。他所のうちに持つてくのと間違へたに違ひ無いよ。」
その靴を靴屋の小僧から受取つたおりかは、頓狂に叫んで笑つた。額に立皺を寄せて、不機嫌そのもののやうな三田が、重たさうに足を引摺つてゐる姿がいゝ笑ひものだつた。

三の二

元の通り箱に納めたのを抱へて、三田は會社の行きがけに靴屋へ寄つた。
「此の靴は誰か外の人の注文したものでは無いだらうか。ためしに穿いてみたところが、二廻も三廻も大きくて、とても歩けやあしない。」
店頭で仕事をしてゐる主人らしいのに、箱から取出したのを見せた。
白地の仕事着のむざんに汚れた膝の上に、出來かゝりの踵の高い女靴をのせて、丹念に検分してゐた蠏目のおやぢは、鐵緣の眼鏡をかけ直して、佛頂面をして出て來た。何の挨拶もしずに、暫時靴を取上げて、三田の顔と見比べて居たが、

「違ふ事あらへん。」

と獨言のやうに無愛想な口をきいた。

「だつて穿いて見せればわかるが、まるでぶかぶかだぜ。此間寸法を取つたのは、若い人だつたが、あの下圖つていふのか、足型といふのか、あれを出して見ればわかると思ふが。」

おやぢは面倒くさゝうに手を延ばして、仕事臺の下から雜記帳仕立の寸法帳を取出した。

「お名前は。」

「三田。」

いちいち指先を舐めながら、一枚々々めくつて、

「違ふ事あらへん。三田樣とちやあんと書いてある。」

さう云つて、ぽんと帳面を叩いて向ふに投出した。

「よし、そんなら穿いて見せよう。」

三田は相手の強情らしい、不精髯のまばらな顔を睨むやうに見ながら、店口に腰をかけ、自分の破靴を片方だけ脱いで、新しいのを穿いて見せた。

「見給へ。こんなにだぶだぶしてゐるぢやあないか。出來あひならば知らないが、あつらへて寸

法を取つたものが、これ程大きさが違ふ筈がない。これは乾度外の御客のだぜ。」
「いんえ、違ふ事あらへん。寸法もきちんと合うてある。」
もう片々の靴を顔の高さ迄持上げて、出來上りに滿足してゐるやうな目つきをして見てゐる。
「寸法かあつてるつて？　そんなら寸法の取違ひか。それにしても餘り違ひ過ぎるぢやあない
か。」
「うちは此の商賣を二十年からやつてゐるが、寸法違ひなんて事は、一度もあらしめへん。」
「たつて此の通り足に合は無いぢやあないか。」
不死身のやうなおやぢのわからずに苛々して、三田はぶかぶかの靴を穿いてゐる足に力を入れ
て空を蹴つた。しまつたと思ふひまも無く、紐はしつかり結んであるのに、大きな靴はすぽんと
脫げて、恰度店の前で遊んでゐたお河童の女の子の横面に飛んで行つた。
不意を喰つて女の子は、おびえた顔をして三田の方にふりかへつたが、いきなり大きな聲で泣
出して、店のなかに馳込んで來た。驚いて立上つた三田の側をすりぬけると、奥の間に消えてし
まつた。其處には母親がゐるのであらう、何かいふ女の聲につれて、泣聲は一段と高く聞えた。
三田はちんちんもがもがで、往來の靴を拾つて來た。すつかり恐縮してしまつた。

「これでは爲方が無いから、間違ひでないのなら直してくれたまへ。」
さう云つて、あわてゝ自分の破靴を穿いた。
「置いて行(い)ておくんなれ。」
おやぢは愈々佛頂面をして、いひ捨てたまゝ仕事臺の前に戻つて、どつかりと胡坐(あぐら)を組んだ。
それつきり、仕事にかゝつてしまつた。

三の三

その日の夕方、三田は同僚の一人と途中迄連立つて歸路についた。靴屋の前を通るのは心がひけたが、運惡く今朝の女の子が、二三人の友達と、大きな毬を股ぐらをくぐらせくぐらせ突いてゐるところだつた。
ころころと轉がつたのを追かけて、往來のまん中に馳出して來たお河童が、ひよいと顏をあげて三田を見ると、ばたばた店の中へ飛んでかへつて、
「阿呆(あほ)。」
と叫んだ。畜生と思つて振かへると、店の中の仕事場から、おやぢの爛目が睨んでゐた。

それつきり、三田は靴屋の前を通るのがいやになつた。

四五日たつて、靴は又届けられたが、入口が少しばかり狭くなつた丈で、大きい事には變りが無かつた。堅く堅く紐を結んでも、靴篦も指先の援助もかりずに、穿く事も脱ぐ事も出來た。それは便利だが、一歩々々歩く度に、足のうらから風が吹くやうな氣持がする。どうしても、靴屋が他所の注文に應じて作つたのを間違か、故意にごまかして寄越したか、若しさうで無いとすると、最初は飛んだ間違ひをしたが、今ではいつたん張り出した強情たから、あく迄もそれを押通さうとするのであらう。それだと尚更憎む可きである。どうしてももう一度直させるか、これを突返して新規に作らせるか、どつちかにしなければならないとは思つたが、すぽんと脱げた靴が女の子に當つた時の、自分の大人氣無い姿を思ひ出すと、三田は再びあの靴屋の店に足踏みする氣にはならなかつた。

赤禿の、まばら髯の、爛目のおやぢの佛頂面と、お河童の女の子の靑んぶくれの顔を思ひ出して、其のぶかぶかの靴の踵で踏躙つてやり度かつた。そんな靴をおめおめ穿いてゐる姿を、靴屋のおやぢに見られ度くなかつた。三田が遠廻りして會社へ通ふ心持は、ひとしほ深くなつた。

みちをかへてから、殆ど毎日出あふ娘があつて、三田は遠廻りを少しもいとはなかつた。何故

もつと早く、此の道を選ばなかつたかと思つた位、最初から其の人に心を引かれた。年齢は十七八か、まだすつかり發育し切らない、いはゞ八分目位大人になりかけたみづみづしさだつた。あんまり多過ぎない髮は何時も銀杏返で、洗ひざらした單衣(ひとへ)ものに、めりんすの帶をしめた哀れつぽい姿の、うしろつきがひどくよかつた。彼の學生時代に、萬龍靜江などゝ並び稱された繪葉書美人の濱勇といふのに、優しさと憂ひを含ませた顔立ちだつた。

此の人に對して、三田は紺サアジとぶかぶかの靴には全く閉口してしまつた。大概出あふ場所は朝も夕方も同じで、裏通りの餘り廣くない町筋を、向ふから來たと見ると、たゞさへ歩きにくい足もとは、一段と重たくなつて、涼しい風の通る朝の日蔭にも、彼は背中迄汗になつた。

段々近づいて、擦れ違ふ時は、三田は動悸が高く打つて、無闇に足が早くなる。先方は年頃の娘によくある稍伏目の姿勢で、電信柱とすれすれに、はじつこの方を通つて行つて了ふ。中肉中脊といふよりも、ちつとばかり丈(せ)の高い後姿丈が、三田の憚りもなく見送るところだつた。みなりの粗末なのに似ないで、いつも洗ひ立ての足袋を穿いてゐるのが、殊の外三田の好みに媚びた。

三の四

その娘が、どういふ身柄であるか、なかたか見當かつかなかつた。すべての様子は、町かたの貧しい家の娘で、母親の手助をしながら御針でも内職にしてゐさうな風だが、毎朝毎夕同じ時刻に同じとこで逢ふところから考へると、矢張何處かの會社か銀行に勤めてゐるのかもしれない。それにしては、近代の社會的經濟的產物なる所謂職業婦人の型にははづれ過ぎて居る。そのはづれて居るところがいゝのだが――と三田のあたまには、その娘のことが絕えず浮んでゐた。

三十を越して一人でゐる三田は、自分自身は獨身の氣安さを惡く無く思つて居るが、兩親、殊に母親は、一日も早く嫁を持たせ度いと思つて、今迄にも他家の令嬢の寫眞などを見せた事もあつた。しかし、三田には令嬢趣味がちつとも無かつた。同年輩の文學者などが、令嬢崇拜だとか、讃美だとか、女學生はとても堪らないなどゝ昂奮した筆致で書いたり、唇を乾かして喋つたりするのを、何か眞實で無い心持のやうに思つてゐた。すつかり親に庇護されて、自分自身には何の力も無いくせに、いやにつんとすまして居るのがいやだつた。あのなか味はからつぽの氣位が堪らないのだ。

そんなら、又他の小說家や、彼の會社の連中などか夢中になる程、玄人の特徵も頂けなかつた。お座つきの如くきまりきつた洒落のやりとりや、何もわからないお客相手の藝事に得意になつて、

先祖代々贅澤をしあきて來たやうな顏をしてゐる藝者の、何處が粋なんだか、すつきりしてゐるのだかわからなかつた。

子供の時分の事で、戀とはいへないが、うちの近所の鹽煎餅屋の娘を、ひそかになつかしく思つてゐた事がある。その娘は、あいにく藝者になつてしまつたが、次には菩提所の門番の娘に同じ心を寄せた。つまり、素人だらうが玄人だらうが、値うちも無いくせに、おもひあがつてゐる奴が嫌ひなのだ。

その點で、朝夕往來であふ娘は、ぴつたりと彼の好みにはまつたのである。澤山見かける職業婦人が、耳かくしだ、七三だと新規を競ひ、寢卷のやうな洋服を着て見たり、白粉と紅丈ではいくら濃く塗り立てゝも滿足出來なくなつて、まゆずみを使つたり、黑子を描いたりしてゐるのに、あの娘は何時もつくろはぬ銀杏返で、白粉も刷いてゐるかゐないかわからない位だ。はでな日傘をさし、手首には人造石のぴかぴか光る手提鞄をぶらさげるのが多いのに、あの娘は色の褪めた洋傘をつぼめたまゝ手に持つてゐる。日があたつて暑い時など、半巾で顏を押へてゐる事もあつたが、その傘は矢張開かれなかつた。あんまり古びてしまつたので羞しくてさせないのかと想ふと、一層いとしかつた。自分の紺サアジとぶくぶく靴にひきくらべて、その羞しさは底の底迄同

情する事が出來た。何とかして先方でも、自分の紺サアジに同情してくれないだらうかと考へて、あまりの馬鹿々々しさに赤面した事もある。

何といつても、先方は此方の存在を認めてゐないのが物足りなかつた。つゝしみ深い性質なのであらう、曾て一度も、ゆきあつてから振返つた事が無い。少くとも、三田は何時でもふりかへつて、娘の後姿を十分享樂するのだが、先方の視線とかち合つた事は一度も無いのだ。

彼は自分の容貌の、女の目をひく丈美しく無い事を忌々しく思つた。

三の五

或日、勤務先に田原が立寄つて、結局三田の宿で一緒に飯を喰ふといふので、連立つて來る途中、いつものとほり、銀杏返の娘にあつた。

「えゝ娘やなあ。」

擦違ふと直ぐに、田原はおどけた調子で云つて、目をまるくして見せた。

「なんでえ、三田公。あかくなつてやがら。」

田原は三田の背中を思ひきつてどやしつけた。

「忍ぶれど色に出にけり我戀はかなあ。」

あくまでも弱味を見せまいとする三田の根性は、さも平氣らしくつぶやかせたが、その癖彼は一層顔が赤くなつて、無闇に半巾で汗を拭いた。氣のいゝ田原は別段追及もしないで、一緒になつて笑つたが、三田は内心閉口してゐた。しかし、どうして不覺にも顔を染めたか、俺の心は本氣かなと、三十男のづうづうしさで、自分を遠方に置いて考へる餘地があつた。

「今日(こんち)はあ。お米さんはどないしてはる。」

「まあま、うちの社長さんだつか。」

あるじの三田はそつちのけで、

「さあ、お米さんの御酌で飲みましよか。酒だ、酒だ。」

と甲高い聲を張上げる。

「あんさんはそないえらさうに云ははつてもあきまへんなあ。せんどみたいに醉うてしまうたら、どもならん。」

「あれは爲方が無いよ。タンク見たやうな三田公や、名にし負ふ蟒を相手にしちやあ、とても堪らないよ。わいはお米さんと二人で、しんみり飲み度いんだ。」

「蜂さんかいな。あの御方は面白い御方だんな。」

「すこし面白過て弱るんだ。あいつは物好きで三田公に惚れてやあがるんだぜ。此間の晩も俺をだしにつかつて、泊つてゐきやあがつたんだらう。」

「おい、おい。人ぎゝかよ過るぜ。泊つて行つたといふと色つぽいが、蜂のはとぐろを巻いて行つたんだからひどいよ。」

三田は紺サアジを浴衣に着換へながら口を挾んだ。

「あてら、あの御方さん社長さんの御てかけさんかと思うてましてん。」

「ところがあいつは變物たから、夏も冬服を着てゐる三田公のやうな甲斐性無しと腐れあはうつていふのさ。變物は變物同志、こつちはお米さんと……」

「あれえ、わるさしたらあきまへん。」

それをきつかけに、お米は御膳をとりに行つた。

酒が來ると、田原は一層はしやいで、高調子のお喋は止度か無くなつて來る。

「なあ、三田公。先刻の娘はん素敵やつたなあ。」

すつかり忘れてゐたらうと思つたのが、又からかふたねになつた。

「お米さん、三田公はねえ、こんなおつかねえ面あしやあがつて、他所の娘はんに參つてゐやあがるんだぜ。物やおもふと人の問ふまでなんて、自分で云つてやあがるのさ。」
彼は面白がつて、途上で見た娘の美しい事、三田が差しがつて赤くなつた事などを、一流の大袈裟な話ぶりできかせた。
「何を云つてるんだい、往來でゆきちがつたばかりぢやあないか。」
三田は默々として飮んでゐたが、何となし思ひ當る心持がして、つい眞面目に取消す氣になつた。
「へえ、三田さんみたいな方でも、戀わづらひいふ事おまつかいな。」
お米は仰山に後へ反つて、ほんとに驚いたやうに三田の顔を見た。
三田は又不覺にも顔の赤くなるのを止め兼た。

三の六

田原が尾鰭をつけて話して行つたのを、宿の者は勿論信じはしないのだが、全く變人あつかひにして居る三田をからかふには、けつく面白い材料だつた。

「三田さん、あんたその娘さんに、毎日道で逢うてゞすの。」
「毎日つて事も無いけれど。」
「何處の娘さんです。」
「知らない。」
「何處ぞへ勤めてゐやはるのと違ひまつか。」
「それもわからない。」
「たより無い戀やなあ。」
そんな事を、三田の顔さへ見ればいふのであつた。それはお米ばかりでは無く、更に傳へ聞いたおりかもおつぎも、面白がつてからかつた。しまひには三田の方も此の話に擦れ切つてしまつて、
「今日は朝も晩も逢へなかつたから、氣持が惡い。」
とか、
「今日はゆきにもかへりにも逢へたから、御銚子のおかはり。」
などゝいふやうになつた。

あんまりのべつに安つぽくからかはれ、自分も冗談口のたねにしてゐるので、ひどくふざけた心持になつてしまつたが、それでも三田の本心は、もつとその娘の事をよく知り度いと思つてゐた。

何時も出あふところは同じだが、それからさきはどつちの方角に行くのか、つけて見度いとも思つた。夕方かへりみちを待ちうけて、何處に住んでゐるか、どんな家なのか突とめ度いとも思つた。しかし、さういふ輕々しい行ひをしては、つゝましやかな娘に對して申譯無いなどゝも考へた。

その娘と出あふ道が、一週間ばかり水道工事の爲めに片側往來止になつた事がある。いつもは西から東へ行く三田と、東から西へ來る娘とが、雙方左側の端を通るのであつたが、片側通行止の御蔭で、擦れ擦れに擦れ違ふ事になつた。三田は汗臭い紺サアジを氣にしながらも、娘の胸のつゝましやかなふくらみや、まつげの長い目の特徴などを、前よりもはつきりと認めたばかりでなく、右の耳の下に黑子のあるのも發見した。

たゞさへ工事の爲めに狹められたところへ、荷車が通りかゝつて、恰もゆきあつた娘ともろ共に、電信柱のうち側へよけなければならなかつた時は、娘の袂が彼の手に觸れて過ぎた。三田の

心持の上で、その袂は人肌のやうに彈力のある感觸を殘して行つた。三田は自分の手の中に、何時迄もその感觸をとゞめて置き度かつたが、もとより愚な願ひだつた。兒戲に類するとは思ひながら、その手の甲を唇に持つて行つた。自分の汗の鹽辛さの外には何等の味も無かつた。

水道工事が濟んで、道の廣さが元の通りになると、三田と娘とは、向側と此方側との端と端を歩く事になつた。なんとなく往來の幅が、廣くなつてしまつた氣がして、掘かへされた土の色のまだ生々しいのに、ばらばら蒔いた小砂利の上を、三田はぶかぶかの靴で、やけになつて踏んで行つた。

四の一

八月に入ると、三田は休暇を貰つた。一年間に二週間を公休日とする會社の內規だつた。久振で東京に行つて見ようかとも考へたが、此の休暇を利用して長篇小說を書上げてしまはないと、これから年末迄の生活費にも小遣錢にも困る事は明かなので、肚を据ゑて籠城ときめた。

「三田さん、あんたお休みにも御勉強だつか。湯治か海水にでもいんだらどうですか。」

と訊かれると、肩身の狹いおもひをした。此頃――殊に大阪では――休みといへば何處か、海

か山に遊びに行くのがはやりなのに、狭くて暑い一室にとぢ籠つて、原稿の上に額の汗が落ちて洋墨の滲むやうな事も度々ある有様は、なさけなくもあり、又悲壯でもあつた。

宿の人は、彼が小說を書くといふ事は知らないので、何か會社の仕事を持つて歸つてしてゐるのだらうと考へて居た。本を讀むとか、字を書くとかいへば、すべて勉強といふほめ言葉をあてはめるのがおきまりだから、ふだんは氣ぶつせいな、とつつき場の無い三田ではあるが、矢張うちに居る人だといふ一種の贔負から、他人にむかつては、勉強家といふ一點でしきりにほめた。「うちの一番の御客さんなあ、あんな感心な人も珍しおまつせ。朝から晚までちいんと机の前に坐つて、あてらにはわからんむつかしい事書いてゐやはるわ。夜は夜で、十二時前に寢床に入らはつた事は無いのやで。一時二時になる事も珍しい事あらへん。」

とおかみさんが第一に、自分の友達や、御花の仲間や、時には出入の車屋や、八百屋にまで自慢した。

それにひきかへて、三番の大貫は、朝は十時頃に起きて會社に出て行き、市内の診査をかこつけに早々歸つて來てしまふ事もあるし、さうかと思ふと會社の方のおもてむきは地方へ出張する事にして旅費と日當を貰ひ、實は半分は宿に寢てゐたりする事もあつた。

「大貫さん、あんたも三田さんのやうに早うに起きて出勤せんと月給が上りまへんで。」

など丶、女中のおこしてゐる聲の聞えて來る事もあつた。

「あんた ゃ三田さんを見習うて、まちつと勉強したらどうですの。」

「三田さん三田さんと、若い男ばかりちやほやしやあかつて、怪しからんぞ。俺樣だつて勉強してゐるんだ。い丶かい、そもそも醫學上男女といふものはだね……」

「きやあ、誰ぞ來てえ。大貫さんがてんがうしやはるし。」

蒲團の中へ引擦り込まうとするのであらう、どたばた騷ぐ物音の、手に取るやうに聞えて來る事もあつた。

相變らず看護婦が泊りに來る樣子だつた。おりかの話では、お米もお相手をさせられる事もあるといふ事だつた。

「あのお米さんて人が、若いくせに大變なんですよ。なんでも十四の年から男を知つてゐるんだつて事だものねえ。」

自分達とは比べものにならない程きりやうもよく、すべてに悧巧ではしつこいのに對し、おりかとおつぎは攻守聯合の形であつた。

四の二

看護婦は小柄ながらに、眉毛の濃い目のはつきりした、口の締つたきつい顔で、いかにも度胸のよさゝうな女だつた。男のところへ泊込みに來ても、誰をも憚る色が無かつた。廊下であつたり、緣側の籐椅子に腰かけてゐると先方も緣側へ出て來たりして、三田も屢々顏を合せたが、先方の方がおちつき拂つてゐて、此方の方が目をそらす位だつた。女中などには無闇にいろんな用事をいひつけ、たまには大貫にかはつて、小言をいふ事もあつた。

大貫の妻だといふ、ひよろひよろと脊の高い、生際(はえぎは)の薄い、出齒の女も見た。別れてゐる夫に逢ひに來る爲めか、夏の盛りだといふのに、眞白に白粉を塗り、着物の好みなども派手(はで)だつた。

その日三田は何時もの通り、緣の籐椅子に腰かけて新聞を讀んでゐたが、夫人は三番の部屋から何氣なく出て來て、思ひもかけぬ人間に驚いて直ぐに引込んでしまつた。何かひそひそ話をしてゐたが、風の無いむし暑い日なのにも拘らず、やがて障子をしめてひつそりしてしまつた。

「いつも寢床(ねま)敷いてやすんで行かはるのだつせ。」

と女中の云つたのを思ひ出して、三田は淺ましくも耳を銳くしてゐた。

或日の如きは、夫人は四才か五才ばかりの男の子を連れて來た。

「さ、あんたは緣で遊んでおいで。」

といふ聲と共に、矢張り障子はしまつてしまつた。とことことことこ小刻にかける足音がしたと思ふと、せつせと原稿を書いて居る三田の目の前に、母親に似て上唇の厚ぼつたくとんがつたひよわさうな子供が、口尻によだれを垂らしながらあらはれた。たゞさへ子供好きのしない三田の顏を、怖さうに見てゐる子供の樣子は、可愛らしくなかつた。殊にその親どものふしだらにむらむらしてゐる三田の大きな眼玉は、おのづから子供を睨むやうだつた。

子供は口の中にキヤラメルか何かを含んでゐるらしく、白いエプロンに落ちるよだれは桃色だつた。來る途で買つて貰つたのであらう、ヂグスのやうなぢいさんの乘つてゐる自動車のおもちやをしつかりと胸に抱いてゐた。ぢいつと三田の顏を見返してゐたが、くるりと方向を轉換すると、たどたどしい足取で逃げて行つた

ほつとして、机に向直ると、間も無く又とことことことこ馳けて來て、ばあとでもいひ度さうに、三田の眼の前に姿を出す。此方が愛想笑でもするのを待構へてゐるやうな樣子だつたが、三田は怖い顏をして追拂つた。けれども同じ事を繰返すうちに、子供の遊戲心は反覆の律動にぴつ

たりとはまつてしまつた。三度目に來た時は、大事に抱いてゐた自動車を、三田の部屋と緣側との間の敷居の溝に走らせて見せた。その小ざかしさが憎らしくて、畜生と思ひながら、三田は大袈裟に拳骨を振上げて脅して見た。ところが、その誇張した動作が芝居じみてをかしかつたのか、子供はげらげら笑ひ出した。

叱ッ、あつちへ行け、といふふりをして見せると、子供の方でも手を振上げて、かへつて三田の方へ近づいて來た。三田が否々といふつもりで首を横に振ると子供もそれをうち消すやうに頭を横に振る。三田はすつかり參つてしまつて、思はず苦笑した。

子供はその笑を見逃さなかつた。兩手を前に突出すと、全然相手を甘く見た態度で、いきなりどしんとぶつかつて來た。驚いて向直つた三田の懷に、全身倒れかゝる勢ひで飛込んでしまつた。

「よせつたらよせ。」

三田は流石に聲を憚りながら、しがみつかうとする子供を胸から離したが、よだれにしめつぽいエプロンを、生溫く掌に感じた。

「淸、淸。」

いつたんしめた障子を殘らずあけ放す氣配と共に、母親の我子を呼ぶ聲が聞えた。

四の三

そんな風な大貫の生活も長くは續かなかつた。看護婦が泊り込んで、例の通り正午迄寢込んでゐたところへ、大貫夫人が子供を連れて來たのである。

「あ、奧さん、一寸お待ちやして。」

臺所で働いてゐたおつぎが、一大事とばかり飛んで出ようとするのを、帳場で煙草を飮んで居たおかみさんは、

「ほつとけ、ほつとけ。」

と小聲で止めて、

「さあ、奧さんお上りやして。ぼんぼん、えらい大きうならはつたなあ。」

冷かすやうな御世辭を投げて、又悠々と煙を吹いた。

「御免やす。」

夫人は何も知らないで、子供の手を引きながら二階へ上つて行つた。

「おかみさん、よろしおまんのか。」

「かめへん、かめへん。あてのうちは待合茶屋とは違ふさかい。」
持前の男性的の高笑をしながら、おかみさんは少からず痛快がつた。
間も無く二階の三番では騷動が持上つた。階下の帳場にはよく聞えないが、三田の部屋には筒拔だつた。
「あんた、これは何といふ事ですの。」
「馬鹿ッ。何だつて許しを得ないで人の座敷に入つて來た。」
どすのきいた太い聲に續いて、怒に震へるきちがひじみた叫びと同時に、子供が高く泣き出した。
「お前さんは出て行つておくれ。出て行け、けがらはしい。」
「靜かにしろ。みつとも無い。」
「みつともないのはあなたですが。こんなぢごくを引ずりこんで……」
「なんだと。貴樣こそ恥知らずだ。」
「恥知らずはそつちやの事た。」
いつ迄も夫を難詰して止まない妻に對して、内心すつかり閉口しながら、大貫は氣勢を見せる

爲めに、

「馬鹿ッ。」

とか、

「貴樣こそとつとと歸れ。」

などゝ怒鳴つて居た。看護婦はどうしたのか聲も立てず、子供は時々思ひ出しては、一段と聲を張上げて泣いた。

梯子段にも廊下にも、宿の女中や娘や料理人が、昂奮した樣子で、しかも面白さうに聞耳を立てゝ居た。

だが、何時迄も同じ事を繰返すばかりで、解決はつかないので、彌次馬は次第にあきて來た。いゝ氣味だと思ひながら、微笑を嚙殺してゐたおかみさんも、あんまり埒があかないのに腹が立つて來た。生來氣の早い方だから、一肌拔いでてきぱきとさばいてやり度い心も動いて來た。うちの女中達に、自分のうでのあるところを見せてやり度くもあつた。

「ほんまにしやうむない人達たらあらへん。」

と舌打しながら、おもたい體を起して二階へ上つて行つた。

四の四

あくびの出さうな顔つきで、部屋の中の騒動を立聴して居た女中達の、一齊に緊張した目に見送られながら、おかみさんは少からず芝居がゝりの氣持で、三番の襖をあけた。

「ごめんやす。」

部屋の眞中にたつた一つ敷いてある蒲團の上には、胡坐を組んだ大貫と、二つの枕がのつかつて居た。涙で白粉を斑（まだら）にした夫人は、その裾のところに半分膝を乘せて、すつかり取亂した姿だつた。看護婦は蒲團の外に滑り出て、寢衣（ねまき）に細帶できちんと坐つてゐた。子供は母親の背後（うしろ）の壁にくつついて、泣きじやくつて居た。

暑くるしい夏の一夜を、しめ切つて寢てゐたまゝ晝過に及んだので、むうつと人臭いにほひが鼻を打つた。おかみさんはその爲めに一層腹が立つた。

「大貫さん、あんた此の有様なんだんね。」

苦々しげに一座を見廻しながら、ずうつと縁側の方まで通つて、蒸されて腐つたやうな室内のいきれと共に、此の人々の關係をも唾棄するやうな手荒な調子で障子をあけた。油を漂はす川水

が、強い光を天井に反射して來た。

「おかみ、まあうつちやつといてくれ。直ぐにかたをつけるから。」

宿料の借があつて、ふだんから頭の上らない相手に出て來られたので、大貫の聲には力が無かつた。

「うつちやつとけいうたかて、これがほつとけますかいな。」

おかみさんの男のやうな大きな聲は、時にとつて威壓する力を持つて居た。夫人も看護婦も男の子も、堅くなつて息を呑んだ。

「奥さん、何もいはんと今日は歸つとくんなはれ。こないな所でぐぢぐぢいうてゐやはつたら御身分にさはりまつせ。あとのことはあてがあんじようしますさかい、ぼんぼん連れていんどくんなはれ。」

先づ厄介者を一人々々片づけようと、おかみさんは、あさましい姿をして居る夫人の方に正面切つていひ出した。

「あては長々と御談義をする事はようしまへんで、わがの胸によう問うて見とくんなはれ。大貫さんのしてはる事がよう無いのはわかつてあるが、それかというてあんたもなあ、親御さんの手

前は綺麗に別れた人やおまへんか、あてはそない聞いとります。そやつたらなあ、よそのうちへ來て、大きい聲しやはるやうな事は愼むのが人の道だつしやろ。あては女學校へも行かんしやうむない女子やけれど、物の理窟いふものは、教育があらうと無からうと、つゞまり同じ事やろと思うとりまんね。」

諄々と說得する積りは積りなのだが、聲の調子を低める事の出來ない性分なので、叱咤するやうに聞えるのであつた。

「なあ、腹も立ちまつしやろ。無理も無いとはあてかて思ひますが、悋氣したらあかんといふ事は、淨瑠璃にもおまんがな。」

なんにも云はずに歸つてくれゝば、後は自分がなり代つて大貫の不心得を糺彈してやると云ふのがおかみさんの言葉の內容だつた。

細君は亭主にむかつた時とはうつてかはつて、一言の返答もしずにうなだれて聞いて居たが、心の中では口惜いのか、何時の間にか手巾を顏にあてゝ泣いてゐた。その泣顏をみんなに見られるのがいやなのであらう、おかみさんの言葉が切れると同時に、靜に立上つて身じまひを直すと、何もいはずに子供の手をとつて、部屋の外へ出て行つてしまつた。

四の五

細君の後姿を見送つて、自分の成功に滿足したおかみさんは、
「さ、次はあんたの番だつせ。」
と看護婦の方へ向直つた。
「おい、おかみ。わかつたよ、わかつたよ。」
大貫は意外に根強くやりさうなおかみさんの態度に怖れをなして、嘆願するやうな、冗談にしてしまひ度いやうな調子でさへぎつた。
「あんたには發言權はおまへん。」
柄にない漢語をつかつたが、冗談では無く大眞面目だつた。
「あんた、あてに仰山ものをいはせんと、歸つとくんなれな。大貫さんの奥さんを歸らせて、あんた丈とめて置いたら、あてが奥さんに濟まんよつてなあ、喧嘩兩成敗いひまつしやろ。」
すつかりいゝ氣持になつて、からからと笑つた。殆ど、豪傑笑といふ形容があてはまりさうな高笑だつた。

隨分氣丈な女ではあるが、看護婦も流石に一言も無く、疊を見詰めて固く坐つてゐた。

「なんだい、歸れ歸れつて、そんな野暮な事を云はなくたつていゝぢやあないか。」

大貫が見兼て、叉横合から口を出した。

「まだ寢てゐるところに氣ちがひ女がやつて來やあがつたもんだから、顔も洗つてゐないし、飯も喰べやあしない、お小言は後程ゆるゆる拜聽する事にして、朝飯だか晝飯だか知らないが、何かしらお腹のたしになるものを喰はしてくれよう。」

どうにかして話をそらしてしまはないと形勢益々險惡だと見てとつて、努めて甘つたれたやうな物言ひをした。

「よろしゆおま。御膳の支度やつたら夙に出來たるさかい、何時なりと上つとくんなれ。そやけどなあ、御ぜんが濟んだら早うにいんで貰ひまつせ。」

「なにを云つてるんだい、君んとこは宿屋ぢやあないか。そんなに人を追ひ立てるやつがあるもんか。」

大貫は冗談めかした調子で云つた積りだつたが、どうしたものかおかみさんはぐつと癪に障つた。

「へえ、あてとこは宿屋だす。宿屋は宿屋に違ひおまへんが、逢引宿とは違ひまつせ。」
「なんだつて。おかみ、少し言葉が過ぎやあしないかい。」
意識して、うんとどすをきかした音聲で云つた。
「なんでだんね。逢引宿や無いいうたのが惡おまんのか。えらい濟んまへんなあ。」
相手の態度に反撥して、おかみさんも苛立つて來た。
「あんたはうちの御客さんに相違おまへん。先月のも先々月のも未だ御勘定は頂きませんが、御客さんには違ひおまへん。けれど、此の御方はあてとこの御客さんではおまへんで。ちよいちよい見えて泊つて行かはる事は知つてはゐれど、つひぞ宿料も御茶代も貰うた覺えは無い。お客さんで無い人に泊つて貰ふ事はいらんさかい、さつさといんで貰ひまつさ。」
「馬鹿な事をいふなよ。宿料も茶代も拂つたら文句は無いだらう。」
「あきまへん。外の御客さんの障りになるやうな騷ぎを起されたら營業妨害や。あんたにもいんで貰はんならん。」
「なにを云つてるんだい。さう昂奮してしまつちやあ話が出來ないよ。おかみ、今日はどうかしてゐるぜ。」

「あてはどないにもあらしまへん。今日云はうか明日云はうか思うてゐた事を云うた丈や。なあ、大貫さん、今迄滯つた宿賃なんか一錢も貰はんかてよろしいさかい、今日限りいんで貰ひまつせ。」

おかみさんの高調子は激怒に震へて、一際家中に響き渡つた。

「あては面倒な事は嫌ひや。今直ぐに御膳を持つて來させるよつて、飯食べたらいんどくんなれや。よろしか。」

いひ切ると立上つて、大貫の呼止めるのを振切つて部屋を出た。廊下にはうちの者が、みんな怯えた顏色で樣子をうかゞつてゐた。

「さ、早う御膳を運ばんかいな。いつもの樣に、御銚子つけてな。」

おかみさんは、ぐつとおちつきを見せて、事も無げに帳場へ下りて行つた。

四の六

其の日の午後、大貫の方は愚圖々々に濟ませる積りでゐたが、おかみさんは如何しても出て行けといひ張るので、大貫も眞劍に怒り出し、何だ彼だと激論のあげく、二箇月餘の宿料と酒代共

他の借金を殘して、看護婦と一緒に出て行つた。その後姿にむかつて、おかみさんは仰山に鹽花を撒きちらかした。

「これでうちもせいせいした。矢張三田さんみたいな堅い人がよろしいなあ。」

おかみさんは女中を指圖して三番を掃除させながら、何のかゝはりも無い三田に聞けがしの高聲で喋つて居た。

その日から暫くの間、三田は此の宿のたつた一人の客だつた。

久々の休暇にもかゝはらず、朝から夜更迄机にむかつて、小說を書續けて居るので、肩や腰が痛む位だつたが、それでも會社で機械のやうに齷齪働いて居るよりはましだつた。

ところが、休が三日たち五日たち、あの娘とあはない日が續くうちに、三田は何となく心寂しくなつて來た。朝と夕方と、いつも娘と往來で擦れ違つた時刻になると、默つて机にむかつては居られない焦躁を感じた。自分ながら羞しいと思ひながら、彼は朝夕散步に出かけるやうになつた。

夜更かしの甚だしい三田は、平生會社に行くのに餘裕の時間が無く、起きる、顏を洗ふ、飯を喰ふ、洋服に着換る、靴を穿く――といふあわたゞしいものであつたが、朝の散步の爲めには、

特にふだんよりも早く起きた。何時も出勤時間に娘と出あふ場所は大概きまつて居るので、早目に宿を出て其の地點を通り越し、電車通迄出かけた。此の朝の散歩の二日目に、娘が南の方から梅田へ行く電車を降りるところを發見して、それと無く尾行し、まんまと其の勤務先をつきとめた。

それは宿を出て、娘と出あふ通り迄行かないうちに南へ曲る一筋の路の、小半町とも無いところにある、日華洋行と云ふ金看板を掲げた、昔の大店を今風に改造したやうな、大阪特有の店構だつた。冬は硝子のはいつた重い開閉扉がとりつけられるのだらうが、夏の事とて日かくしにつけた葭戸を押して、娘の後姿は暗い店の中に消えた。それ丈でもおもひを達した氣がして、三田ははればれした顔つきで宿に歸つた。

「三田さん、昨日も今日も、えらい早うから御散歩だんな。」

女中が何かからかひ度さうな口をきくのを、

「どうも休になつてから、ふだんよりも運動が惡いので、お腹が空かなくてしやうが無い。」

といゝ加減な返事をして、さつさと二階に上つてしまつた。

夕方又時間を見はからつて出かけた。日盛に働く爲めか、朝よりも全體に汗ばんだやうな、疲

れた風情がひとしほよかつた。先方が何も知らないのに、あとをつけるといふのは、申譯が無いやうな氣もしたが、大通迄ついて行つて、滿員の電車にやうやく乘込んだのを見屆けた。
日華洋行といふのは、雜貨を支那に輸出する店だといふ事を調べた外には、何の發展する事も無く、三田はたゞ往來で娘にあふ事を樂しみにしてゐた。

五の一

三田の長篇小說「贅六」が完成したのは八月の末だつた。大阪に舞臺をとつて、大阪といふ商業都市と、大阪人といふ金儲中心の特殊の性格に、多少皮肉な批評を浴せながら、表面は寫實的描寫を以て、都會の日常生活の幾場面を展開したものである。三田は幾度となく繰返して讀んで、なほあき足り無い節もあるにはあつたが、差迫つて金も欲く、又暑中をつめて勉強した疲勞が氣力を奪つて、只管休息を求める爲め、豫而寄稿の依賴を受けて居た新聞社に持つて行つて、金に換へた。
いつたん纒つた金が入ると、忽ち氣が大きくなつて、身の程知らぬ豪遊をきめるのが三田のおきまりだつた。またたくひまに素寒貧になつて、年中みすぼらしいみなりをして暮らすのはよく

ない性分だと常々知つては居るのだが、どうしても直らなかつた。
　新聞社を出ると、町角の自動電話で田原の會社へかけた。
「なに？　例の長篇が出來上つたつて。おごれ、おごれ。」
　車輛會社の重役は、忽ち書生時代の態度に變つて、頓狂な聲を出した。
「それなんだよ。若し今晩君がひまなら、久し振りでゆつくり飲まうかと思ふんだ。」
「よおし、飲まう。場所は？　わかつた。例の所か。」
　話を切つて、外に出ると、三田は勇んで宿に歸つて、紺サアジを一帳羅に着換へた。
「お出かけだつか。」
「今晩は少し遲くなるかもしれません。たぶん十二時迄には歸る積りだけれど。」
「十二時が一時でも、お泊りやしても大事おまへん。」
「おたのしみだんな。南だつか、北だつか。」
「お早う御かへり。」
　女中達が口々に何かいひながら送り出すのを、三田は無言で受けて宿を出た。日暮方の川の面（も）には、中之島あたりから漕ぎ下つて來た貸端艇（ボウト）が、不規律にゆきかひ、うすら靑い空には、蝙蝠

がしきりに飛んでゐた。
三田は北の新地へこゝろざした。元來彼の生眞面目な性分は、所謂遊びをありのまゝに享樂する事が出來なかつた。粋がつたり、通がつたりする趣味は全然無かつたし、女と見れば物にしないでは置かない人々の所業も、彼の内部にひそむ人道主義が許さなかつた。藝者に對しても或人々のやうに理想化して讃美する事は思ひもよらず、さりとて頭から馬鹿にする事も出來ず、友達として取扱ふ外におちつくところが見出せなかつた。
「三田さん、あんた何が面白おまんの。うたうたははるのんでも無し、〔九字削除〕のんでもなし……」
彼と田原が時々行く席貸のおかみさんが、づけづけと訊いた程、みんな不思議がつて居た。
「別段面白いとは思はないね。いゝお酒を飲ませてくれて、他人が邪魔さへしなければ、關東煮で結構なんだ。」
といふのが三田の返答だつた。——座敷がきれいで、おちついて酒が飲めるといふ事の外に、新地のお茶屋も左程の魅力は無かつた。
しかし、三田は少からずいそいそして、新地へ足を踏み入れた。自分の勉強が四百枚の長篇を

しあげ、それによつて多額の金を得たゝめに、何の心配も無く酒の飲めるといふ事は、彼にとつて何よりも樂しかつたのである。

五の二

きれいに掃いたあとに打水をした敷石を踏んで玄關にかゝると、
「まあ、三田さん、えらいお久しおまんな。」
と顔馴染の年とつた仲居頭が出て來て、奥の座敷に案内した。
「今に田原が來る。それ迄僕は寢てゐるから、何も構はないでくれたまへ。お茶もいらない。枕もいらない。」
「社長さん見えてゞすの。ほしたらあちらさんが御出でやしてから御酒だんな。」
三田の氣性を呑込んでゐる仲居は、客をうつちやらかして引込んでしまつた。
廣い座敷の中庭に近い端つこに座蒲團を出して、三田は柱にもたれながら狹く限られた町中の空を見て居た。東京風のおもてつきばかり堂々としてゐて、融通の利かない建て方で無く、廣くもない地面に使へる部屋を奥深く上手にとつた上方の建築だから、市中の物音は聞えて來なかつ

た。仕事を濟ませた滿足は、限り無く三田の心を安らかにした。

「社長さん御越しやしたぜ。」

仲居の聲を聞いた時、三田はうとうとしてゐた。

「やあ、遲くなつた。」

田原は入つて來ると直ぐに上衣を脫いで、

「三田公、例の濟んだんだつてなあ。ひとはこ位はいつたか。」

指先で圓(まる)をこしらへて冷かした。

「すつかりくたぶれちやつた。しかし、重役になつたやうな氣持だ。」

「何をいつてやがんだい。なつた事も無いくせに。」

無駄口を叩いてゐるうちに酒が出て、若い藝者があらはれた。

「いよう、はしけやし葉牡丹さんか。」

「なんだんねはつけよいいひまんのは。」

「俺と四つに組まうつていふんだよ。」

「社長さん、いけづやなあ。」

とられた手を振拂つて、
「三田さんおひとついきましよか。」
「あゝ、實にいゝ氣持だ。田原のやうな有閑階級には此の味はわかるまいが、大仕事をしたあとの酒程うまいものは無い。」
三田は口をきくのももものうい陶然たる心持で、盃の酒を樂しんでゐた。
「そんなにおいしかつたら夜どほし飲んでもかめしめへんわ。今にお葉さん姐さんも來やはるさかい、お相手もおまつせ。」
「あゝ、あの蜂はたしかに三田公に惚れてるよ。」
「あほらしい、誰が三田公なんかに惚れるもんか。」
突然廊下で大きな聲を出して、當の蜂がやつて來た。
「さ、飲まう飲まう。今も他所で、三田さんとをかしい云はれて來たのや。なんでやらうなあ。」
さも不平さうにつぶやきながら、田原のさす盃をうけた。
「あては三田公が好つきやわ。しかしやな、好きと惚れるとは違ひまつせ。よろしか。惚れるのやつたら、まちつと氣の利いた男に惚れるわ。」

「なんだい、もう醉つ拂つてるのか。」
三田も盃をさした。
「あかん、あかん、こんなちつぽけなもので飮んだかておいしい事あれへん。葉牡丹さん、コツプ貰うてんか。」
蟒のコツプ酒にはいつも辟易する三田も、仕事をしまつた思ひ殘りの無い心持から、その晩は強ひて反對しなかつた。

五の三

三田や田原が蟒と呼ぶお葉は、廣島の生れで、其處で藝者に出たのだが、大阪に來てからでも、最早十年になる。外土地から來たといふいはれの無い毛嫌で、兎に角一流の仲間入をした今でも、兎角蔭口をきかれるのであつた。當人にして見ると、生來の負けぬ氣から、毛嫌されると知れば知る程藝事にも人一倍勵んで、ひけをとるまいとするのが、時には喧嘩面になり兼ない。いひ出したら後へはひかず、お客だらうがなんだらうが、氣に喰はなければぽんぽんやつゝける。酒を飮むと止度が無く、自分自身面白くなつて、つとめ氣は無くなり、醉つぶれる迄飮まうといふ氣

性だつた。その癖頭腦が明敏で、三田のやうな異種を取扱ふこつも心得、叉猩々だとか蟒だとか云はれる大酒飮みに似合はぬ親孝行兄弟おもひで、弟は東京の大學に通つてゐて、間もなく學士になるといふ事だつた。

「かう見えても武士のたねだつせ。あては藝者みたいなしやうむないもんになつた體だから、一生三味線持つて暮らすけれど、弟やみなはちやんと教育して一人前の人間にせんならん。」

と醉つた口でいふ事があるが、さういふ時は自慢する氣色は少しも無く、我が身を寂しがる色が見えるのであつた。

少し亂暴なのには閉口する事も多かつたが、萬事てきぱきと切つて廻し、御世辭や御座なりが無く、傍若無人な醉體も、三田の面白がるところだつた。

「あゝ醉うた、醉うた。三田公、あて醉拂つちやつたよ。」

蟒は熱燗のコップ酒が廻つて、蒼白い顏が一層蒼白くなり、呂律があやしくなつて來た。

「ちつとも珍しくないよ。」

それに引かへて、三田は最初こそ陶然とした氣持だつたが、充分酒が沁みて來ると、かへつて體もきちんときまつて、膝も崩さずに盃を重ねてゐた。田原はとつくに落城して、座蒲團を枕に

して寝てしまつた。

「なに、ちつとも珍しくないたと。そんならそれでよろし。あてはあてで勝手に飲む。」

手酌でコツプになみなみ酌いだと思ふと、ぐぐぐぐと一氣に干した。

「さ、あんたも景氣よく飲みいな。お店の小僧さんみたいにお膝に手を置いて、かしこまつてゐられたら窮屈でかなはん。」

「それで窮屈なのかい。あんまり窮屈らしくも見えないぜ。」

「いゝえ、窮屈だ。人が何といはうとも、あては窮屈で窮屈でたまらん。第一この着物や帯か窮屈だ。」

「そんなに窮屈なら裸體(はだか)になるさ。」

「かめしめへんか。」

「かめしめへん。」

蜂の長身が立上つたと思ふと、するすると帯を解き、着物を脱いで長襦袢の胴中に伊達卷をきつく締め、足袋もとつて座敷の一隅にはふり出した。

「これでどうやらいきかへつた。これからあてと三田公と、あしたの朝迄飲みくらべや。」

蜂は又コップを取上げて、それを三田にさしつけた。

「いやだよ。僕はコップは嫌ひなんだ。どういふわけだか猫と慈姑と牛乳と生玉子とコップが嫌ひなんだ。」

「あほらし。コップが嫌なら湯呑にしたらえゝ。」

「それそれ、その湯呑も嫌ひさ。」

「そんなら茶碗。」

「その茶碗も……」

「えゝ男らしく飲みいな。」

蜂はしんからじれつたさうに、なみなみついだコップの酒を、三田の鼻先につきつけた。

五の四

醉へば屹度始まる蜂の無理強ひに、三田も盃を捨てゝコップで飲んだ。宵の口から賑やかに騒ぎつゞけて居た二階の大一座も散會したと見えて、三味線も歌の聲も聞えなくなつた。時々お銚子のお代りを持つて來るおちよぼの外には誰も顔を出さず、葉牡丹も何處かの座敷に貰はれて行

つてしまつて、家中がぐつたり疲れたやうな感じがした。
「あゝあ、寢た寢た。ぐつすりねちまつた。」
狸なのかほんものか、二時間近くも眠つてゐた田原がむつくり起きた。
「おい三田公、俺は失敬するぜ。」
田原は醉へば寢てしまひ、目が覺めれば直ぐ歸るのがおきまりだつた。
「いや待てよ。うどんを喰つて行かう。素饂飩といふやつをな。」
誰も相手にならないので、自分で手を叩いて注文した。それが來ると、さもうまさうに三つ平げて、思ひ殘す事も無く立上つた。
「おい蜂、これから三田公を口說くのか。」
「あほらしい。あんたみたいなねむつてばかり居る人は、とつとゝいんで貰うた方がえゝ。今夜はあてと三田公は御月見や。」
「けなりい、けなりい。」
田原は大きな欠伸をしながら行つてしまつた。
「僕も歸るよ。十二時迄には歸ると宿に斷つて來たんだから。」

「歸さないよ。」

蟒は空うそぶいた。

「明日（あした）は又勤があるんだからね。」

「あつたつて構はないよ。」

言葉尻に「よ」とつける時は、蟒は大阪人の所謂江戸詞（えどっこ）の積りなので、これも酔拂つてから出す癖だつた。

「降參してあやまるから歸してくれ。そんなに引止めるところを見ると、さては惚れてるな。」

「あほらしい。あんたみたいなへんちきちんに惚れはしないよ。あてには頭の禿（はげ）たえゝ人があるんだよ。」

「それぢやあ其の禿頭によろしく。」

三田は始めから坐り通しで、痺（しびれ）の切れた足を起した。

「あんた、ほんまに歸らはるのか。」

「歸るよ。」

「歸さん。」

いふかと思ふと長いからだを半分起して、いきなり三田の袂をつかんだ。酒で正體が無くなつてゐるので、つかむと同時に全身の重味で倒れかゝつた。袖つけから半分ばかりぴりゝと綻が切れ、三田もはずみをくつてよろよろと膝をついた。

「よし、それぢやあ一時迄と堅い約束をして飲まう。」

「けち臭い事いうてはるなあ。よろし、負けてやろ。そのかはりコップで、こないして飲むのだつせ。あてが飲む、あんたが飲む、あてが飲む、あんたが飲む、あてが飲む、あんたが飲む。おゝしんど。」

蟒は我意を通して三田を引止めたので、すつかり機嫌がよくなつて、そこらに林立するお銚子を集めて坐り直した。

五の五

「おい三田公。今夜は夜あかしでお月見しませうよ。」

「そんな奴があるもんか。午前一時迄とちやあんと約束したぢやあないか。」

「約束したにはしたけれど、あて面白くなつて來たのだもの。あんただつて、たまにはつきあつ

てもいゝだらう。」
「これだけつきあふ御客はまづあるまいぜ。」
「そこが三田公のえゝとこや。」
「そんなら惚れたか。」
「あほらしい。あてには……」
「禿頭のいゝ人がゐるだらう。」
「ほんまにいな。そやけどなあ、あては三田公が好きなんやわ。三田公だつて、あてが好きで無い事は無いのやろ。」
「好きだよ。大好きだよ。好いた同志さ。」
「そんなら好いた同志で飲みあかさう。よろしか。」
蟒はすつかり舌が利かなくなつて、同じやうな事を繰返しながら、それでも手を叩いて酒を呼ぶのであつた。三田も酔つて、もう一滴も欲く無かつた。早く宿へ歸つて寢たいと思ふばかりだつた。外の座敷の雨戸をしめる音が、あてつけがましく聞えて來た。
「えらいお仲がよろしゆおまんな。」

しきりに蟒が手を叩くので、先刻から姿を見せなかつた仲居頭の年寄が、兩手にお銚子を持つてあらはれた。

「なんや、二本ばかしの御酒なら、無いも同然や。もつと仰山持つて來とくれやす。」

「よろし、そんなら一打ばかり持つて來まつさ。」

氣のいゝ仲居はもう一度臺所へ引つ込んで、ほんとに澤山のお銚子を運んで來た。

「さ、三田公。あてが飲んで、あんたが飲んで、あてが飲んで、あんたが飲むのだつせ。」

蟒は第三者が見てゐると思ふと、一段と勢ひづいて、コツプを干しては直ぐにさした。あまりのしつつこさに三田も面倒臭くなつて、さゝれれば飲み、飲んでは返した。

「えらいやつちや、えらいやつちや。」

夏祭の花車や神輿を取巻いてはやすやうに、仲居は團扇を叩いて驚嘆した。

「もういけない。もう全く飲め無い。約束の時間になつたから歸るよ。」

三田は時計を出して見た。

「いかん、あんたが歸つたらあてが寂しうなる。」

蟒は又袂を捉へて放さない。

「よせよ。いゝ加減にしないと怒るよ。」
「怒るなら怒つて見ろ。どうしても歸るといふのなら、頭からお酒をぶつかけてやるよ。」
「それ丈けは堪忍してくれ。これがたつた一枚のよそいきなんだから。」
「堪忍しないよ。」
「勝手にしろい。」
少々芝居がかつたかなと、三田自身が思つた程きつぱりしたが、蜂はぐつと癪にさはつたらしく、いきなり熱燗の徳利を取ると、三田の頭から一氣にぶつかけた。
「あれ、お葉さん、なんすんのや。」
仲居はびつくりしてとめようとしたが、蜂は止められるとかへつて我意が強くなるたちだつた。
「かめへん、かめへん。あてが寂しうなるから歸つたらいかんいふのに、歸るいふやうな旋毛(つむじ)まがりの根性を直してやる。」
いひながら又一銚子三田の頭にそゝいでしまつた。
三田は默つて坐つてゐた。着物を通し、襦袢を通し、じつとりと素肌迄濡れてしまつた。頭髮(あたま)の中を這つて、額や頬邊を傳ふ酒の雫は、襟頸や懐(ふところ)に流れ込んだ。怒るだらうと思つた三田が默

つて坐つてゐるので、蜂は張合がぬけてしまつた。
「もう歸つてもいゝだらう。これ丈つとめれば許してくれてもいゝ筈だ。」
三田は暫時して、冷靜な態度で云ふと、亂箱にたゝんであつた羽織を濡れた着物の上に着て立上つた。
「三田さん、待つて。あても一緒に行く。」
座敷を出ようとする時、後から蜂が呼び止めた。

五の六

「三田さん、よう堪忍しやはりましたなあ。」
廊下へ出ると、仲居が聲をひそめて、氣の毒さうにいふのだつた。
「あの藝妓は醉はんとえゝのやが、醉うたらどもなりまへん。せんどもうちの御客さんがいゝやらしい事いうたとかで、えらい怒らはつてなあ、横ずつぽうを叩いたりして弱らされました。それが警察署の何たらいふえらい御役人さんでなあ。」
「醉つた時は爲方が無いよ。お互に二三升づつも飲んでゐるんだから。」

「そやけどなあ、あんた御氣味悪い事おまへんか。うちの浴衣と着かへはつたらどうだつしやろ。」

「夏の事だ。水を浴びたやうなものさ。」

三田はそのまゝ玄關に出て、一度しまつた門の潛をあけて貰つて往來に出た。

「三田さん、待つて。」

着物を着た蝶が、帶をしめながら追かけて來た。

月のいゝ夜だつた。更けた町を通る人影も少かつた。軒を並べる茶屋のおもても、一様に大戸が下りて、宵のうちの賑やかさの後だけに、新地の眞夜中は寂寞たるものがあつた。

「君のうちはそつちだらう。僕とは反對だ。」

三田は蝶が醉のさめた顏をして、先刻の亂暴を恥ぢ、自分に對して濟まなく思つてゐる心を見てとつた。その心で送つてでも來られては窮屈で堪らないと思つた。

「三田さん、あんたほんまに川べりの雁木へ行つて、あてと一緒にお月見しませうよ。」

蝶はもう少し前迄の亂暴なところはなくなつて、妙に靜かになつてしまつた。

「それは此の次にしよう。麥酒とサンドウイツチでもとゝのへて、舟で淀川をさかのぼるのもい

ゝかもしれない。」
「今夜はどうしてもあきまへんか。えゝ月夜なのになあ。」
感慨深い様子で、中空に蒼白い顔を向けた。
「此の次にしよう。僕はすつかりくたぶれちやつた。」
「そんなら御宿迄送つて行こ。」
「ようさよ。第一君の足もとは餘程危ないぜ。」
「大事おまへん。」
何といつても送るといふので、
「そんなら橋の所迄送つて貰はう。橋のまん中で月を見て、北と南に別れるのさ。」
それで蜂も納得して、二人は並んで歩き出した。夜風が通る度に、頭から浴びせられた酒が肌であつたまつて、異様な香を立てるのが強く鼻をついた。
新地を出て、電車路にそつて、約束の橋の上迄來た。一筋の川に碎ける月を、欄干につかまつてのぞいて見た。川上も川下も、烟のやうに朧に、水底のやうに蒼かつた。
「なんだか寂しいなあ。」

三田は酔がさめて、腸（はらわた）迄月光が沁みるやうな氣持だつた。
「ほんまにお月様（さん）いふものは寂しゆおまんな。あてら平生はゆるゆるお月さんを見る事もあらへんが、斯うして見てゐると、お月さんいくつ、十三七つと子供の頃に歌つた事なんぞ思ひ出しまんな。」
蜂は遠い幼い時の事から、數奇な今日迄を追想するらしく、何時迄も月を仰いで佇んでゐた。
「もう二時だ。さよならにしよう。」
「あけ方迄此處に斯うしてゐたいなあ。」
取縋るやうに欄干につかまつたが、おもひ返して、
「そんなら握手しませう。」
と手をさし出した。三田は固く握つて振つて、そのまゝ別れて歩き出した。

六の一

「三田さん、今日は休まはりまんの。起きんとよろしゆおまつか。」
ついぞ無い事で、前後不覺に眠つてゐるのを起された。深酒と睡眠不足で、頭も上らない程疲

れて居た。朝日が高く上つたので、しめきつた室のなかは蒸暑く、おまけに昨夜のコップ酒が祟つて、腸迄も熱つぽかつた。

「昨晩はえらい醉うてゞしたなあ。おもてをどんどん叩かはるよつて、くゞりをあけると、まあどうでつしやろ、むうつと御酒のかざがして、べゞはぐしやぐしやに濡れてあるし、えらいこつてしたぜ。」

三田の枕もとに坐り込んで、おつぎはさも面白さうに笑ふのだつた。あんこの澤山詰め込んである束髪も、年中笑つてゐる目も鼻も口も、三田の目にはたゞ朦朧と映るばかりだつた。

「なあ、三田さん。ほんまに休まはるのやつたら大事おまへんけどなあ、會社へ行かはるのやつたら起きんとあきまへんぜ。」

「よおし、起きるよ。」

他人に促される事の嫌ひな三田は、いきなりむつくり起上つたが、宿醉のからだは自由を缺いて、ふらふらと倒れかゝつた。

「危ない。」

おつぎは又全身を波打たせて笑つた。三田がよろけかゝつた身を支へた壁には、酒びたしにな

つた一帳羅の御召縮が、衣紋竹に兩肩を張つて、四角張つて懸つて居た。
三田は手拭をひつつかむと、逃るやうに地下室の洗面場へ下りて行つた。臺所の連中からも、一齊に冷かされた。頭から二三杯水を浴び、全身を冷水でごしごし拭いて部屋に戻ると、掃除も濟んでお膳が出た。まるつきり食慾は無かつたけれど、ひけめを見せるのも癪にさはるので、無理にお茶漬を流し込んだ。
「あんた蟒さんにつかまつて、飲まされたのと違ひまつか。三田さんも色男やなあ。」
おつぎはお給仕をしながら、しきりに昨夜の事を訊き度がつた。
「飲まされたには飲まされたに違ひ無いが、もう飲めないと云つたら、頭からぶつかけられちやつた。」
「えらい女はんですなあ。お客さんとらまへて、そのやうな事する藝妓はんがおますかいな。それでお商賣が出來るのやろか。男はんいふものはほんまに甘いもんやなあ。」
「どの男もどの男も、頭から酒を浴びせられるわけではないんだ。僕のやうな特別御氣に入りの男が、さういふ光榮に浴するんだよ。」
「へえゝ、あんたが蟒さんの御氣に入りだつか。」

「大好きなんださうだ。」
「矢張り惚れてゐやはりまんのやな。そやけれど、惚れた男になんで御酒かけたりするのやろ。」
「惚れてはゐないさうだ。僕も惚れられてゐるのでは無いかと思はれる節があつたものだから訊いて見たが、斷然惚れてゐないと云ふ返事だつた。どうせ惚れるのなら、あんたみたいなへんちきちんで無く、まちつと氣の利いた男に惚れますつて云つたよ。」
「三田さん、あんた……」
　おつぎは脇腹をおさへて笑ひ倒れた。三田にして見れば、宿酔で參つてゐるところを見せまいとして、強ひて言葉數も多く、冗談口もきくのだつたが、平生だんまりやで通つてゐるので、その冗談の効果は一段と大きいのであつた。おつぎはころがつて笑つた。

六の二

「あの着物このまゝにしといたら、着られしまへんで。仰山御酒が浸みたるさかい、洗張にやつて、縫直して貰うたらどうでつしやろ。」
　やうやく笑ひ止んだおつぎは、着物の事になると他人のものでも粗末にはしない女の根性で、

眞面目に心配するのであつた。
「あれがたつた一枚の他所行だつたが、むざんなめにあはされちやつた。なんとかなるものなら、なるやうにして呉れ給へ。近所に縫物をする人があるだらう。」
「へえ、別嬪さんの娘さんもおまつせ。」
「そんならその人に頼んでくれ給へ。どうせなら汚ならしい婆さんの手にかけるよりも、別嬪さんの方がいゝからねえ。」
三田は宿醉の重たい氣分を鞭うつて、會社へ出勤する爲めに洋服に着換へ始めたが、おつぎはゆつたりと坐つたまゝ、なかなか御尻を持上げ無い。
「三田さん、あの娘さん知つてはらしまへんか。何時もうちの裏の川べりで、洗濯してゐやはりまんが。」
「知らない。そんな別嬪さんがゐるかしら。」
「なかなかえゝ女だつせ。細りした姿で、あれが柳腰いひまんねやろ。」
「へえ、大したもんだね。何處の娘さん？」
「あんたが會社へ行かはる時通らはる、あこの耶蘇の眞向の家に、お父さんと二人きりで住んで

ゐやはります。」
「つひぞ、そんな娘さんを見た事が無いがなあ。」
「その娘さんいふ人がなあ、いろいろ噂のある人ですね。」
おつぎは、ネクタイを結びながら、うはの空で聞いてゐる三田の態度にあきたらず、どうかして話に興味を持たせようとするのであつた。
「そりやあ年頃の娘さんで、しかも柳腰と來れば、ちつと位の噂はあたりまへぢやあ無いか。岡燒半分いゝ人があるとか無いとかいふんだらう。」
「いゝえ、そんなんと違ひますわ。もつともつとえらい噂ですが。」
話の根本を手取早く出せばいゝと思ふが、一方は出し惜んで、なんとかかんとかもつたいをつけて話すのであつた。
「あては嘘やろと思ふのやけれど……」
「何がさ。」
「その噂ですがな。」
おつぎは矢張奥齒で嚙み殺してゐて埒があかない。

「なんだい、えらい噂つて。まさか夜中に化(ば)けて出るといふのでも無いだらう。」

「ところが、それですがな。化けて出るいひまんねぜ。」

相變らず笑の外には表情を知らない相手だから、噴出すのを堪(こら)へてゐるやうな顔付ではあるが。あまり意外な返事に三田も驚いた。

「へえ、化けて出るつて？　行燈の油でもなめるのかしら。」

「さあ、何をなめるのかしりめへんけれどなあ、晩方から綺麗に御化粧して、出て行かはります。」

　おつぎは持前のほがらかな聲で笑つた。

「なあんだい、そんな事か。僕はほんとに化けるのかと思つた。」

「ほんまに化けるのと違ひまつしやろか。お晝間は御仕事して、夜は御化粧して何處やらへ行かはるのだつせ。」

「はつきりいへば淫賣かい。」

　出勤の時間を念頭に置いて、三田は話にきりをつけようと思つた。

「まづ、そんなところでおまつしやろ。」

「よし、その淫賣さんに賴まう。」
三田は壁に懸つてゐる酒びたしの着物を指さして、扨て紺サアジの暑苦しい上着を着て、宿醉のだらけた頭とだらけた體を會社へ運ばなければならなかつた。

六の三

三田が會社へのゆきかへりに通る、敎會の眞向の家といふのは、二階建の二軒長屋で、天井の低い二階も階下も、おもてに向いた方はすべて格子造で、それを紅殼で塗り、入口のくゞりの中は土間になつてゐて、裏口迄つきぬけてゐるといつたやうな古風なものだつた。格子窓の障子のあいてゐる事はあつても、內部は光線が充分はいらないので、人が居るのか居ないのかわからなかつた。屋根も廂も、恐らくは土臺迄も傾いた古家で、此の新しいもの好きでは今正に東京を凌駕して亞米利加に追隨しようと云ふ大阪に、不思議にも多く殘つてゐる景色である。近松や西鶴の描いた時代から、今日迄立腐れつゝ燒殘つたものであらう。
その長屋から前帶結んだおかみさんでも出て來るのなら似合はしいが、年ごろの綺麗な娘が住んでゐるとは、つひぞ想はない事だつた。三田はおつぎの話を聞いてから、特に注意して見るや

うになつた。今迄は氣が付かなかつたが、窓の格子には、御仕立物と書いたちひさい木札が出て居た。

十日ばかりたつて、仕立直の御召縮は、三田の机の上に載つてゐた。

「教會のお向の娘さんがしてくれたの？」

「へえ、あんさんが別嬪さんの手にかけ度いいはゝつたよつて、あてが行つて頼んで來ました。」

おつぎは新しい興味を此の仕立直に持つて、しきりに微笑をつゞけてゐる。

「僕は毎日氣をつけてゐるんだけれど、つひぞその娘さんを見た事が無い。」

「ほんまだつか。あちらでは三田さんを知つてゐやはりまつせ。あんたとこの眼の大きい、紺の洋服着て、大跨に歩いて行かはるお客さんでつしやろと、こないいうてはりましてん。」

三田は顔が赫くなつた。何時の間にか先方が知つてゐたのが羞しいのでは無い。眼玉の大きいのを第一に認められたのも爲方が無い。人よりも大跨なのも特徴であらう。しかし紺サアジが印象を殘してゐる事はなさけ無かつた。

「さうかしら。僕は全く知らないがなあ。」

三田はさういふより言葉が無かつた。

「あてはなあ、あの娘さんと長い事おしやべりして來ましてん。お母さんは早うに死なはるし、お父さんいふ人は、心臟とかが惡うて、永い事寢てゐやはるさかい、娘さんも氣の毒ですわ。さりやうがよろしいばかりで無く、ほん心だての優しさうな人でつせ。あのやうな人が、なんで恥かしいお商賣なんぞしやはるのかしらん。」
「そんな商賣をしてゐるかどうか訊いて來たのかい。」
「なんぼあたしかつてその樣な事は訊かれへん。それでもあんまりをかしいから、夜分もおうちですかと、こないいうて見ましてん。」
よくもそんな事が訊かれたものたと、三田は斯ういふ連中の押して行く力の強さに驚いた。
「ほしたらなあ、夜分は御稽古に行くと、こないいうてはります。」
「何の御稽古だつて。」
「謠の御稽古ださうです。」
「謠？」
三田はあんまり意外な話に、思はず笑が込み上げて來た。どんな娘だか知らないが、病父を抱へて困つてゐるのが、色をひさがなければならないのは哀れである。特別の技能の無い女のうで

ど、一家を支へる事は外に方法があるまい。當人は世間の思惑を憚つて、身を恥ぢて居るに違ひ無いのに、つけつけと問糺されては堪るまい。その場限りの出まかせに、稽古に通ふといつたのを、更に立入つて訊かれた爲め、何を考へるひまも無く謠と答へたのだらうが、義太夫か常盤津ならばいざしらず、あんまりとんちんかんなのが可笑しかつた。氣の毒だとは思ひながら、三田は失笑を禁じ得なかつた。

六の四

朝、會社に行く時と、夕方會社から歸る時と、大概毎日出あふ日華洋行の娘の事も忘れなかつたが、晝は仕立物をし、夜は謠の稽古に行くといふ教會の眞向の家の娘も、三田の好奇心を離れなくなつた。

或朝、三田は紺サアジの服と、ぶかぶかの靴を氣にしながら歩いて行くと、その家の格子窓のところで、針仕事をしてゐる娘を見た。今迄にも、さういふ場合はあつたのだらうが、三田の方で氣のついたのは始めてだつた。ほんの一瞬間だつたから、顔立ちも何もわからなかつたが、銀杏返に結つたほつそりした娘で、行人の足音に目をあげて往來を見た時、三田の視線と視線が合

つた。おもひなしか、その娘が日華洋行に通勤する娘に似てゐるやうに思はれた。
その時から、格子窓の中の娘を見かける事が多くなつた。夕方、格子につかまつて往來を見てゐた時は、三田に對して挨拶しさうな氣もした。そんな事があるものかと思ひながら、仕立物を賴んだ事に結びつけて、挨拶をされても差支へ無いと、勝手な事も考へた。
日曜の事だつたが、三田が机にむかつて本を讀んで居るところへ、おつぎがあわたゞしく呼びに來た。
「三田さん、三田さん。早う來てごらん。」
「なんだい、何處に行くのさ。」
三田は折角夢中になつてゐた本を閉る氣にならないで、さも面倒臭さうにふり向いた。
「早う、早う。えゝもの見せてあげる。」
おつぎはいきなり三田の手を取つて引起し、さうされるとわざとにも澁つて見せるのを、ぐんぐん引つ張つて緣づたひに、三番の部屋の前迄つれて行つた。其處の緣側のはづれから、欄干につかまつて身を延ばし、顏をつき出すと、隣の空地が見えるのである。
「さ、あこを見てみなさい。」

後から背中を押して、自分も三田と首を並べて突出した。
「おみつつあん、洗濯してはりまんの。」
大きな聲で呼びかける目の下の川岸にしやがんで、洗濯をしてゐるのは教會の眞向の家の娘だつた。しやがんでゐるまゝで振仰いだが、腰をあげて、端折上げた着物の裾をおろすと、かぶつてゐた手拭を取つて輕く頭を下げた。
三田ははしたない自分の居場所に面くらつて、顔を引込めようとしたが、おつぎは面白がつて大きな體に重味を加へて放さない。
「あのなあ、三田さんがなあ、あんたに遊びに來ておくれやすつていうてはりまつせ。」
おつぎはすつかり調子づいて、生れついての朗な聲でからかふ。
「へえ、大きに。」
娘はしやう事無しに笑顔を見せて又頭をさげた。
「いけないよ、そんな事をいつてからかつちやあ。」
「かめしめへんがな。」
何の積りか三田の背中をどしんと叩いて、又娘の方に聲をかける。

「ほんまだつせ。遊びに來とくれやすや。」

娘は何かいはれる度に、笑顔をつくつてはおじぎをするのであつた。下宿の二階から二三人の學生が顏を出して、下の井戸端で洗ひ物をしてゐる近所の娘などにからかつてゐる景色をむかし見たが、恰度それと同じだつた。三田はすつかり閉口して、滿身の力を籠めておつぎの手の中から逃れ出た。

日華洋行の娘に似てゐるやうな氣がしてゐたが、それは銀杏返に結つてゐる事と、脊の高い事丈で、顏立は違つてゐた。笑ふと眼のなくなつてしまふやうな、たゞたゞ弱々しい可愛らしさで、美しさは比べものにならなかつた。けれども、顏色の蒼白く冴えない、胸の病氣でも出さうな體質などが、若しもほんとに夜のあきなひをしてゐるとすれば一段と哀れが深く、そこに三田の心を誘ふものがあつた。

六の五

貴夫人令孃藝者――すべてきらびやかなみなりをして、無反省におもひあがつて居る女を、三田は好まなかつた。藝者にはまだしも、身の上の哀れがともなつてゐる丈いゝところもあるが、

しかし大概は心懸が悪く、さも贅澤な育ちをして來たやうな顏をして、得意さうなのが不滿だつた。おいらんはあまりに悲慘で、彼には近づく事が出來なかつた。享樂主義の文學が全盛を極めた時代には、吉原や洲崎を知らないでは恥辱のやうに思ふ文學青年が多く、彼もしきりに誘はれたが、持つて生れた人道主義と感傷主義が承知しないで、遂に足を踏入れた事が無い。

そんな心持の多分にある三田の想像では、おみつつあんといふ娘が、硯友社時代の小説にでも出て來る、親孝行で優しくて、身を賣つて病父の薬を購ふといふやうな、古風な哀れつぽさで取巻かれてゐる女主人公になつてしまつた。かりに自分にどつさり金があるとして、月々充分のしおくりをして親子の者を安樂に暮らさしてやる。勿論自分は娘に對して何も要求しない。好きな人があるなら一緒にしてやる。萬一、先方が自分の好意に感謝するあまり、本氣で自分が好きになつて來たら、その時はいつしよになる。一面極めて理想派なる三田は、そんな空想をもほしいまゝにした。

「三田さん、おみつつあんなあ、あんたの事を男らしい人やいうてはりましたぜ。」

おつぎは其後も面白がつて、しきりに其の娘の話をした。たぶん先方に行つては、自分の事を話して居るのだらうと思ふと、いゝ氣持はしなかつた。

「あの人なあ、ほんまに謠の御稽古してゐやはりまんねと。むこのうちの前を眞直に南へ行くと、ちつさい橋がおまつしやろ。あの橋のねきの饂飩屋の路地をはいつだところに、なんたらいふ謠の先生があつて、其處へ通うて行かはるのだつせ。」

「ふうむ、謠とは不思議だなあ。」

「それといふのがお父さんが以前はえらい謠道樂におましてんと。そやさかい、みつちり御稽古して病氣のお父さんに聽かせてあげるのやと、自身いうてはりまつせ。」

「そんなら淫賣だなんていつては申譯が無いぢやあないか。」

三田は娘の爲めに義憤を感じて、強い語調で詰つた。

「いゝえ、それはそれですがな。」

おつぎはあわてゝ打消した。

「その謠の先生いふ家が、たゞの家とは違ひまんねと。奥に離室座敷があつて、おみつつあんみたいな娘さんが、五人も六人も集まつて來るしくみになつてゐますさうな。うちのおつさんが、饂飩屋で聞いて來やはりましてん。」

その話を聞かされて、世の中に存在するいやな事に憤り度い心持と共に、娘はひとしほ氣の毒

に思はれた。

三田は夜涼にかこつけて、おつぎに聞いた橋袂の饂飩屋の前を通つて見た。路地の奥は袋地らしく、突當りの家の軒燈に謡曲指南と書いてあつた。ひと廻り近所を歩いて來ると、橋の上には團扇を手にした涼の人が四五人佇んでゐて、謡の聲が聞えて來た。何氣なく欄干に身を倚せると、恰度饂飩屋の座敷の向ふに、謡曲指南所の一室が突出てゐると見えて、川添のあけ放した軒に簾をかけた中で、ひとくさりづゝ男の聲について、聲量の極めて乏しい女の聲で熊野を稽古してゐるのであつた。男は師匠であらう、女は誰だかわからないが、その聲の弱々しさが、おみつつあんのやうに思はれてしかたが無かつた。

六の六

九月に入つても暑さはなかなかきびしかつたが、夜は流石に目に立つて涼しくなつた。長い間大仕事にかゝつてゐたので、それを濟ませた安心から、三田は怠け癖がついてしまつた。本を讀む事は怠らなかつたが、筆を持つ氣にはならなかつた。會社から歸つて、湯に入つて、晩酌の後で飯を喰ふと、縁の籐椅子に腰かけて、川風をなつかしがりながら、舟のゆきゝを見て暮らす事

が多かつた。淀川へ上る舟、河口へ下る舟の絶え間無い間を縫つて、方々の貸舟屋から出る小型の端艇が、縱横に漕廻る。近年運動事は東京よりも遙かにさかんだから、女でも貸端艇を漕ぐ者が頗る多い。お店の小僧と女中らしいのが相乘で漕いでゐるのもある。近所の亭主と女房と子供と、一家總出らしいのもある。丸髷や銀杏返の、茶屋の仲居らしいの同志で、遊んでゐるのもある。三田もふいと乘つてみる氣になつて、一人乘の端艇を借りたのが病つきになり、天氣のいゝ日には、大概晩食後、すつかり暮れきる迄の時間を水の上に過した。

「三田さん、あても乘せとくんなはれ。」

「あたしも乘せて下さいな。」

と女中達がせがむので、かはるがはる乘せて漕いだ。

或日も、彼はおりかを艫に坐らせて一廻り廻つて來ると、岸には次の順番を待つてゐたおつぎの外に、おみつつあんが立つてゐた。

「三田さん、あてのかはりにおみつつあんを乘せてあげとくれやす。」

端艇が雁木に着くのを待兼ねて、おつぎの朗な聲が響き渡る。

「あて、いやゝし。あんた乘せて貰ひなはれ。」

娘はおつぎの背後に身をかくして、逃げ腰になつてゐる。
「そんな事いはんと一ぺん乘せて貰ひなはれ。」
「あて生れてからお舟に乘つた事あらしまへん。なんやら怖いわ。」
「三田さんと一緒やつたら沈んだかてえゝやないか。」
「いやあ、そないな事いうたら、あていにまつさ。」
それをいきなり抱止めて、おつぎは水際迄引つ張つて來た。陸に上つたおりかと一緒に、強ひて娘を舟に乘せてしまつた。
「三田さん、後でたんとおごつて貰ひまつせ。」
おつぎは自分の思ふ通り、三田と娘とを相乘させたのに滿足して、手を叩いてはやし立てた。
三田は娘と向あひの具合の惡さに、一層力をこめて漕いだ。フオアの時は、娘のきちんと揃へた素足の爪先が氣になり、バツクの時は、羞しさうにうつむいてゐる娘の顏が氣になつて爲方が無かつた。
「三田さあん。よう似合ひまつせ。」
中流に漕ぎ出したのにむかつて、岸の女はなほからかひやまなかつた。宿屋の縁側にも、亭主

とおかみさんらしいのが、此方を指さして何か話合つてゐた。娘は袂を顏にあてゝ、愈々うつむいてしまつた。

端艇はどんどん上流に溯つた。橋をくゞると、もう酔月は見えなかつた。三田は汗をかく迄踏張つて、中之島の方迄漕いで行つた。川面も段々夜の色になり、近々と腰かけてはゐるのだが、娘の顏もほの白く見えるばかりだつた。充分川幅の廣いところで、三田は櫂をあげて舟を流れに任せた。

六の七

「此間は難有う。」

先刻から何か口をきかなくては變だと思ひながら、何のきつかけも無くて困つてゐたが、三田は少からぬ努力で話かけた。

「え。」

ふいに聲をかけられたので、娘は眞面目に顏をあげて問返した。

「仕立物を御願ひしたでせう。」

「へえ、こちらこそ御禮を申遲れまして。」
それつきり途絶えてしまつた。時々擦違ふ外の端艇は男と女の差向ひと見て、わざと衝突しさうな勢ひを見せてからかつたり、
「よおよお、けなりい、けなりい。」
とあからさまにはやして行くのもあつた。何時か東の空に月が出て、ぐんぐん中空にのぼつて行つた。その月光は川波に碎け、娘の額から肩のあたりを、蒼白く照らした。
「あなたは早く歸らないといけないんでせう。」
「いゝえ、大事御座いません。」
「御うちには御病人があるといふのぢやあないのですか。」
「へえ、お父さんがわづらつて居りまして。」
ひどく恐縮してゐる爲めか、言葉づかひも叮嚀で、宿の者が噂するやうな身柄の人とは思はれなかつた。三田はさも自分のいたづらな心から、此の人を無理に誘ひ出したやうな心苦しさを感じた。
「あゝ、いゝ月だ。此のまゝ何處迄も下つて行つたら海に出るんだらうなあ。」

變に感傷的な氣分になつて、彼は大空を仰いで獨語した。女も誘はれたやうに月を見た。細過ぎる日が上を向くとぱつちりして、いきいきした美しい顔になつた。
「宿の連中は驚いてるでせう。何處に行つたらうと思つて。」
さう云つても、娘はかすかに白い齒を見せて笑つた丈で、何とも答へなかつた。端艇は次第に泥臭い川下に流れ下つた。
「あなたは謠の稽古をしてゐるさうですねえ。」
そんな事を訊いては可哀さうだと思つて我慢してゐたが、娘の樣子から考へて、ほんとに謠の爲めに謠を稽古してゐるのではないかと思はれ、又何か自分の頭の中の邪魔になるこだはりを除いてしまひ度いとも思つて、思ひ切つて云つてみた。
「へえ、誰に御きゝなさいまして。」
「矢張宿の人がさういつてゐたんです。」
「御稽古いひましても、ほん始めましたばかりで。」
何の混亂した表情もなく、すらすらと答へた。三田は此の人に絡る忌々しい噂を打消したやうなすつきりした氣持で櫂を取上ると、折柄さしかゝつた橋の下を、雙腕に力をこめて漕いで過ぎ

た。橋を越えると醉月の二階の燈火が、第一番に目に入つた。

その二階の、自分の部屋の縁側に立つ人影は、端艇の行方を不審がつてゐる女中達に違ひ無かつた。三田はわざと知らんつらをして、次の橋の際にある貸船屋迄漕下つた。

「三田さあん、三田さんと違ひまつか。」

暗い中流を下る舟を認めて、おつぎの透通る聲が呼びかけたけれど、三田は返事をしなかつた。川岸に上つて、橋袂の氷店で、しきりに辭退する娘を強ひて氷菓を喰べ、わざと時間を消して宿に歸つた。

七の一

三田の創作「贅六」が新聞に出始めたのは其の月の末だつた。自分の書いたものではあるが、印刷になると全く目新しく、恐らく誰よりも一番熱心に夕刊の配達を待つのは作者自身だつたであらう。

三田が小説作家としての文壇生活も既に十年になる。同人雑誌出で、若々しい詩情のありあまる情緒主義の作家として世に出た頃は、恰も自然派全盛時代で、こつぴどく取扱はれたものであ

つた。その後年齢と共に感傷癖は消失せて、社會批評を含んだ現實主義の作風に移り、ぢりぢりと文壇の一角に地歩を占めたが、會社勤をして衣食の資を得てゐる爲めか、或は彼の文壇づきあひの下手な爲めか、二重生活者だ、傍系作家だと、ともすれば繼子扱にされて、一種不思議な地位を保つ作家となつてしまつた。作品は默殺されるのがおきまりで、たまたま批評するものがあると、當の作品の批評よりも、仲間外れに對する漫罵に類するものが多かつた。

さういふ特殊の作家として、且執筆の時間も乏しく、又元來遅筆だつたから作品の數も少い爲め、中央は別として、地方の讀者といふものをまるつきり持つてゐなかつた。發行部數の多い婦人雜誌や投書家相手の雜誌に寄稿しない爲めもあつたらうが、彼の筆名、樟喬太郎は、十年間文壇に介在しながら、大多數の人には新しい印象を與へた。此の前大阪の新聞に小説を書いた時の如きは、意外に讀者うけはよかつたが、そんな名前の作家がゐたのかしらと思つた人も少く無かつたらしい。新聞社に宛て、樟喬太郎といふのは始めて知つた名前だが、今迄に何か著書でもあるなら知らせてくれといふ手紙を寄越した人も多かつた。その時三田は、既に十數冊の短篇小説集をあらはしてゐたのである。

今度も亦新しい讀者から、新聞社宛の投書がしきりだつた。作中に用ひた大阪言葉が存外うま

いとほめて來るのもある。甚しくまづいと云つて、一々叮嚀に訂正して來るのもある。作者の大阪觀が間違つてゐるといつて、堂々と反對して來るのもある。贅六根性を痛罵したところが氣に入つたと稱讚して來るのもある。三田としては作品に人氣があるといふ事も惡い氣持はしなかつたが、それよりも作品に對する藝術的批評が聞き度かつた。しかし、新聞社としては、讀者うけのいゝといふ事が第一だから、その爲めに三田は少からず感謝された。

會社の連中はいつもの通り、儲仕事として羨しがつた。一日分いくらだとか、資本なしでぼろい儲をするこんなうまい事は無いとか、口々に勝手な事をいつた。

醉月では三田が小說を書く事は知らなかつた。夜、臺所の洗ひもの迄すませてから、おつさんだの、料理番だの、女中達があかりの下に集つて無駄話をしてゐる事もあるが、時には誰かゞ新聞を讀むのを、みんなで聽いてゐるやうな事もある。講談物程人氣は無かつたが、一面の小說も朗讀された。

「もひとつ面白く無い小說やな。」

「なんやら堅苦しうてあかん。」

などゝいひながら、きいてゐる景色は、三田もくすぐつたい心持で目擊した事がある。

七の二

涼風が立ち始めると、醉月は俄かに忙しくなつた。二番も三番も四番も五番も六番もふさがつて、三人の女中では手の足り無い事が多かつた。多くは地方から商用で出て來る人で、三日五日長くて一週間位の泊だつた。どうしてそんなに用事があるのだらうと不思議に思はれる位、あつちでもこつちでも手を叩いて女中を呼ぶ。茶を持つて來い、飯を早くしてくれ、お酒のおかはりだとせき立てられるので、何も用事をいひつけず、うつちやつて置けば何時迄もおとなしく本を讀んでゐる三田は、自然と閑却され勝だつた。

客の中には、夜の更ける迄女中に酌をさせて酒を飲む者もある。みだりがましい話をしたり、手を握つたり、晩に泊りに來てくれなどゝ云つてゐる聲は、三田の部屋まで聞えて來た。時には藝者をよぶものもあつた。東京では見られない景色だが、宿の廊下を裾を引いた姿で通るのを誰も不思議とは思はない。壁か襖を一重へだてた隣人には何のお構ひも無く、三味線を彈かせてうたをうたふ者もあるし、騷々しいかけ聲をして、拳をうつ者もあつた。勿論、泊つて行く藝者もあるのである。

さういふ混雑の中に、或時新聞社から電話がかゝつて來た。取次に出たおりかは、

「え、くすのきさんですつて。さあ、うちのお客さんにはそんな方はゐないやうですよ。」

と返事をして、なほ念の爲めに帳場にきいてみた。

「おかみさん、くすのきさんて方ゐますかねえ。今朝おつきになつた二番のお客さんは？」

「二番は篠崎さんや。くすのきさんなんてゐたはれへん。」

おりかは、そんな人はゐないと先方へ答へた。けれども新聞社の方では、確かにゐる筈だと不滿さうな言葉を使つた。

「さうですかねえ。そんなら一度みなさんにきいてみませう。」

氣の輕いおりかは直ぐに室々（へや〳〵）をきいて廻つた。

「こちらにくすのきさんて方ゐらつしやいますか。」

階下の六番から、二階の五番四番と順々にきいてゐる聲が、三田の耳にも入つたが、彼は默つてゐた。自分が小說を書くといふ事は、宿の人達には知らせない方がうるさくなくていゝと思つた。

「こちらにくすのきさんて方ゐらつしやいますか。」

三番できゝ、二番できいて、
「矢張ゐやあしないやね。」
とつぶやきながら立去らうとしたが、その場のいたづらで三田の部屋の襖をあけて、
「こちらにくすのきさんて方ゐまあすかあ。」
と面炮面をぬつと出し、みそつ歯の口を大きくあけて云つたと思ふと、ぺろりと舌を出して、ばたばた逃げて行つた。今では此宿で一番馴染の深い三田が、どうして樟さんであつて堪るものかと思つてゐたのである。
「あゝ、もしもし、お待たせしました。くすのきさんて方はねえ、いくらたづねてもゐらつしやいませんよ。え、小説を書く人ですつて？　だつてゐないんだもの、爲方がありませんよ。どうもお氣の毒さま。」
りりりりりりんと電話は切れた。
「ふんとにわからない奴だね。ゐませんて人が云つてるのに、ゐるに違ひ無いなんて。」
「くすのきさんやつたら湊川にゐますう、いうてやつたらえゝ。」
おかみさんが駄洒落を出したので、臺所の者迄どつと笑つた。

七の三

その次の日の夕方だつた。三田が湯から上つて、夕刊を讀んでゐる時、昨夜電話をかけたといふ××新聞の記者がやつて來た。

「あゝ、ゆんべ電話をかけたのはあなたなんですか。」

取次に出たおりかは、ゐないといふのにしつつこくたづねて來た男の顔を、馬鹿にして見た。顔色の冴えない、不精髯をはやした中年者で、新聞社の肩書のある大型の名刺をさし出した。

「君はゐないつていふけれど、僕はちやんと調べて來たんだ。道修町の會社に勤めてゐる三田さんといふ人ゐるだらう。」

かくしたつて駄目だぞといふやうな語氣で、記者は云つた。

「え、三田さんならゐますがねえ。」

おりかは何を頓珍漢な事をいふんだと云つた風な返事をした。

「その三田さんなんだ、樟喬太郎つていふのは。」

「あらやだ。三田さんは違ひますよう。」

「違ふもんか、うちの夕刊の小說を書いてるんだから。」
「へええ、さうですか。そんならきいてみませう。」
おりかはとんだ間違つた事をいふ人間だと、面白がつて二階へかけ上つた。
「三田さん、あんたくすのきさんてんですか。」
をかしくて堪らなさうに、面皰と笑で顏中いつぱいにして訊いた。
「何をいつてるんだい。三田さんは三田さんぢやあないか。」
三田が苦い顏をして答へた時だつた。
「やあ、樟さんですか。失敬します。」
と、何時の間に靴を脫いで上つて來たのか、記者はづかづか部屋に入つて來た。三田も今更爲方が無く、おりかと顏を見合せて苦笑した。
「へえ、やつぱり三田さんの事だつたんですか。へええ。」
おりかは腑に落兼る樣子でつぶやきながら、茶道具を持つて來るのと、階下の仲間に話して聞かせる爲めに、急いで出て行つた。
「御作は每日拜見してゐます。大變評判がいゝので、うちの社のものもみんな喜んでゐます。」

巻煙草に火をつけると、一度窮屈さうに坐つた洋服の膝を胡坐に直して、

「僕は學藝の方面では無く、社會部のものですが……」

いひながら、先刻おりかに渡した名刺の疊の上に置つぱなしになつて居たのを拾上げて、三田の前へ差出した。××新聞社今宮正人といふのであつた。

「初對面で直ぐさまお願するのはづうづうし過るが、うちの新聞に小説を書いてるあなたは、いはゞ親類のやうな關係なんだから、ざつくばらんに話をするんだが、どうでせう、短冊に何か書いてくれませんか。」

彼は部屋の入口に置いた風呂敷包を引寄せて、中から數枚の短冊を取出した。

「駄目です。私は歌も句もつくれません。」

三田はすつかり不機嫌になつてしまつた。

「いや、格言でも座右の銘でも標語でも都々逸でもかまひません。たゞあなたの署名があれば、それでいゝのです。」

「ところが非常な惡筆で、筆を持つた事がありません。」

三田は生れついての惡筆を、平生深く恥ぢて居るので、曾て短册などに筆を染めた事がないの

であつた。
「そんな事を云はないで書いて下さい。實はね、僕も少し困つてゐるもんたから。」
彼は知名の文人の名を擧げて、誰にも彼にも書いて貰つた事があるが、今度頼むのは些か遊び過て、方々に借金が出來たから、三田に短冊を書かして、それを賣つて金にしようと云ふのであつた。
「うちの新聞に出てゐる小說が素敵に評判がいゝから、今ならとても買手があると思ふんだが。」
「わたくしは御免かうむります。」
三田ははつきり斷つて、堅く唇をとぢた。それでも相手はあきらめずに、しきりに自分の窮狀を訴へて、救濟してくれと繰返し、しまひには、
「どうしてもいけなければ、名前を貸して下さい。僕が自分で書くか、或は誰かに書かせて、あなたの名前で賣るから。但し儲は山分ですよ。」
と虫のいゝ事をいひ出したが、三田は強情に返事をしなかつた。

七の四

「おかみさん、くすのきさんといふのは三田さんの事なんですとさ。」
階下に下りると直ぐに、おりかは帳場に注進した。
「なんやて、三田さんがくすのきさんいふ人と同じ人だ？　ふうん、さよか。」
これも腑に落ちない様子で首を傾けた。
「今のお客さんは××新聞の人で、その新聞に小説書いて居るくすのきさんといふのが、うちの三田さんですとさ。」
「へえ、××新聞？」
おかみさんのお尻のところに背中をまるくうづくまつて、夕刊を讀んで居た娘の手からひつたくつて一巡目を通した。
「小説みたいなもんは、此の贅六たらいふ好かんたらしい名前のと、荒木又右衞門の外に何もあらへん。くすのきいふ字は木偏に南と書くのやで。」
「さうかねえ、それでも今のお客さんさう云つて居たけどねえ。」
假名の外に何も讀めないおりかは、自分の報告が間違つて居るぞと云はれたやうに、途方にくれた顔をして居た。

「此の小說書かはる人の名前は、なんと讀むのかあてらにはわからへんが、木偏になんやらむつかしい字が書いてある。此の字は何と讀むのやろ。」
「あてもしらん。木偏に章魚(たこ)のたアの字やな。」
娘は義太夫でつぶした太いかすれた聲で答へた。
「なに、たこといふ字は虫偏やで。」
「虫偏のもあるけれど、此の字と魚(さかな)といふ字のもある。」
「おつさんにたづねて見たらどうだ。たこ安だたこ梅だと、よく飲みに行くのやないか。」
結局何の事かわからなかつたが、何れにしても三田が、たゞの三田でないやうな氣持丈に、みんなの心に殘つた。
おりかは、外の部屋の御給仕に出て居るおつぎやお米にも、臺所で働いて居る料理人にも、地下室で風呂を焚いて居るおつさんにも、顏を合せたものから順々に話を傳へた。
やがて小一時間位は居たであらうか、新聞記者は佛頂面をした三田に見送られて、二階から下りて來た。
「いや、どうも失敬しました。」

記者も機嫌のよくない顔つきで、ろくにおじぎもしずに歸つて行つた。
「三田さん、三田さん。あんたくすのきさんといふ名前もあるんですか。」
何處かの部屋にお銚子のおかはりを持つて行かうとして居たおりかは、梯子段を追かけて上つて、息をはずませてきいた。
「今の新聞の人、さういつてあんたを呼んで居たぢやありませんか。」
「うむ、新聞社の人間なんてものは、大概人を符帳で呼ぶんだよ。」
「へえ、さうですかねえ。」
「小川平吉つていふのをオガ平だとか、武藤金吉をムト金だとか。」
うるさい事はきいて吳れるなといふ表情を露骨に見せて、三田はさつさと部屋の中へ引込んでしまつた。

七の五

三田のところへ御膳の出たのは最後だつた。
「お待遠さん。ほんに今日程忙しい事はおまへんでしたぜ。」

おつぎはぶくぶくと白く肥つた顔中に細かい汗をかいて、息切れのする樣子であつた。
「そんなに忙しい時に御酌なんかしてくれ無いでもいゝよ。何時もいふ通り、僕は一人で飲む方がうまいのだから。」
「そんなに嫌はんかてよろしゆおま。樟先生。」
してやつたといはんばかり、からだを波打たせて笑つた。
「お帳場ではみながえらい評判です。夕刊に出てある贅六ですかいな、あれを書かはる人の名前が、木偏に章魚のたアの字や、そんなけつたいな字あらへんたらいうて爭つてゐるところへ、今さつき旦さんが歸らはつて、此の字もくすのきと讀むと云はつたもんで、うわあ三田さんの小說や、えらいこつちやえらいこつちやとみなが騷ぎましてなあ。」
全く意外な事だつたと云はんばかり、おつぎはつくづくと三田を見ながら、宿のものの驚きを傳へるのであつた。
外の者は實の所、むつかしい小說だと思つて時折拾讀みするばかりたつたが、宿のあるじは大變愛讀して居たのださうだ。
「樟といふ小說家は始めて出つくはしたが、うちの三田さんとは思はなんだ。あの御方は一風變

つてるとは夙に睨んでゐたが、矢張ただもんではなかつた。」

とふだんは無口のあるじもいつしよになつて、今日の夕刊を引張合ひながら噂をしてゐたといふのである。

「よう小説みたいなものが書けますなあ。むつかしい事でせうに。」

おつぎはわけもわからずに感嘆の意を表して、愈々三田をうるさがらせた。

恰度飯を濟ませて、お茶を飲んでゐるところへ、お米が三番の客の使だと云つてやつて來た。外の部屋の客は大概二三日中に立つてしまふのだが、三番の野呂丈は、三田と同じく月極で、これからこつちの會社に勤める人だといふ事だつた。

「その野呂さんがなあ、あんさんの書かはる小説を讀んでゐやはつて、是非ともあつて話がして見度い、ひつれいでなかつたら、こちらへ寄せて貰ひ度いと、こない云うてはりまんね。」

五六日前にその部屋はふさがつたのだが、客の顏を三田は知らなかつた。大正化學工業株式會社とかの大阪出張所長といふ肩書を、お米は多分の尊敬を含む語氣で云つた。

「折角だけれど、今晩は少し仕事がありますから失禮しますと斷つてくれたまへ。僕は知らない人には逢ひ度くないんだ。」

來てから間も無いのに、毎晩女中を相手に酒を飮んで、遲く迄わいせつな事を云つてふざけてゐるのを、三田は知つてゐた。いつぱい機嫌で、小說家とはどんなものだらう位の心持で冷かしに來られてたまるものかと思つた。

「それでもなあ、是非々々あんさんに御目にかゝり度いと、熱心に云はるのんたつせ。」

「そんな事を云つたつて僕は駄目だよ。面白い話なんか出來やあしない。」

なんてつたつて承知するものかといふ態度で、たゞさへ怖い三田の眼つきが險しくなつた。

「どうしてもあきまへんか。弱つたなあ。」

お米は三田に對してよりも、先方に對して困つてゐる樣子でもじもじしてゐたが、

「そんなら又今度おひまの時に寄せてあげとくんなれ。」

といひ殘して立去つた。

間も無く三番の部屋で、ひそひそ聲で報告してゐるのが聞えたが、それにつゞいて酒に醉つた男の聲で、

「なあに小說を書くといつたつて漱石や蘆花なんかとは比べものにならんさ。」

とうつちやるやうにいふのが聞えた。

七の六

××新聞の夕刊の小說の作者が三田だとわかつてから、宿屋のものの三田を見る眼は違つて來た。

お坊ちやん育の我儘な偏屈人だときめてゐたのが、口調こそ重々しいけれど時々は冗談もいふし、淫賣だといふ噂のある娘と相乘で端艇に乘る位の洒落氣もあるし、段々氣心が知れて見れば、見かけの怖らしい程の事は無く、存外優しくて親切らしいところもあると思ひかけてゐたところだから、小說を書くといふ一つの特殊な色彩が、一層それを助長して、もう一つ距てを取除いたのである。

たゞ、みんなが想像してゐた小說家といふものとは、まるつきり違つて居た。大臣だとか金持だとか、日頃えらい人だと思つて居る人間は、曲りなりにも大概見當はつき、頭の中にははつきりした型があつたが、小說家なんかには、此の世の中で廻りあはうども思はなかつた。だから、不意に目の前に現はれた三田の樟喬太郎は、宿の連中にとつては唯一の代表的小說家でなければならない。たつた一本の筆さきで、いゝ男といゝ女とを喜ばせたり悲しがらせたり、勝手氣儘な

運命をしよはせて死なせもするし、面白をかしい世態人情を自在に物語る小説家といふものは、矢張その作中の人物の如くいゝ男で、粋で、世間馴てゐて、人一倍情愛が深く、一口にいへば粋も甘いも噛みわけた人だらうと想ひ描いて居たのであつたが、現實の作家は、骨組のたくましい髯男で、みなりなんぞはぢゞむさく、都々逸ひとつうたふ事も知らず、世間外れのだんまりむつつりで、到底女に好かれさうな人間では無かつた。

「小説なんぞ書かはる御方はどんな人かと思うとつたら、うちの三田さんみたいな人かいなあ。」

と末は娘義太夫になるといふ大望をいだいて居る娘迄、意外だつた事を正直に發表した。

「あてら、今でもほんまかしら、嘘やないのかしらと思うてゐまつせ。」

「あんな怖らしい顔つきしてゐやはつて、若い女の事書いたり、戀したとか好いたとかいふやうな事、ようまあ書けたもんやなあ。」

「さういうたものでは無い。あゝいふどつしりとおちついた人が、世の中の事をよう見てゐるもんや。此の小説かつて學のある人でなければ書かれへん。」

隨一の愛讀者なる醉月の主人は、三田の事になるとひどく買かぶつて、ほめ方を一手に受るのであつた。

兎に角あるじのいふ事だから、おかみさんが先づ第一に信じてしまひ、自然に女中達も安くは取扱はなくなつた。そればかりでは無く、外のお客の部屋へ行つても、一番のお客さんは××新聞の夕刊の小説の作家だと吹聴して廻つた。

「まだ若い書生さんみたやうな方ですけれどねえ、その勉強つたらないんですよ。感心なもんですねえ。」

と隣の部屋の客の自慢をしてゐるおりかの聲を聞いて、三田は冷汗を流した事もあつた。

八の一

樹や草の少い大阪の町は、東京程はつきりと秋の景色をあらはさないが、それでも土佐堀の水も澄み、醉月の二階に照(てり)つけた西日の色も日に日に薄くなつて來た。

三田の部屋の下の川岸を住家(すみか)とする泥龜は、夏の間に相手を見つけて、何時の間にか稍(やゝ)形の小さいのと二疋になつてゐた。水の干(ひ)る時には淺瀬の石の上に並んで背中を乾かし、滿潮の中高にふくらむ水に漂つては、からだを擦りつけて泳ぎ廻つた。三田は朝晩、その二疋の龜の子を見るのを喜んだ。

「あれあれ、龜さんが嫁さん貰ははつた。」

「なんて仲のよいめをとやろ、三田さん、けなるい事おまへんか。」

女中達は、何時迄も欄干の外に首を突出して見てゐる三田のうしろに來てからかつた。

さしもに盛んだつた貸端艇も數が少くなつたが、そのかはりに小舟で網を打つ人がちらほら見えた。雪のやうに腹の白い魚が、網の中で光るのも、此の宿の眺めだつた。

三田は九箇月間着通した紺サアジ服に別れを告げて、新聞社から受取つた原稿料の一部でつくつた新調の洋服を來て、相變らず機械のやうな會社勤を勵んだ。靴の大きいのは氣になるが、色の褪めた、肱や膝や背中の光る古服と緣を絕つたので、氣が輕くなつた。尤も新しく洋服をあつらへる氣になつたのには、日華洋行の娘と、敎會の眞向の家のおみつつあんの、本人達は夢にも知らない影響があつた。

日華洋行へ通勤する娘の方は、何時迄たつても此方の存在を認めてくれないらしく、いつも稍伏目勝の瞳を動かさず、些かも姿勢を崩さずに、さつさと行過てしまふのであつた。何とかして一度でも此方を見てくれゝばいゝと三田は念じてゐたのだけれど、先方にとつては、三田の如きは路傍の電信柱に等しかつた。

それにひきかへて、おみつゝあんとは、月明の夜の端艇以來挨拶をするやうになつた。三田が通りかゝると、格子のところへわざわざ出て來て、聲はかけずに笑顏で會釋する。肉體の弱々しいのと同じく、その表情も近代的の活潑なところが無く、笑ふ時さへ寂しかつた。三田は、もう一度この娘と親しく口をきいて見度いと思ひながら、もう端艇の時節も過ぎてしまつたし、外には何のきつかけも無いので、殘念ながらたゞ帽子をとつて挨拶を返す丈だつた。

「三田さん、おみつつあんがなあ、又あんたと遊び度いいうてゐやはりまつせ。」

おつぎをはじめとして、女中達はよくからかつた。

「僕も遊び度いんだよ。」

半分は冗談らしく、實はそれをきつかけに、ほんとに連れて來て貰ひ度い氣もあつた。

「ほんまだつか。ほしたら、うちへ呼んで來てお酌させましよか。」

「もつたいない。お酌なんかさせるもんか。それよりも一緒に箕面か寶塚にでも行くか、それでなければ成駒屋はんの芝居でも見に行き度いなあ。」

「お芝居、よろしゆおまんな。あてもみい度いわ。」

「よおし、そんならみんなで見に行かう。」

「ほんまたつか。」

「ほんまさ。」

女中達は半信半疑だつたが、三田はほん氣だつた。何時か一度、實行してやらうと思つてゐた。

八の二

醉月は引續いて繁昌してゐたが、客の顏は絶えず變つてゐた。たゞ、一番の三田と、二番の野呂は、月極の客だつた。

年配は三田よりも上で、頭の薄禿を撫でつけた髮でかくし、鋏で刈つたちよび髯も手入がよく行屆き、強度の近視眼にふち無しの眼鏡をかけた、いかにも工業會社の出張所長らしい様子の男だつた。最初に三田と話をし度いと申込んで來たのを斷つたのが餘程癪にさはつたと見えて、廊下であつてもわきを向いて挨拶をしなくなつた。結句それはうるさくなくて、三田にとつても幸(さいはひ)だつた。

野呂は酒飲みで、三田のやうに宿屋では一合ときめて、さつさと切上げてしまふやうなのでは無く、女中に酌をさせながら、醉倒れる迄盃を放さない。その間に、嘘かほんとか大げさな話を

得意にしてゐるのが、一室へだてた三田のところ迄、殘らず聞えて來るのであつた。彼の勤めてゐる會社は創立後日は淺いけれど、儲かり過ぎて困る程儲かるとか、野呂自身は他の商賣をしてゐたのだが、社長に懇望されて入社し、半年で出張所を預かる地位になつたとか、北の新地の何とかいふ家が宿坊で、藝者にもてゝ困るとか、すべて景氣のいゝ話だつた。

　彼は又、何事でも知らないといふ事が無かつた。政治でも經濟でも、文學でも美術でも、萬事心得てゐて女中達を驚嘆させた。殊に日本國内は勿論、支那朝鮮亞米利加歐羅巴、あらゆる國々の話を知つてゐた。就中彼の得意なのは、各方面の名士と、何れも友達の如きつきあひがあるといふ事だつた。從而床次がどうしたとか、西園寺が斯ういつたとか、みんな呼びつけで、如何に親しいかを示した。加藤はけちんぼでいくら勸めても金を出さないとか、犬養は貧乏で閉口してゐるとか、澁澤には未だに何人妾があるとか、大倉はあの年で毎日鰻の大串を幾串喰べるとかいつたたぐひの話はふんだんに持つてゐた。

　はじめのうちこそ三人の女中が、かはるがはる御給仕に出てゐたが、何時の間にか野呂の部屋はお米の受持ときまつたやうになつた。外の二人よりも若くてきれいで、小とりまはしたから、どの客もお米さんお米さんと一番早く名を覺えて呼立てるので、本人もおりかやおつぎとは格が

ちがふやうな氣持になつてゐた。ちつともちやほやしてくれない三田のところが一番つまらなく、お米でなくては納まらない野呂のところに足の繁くなるのはあたりまへだつた。
お米が野呂を獨占したのか、野呂がお米を獨占したのか、兎に角除外された外の二人は、聯盟して三番の客とお米の惡口をいひふらした。
「お米さんは又野呂さんともをかしいんだよ。あたし、ちやあんと現場を見屆けたんだもの。」
「ほんまに野呂さんいふ人はいやらしな。あてらみたいなもんにも、今晩泊りに來んかとかなんとか云うてなあ。」
「あら、あんたにもそんな事を云つたの。あたしにもなんだよ。やだねえ。誰があんな大法螺吹なんかに。」
「お米さんもえらいなあ。大貫さんともちよんちよんやつたし、その以前にも誰彼と噂はあつたやないか。」
そんな會話を、三田の部屋に來ても殘して行つた。
子供の學校の爲めに女房は東京に置いてあるといふ四十男のみだりがましさは、充分想像する事が出來た。實際お米は夜更迄、醉つて大言壯語をほしいまゝにして居る野呂の相手をして、三

番に殘つてゐる事が多かつた。

八の三

三田は相變らず、田原を誘ひ出したり、田原に誘ひ出されたりして、そつちこつち飮廻つてゐた。さういふ時に、影の形に添ふやうにくつついてゐるのは蜂だつた。

蜂の説によると、三田と酒を飮むのが一番面白いのださうである。お客と藝者と云ふ立場で無く、全く對等の友達づきあひなのがよかつたらしい。田原がいふ通り、蜂も三田公三田公と呼んでゐた。此の友達は、時折氣まぐれに醉月を訪問する事もあつた。凡そ南でも北でも新町でも堀江でも、一流の藝者ならみんな親類づきあひのやうな口をきいてゐる野呂は、同宿の苦虫をかんでゐる三文小説家のところに遊びに來る女があるときいて、少からず平らかでなかつた。

「え、お葉だつて。あゝ、お葉ならよく知つてるよ。まあ北地では二流と迄も行かないところだらうね。」

「ようお酒飮まはる藝奴はんだつせ。」

「知つてるよ。あいつと飮つこしてね、ひどいめにあつた事があるよ。」

野呂は密かに噂をしてゐた。三田なんかのところに女が來るといふ事は、彼自身のうでのない事を證據立てられるやうな、理由の無い不愉快な事だつたのである。だから、少しでもその女の値打を安くして置き度かつた。

それが、それからそれと三田の部屋迄傳づて來た。

「あの蜂さんを三番の野呂さんも知つてゐやはるさうですぜ。よう酒飮む女やいうてゐやはりました。」

三田は何の心も無く耳に入れた。

ところが或時蜂が遊びに來た。近所の金光様へお參りしたついでに寄つたといつて、最初はひどく神妙だつたが、お茶がはりに出した麥酒がお腹に入ると、忽ち商賣の事なんか忘れてしまつて、

「三田公、いつぱい飮みましよか。」

と膝を乘出して來た。

「飮まう。」

酒のつきあひ丈は存外いゝ三田の事だから、忽ち酒戰となつたのである。

三番では今日も亦、野呂がお米に酌をさせて、よくもあきない猥談に夢中になつてゐた。
「今、向ふの部屋でしきりに何か喋つてゐる男があるだらう。あれが君を知つてるさうだぜ。」
「へえ、何といふ方ですの。」
「野呂さんていふんだ。」
「けつたいな名前だんな。顔を見たらわかるのやらうけれど、思ひ出しませんな。」
「なかなかその道の豪傑らしいんだ。大阪中の藝奴はんはみんな友達らしいぜ。」
「へえ、いやらしい人やなあ。」
蟒はあんまり興味を持たず、しきりにコップ酒に夢中になつてゐた。
「おい三田公、君もコップで飲み給へ。盃みたいなちつぽけなものはけちくさい。」
「まあ許してくれ。コップはもうこりこりだ。又頭からぶつかけられるのが落(おち)だからなあ。」
「ぶつかけられたつて大事おまへんやろ。又淫賣さんにあんじよう縫うて貰うたらえゝのやもん。」
ほんとに幾度でもこりずに浴せかけさうな勢で、なみなみとあふれるばかりのコップ酒を、たうとう三田の手に受取らせてしまつた。

八の四

見る見るうちに德利は、狹い部屋の中に立つたり轉んだり、うづろの姿を並べた。蜂は顏色こそ蒼白くなつたが、心持は天上天下唯我獨尊だつた。自分で飲んでは三田にさし、三田が飲干すと奪ひ取つて又飲む。酒がなくなると手を叩いて女中を呼んだ。

三番でも醉拂つた野呂の高調子が、舌にもつれて聞えて來た。

「をかしいな。あては自慢やないけれど、耳が惡うないよつて、知つてる人の聲なら、よう覺えてゐるがなあ。」

蜂は酒の氣のない時は問題にもしなかつたが、飲み足りると氣になり出したと見えて、野呂の聲に耳を傾けてゐた。

「姐さん、むこのお客さんなあ、あてを知つてゐるというてゐやはりまつか。」

お銚子を持つて來たおりかにも聞いて見た。

「えゝ、よく知つてる、お酒を飲つくらした事があるつて云つてらつしやいましたよ。」

「へえ、さうだつか。どないな顏つきの人でつしやろ。」

「眼鏡をかけた、鼻の低い、髯のある、……」
「顏の色は。」
「さうですねえ、赭黑いつていふのかねえ。」
「頭は？　ちやびんだつか。」
「ちやびんて程でもないけれど。」
「ほしたら半ちやびんやな。」
二人はいつしよになつて笑つた。
「あて、行て見て來ようかしらん。」
蜂は自分自身すつかり乘氣になつて、いくら考へても思ひ出さず、先方では知つて居るといふ相手に興味を持つた。
「えゝ、いつしよに行きませうか。」
「よせよ。醉拂つて他人の部屋になんか行つてくれるな。」
三田はほんとに心配して引止めたが、とめられると無理にもとまらないのが蜂の性分だつた。ぐつと一息にコツプを干すと、半分崩れかけてゐた體を起して立上つた。

「まつたくよした方がいゝぜ。第一これがきつかけで、又僕に交際でも求められると厄介だ。」
「あんたの知つた事やあれへん。あて一寸行て見てこ。」
蜂はいひ殘して、おりかを先だちに廊下に出て行つた。
「今晩は？　入つても大事おまへんか。」
間も無く蜂の醉つた聲でいふのが三田のところまで聞えた。
「さあさ、お越しやす。」
とうけたのはお米だつた。
「へえ、あんたですか、あてを知つてるいうてはるのは。あて知りめへんで。」
聞いてゐる三田が冷々する程、蜂の口のきき方は遠慮が無かつた。
「あゝ知つてるよ。いつだつたかなあ、吉寅で宴會のあつたのは。」
「吉寅？　あてむこのうちはちつとも行きまへんがな。」
「さうか、そんなら千代本だつたかしら。」
はなれてきいて居ても、野呂のいふのは出まかせらしかつた。
「まあ、いつぱい飲みたまへ。君の氣分が氣に入つた。」

「よろし、飲みまつさ。そのコップ貸しとくんなはれ。」
「コップか、えらいなあ。」
蜂がそこにおちついて、コップ酒となつたらしいのを、心配半分面白半分の氣持で聞きながら、
三田は獨酌の盃をなめてゐた。

八の五

「あんたの名前、野呂さんいひまんの。けつたいな名前だんな。」
さういふ聲につゞいて、うわつはつはつと豪傑笑をした野呂が、
「女に野呂さんだよ。」
と答へた。
「へえ、あては野呂間の野呂かと思うてましてん。」
「いや、實に愉快だ。君の氣分が氣に入つたよ。」
さう云つて、又酒を強ひてゐる様子だつた。
「あんたあての氣分が氣に入つたいうて、どのやうな氣分だか知つてゐやはりまへんのか。」

「そこが面白いんだ。客を客ともおもはないでね。」
「よしとくんなはれ。あてはあんたに藝者として呼ばれてるのとは違ひまつせ。あての方から遊びに來てゐるのやさかい、あてがお客でつしやろ。」
「惡かつた。あやまるよ。まあ氣を惡くしないでいつぱい飲みたまへ。」
男の方はからかふつもりでゐるのだが、蜂の權幕は強過て、むざむざからかはれてはゐなかつた。
「よろし、いくらでも飲みまつさ。そのかはり、あんたも盃みたいなものほつといて、コップでつきあつたらどうですか。あてがいつぱい飲む、あんたがいつぱい飲む、あてが飲む、あんたが飲む、あてが飲む、あんたが飲む。姐さん、お酒一打程貰うて來てくんなはれ。」
三田は三番の部屋のなかの光景がはつきりわかつた。あてが飲む、あんたが飲むが愈々出たところを見ると、蜂が醉ひつぶれるか、野呂が倒れるか、どつちにしてもあらけた結末になる事はたしかだつた。いゝ加減に切上てくれゝばいゝがと思ひながら、そろそろ野呂の方で相手が勤まり兼て來たらしいのを、密かに痛快にも思つて居た。
「さ、飲みなれ、飲みなれ。それが飲めんやうな事やつたら、えらさうな事いふのはやめて貰ひ

まつさ。」
「まあ、待つてくれ。今飲んだばかりぢやないか。さう女の方からせつつかれては堪らないよ。」
「姐さん、野呂さんは三田さんみたいにたんとあがれへんのですさかい、かんにんしてあげとくれやす。」
蟒のたてつゞけに飲んではさすコツプに辟易して、野呂が逃げるに逃げられなくなつたのを、お酌をしてゐるお米が見兼て仲に入つた。
「そんならあんた降參しやはつたのか。」
「降參はしないよ。しかしだね、君は三田君のところに逢ひに來た人なんだらう。それに違ひないや。それをだね、それを僕が占領してゐては第一三田君に濟まんぢやあないか。」
野呂はまるつきり醉はされて、言葉と言葉のつながりがはつきりしなくなつてゐた。
「ほんまですがな。三田さん一人で寂しがつてゐやはりまつしやろ。」
お米も共々蟒を追拂はうとし出した。
「三田公なんかほつとけばよろし。あてはあんたがあてを知つてる、一緒に飲んだ事ある云うてはると聞いたによつて、遊びに來た。來て見たれば、あての方では見た事も無いやうな氣はする

けれど、あんたが飮めいふから飮んでゐるのだつせ。よろしか。」
「わかつた、わかつた。しかしだね、三田君の身にもなつて見給へ。折角君が顏を見せに來たといふのにだね、僕のところに入りびたつてゐられては、面白くなからうぢやあないか。それよりもお二人仲よくおやすみになつた方がよくはありませんか。」
「阿呆らし。あんたはあてと三田公と何ぞあるとおもうてゐやはるのか。置いて貰ひまつさ。はぐかりながら、そんなけちな三田公でも無し、あてでも無いわ。飮めといふ酒が飮めんのやつたら、男らしく降參したらえゝ。あてらのきよいつきあひを知りもせんくせに、けつたいな事いふのは置いて貰ひまつさ。さ、ぐつと飮んだらどうですか。」
「あ、あむない。」
お米が甲走つて叫んだのは、蜂が立上つたところらしかつた。
「さ、飮みなれな。」
「もう、いかんよ。」
「そんなら降參しましたといひなれ。いはんと頭から浴せまつせ。」
三田はやつたなと思ふと、おもはず盃を下に置いて、襟首がつめたく感じた。

「あ、あ姐ちやん、手荒い事したらあきまへんがな。」
悲鳴に似た聲と共に、皿小鉢の割れる音がしたと思ふと、
「あゝ、誰ぞ來てえ、おりかさん、おつぎさん、雜巾持つて來てえ。」
お米が一人で立騷ぐ音がつゞいた。
蜂はよろよろした足取で、三田の部屋に引あげて來た。
「阿呆らしい。人を馬鹿にしくさつたよつて、頭からお酒をかけてやつた。おゝしんど。」
と事もなげにいひながらお尻を下すと、長々と横になつて、忽ちぐつすり眠つてしまつた。

八の六

醉倒れて寢てしまつた蜂は、小一時間もたつとむつくり起上つて、人力車を呼ばせて歸つた。三番では、頭から酒を浴びた野呂が、強ひられてすごしたコップ酒を吐いて大騷ぎだつたが、女中達に介抱されて寢たらしく、宿中がひつそりしたのは十二時過ぎだつた。三田はいゝ心持に醉つた體を椅子に托して、天の川の目立つて高い空を撫でて來る夜風に吹かれてゐた。
「えらい騷ぎでしたなあ。」

とおつぎが持前の笑顔を一層崩してやつて來た。臺所番にあたつてゐて、二階の騒動にかゝづらはなかつた丈、無責任の興味を多分に持つてゐて、狼藉を極めた部屋の中をかたづけ、床を敷きながら、しきりに三番の出來事を話したがつた。

「ほんまにえらい女はんですなあ。さ、飲みなれ、飲まんとかけまつせと、こないいひながら、野呂さんの頭からあつうい御酒をじやあとかけはりましてんと。あの人酔ははつたら、何時もあのやうにいけずしやはりまんのか。」

「どうも、さうらしいね。僕だけが御贔負分にやられたのかと思つてゐたが。」

「野呂さんもあんたと同じですわ。着物も襦袢もづぶ濡れにならはつて、あげくが自身もどしはつたさかい、その臭さいうたらおまへんでしたぜ。あゝ、考へても胸が惡うなる。」

「又おみつつあんに頼んで仕立てゝ貰ふといいや。」

「ほんまにいいな。」

さも面白さうに朗かに笑つたが、急に眞面目な顔をして、

「時に芝居行はどないなりました。おみつつあんも待つてゐやはりまつせ。」

「なんだい、あの人に話してしまつたのかい。」

「わるおましたか。あんさんがほんまにみなで行かう云はゝつたよつて、せんどおもてゞ逢うた時、いうてしまひましたがな。」

「かまはないよ。近いうちに行かう。その日はおみつつあんに丸髷でも結つて貰はうかな。」

「よう似合ひまつしやろ。」

おつぎは笑ひながら出て行つた。

三田は緣側の玻璃戸をしめて、寢床の上に大の字になつた。風に吹かれてゐる間は、すつかり醉もさめた氣でゐたが、横になつて見ると深酒の名殘は蒸暑く、胸から上に押上げて來た。

ほんとに芝居に行かう。すべて世の中は何のこだはりも無く、めいめい仲よく遊ぶのがいゝ。淫賣だらうがなんだらうが、よさゝうな人間ならつきあつて見るに限る。おみつつあんと蜂と、日華洋行の娘と、おつぎとおりかとお米と、現在自分の身近にゐる連中みんなといつしよに、芝居を見に行つたら面白いだらう。その次にはお辨當を持つて、山のぼりか、海邊にでも出かけよう。さうだ、田原は是非とも誘つてやらう。あのお調子ものは飛上つて喜ぶだらう。三田はぼんやりした頭の中で、とりとめも無い空想に耽つてゐるうちに、段々と瞼が重くなつた。

八の七

「三田さん、三田さん。むこの部屋におみつつあんが來てゐやはりまつせ。」

一週間ばかりたつた日の夕方だつた。會社から歸つて、湯に入つて、くつろいだところへ御膳を持つて來たおつぎが、聲をひそめて云つた。

此間蜂が酒をぶつかけた着物の仕立直しを持つて來たおみつを、無理に自分の部屋に連れて來させて、野呂は悅に入つて居るのださうだ。

「野呂さんも女好きですからなあ、しつかりせんとおみつつあんとられてしまひまつせ。」

とおつぎは三田の給仕をしながら、おみつを女主人公とする事件の複雜になるのを面白がる樣子だつた。

「困るなあ、何んだつてあんな男の着物なんか縫はせるんだ。もつたいない。」

「あんたがおみつつあんに賴んだらえゝ云やはつたのだつせ。そないな事今になつて云うたかてあきまへんがな。」

三田が冗談に云つた言葉がきつかけになつて、おつぎがおみつの事を話すと、野呂は忽ち乘氣

になり、是非ともその娘に賴んでくれといふのだつたさうだ。年が年中女の話ばかりして、此の宿に來て間も無いのに、正にお米は手に入れてしまつた男だ。夜更に三番をそつと出て行く魚の感じのするお米の姿は、三田も二三度見た事がある。あゝいふ臆面の無い四十男にかゝつては、おみつなんか目の前でおつぷせられてしまふであらう。薄禿のあの頭も、荒淫の證據のやうな感じがして、三田はいたいたしい景色がちらちらして爲方が無かつた。たとへおみつが客をとる身の上としても、野呂だけはやめて貰ひ度いと思つた。

三番でも酒が始まつたらしく、何時もの通りお酌に侍るお米のへらへら笑ふ聲の絶間に、野呂の相も變らぬ猥談が聞えるのであつた。物靜かなおみつの聲は少しも聞えないが、話の模様で、その席にゐる事は確かだつた。

「お米さんもけつたいな人ですなあ。せんどの大貫さんの時も同じ事でしたが、自分が仲ようつてゐながら、その男が外の女はんにぢやらぢやらしやはるのを、いつしよに面白がつてゐるのですからなあ。」

大貫の場合にも、看護婦があひに來る時は、二人が盃のやりとりしてゐる前に坐つて酌をし、それが濟むと一つの床に二つの枕を並べるのも平氣でやつてのけ、つひぞ嫉妬らしい顔をした事

が無かつたといふ。
「さばさばしたもんですなあ。」
おつぎはしんそこから感心したやうに云つた。
「君ならどうだい。」
「あてだつか。あてはやきもちやきだつせ。その爲めに極道の亭主を持つて、辛抱出來んで出て來ました。」
「へえゝ、君は御亭主があつたのか。」
「へえ、子供もおましたがな。」
おつぎは始めて身の上話をした。大阪の郡部の役場に勤めてゐる男のところに嫁に行き、子供も一人出來たが、亭主が無類の道樂者で、たうとう喧嘩して出てしまつたといふのだつた。本人はひどく悲劇がつてゐるらしかつたが、笑の外には表情の無い女だから、少しも憂ひがきかなかつた。
「亭主には未練おまへんけどなあ、子供は矢張可愛うて忘られまへんなあ。」
いつ迄も親子の情あひを說いてゐるのを聞流して、三田は三番の部屋の人聲にばかり氣を取ら

れてゐた。

八の八

その晩はそれで濟んだけれど、四五日たつて又おみつは、野呂のところへよばれて來てゐた。
「今晩はなあ、お米さんとおみつつあん連れて、野呂さん活動見に行かはるのですと。」
おつぎは多少羨しさうな様子はありながら、何時もの通りにこにこして、三田のお給仕をしながら告(つげ)るのであつた。
「畜生、先手(せんて)を打ちやあがつたな。」
三田は肚の中で、何の容赦も無く實行の歩を進める野呂の遣口に憤慨しながら、さつさとおつもりの酒を飲んで、飯を濟ませてしまつた。何を云つても取合はない三田の態度に張合のぬけたおつぎは、
「よろしゆおあがり。」
と挨拶して、あつけなさゝうに引きさがつた。
机に向つて本を開いても、集中力が無くて一向身に沁みない。ふだんよりもはしやいでゐるお

米の聲と、相手がはしやいでゐると見てとつて、無理にもおちつきを見せようとするらしい野呂の聲か耳をはなれない。時々は、遠慮深いおみつの笑聲もまじつた。
外出の爲めか、例の長つたらしい酒も始まらないで、間も無く連れ立つて出て行つた。三田は變に寂しかつた。欄干に近く遙々と見渡される澄み渡つた星空の下を、靜に下る川船の艪の音が、ぎいと冴えて聞えて消えて行く。秋の感じが深かつた。
「三田さん御勉強ですか。お茶でもいれませうか。」
おりかとおつぎが臺所の仕事をしまつて、遊びに來た。宿に居れば必ず机にむかつてゐる三田の部屋には、つひぞ斯ういふ景色はない事たつたが、お米が野呂につれられて行つたのに對して、平らかならぬ二人が、味方ほしさに來たものらしかつた。
「ひとりきりで、よう寂しい事おまへんな。」
「お茶はほしくないけれど、まあ御入りなさい。」
平生ならばうるさがるところだが、本を讀んでも頭に入らない折柄、意地になつて嚙りついてゐた机をはなれる丈でも救はれる氣がした。
「野呂さんやみなは、何處へ行かはつたのでつしやろ。」

二人の話は活動に行つた三人にばかりかゝはつてゐた。
「洋食喰べて、それから樂天地に行くんだつてお米さんはいつてたよ。」
「へえ、あてら洋食みたいなもん、よう喰べんわ。」
三田は二人を歡迎してみたものゝ、ちつとも話に乘る氣はなかつた。野呂の女好きだといふ事、お米の淫奔な事、二人の關係の目に餘る事、その野呂が又してもおみつを物にしようとしてゐる事、しかもお米はそれを承知してゐて平氣であるばかりでなく、寧ろ取持ちさうだといふ事などを、女達は何時迄も話してゐた。
「お米さんは、三田さんは窮屈で嫌ひだつて云つてるんですよ。」
「そのくせ三田さんが、みなで芝居見に行こ云はゝつたら、あても連れて行つて貰ふいうてきかん、ほんまに氣まゝな人やで。」
しまひには三田を味方に引入れる爲めに、そんな事迄もいひ出した。
「ふだんは骨惜みして働かないくせに、面白い事だと自分ばかりいゝめを見ようつていふんだからねえ。」
「いゝぢやあないか、君達もお米さんもみんな一緒に行けば。」

あんまりめいめいの心の中が見え過ぎて來て、きいてゐてもいゝ氣持で無い爲め、三田はなだめるやうに口をはさんだ。

「それだつてうちの用事があるから、三人とも行くつてわけには行かないんですよ。」

芝居に行くといふ事は全く女中達の心をとらへて、すつかり眞劍になつてゐるので、三田にはひどく面倒臭い事になつてしまつた。面倒臭いから早くかたづけてしまふ方がいゝと云ふ氣にもなつた。

「よしよし、君達のいゝやうにしてくれ給へ。今度の日曜に行くときめるから。」

「ほんまだつか。何處の芝居にしましよか。」

「おみつつあんも連れて行くんですか。」

二人は忽ち膝を乘出して來た。

「勿論さ。芝居は何處でも君達できめて、御苦勞だけれど棧敷を取つて置いてくれたまへ。」

「一等ですか。」

「特等々々。」

三田は話を打切つて、露骨な欠伸をした。

八の九

おりかとおつぎを追拂ふ爲めに早寢にした三田は、翌朝あけがたに目が覺めてしまつた。平生夜更かしで、一時二時迄机にむかつてゐる事も珍しくないのが、無理に早くから床に入つたので、いつたん目が覺めると、いくら努めても再び眠る事は出來なかつた。

いさぎよく起きて本でも讀まうと、廊下のつきあたりのはゞかりへ行くと、その戸に手をかけた時、中から開けて人が出て來た。びつくりして道を開くと、先方もあわてゝ通つたが、三田を見ると一層驚いて頭を下げた。長襦袢にしごきをしめた姿は脊丈をなほ高く見せた。直ぐに三番の襖の中に消えたのはおみつだつた。

三田は部屋にもどつて又床の中にもぐり込んだ。昨夜夜中に野呂達が歸つて來た氣配は知つてゐたが、うつゝながらも聞いた人聲は野呂とお米のものだつた。それで安心したわけでは無いが、直ぐに又眠つてしまつて、おみつが泊つてゐるようなどゝとは微塵も考へなかつた。矢張賣物たつたのかと、豫々一分の疑を殘してゐた事がはつきりとわかつたが、それにしても餘り無雜作なのが腹立たしかつた。仕立物を賴んで、それが出來上つて持つて來た時が初對面で、二度目が洋食

と活動で、それでもう萬事濟んだのか。いくらなんでも、ゆとりが無さ過る。詩が無い。遊びが無い。なんといふ簡單な取引なのだ。しかも其の取引のきつかけをつくつたのは、蟒が醉拂つて見ず知らずの野呂の頭に酒をぶつかけた事に始まり、仕立物ならおみつに頼んだらよからうと冗談に云つた自分の言葉も重大な役目をつとめたのだ。さう考へると、三田は世の中の一切の事が馬鹿馬鹿しいやうな心持になつた。

　朝の御膳を運んで來たおつぎは、

「あんた知つてゐやはりまつか。」

　とたつぷり意味のある笑を示して訊いた。

「何を？」

　三田は自ら顏が赤くなるのを感じながら、空とぼけてきゝかへした。

「昨晩おみつつあん泊つて行かはりましたぜ。」

　聲をひそめながら、三番の方角を指さした。

「今朝早ういにましたがな、よう平氣であて等に挨拶して行けたものと感心しましたわ。」

「そりやあ商賣だもの。」

三田は平氣をよそほつて云つてのけたが、自分の言葉ながら不愉快だつた。もつと詳しい事をきゝ度いやうな、一切何もきゝ度くないやうな、いりまじつた心持で、齒が惡くて上手には喰べられない御飯にお茶をかけて流し込むと、さも忙しさうに立上つて、會社に出かけた。往來で、いつもの通り日華洋行の娘と出合つた時は、その美しさによつて不淨を拂つたやうな氣持がした。けれども、その晩は又一層深刻に、野呂とおみつの事を女中達にきかされて參つてしまつた。洋食を喰べて、活動を見て、三人が歸つて來たのは十二時頃で、お米が萬事取計(はから)つて自分で寢床迄敷いてやり、おみつを泊めてしまつたのださうだ。

「二圓ですとさ。」

おりかは面皰だらけの顏をあからめて云つた。

「へえ、それが相場かい。」

「いゝえ、相場つてわけぢやあないんですとさ。野呂さんがね、自慢さうに云つてるんですよ。あの娘はちつとも面白くないし、洋食も喰べさせてやつたし、活動もおごつたから一圓五十錢位で澤山だと思つたけれど、奮發して二圓つかまして歸したゞつて。」

おみつは二度と野呂には呼ばれなかつた。二三日たてつゞけに、皆(みんな)にからかはれてゐた野呂は、

その娘が何の感興も起さない特殊の人間に屬する事を、露骨な言葉であらはして、さも損をしたやうな口をきいてゐた。

「矢張お米さんに限るよ。」

と當のお米にむかつていふのを、お米も一向平氣で、面白さうに笑ひながら聞いてゐるのであつた。

八の十

日曜の芝居見物は、女中達を昂奮させ、誰と誰とが行くといふ事で、はしたなくいひ争つたが、結局おかみさんが大きいところを見せて、二人とも行く事になつた。

「よろし、野呂さんの外にはお客さんゐてはれへんのやから、一日だけあてが働いてやろ。折角三田さんが連れて行つてやる云はゝるのやつたら、みんな揃うて行くがえゝ。」

その一言で、眞劍に仲間割のしさうだつた形勢も無事に納まつた。

「三田さん、あんたも物好きな人ですなあ。しやうむないうちの女衆(おなごしゆ)や、淫賣娘みたいなもんを連れて御芝居見に行つて、何が面白いのでつしやろ。」

おかみさんは三田の顏を見ると、男らしい口のきゝ方をして、からから笑つた。
女中達が擇んだ芝居は、雁治郎でも延若でも無く、此の頃流行る劍劇といふ立廻を賣物にする書生芝居だつた。
その日は朝のうちから、女中達はそはそはしてゐたが、めいめい他所行に着換へ、厚手に白粉を塗つて、三田を促してうちを出た。おみつもすつかり身じまひをして、留守居を賴んだ近所の婆さんと、格子のところに顏を並べて待つてゐた。
電車の中でも、道頓堀の人ごみの中でも、女中達は事每に面白さうに笑ふのであつた。自分達が年中あこがれてゐる芝居に行くといふ事で、世の中の萬事が面白く樂しくなつたのである。けれども、おみつはとりすました口元に微笑を浮べる位で、日頃に變らぬ寂しさだつた。野呂がしきりにいふ樣に、何か肉體的にも缺陷があるやうに見えるのであつた。
劇場の中に入ると、女達の心持は一層浮立ち、緞帳の縫取に感心したり、天井を見上て驚嘆したり、棧敷に坐つたまゝ、天上してしまひさうな樣子だつた。三田は、誰が見ても不思議な組合せに違ひ無い此の一連を、みんなが好奇の眼を以て見てゐるやうに思はれて、心がおちつかなかつた。早く幕が開いてくれゝばいゝと思ひながら、目の前のおみつの銀杏返のかげに、かくれる

やうに坐つてゐた。
恰度幕が開かうといふ時に、隣棧敷へかけ込むやうに來た一組があつた。おや、と思ふ間も無かつた。
「おゝ、三田君か。」
先方も氣がついて、輕くうなづいたのは三田の勤める會社の支店長だつた。一家揃つて來たので、でつぷり肥つた夫人と、中學の制服を着た息子と、女學校の上級生らしい娘がゐた。その誰もが、三田の一連を、さも不思議さうに盜み見るのであつた。
「會社の三田君。筆名樟喬太郎先生。今夕刊に出てゐる小說の作者さ。」
豪傑肌の支店長は、家族の者に紹介して、何がをかしいのか高笑をしたが、しかし鋭い眼ざしで、女連を觀察してゐた。三田はすつかり恐縮して、さかんに斬合つてゐる舞臺の活劇も目に入らず、芝居の筋なんかてんでわからなかつた。
幕間に女連が何處かへ出て行つてしまふと、
「どういふおつれだね。」
と支店長は直に質問した。

「宿の女中です。」
三田は夫人や令嬢の手前を氣にして赤面しながら答へた。
「女中慰安か。」
又高々と笑つたが、さつぱりと話題を轉じて、
「あんまり評判が高いので見に來たが、痛快だね。男と女が泣いたりいちやついたりするのよりは面白い。今の立廻なんか眞に迫つてゐる。」
と感服してゐた。

九の一

涼しいと思つた風もいつしか寒くなつた。川に面した縁側の玻璃戸をゆする木枯の日もあつた。夏中閉口した西日も今は戀しいのに、日の暮が早くなつて、それもさして來なかつた。東京のやうにはげしくはないが、矢張塵埃の舞上る往來を、三田は外套の襟を立てゝ會社に通つた。新聞に出てゐる小說も間も無く終りに近く、暫く休息したので又燃えて來る創作慾に驅られて、夜は火鉢を抱へて新規の作品に取かゝつた。

往來であふ日華洋行の娘は、手編らしいオールド・ローズの長い毛絲の肩かけをしてゐた。寒さうな後姿に、冬の日の風情があつた。おみつの家の前を通る事も、三田にとつては一つの期待を伴つてゐた。格子の中に障子がはまつたので、夏の頃のやうに姿を見かけないのが物足りなかつた。張合の無い、内氣といふよりも無神經な娘は、自分が色をひさぐ事さへ、何の反省もなく從つてゐるらしかつた。大阪には、嫁入道具をこしらへる爲めに、さういふ稼ぎをする娘も少くないと聞かされた事など思ひ合せて、三田は持前の、みじめなものに對する愛憐を感じてゐた。芝居に行つてからは、先方は一段と親しさをましたか、以前よりも微笑を深く湛へて挨拶するのであつた。

「三田さん、あんたおみつつあんをどうぞしてあげたらどうですか。三田さん、三田さんとよう噂してゐやはりまつせ。」

男と女とは必ずくつつくものと思ひ、くつつける事にも多大の興味を持つて居るお米は、腑に落ちない三田の態度を齒がゆがつた。

そのおみつの家の二階に、或日宿のおつさんの姿を見出した。肱かけ窓に肱をついて、三田を見下してにた／＼笑つてゐた。

「今日ね、おみつつあんの家の二階から、うちのおつさんが顏を出してゐたがどうしたんだらう。」

と何か心にかゝるものがあつて、三田は直ぐさま訊いてみた。

「おつさんですか。あすこの家に間借してゐるんですよ。」

おりかは滿面の面皰を笑で動搖させながら、意味ありげにいふのであつた。

「へえ何時から。」

「つい一週間ばかり前からです。おつさん、若い女と一緒にゐるんですよ。」

「おみつつあんかい。」

三田は唇の厚ぼつたい、舌が長過て涎のたれさうな薄汚ないぢいさんの顏を思ひ出して胸が惡くなつた。

「いゝえ、おみつつあんぢやあないの。何處の娘だか、身投しようとしたのを助けて、その人といつしよに住んでるんです。」

噓のやうなほんとの話を、おりかは三田の酒の肴にした。

つい此間の大雨の晩、おつさんは何處かで引かけてふらふら歸つて來る川岸つぷちで、正に身

を投げようとする女を抱きとめた。びしよ濡れになつてゐるのをうち迄連れて來たが、うつかり引擦りこんでおかみさんに叱られてはつまらないと考へ直し、おみつのうちに談判して、その晩から二階を借りる事になつた。女は近在の百姓の娘で、いろ男に捨てられたのを悲觀して死ぬ氣になつたのださうだ。

「まだ十九か二十位だらうね。それをおつさんはいふ事をきかせようつて大變なんですよ。」

おつさんは折角自分が授かつて來た女を逃しては大變だと思つて、おみつの家の二階にとぢ籠つたまゝ一歩も外出しない。宿の風呂をたく事もしないので、おかみさんはもう寄せつけないと怒つてゐるといふのであつた。

「それぢやあ無理にその女を監禁してゐるんだね。」

三田は驚いて膝を乘出した。

九の二

三田は、おりかに聞かされたおつさんと、おつさんが助けて連れて來た女の事がひどく氣になつた。あんまり手近に起つた事件なので、かへつて噓らしくも思はれたが、萬一事實だとすれば

默視出來ない。警察に訴へるのは面白くないが、何とかして救ひ出してやらなくてはならない。三田は、活動寫眞の主人公のやうに勇敢な自分を空想した。木枯の吹き荒ぶ夜半に、教會の建物のかげから忍び出て、おみつの家の廂に手がかゝると、身輕に屋根に飛上る。雨戸を押破つて忍び込む。誰も氣の付かないうちに娘を抱いて出て來る。さうで無ければ、間一髪といふところにあらはれて、おつさんと格鬪したあげく、女を奪還する。さういふ冒險の幾場面が、無數に目の前に映じるのであつた。

話を聞いた晩には、わざわざ散歩に出て、おみつの家の前を通つて見たが、二階の雨戸はしまつてゐて、灯影ももれて來なかつた。

それ以來、三田は會社のゆきかへりに注意して見るが、時々おつさんが間抜な顏を窓にさらしてゐるばかりで、つひぞ女の姿を見無かつた。けれども、女がその二階に居る事は、外の者の口からも確かめられた。

「おつさんが毎晩々々その女はんを口說いて居るのが、とてもをかしうて堪らんと、おみつつあんが話してゐやはりました。」

おつぎもおりか同様に、此の事件を年とつたおつさんの演ずる喜劇として笑つて居た。男に捨

てられて身を投げようとした若い女が、救はれたぢいさんに監禁されて、いふ事をきけと攻められてゐる悲劇だとは考へてゐなかつた。
「それで、どうしてもおつさんのいふ事をきかないのかしら。」
「へえ、いやゝ云うて承知しやはれしめへんのですと。」
「そんなにいやがるのを、いゝ年をしてよせばいゝのに。最初助ける時は、助けようといふ氣持丈で、別段後でものにしようといふ考は無かつたんだらうぢやあないか。」
「それはさうでつしやろがな、おつさんにしてみれば、着物も買うてやらはつたし、喰べる物も喰べさせたし、何やかやともの入りもおましたよつて、たゞでかやしたらつまらんと、こないにまあ、思うてゐやはるのでつしやろ。」
さう云ふおつぎの態度にも、命を助けてやり、衣食を與へたものだから、その代償として要求するのは當然ではないかと云ひ度さうな様子がありありと見えた。おりかにしても、お米にしても、みんなこれと同じ考へらしかつた。
「いつたい其の女の人は毎日何して暮らして居るんだらう。まさか朝から晩迄おつさんに口說かれて居るわけでは無いだらう。」

「へえ、晝間はおみつつあんといつしよにお針してゐやはります。うちへ歸つて百姓するのはいやだし、今更親達や村の衆に顔を合せる氣もないから、大阪で何處ぞへ奉公したいとも云うてゐやはるさうです。」

「ふうむ。」

一人の女が、せつぱ詰つた苦艱に遭遇して居るのだから、どうしても救ひ出さなくてはならないと考へて居た三田は、存外登場人物が平氣らしいのに驚いた。世の中は廣くて深いなあと、彼は自分の一本氣を顧みて恥ぢる心持さへ起した。

九の三

それでも三田の心の底には安んじないものがあつた。何といつても、若い女を監禁して居るのは許し難い。いくらおつさんが口說いてもいふ事をきかないと云ふけれど、それも何時迄持堪へるかわからない。萬一暴力に訴へたら、それつきりではないか。どうしても其處に至る前に救ひ出さなければならない。三田はしきりに機會をうかゞつて居た。

或晩散歩に出て、それとなくおみつの家の前を通り、あかるい町の方へ行つた時、小間物を賣

る店から、湯上りらしく、ふだんよりも白粉の濃いのがくつきりと夜の町に浮んで出て來たのはおみつだつた。笑顏を傾けて行過るのを、三田は思ひ切つて呼止めた。
「何ぞ御用ですか。」
「一寸話があるんですけれど。」
呼止められて、日和下駄の音をとめたおみつが、女らしい不安を浮べて居るのを見て、三田は不圖口ごもつた。何處へつれて行つて話をしたらいゝか迷つたのである。
「あなたこれから何處かへ行くんですか。謠の稽古ですか。」
「はあ、いゝえ、別段急ぐ事も御座りません。」
「そんなら暫くつきあつて下さい。決して長くは引止めませんから。」
三田はそのまゝおみつの家とは反對の方へ歩き出した。往來の人があやしんで見て過るのがいやだつたのである。おみつはつゝましく一間ばかりの間隔を置いてついて來た。
西洋料理屋だの鳥屋だの蕎麥屋だの、いれごみのうちは避けて、三田は小料理屋を選んだ。
「おいでやす。お上りやす。」
帳場に坐つて居るおかみさんが、ぢろぢろ客種を觀察しながら、不精つたらしく迎へるのをう

しろにして、急な梯子段を上ると、右と左に一室づゝある座敷の往來に面した小さい方に通つた。壁の上に品書の貼つけてある程度の小料理屋で、求められゝばさのさ位はうたひさうな女中が、これも二人をうさん臭さうに見ながら注文をきいた。

　みつくろひのさかなに酒が出て、御酌には及ばないといふと、

「そんならよろしうお願ひしまつさ。」

　とおみつに挨拶して引さがつた。

「實はね、あなたにきゝたい事があつてね。」

　三田は手酌で飲みながら話をきり出した。小ぢんまりとした綺麗な顔ではあるが、何時も物足りなく思はれるのはおみつの表情の無い事だつた。往來で呼止められて、小料理屋の二階に連れて來られても、別段何の動揺も無い、きめの細かい薄皮の顔をあかりの下にはつきり見せて、行儀よく坐つてゐた。

「あなたのうちの二階に、醉月のおつさんが居るでせう。」

「へえ、ゐやはります。」

「そのおつさんの外に、若い女の人が一人ゐやあしませんか。」

「へえ、ゐやはります。」
何の話かと思つてゐたら、おつさんの事なので意外らしかつた。
「私はよくは知らないのだが、その女の人は、男に捨てられて身投しようとしたのを、通りかゝりのおつさんに助けられたとかいふ話だけれど、ほんとですか。」
「さうやさうでして。」
「ところが其後おつさんは、その人をあなたの家の二階から外に出さず、いふ事をきけと云つて責めて居ると云ふ事だけれど、そんな怪しからない事があるんですか。」
それが事實ならば許して置けないと思ふので、自然と語氣が強くなつた。おみつは自分が咎められて居るやうな驚を見せた。
「何とか彼とかいうてゐなさるやうですけれど……」
「それでおつさんは無理にどうしようとか云ふやうな事は無いのですか。手荒な事でもするといふやうな。」
「手荒な事をなさるやうな事はおまへんでつしやろ。」
「だつて一週間も二週間も根氣よく口說いて居るといふのだから、どうしても駄目だと見たら亂

暴しないとも限らないでせう。」

頼りにならない相手の返事に少々苛々して、食臺についた肱にも力が入つた。

「そない云はゝりますけれどなあ、女さんの方が體も大きうて、おつさんよりも強さうに見えますよつて、大事おまへん。」

三田ははり詰めた氣が弛んで吹出しさうになつた。

九の四

女を監禁してゐる惡漢――それがよぼよぼの涎の垂れさうなおつさんなのは張合が無いが――に對し、自分は義血俠血に富むひとかどの役柄を引受けて、目出度く救ひ出さうと云ふ緊張した場面を想像して居たのに、話が進めば進む程劇的要素の減つて行くのは喰ひ足り無い事であつた。三田の心持は、少くとも當の女は逃げようにも逃げられず、絶間無い責折檻に苦しめられ、悲歎にくれてゐる位の事は當然ある可き事だと思つてゐた。けれども、根掘葉掘訊き糺してゐるうちに、段々それは裏切られて行つた。

「けれどもねえ、何故女の人は逃げ出さないんだらう。おつさんが手荒な事をしないのなら、逃

げられさうなものぢやあないかと私は思ふけれど。」
「それは逃げようと思うたら逃げられん事はおまへん。けれども、逃げたかて行くところも無いさかい、え丶奉公先でも見當る迄は、辛抱してゐた方がよろしうおまつしやろ。」
どうしても親もとには歸らないと、その女は云つてゐるさうである。
「では別段泣かされてゐるわけでも無いのかしら。」
「はじめは泣いてゐやはる事もおましたが、それかつておつさんがいぢめるからと云ふわけでも無いのです。やつぱり女ですからなあ、身を投げようと思うたり、知らぬうちに連れて來られたりして、心細う思うたのでつしやろ。」
「そんなら今は泣いてはゐないのですか。おつさんか見張をしてゐるから、何處にも行かれないといふわけでも無いのですか。」
「見張はしてゐやはります。そないせんかてよろしいのに。」
三田には何の事だかわからなくなつてしまつた。
「では、おつさんと一緒にゐるのはいやではないのかしら。」
「い丶え、いやはいやですわ。けれども、命は助けて貰うたし、着物も買うて貰ひ、御飯も喰べ

させて貰うた義理もおますよつてなあ。」

三田は又してもぎやふんと参つた。おつぎやおりか同様、此の娘も衣食の爲めにもの入りをかけたからには、むげに振もぎつて逃げては濟まないといふ考を持つて居るのであつた。

「そんなら其の義理を果す爲めには、おつさんのいふ事をきく義務があるともいへさうですね。」

自分の道德觀とあんまり違ひ過るので、三田は皮肉な質問をした。

「それですがな。本人は大阪で奉公したいいうてゐやはるので、そんならえゝところに奉公させてやるからと、おつさんが又口說かはるのでつせ。」

心持顏を紅くしはしたが、おみつはあたりまへの事のやうに話した。つまり、たゞ口說いたのでは女も承知しないが、奉公口を探してやるといふ交換條件で、完全に落さうといふ事なのだ。そして女の方も、奉公口さへ探してくれゝば、うんといひさうな話だつた。三田は世の中の廣いのに驚嘆した。

おみつはいくら勸めても遠慮して箸を取らなかつた。

「えらいすみませんけれど、頂いて歸つても大事おまへんか。」

病氣の父親に土產にするといふのであつた。最初からその積りで、ちつとも箸をつけなかつた

のかもしれない。三田は女中を呼んで勘定を命じた。
おみつは、自分の分と、三田が喰べ殘したのとを一つの折に詰めて貰つて大事さうに提げた。
天ぷら鹽燒はいふ迄も無く、お椀の中の魚もあつた。

九の五

おみつの家の二階にゐるおつさんと、おつさんが助けて來て且口說いてゐる女にかゝはる三田の心配は少しは減つたけれど、二人の關係はいふ迄も無く、おつぎ、おりか、おみつなどの態度も、三田の潔癖が承認しがたいところだつた。どうにかして、おつさんの手から女を解放して、面白くない取引の行はれないやうにしてやらうと思つてゐると、或日會社の歸りに、おみつの家の二階の窓に顏を出して居るおつさんを見つけた。何時もにたにた笑ひかけるのを、知らん面して通過るのであつたが、三田はその日思ひ切つて此方から聲をかけた。
「おつさん、いつぱい飲まうか。蛸安はどうだい。」
「よろしいな。」
もう酒の香が鼻をつくやうに相好を崩して應じた。

「今晩行かうか。」

「行きまほ。」

「それぢやあ後で誘ひに來るよ。」

しめたと思ひながら、三田は宿に歸つた。急に他所で飯を喰ふ事になつたからと斷つて、湯に入ると直ぐに支度をして出た。暗い夜で、つめたい風が埃を吹きつけた。

おつさんは待兼て、寒いおもてに顔を吹きさらしてゐた。

「こない寒い晩は、御酒の事だんな。」

鳥打帽子を目深にかぶり、毛絲の襟巻に顎を埋め、背中をまるくしながらしきりに水洟(みづつぱな)をすゝり込む。川岸に出ると風はなほ更強くなつた。

「旦さん、あんた蠣(かき)嫌ひだつか。」

「嫌ひぢやあない。」

「蛸安もよろしいが、どうで御馳走になるのやつたら、蠣船よばれましよか。」

おつさんは突然立停(たちどま)つて提議した。

「蠣船やつたら、あてがえゝとこ知つてゐますがなあ。」

「僕は何處でもいゝ。蛸安に限るつてわけでは無いのたから。」
「ほしたら蠣船にしまほ。どて燒や、からまぶしや、酢蠣、みなよろしいな。」
おつさんはすつかり滿足して、今來た方へ引返した。醉月の前をこつそり通り拔け、次の橋袂にある蠣船に三田をつれて行つた。
「今晩は。」
川岸から渡した踏板を踏んで、馴染らしく聲をかけた。
「ようお越し。誰かと思うたらおつさんだつか。」
水に近い食臺を占めた二人のところへ、年增の女中が來て挨拶した。
「旦さん、あんた何あがつてだつか。酢蠣いひまほか。」
「何でも君の好きなものをあつらへてくれ給へ。」
おつさんはあれこれと自分の好みを云つた。
「あのなあ、お銚ゐたらなあ、ちよと呼んどくれんか。」
あつらへを聞いて立つて行く女中を呼止めて、賴みながら、樂しさうな笑を滿面に浮かべて、厚ぼつたい唇をなめた。

九の六

お銚子を持つて出て來たのは、がつしりと肥つた若い女中で、健康さうな頰邊の色、笑はない時にも微かな皺の寄つてゐる目尻、くくり顎の線のはつきりした、何處から見ても善良で、生活力にみちみちてゐた。客馴れない事は、薄べりを踏む足つきにも歷然とあらはれてゐた。

「いよう、今晩は。」

おつさんはしまりの無い口尻から涎をたらしさうな相好をして、頓狂な聲を出したが、相手はまるつきり無感動で、食臺の上にお銚子を置いて、別段お酌をしようともしない。もう一人の年增の方が、どて燒の鍋や、生蠣の大皿を運んで來て、あんばいよく並べて行つた。

「こちらは醉月のお客さんや。」

自慢さうに三田を紹介し、

「お酌もようせん仲居さんも面白おまつしやろ。」

と三田の方には女中の事をそれとなく引合せた。さう云はれてお銚子を取上げて、女は不器用な太い手で酌をした。

「旦さん、この仲居さんはまだ新米たすさかい、氣のきかんところはかんにんしておくんなはれ。」
おつさんは盃を大切さうになめながら、素晴しい機嫌だ。
「お馴染かい。」
「お馴染もお馴染、うちの娘みたいなものですが。」
へらへら笑ひながら、おつさんは手持無沙汰に惱んでゐる女から目を放さない。
「旦さん、許して貰ひまつせ。ひつれいとは思ふけれど、きつちり坐つとつたらお酒がおいしうないわ。」
堅く膝を合せ、足のうらにお尻を乘せてゐたのが胡坐になると、一層酒の味がたちまさるのであつた。
三田は惡酒に閉口してゐた。喰べさせる物はうまいけれど、年中口中に涎のたまつてゐるおつさんと、ひとつ鍋をつッつくのもいゝ氣持はしなかつた。
おつさんは舌たらずの口で一人で喋つた。無言で、どつしりと坐つてゐる女中を促しては三田にも自分にも酌をさせ、その酒の味をほめながら、押頂くやうにして飲んだ。たるんで皺の寄つ

た顔にも脂肪が浮き、お金を出さないでいくらでも飲める酒の嬉しさは、かくす事が出來なかつた。

「旦さん、えらいひつれいですが。」

先刻から手放さない盃を、さして來た。三田は涎のたれさうな厚唇のあつたかみの殘つてゐさうなのに辟易したが、受取らないわけにも行かなかつた。

「僕は麥酒の方がいゝなあ。」

三田は全く弱つて、逃口上を考へながら、受けた盃を下に置いた。

「麥酒だつか。あのやうな苦いものがなんでおいしいのやろ。天下にお酒程結構なもんはあれしめんがなあ。」

「兎に角僕は麥酒だ。」

「さうだつか。旦さんは麥酒がえゝ云うてはるさかい、早う持つて來てあげなれ。」

女中はせき立てられて立つて行つたが、その後姿を見送つて、おつさんは聲を落し、

「旦さん、あの女なあ、男に捨てられたいうて、川にはまつて死なうとしたのを、わいが助けてやつたのだつせ。」

と一大事を打あけるやうに云つた。

「え、あれが？」

三田は不意うちを喰つて息を呑んだ。

「ほんまだつせ。若い女のくせに、むちやしよる。」

おつさんは、功名話がしたくてうづうづしてゐる厚唇をなめて一膝乗出した。

九の七

おつさんの話は、おつぎやおりかに聞いたのと同じで、大雨の夜の川端で偶然助けた女を連れて歸り、身の上をきいて見ると男に捨てられた口惜しまぎれに死なうとしたと云ふので、なだめすかして思ひ止まらせ、その後衣食の世話をしてゐたといふのであつた。たゞ違ふところは、無理口説きに口說き通してゐたといふこと丈である。話のなかばにお兼といふその女は麥酒と酒のおかはりを持つて來て、二人の間に坐つたが、別段自分の話をされてゐるといふ事に特別の色も動かさなかつた。まるつきりの山だしだけれど、はちきれさうな健康な顔つきには、つくろはない愛嬌があつて、助平な年寄が愛撫の手を出したがりさうなところは認められた。

「どこぞ大阪で奉公し度い云ふので、よろしい、命を助けたついでに、それも世話してやらうと、こない云うてなあ、あちらこちら聞合せたあげくに此のこゝのうちへ連れて來ましてん。」

折角さした盃をうけつぱなしにされた形で、何時かへつて來るかと待つてゐても埒があかないのに我慢出來無くなり、そうつと手を延ばして取戻して、又ちびりちびり飲み始めた。

「しよんべん臭い百姓の伜にだまされよつて、えゝ事した迄はよかつたが、犬ころみたいに捨てられたかつて、川にはまるいふのは阿呆らしいやないか。廣い大阪には、お日いさんも照れば花も咲く、色こそ白うはないがまんざら捨てたきりやうでも無し、よう分別するが悧巧といふもんやぜと、此のおやぢが說法して聽かせました。」

醉へば醉ふ程おしやべりになるおつさんは、長過てあつかひ惡い舌で上下の脣をなめながら、くどくど繰返して自慢をする。

「人間一人救うた心持は何ともいはれまへんな。これも天子様の赤子の一人やさかい、おかみから御はうびが下つてもよからうと思ふけれど、まだ下らん。」

三本四本德利が空になつて、おつさんのろれつは愈々あやしくなつて來た。三田は時折麥酒に口はつけるが、心持が重たくなつて、いたづらに煮詰まる鍋を見てゐる事が多かつた。身投しよ

うとする女を助けたといふ丈でも緊張した話なのに、その女を監禁して口説いてゐるといふ驚く可き事件に昂奮して、ひどく悲痛な人生の奥底に直面したやうに感じてゐた三田は、案外何の葛藤も無く、當事者は當事者相應の考へで、すらすらと解決して行くのに驚く外は無かつた。可哀さうなめにあつてゐるだらうと思つた女が、存外壯健な肉體と無頓着な精神をもつて目の前に坐つてゐるのも、本來ならば目出度い筈なのだが、なあんだ下らないと思ふ心を禁じ兼た。それにしても、おみつが話したやうに、此の女は奉公口を求め、おつさんがいくら口説いてもたゞでは應じないので、その奉公口を見つけてやるからいふ事をきけと云つてたといふのがほんとなら、此の女も結局蠣船の女中に世話して貰つて、うんと云つたのかしら。果してさうなら、何處迄世の中は單純で複雜なんだらう。全く無神經らしい健康な女を見てゐると、おつさんのやうなぢいさんでも、何の交換條件も無しに身を任せさうな氣もして、三田の心は呑氣になつた。彼は川波に少し搖れる舷に肱をついて、つかれた肚の底から欠伸の出て來るのを嚙み殺した。

　そんな事には頓着無く、おつさんは相手にしても面白く無い三田をうつちやらかして、女の方にしきりに話しかけてゐた。

「なあ、二度と浮氣したらあかんぜ。惡い奴にだまされたら、又身を投るやうな事になる。う丶

い、死んではなみが咲くものかいふ事知つたるか。」

冷たくなつた德利の底の酒をしたんで飲んだが、もう體の上半分の重みが支へ切れないで、

「旦さん、もう飲めまへん。若い時は家倉も飲んだおやぢだが、もうあかん。」

といひながら、ずるずると滑るやうに横に足を投出し、

「ひつれいさせて貰ひましよ。」

とぐつたり倒れると、まるまるとはちきれさうに盛上つた女の膝を枕に寢てしまつた。

十の一

年の暮になると、一年の總勘定の決濟に集つて來るのであらう、諸國の商人で醉月も忙しさを極めて居た。醉月が忙しいばかりでは無い、大阪中が何となくざわざわして、ぼろい儲をしたのか儲けそこなつたのか、何れも昂奮して血眼になつて居るやうだつた。

つひぞ懷にありあまる金のはいらない月給取さへ、誘ひ込まれて多忙がつてゐた。三田は別段平生と變つた事も無かつたが、新聞社から受取つた長篇小說の原稿料も夙につかひ果し、月末に賞與金を貰ふのを樂みにしながら、逼塞してゐた。さう云ふ時には、半分はやけになつて勉強す

るのが、彼の精神修養の方法だつた。たまには酒を飲みに行き度い衝動もあつたけれど、何をいふにも懐中が承知しないので、只管机にむかつてゐた。
月のなかばに、田原に誘はれて同窓會に顔を出したのが、久々で人中へ出る事であつた。ホテルの廣間を借りて、安い會費で催す、あたじけないものではあるが、時々出席して置くと、寒暑の挨拶状などを出さないでもいゝやうな氣がするのであつた。
つきあひ下手の三田でも、珍しいといふのが一徳で、會場では存外もてた。殊に最近迄新聞に連載されてゐた小說の作者だといふのが、人々の好奇心をそゝつた。食堂では田原と並んで席に着いた。恰度向ひあはせて、見た事のあるやうな、無いやうな、大兵肥滿の男がゐたが、田原とは知あひらしく、ことばをかはしてゐた。柄こそ大きいが、ぶよぶよ肥りの色白で、いかにも大阪育のぼんちらしいところのある、善良さうな人だつた。
「井元さんは三田君知つてゐませんか。」
「へえ、御高名はかねがね承つて居りますけれど。」
「さうでしたか。それでは御紹介しませう。三田君です。井元さん、日華洋行の大將さ。」
雙方に口をきいて、ひきあはせた。

「樟先生ですな。せんど新聞に御作の出とります時は、毎日樂みにして愛讀して居りました。私よりも家内の方は殊にあなたの御作が好きでして……」

自分達よりは確かに三四年先輩に違ひ無いのに、まるつきり商人らしいへりくだつた態度に出られて、口の重い三田は殆ど何もいへなかつた。それよりも、相手が日華洋行の大將だといふ事が、彼の胸をどきつかせた。

「日華洋行つていひますと土佐堀の……」

「さよです。どうして御存じで。」

「私は御近所に下宿して居るものですから、散歩に出たりして記憶にあるのです。」

「へえ、さよですか。ちと御立寄下さい。むさくるしい所ですけれど。」

三田は無心でいふ相手の言葉にも顏が赫くなつた。しかし此の人の店に彼の娘がゐるのだと思ふと、話をしてゐても嬉しかつた。他人で無いやうな氣もした。こんな素性の知れてゐる人の店に彼の娘がゐるといふのが安心だつた。

一井元さんなんざあ、大したものなんだ。全く自分一人の店で、思ふやうに經營出來るんだからなあ。」

田原は、あんまり思ふに任せない自分の會社とひきくらべて、心から羨しさうだつた。會のおしまひ迄田原と三田は一緒だつたが、井元はつきあひが廣いと見えて、あつちこつちと人中を廻つて歩いて居た。大男に似合はない細い聲で笑ふのが、その特徴のひとつだつた。

十の二

三田の心には樂しい空想の花が開き始めた。日華洋行の主人井元安吉と知合になつたのが手蔓になつて、何といふのか名前は知らないけれど、その店に勤めてゐる美しい娘と口を聞く機會が出來さうな氣がした。此の半年の間、日曜祭日を除いては、大概一日に一度か二度は往來で擦違ひ、先方こそつひぞ振向いて見た事も無いが、此方にとつては大阪中で一番忘れ難い人なのだ。いつたん近づいたら、極力いゝ印象を與へるであらう。交際する。土佐堀に端艇を浮べて月を見る景色を、年の暮だといふのにはつきりと想ひ描いた。それから父母を說いて結婚に同意させる。仲人には田原夫妻を頼まう。其處迄考へた時、最も頑固にありきたりの社會の掟を守る兩親が、おいそれと承知しない事で空想はつまづいた。しかし、兩親が反對するといふ事も亦、結局それに打勝つてしまへば、かへつて後の喜びを深くするだらうと思ひかへした。

就中緊張したのは同窓會の翌日の朝、會社へ行く途上で當の娘に出あつた時である。今日はと呼びかけて、いきなり帽子を取つて挨拶しても差支無いやうな氣がした。

けれども、三田の空想は長くは續かなかつた。同窓會で始めて紹介されてから僅かに三日目に、井元安吉は自殺してしまつた。

その日、何も知らないで執務してゐる三田のところへ、田原が突然やつて來た。

「おい、井元が死んだよ。」

と昂奮して調節を失つた聲で云つた。

「死んだ？」

「やつちやつた。」

田原は額に短銃の筒口を押當てる形をして見せた。

「今曉一時、天王寺の自宅でやつたんだ。先刻知らせがあつたものだから一寸行つて來たが、悲慘だよ。細君と、子供が三人、六十幾歳だかになるお母さんが居る。」

井元は日華洋行の營業成績が面白く無く、方々へ不義理が出來た上、最近不渡手形を出したのが世上の噂になると、根が善良過る位善良な人間だから、おもひつめて自命を絕つたのだ。彼

は養子で、先代が一代に築き上げた商賣と身代を、自分の失敗で失ふ申譯なさが、遺書に認めてあつたさうだ。
「それにしても同窓會に出て來た時は、如何にも世の中が面白さうな顏をしてゐたぢやあないか。」
色白のぶよぶよ肥りの大男の笑顏は、はつきりと目に浮ぶのであつた。
「ところがね、同窓會に出たのも、みんなに訣別を告るつもりだつたらしい。細君の話によると、此の一週間ばかり、のべつに親類や友達のうちを訪問してゐたさうだ。」
「死を決してから、あれ程柔和に笑つてゐられるものかなあ。」
三田は、たつた一度口をきいたばかりだけれど、其の人の動かし難い覺悟をもつて行つた死を惜んだ。從容として死に就くといふと、おそろしくいかめしく聞えるが、たよりの無い大阪辯で、柄に似合はぬ細い聲で笑ひながら人々の間をあちらこちらと愛嬌を振まいてゐた井元にも、しつかりした肚はあつたのだ。
連立つておもてに出ると、夕刊の新聞には寫眞入りで、人の不幸をいゝ材料にして書立てあつた。

「どうも俺は他人事とは思へないよ。日華洋行つていへば、一時は素晴しいものだつたからなあ。俺だつて何時なんどき變な羽目に陥らないとも限らないんだ。げんに、今度の決算次第で、專務さんもまた失職者となるかもしれないいんだ。」

「そんな事があるものか。」

「いゝや、あるんだ。今夜話すから聞いてくれよ。」

田原は友人の死に深く感動してゐた。三田は田原がしきりに繰返す井元の死に關聯する事柄に耳を貸しながら、一方には彼の娘が今後どうなるかといふ事を心配して居た。

十の三

田原と三田は、北の新地に近い金ぷらや千種の二階で、又新しく井元の死をいたみながら酒を飮んでゐた。晝間井元の家に馳つけて、無慘な死體を見て來た田原は、酒が胸に閊へ、それをまぎらす爲めに飮むので、一層醉つてしまつた。

「三田公、俺はほんとに又失職だよ。」

醉ひは醉つても、ふだんのやうにはしやがないで、田原は自分の會社の業態の面白くない事、

それよりも內輪の重役や大株主の間に意見がもつれて困つて居る事を、彼には似ない愚痴つぽい調子で話すのであつた。田原を專務取締役とする車輛會社は、創立後左程の年月も經てゐないので、比較的に營業費は嵩み、積立金も少いから利息收入も多く無く、堅實な遣口で行けば、當分無配當で押通し、後日の發展を待つ可き筈である。しかし、事業そのものに熱情を持つて居るのは田原以外には一人も無く、大阪式の目先の金儲ばかりを考へて居る連中は、三期も四期も無配當を續けて行く辛抱は出來兼る。そこで田原を壓迫して、其の年の上半期には無理に四分の配當をさせた。ところが此の下半期の決算には、六分の配當をさせようと云ふ株主間の意見で、總會を間近に控へながら、田原は極力反對してゐるが、金力の差は如何とも爲方が無く、あく迄自說を主張すれば、彼は辭表を提出する外に途が無いと云ふのであつた。

「そんなならどしどし配當をして、みんなを喜ばしてやればいゝぢやあないか。收支相つぐたはないといふ譯ではないんだらう。」

三田は、年中理想論に惱まされて居る田原を、面倒臭く思つてゐた。職工の待遇の改善を何よりも急務とする彼の主張には同感するが、外の會社との競爭に堪へられ無いのはわかり切つて居るのだから、先づ儲けて後に志を行へばいゝと考へ、又あからさまに注意もした。田原が理想家

としての美點は、實業家としての弱味だつた。
「そりやあ多少の利益はあるんだ。しかしその利益たるや到底六分の配當は不可能な位けち臭いものなのだ。俺はあと二年間無配當で我慢してくれゝば、その後は八分の配當を保證してもいゝと云つてるんだが……」
彼は無理にうはべ丈の利益勘定を捻出して蛸配當をする事は、結局何時迄も會社の狀態を不安ならしめるものだといふ事と、例によつて職工の待遇改善の急を說いて止まなかつた。
「しかし、我輩と雖も失職の苦みを再び繰返すのは實に辛いんだ。」
「再びなもんか。もう四度か五度は失職したらう。」
「ほんとだ。だが三田公、冗談ぢやあないぞ。毎日々々會社へ出かけて行つた者が、いちにち中うちでぼんやり暮らしてゐるのは堪らないぞ。女房は段々不機嫌になる、子供は最も敏感で、お父さんどうして會社に行かないのつて聞きやあがるんだ。あの苦み丈はとても堪らない。」
「そんなら株主の望み通り配當をしてやるのさ。」
「それが俺に出來るかい。」
田原は醉つて重たくなつた頭を横に振つた。

十の四

翌日三田は何時もよりも早く宿を出た。日華洋行がどんな樣子になつてゐるか知り度かつたのだ。會社に行くのとは全く方角が違ふのだが、同窓の先輩として、一度でも口をきいた人の死を弔ふのは當前だといふやうないひ譯を心の中にたゝみ込んで居た。

店の入口には本日休業と書いた紙が貼つてあつたが、中には頻に話聲がしてゐる。一瞬間躊躇したが、三田は思ひ切つて重たい開閉扉を押して中に入つた。整然と机は並んでゐるが、店の人達は仕事なんか手につかないらしく、あつちこつちにかたまつて、昂奮して話してゐた。主人の並ならぬ死に驚いたのと、今後の店の運命と、自分達の生活の心配と、入りまじつた混亂が、誰の顏色にもあらはれて居た。

三田は身震ひするやうに固くなつて帽子をとつた。目の前の、受附と書いた札の出て居るところに、あの娘がつゝましくひかへて居るのを見たのである。

「私は井元さんと同窓の者ですが、此度の事については深く同情して居ります。御宅へ伺ふのがほんたうだとは思ひますが、御近所に居りますので、こちらへ御悔に伺ひました。」

つひぞ使つた事の無い名刺を出して、兵隊のやうな切口上で述べた。

「えなみさん、何の御用？」

奥の方の机に坐つてゐる中年の社員が、椅子から立上らうとするのを見て、受附の娘は受取つた名刺を持つて行かうとした。

「たゞ御悔に伺つたばかりです。よろしく。」

三田は呼止めるやうに聲をかけて、もう一度叮嚀に頭を下げておもてに出た。方々の家の屋根には露霜の置く朝だつたが、額に汗を覺えた。人の不幸を弔ふ爲めとはいふものゝ、あの娘を見に行つた事は否まれなかつた。それが三田の心をたしなめた。

けれども、長い間たゞ途上で擦違ふばかりだつた娘と口をきゝ、自分の名刺を殘して來たのは少からぬ滿足だつた。えなみさんといふ苗字も知つたが、江南かしら、榎並かしら、江波かしら――と考へながら、銀杏返の生際のいゝ優しい顏だちを想つた。

次の日の朝は何時もの通り、一筋道の向ふから急いで來るえなみさんの姿を見て、三田は胸を躍らせた。昨日日華洋行の店さきで口をきいたのだから、今日は帽子をとつて挨拶しても失禮ではあるまいと思つた。よした方がいゝかしらとも勿論考へたが、間近く來ると明かに先方でも自

分を認めてゐる様子なので、彼は黒い中折の山に手をかけた。けれども、えなみさんは明かに此方の視線を避けるやうにうつむいて、知らないふりをして通り過ぎてしまつた。三田は振かへつて、遠ざかつて行く後姿を見送つた。五六間行過たえなみさんは、何と思つてか半身を柔かくねらせて振向いた。幾月の間、往來であふ度に三田は立どまつて見送るのだつたが、先方はつひぞ振かへつた事が無かつたのだから、三田は不意うちを喰つたやうにあわてゝ歩き出した。

それつきり、その娘を途上に見る事が無くなつた。朝夕の物足りなさに驅られて、三田は又わざわざ日華洋行の前を通つて見たが、店はすつかりおもてをしめて、商號の金文字で書いてあつた看板も取はづされて居た。

十の五

その年も愈おしつまつて、田原はたうとう辭表を提出した。前期の四分さへ無理だつたのに、秋になつてから一般の不景氣のあふりを喰つて業績はおもはしく無いにも拘らず、どうしても六分の配當をしろと云ふ一派の大株主の壓迫に、死物狂で戸別訪問迄して對抗策を講じたが、結局力盡きて敗れたのである。反對派の手強い壓迫の底には、單に一期や二期の利益配當を欲しがる

慾得づくばかりで無く、事毎に社會思想家がつて理想論を振廻す田原を、小面憎く思ふ姑根性が潛んで居た。月の始めから再三重役會を開いて懇談しても、ねちねちと意地惡く絡んで來る相手方の態度に憤慨して、田原も自分の背後に控へて居る筈の父親や親類の關係を辿つて一味を糾合し、華々しく決戰しようとした。しかし、味方と思ふ人の中にも、あまりに理想に走り過て居る所論をあやぶむ者も多く、殊に昂奮して來ると激越な調子になり度がる田原を危險思想の持主かと惧れる者もあつて、うまく纏まらなかつた。おまけに、反對派は田原の戸別訪問を陰謀と見做して反對宣傳を試み、此の方はうまうまと効果を收めたのであつた。その爲めに、田原の失脚は株主間の不信任の結果だと云はれても爲方の無い形になつてしまつた。

「おい三田公か。今最後の重役會で思ふさま奴等を罵倒したあげくに辭表を叩きつけてやつた。今晩は引退祝をやるから出て來てくれ。」

その日田原は電話をかけて來た。受話器をあふれるやうな高調子で、如何に彼が憤懣に堪へ無いでゐるかは推測する事が出來た。

三田は此間田原自身から、地位を保つ事が難しい狀態に陷つてゐると聞くよりも前から、密かに今日ある事を心配して居た。今時珍しく明るい性質で、物の一面しか見る事をせず、陰影には

全く氣の付かない美點といへば云ふ可き特性が、到底現在の商賣人として成功させない事は、人間性に眼を光らせてゐる小說家の見逃さないところであつた。殊に普通の勤人としては再三失敗したのが、有力な身內の者の後援で、突然專務取締役の要職に就いたといふ事も不自然だつた。加之此の天降りがおとなしく從來のしきたりを踏襲して行かない。事の成否に頓着無く、よくいへば一步進んだ施設を實行しようとするのだが、惡くいへば先走つた事をやらうと云ふのだから、反感を持たれ、あやぶまれるのはわかり切つてゐる。三田は田原の電話が切れた後、しばらくの間、如何に善良なる人間にとつて、現在の世の中は住みにくいかを考へさせられた。

一度宿に歸つて、湯に入つて和服に着換へ、田原の指定した曾根崎新地の茶屋に行くと、田原は旣に蜂を相手に酒を飲んで、眞赤になつて居た。

「どうもあんまりむしやくしやするもんだから、蜂姐さんのお勸めに任せて先に始めちやつた。」

「三田公、今晩は痛快に飮むぞ。」

「何いうて。社長さんは何時も宵の口には威張くさつて、あてがそろそろえゝ心持に醉うて來る頃には、僕歸るよか、それで無かつたら、葉牡丹さんの膝枕で高鼾ときまつてゐるわ。」

蜂は旣にコツプを手にして、うまさうに咽喉を鳴らして居た。

「おいおい、もう社長さん社長さんと云つてくれるな。今日から廢業だつて今話したぢやあないか。社長どころか、失業者だ。」

「かめへん、かめへん。社長さんみたいなやゝこしい御商賣せんかてよろし。そないな事にくよくよせんと、おいしいおいしいお酒を飲む方が悧巧だつせ。」

「そりや蜂さん姐さんのやうに禿頭がついてゐれば安心だけれどね。」

「大きに。あんたの御父さんはちやびんと違ひまつか。當分その毛脛を嚙つてゐたらえゝ。」

「いやあ、こいつは參つた。」

後へひつくりかへりさうな恰好をして、田原は自分の頭を兩手で抱へた。

田原がむきになつて車輛會社に對する不平不滿をぶちまける事と想像し、如何に慰めなだめようかと考へてゐた三田は、意外に陽氣な座敷の景色に安心して、蜂の差しつけるコツプを受けた。

「田原の社長廢業を祝して乾盃しよう。」

「よからう。」

「プロヂツト。」

蜂が柄にも無い事を云つて、コツプとコツプを觸合せた。

十一の一

三箇日と新年宴會の五日は、會社も休みだつた。大晦日迄はたてこんでゐた醉月も、元日には客といつては三田一人で、三番の野呂も休暇を利用して東京にゐる妻子のところへ行つてしまつた。

宿の娘とお米は島田に結ひ、外の者も小ざつぱりしたみなりに化粧をして、一人々々叮嚀に年頭の挨拶に來た。

三田は、無闇に厚ぼつたい新年の雜誌の幾册かを、此の休みのうちに讀んでしまはうと思つて、元旦から机にむかつて居た。あいにくうそ寒い曇日ではあつたが、往來には羽子をつく者もあつた。

「三田さん、あんたも羽子つきしませんか。」

と女中がかはるがはる呼びに來たが、三田は相手にならなかつた。

「三田さんみたいな人見た事無いわ。お正月の元日から、机にかじりついて勉強してゐやはる。」

と話してゐるのが、三田の耳にも聞えて來た。

「三田さん、おみつつあんが遊びに來てゐやはるさかい、一寸御いでやす。」
午後になつて、又おつぎが呼びに來た。恰度長々しい小説を讀終つたところだつたので、三田も氣分をかへる爲めに、
「よおし。」
わざと元氣よくこたへて本を閉ぢると、勢よく立上つた。
「げんきんなものですな。おみつつあんが來やはつたいうたら、直ぐにこれや。」
先に梯子段を下りたおつぎは、階下の連中にむかつて笑ひながら報告した。あけ放した玄關前の往來で、みんなは羽子をついてゐた。根の高い島田に結つたおみつもまじつてゐた。
「さ、今度は三田さんとおみつつあんやし。」
「三田さんの御尻叩いてやらんならん。」
無理に二人を向ひあはせに立たせて、追羽子をさせようと云ふのであつた。
ひとめ　ふため
みあかし　よめご
いつやの　むかし

ななやの　　やくし
ここのつ　　とをオ

上方らしい悠長な節でうたふのにつれて、三田は不器用な恰好で羽子をついた。
夕方からは雲が降出したので、三田の部屋隣の一番廣い座敷で、雙六や歌留多が始まつた。はじめのうちこそ、正月氣分で遠慮の無くなつて居る女中達になぶられてゐるのも面白かつたが、三田は長くおつきあひをして居る根氣は無かつた。それでもなかなか解放して異れないので、お酒を貰つて一隅で飲んでゐた。
夜遲く迄無禮講の遊びは續いた。三田はお相手にあきあきして、酒に醉つたのを口實にして引さがり、床に入つて雜誌を讀んでゐたが、そのうちに眠つてしまつた。
不意に、どたんばたん音をさせて侵入して來た人數に驚いて目をあくと、女中達がおみつの兩手をとり、後からは一人が押して、無理やりに三田の部屋へ連込んで來たところだつた。
「三田さん、おみつつあんを一緒に寢せてあげとくんなはれ。」
「おみつつあんはなあ、三田さんが好きやいうてゐやはりまつせ。」
口々に勝手な事を喋りながら、おみつを三田の夜着の中へ押入れようとする。おみつはさうは

させまいとして、疊の上に膝をついてあがつてゐる。三田が半身起しかけると、女中達はおみつ一人を殘して、ばたばた廊下へ逃出した。

「おいおい、一寸待つてくれ、ちよつと。」

三田は寢たまゝで聲をかけた。

「あのねえ、おみつつあん一人では可哀さうだから、みんなで雜魚寢しよう。」

忍び足でもどつて來たお米が首を出して、

「え、雜魚寢？　あたしらおかみさんに叱られますがな。」

と口ではいひながら、いかにも面白さうに反問した。

「叱られるかどうか、ためしに聞いて來てごらん。僕の御使だと云つて。」

「ほんまだつか。」

念をおして、げらげら笑ひながら馳けて行つた。しばらくたつて、三人の女中は一緒に歸つて來た。

「おかみさんにたづねましたらなあ、ほんまに三田さんみたいな物好な人はあらへん。うちの女衆で間に合ふ事でしたら、どないになりと御隨意に願ひますと、こない云うてゐやはりました。

「よし、そんならお隣の部屋で雑魚寝た。僕は此のまゝ寝てゐるから、蒲團の四隅を持つて運んで行つてくれたまへ。」
女連はげらげら笑ひながら、隣座敷に床を敷き、やがて三田のいふ通りに、おみこしの如く運んで行つた。
えらいやつちや、えらいやつちや、えらいやつちや、えらいやつちやと口々にはやしながら。

十一の二

三田が目を覺ました時は、女達は一人殘らず起きた後だつた。夜具もすつかりかたづいて、たゞ何となく女臭いいきれの漂つてゐるのが名殘たつた。
顏を洗ひに階下へ下りて行くと、女中達か一齊にお早うをいふのといつしよになつて、おかみさんも聲をかけた。
「三田さん、昨晩は女衆の寢言や齒ぎしりやおならをきかされて、ようやすまれへんでしたやろ。」
「僕は何も知らないで寝てゐたが、頭の一つや二つ蹴飛ばされたかも知れない。」

「三田さんのいははること。おみつつあんの方ばかり向いて寢てゐやはつたくせに。」

お米が横あひから口を出し、どつと笑ふのを背中にして、地下室へ下りた。

「旦さん、御目出度うさん。」

思ひもかけないおつさんが、洗面器をごしごし洗ひながら頭を下げた。

「せんどはえらい御馳走さんになりまして。」

「どうしたの。又此處のうちへ歸つて來たのかい。」

「へえ、やうやく勘當がゆりましてん。」

今にも涎のたれさうな口を開いて、げらげら笑つた。

「お兼さんか、艀船のあの人はどうしたい。」

「うふふ、しやうむない田舍者ですが、旦さん又今度行てやつとくんなはれ。」

三田はばりばりの髭にかみそりを當てながら、正月らしい呑氣な心持を感じた。年があけると同時に許されて、再び閾をまたぐと云ふ事が、ひどく面白かつた。

昨日につゞく寒い日で、霙から雨になつてなほ降つてゐた。終日雜誌を讀む積りで机に向つたが、おちつかない。田原のところへでも行つて見ようかしら。寂しがりの弱虫だから、失職の打

擊の後の正月を、さぞかし悄氣て暮らして居る事だらう。今から行つて誘ひ出して、晩には一ぱい飲まうかな。三田は間も無く心を決めて、机の抽斗にしまつてある蟇口を出して見た。確にその中にあつた筈の十圓札が一枚なくなつてゐた。

盆暮の賞與か、たまにはいる原稿料の外には、まとまつた金を持つた事の無い三田は、銀行との取引は無かつた。銀行預金としたところで、どうせ短時日に引出してしまふのだから、ろくに利子のつく筈も無い。それよりも手數のかゝらない方がいゝと云ふので、現に暮の賞與金は手つかずに、押入の柳行李の底にしまつてある。毎日の小遣は蟇口に小出しにして、これは無雜作に机の抽斗にはふり込んで置くのであつた。それが十圓札一枚と一圓札二枚と、銀貨銅貨をまぜて都合十圓なにがしかあつた。年中ぴいぴいして居る癖がついて、なかみがいくら殘つてゐるかは、よく承知して居るのである。念の爲めに柳行李の方も調べてみたが、これは新聞紙に包んだまゝどん底に入れてあつて、無事だつた。

前にゐた下宿では、盜癖のある小婢がゐて、時折間違があつたが、此處に來てからは安心して居た。たしかに盜られたに違ひ無いが、昨日の晩床に入る時にはあつたのだから、雜魚寢の爲めに隣の部屋へ行つてからの出來事でなければならない。眞夜中の事かしら、朝になつてからの事

かしら、何れにしても疑ふべき人間は、女中達とおみつの外に無かつた。

數箇月の間、一度も斯うした間違ひは無かつたのだから、冷靜に疑の絲を辿つて行けば、他所から來たおみつを第一に數へなければならない。假におみつの所業として、夜中にみんなの寢息をうかゞつて雜魚寢の部屋を拔出したとすると、あんまり度胸が太過ぎる。又、三田の机の抽斗に蟇口がはふり込んである事を知つてゐるわけは無いと考へると、疑は第二の人間にかゝるのが至當である。そんなら女中達の中の一人か。三田は忌はしい嫌疑に濁つた頭を轉換させる爲めにも、此の部屋に居るのがいやになつて、田原の家をこゝろざして出た。

十一の三

御影の田原の家はひつそりして、あるじの悄氣てゐるのに引込まれ、子供達迄つまらない姿をしてゐるだらうと想像してゐたのにひきかへ、方々の酒藏の間をぬけて海邊に出ると、早くもその家の騷ぎが聞えて來た。小雨の横なぐりに降りそゝぐ海を見はらす二階には、澤山の人數が酒を飲んでゐて、三田は門をくゞるのを躊躇した位である。

「どちらさんです。」

出迎へたのは酒びたしになつたやうな男だつた。ずるつこけさうな袴を引ずつて、坐つても體中ふらふらしてゐた。
「三田さんですな。」
念を押して、とつつきの梯子段を、あぶない恰好で上つて行つた。
「まあ、三田さんですか。どうぞ御上り下さいまし。」
いれちがひに田原の細君が、空の德利を兩手に持つて下りて來た。
「大變な騷ぎですね。」
「えゝ會社の職工さん達が年始に來てくれまして、殺風景では御座いますけれど、兎に角御屠蘇だけでも祝つて頂きませう。」
女學校出とは思はれない、舊家に育つた面影のある細君は、正月の儀式をおろそかにしない風があつた。
「折角みんなが愉快に騷いでゐるところへ、私のやうなものが飛込んでは面白くないでせう。又出直す事にしませう。」
「そんなことは御座いませんのですよ。三田さんさへ我慢して下されば、あの人達は……」

さういつて押問答をしてゐるところへ、
「よお、三田公。どうしたんだ。あがらないつて事があるか。」
と大きな聲を梯子段の中途からかけて、朱面のやうに醉つた田原が下りて來た。
「一寸でもいゝから上つてくれよ。工場の奴等が失脚專務をなつかしがつて來てゐるんだからな。とても愉快なんだ。」
彼はいきなり三田の手をつかんで、力任せに引上げようとした。
「あぶない。」
細君が聲をしぼつたと同時に、足駄の足下のしつかりしない三田は友達を支へ兼て二人は一緒に玄關の三和土の上へ倒れた。
「大丈夫だ、大丈夫だ。」
「あなたは大丈夫でも三田さんはたまりませんよ。どうかなさりはしませんか。」
「いゝえ。」
三田は友達を扶け起し、細君に心配をさせない爲めに、相手を抱上るやうにして二階へ上つた。
「諸君、僕の竹馬の友三田公です。御紹介します。」

田原は自分の隣に三田を坐らせた。
「御目出度う御座います。」
「始めまして。」
十疊の座敷からはみ出して緣側にゐる者迄、一齊に坐り直して挨拶した。中には脫ぎすてゝあつた紋つきの羽織を着る者もあつた。折角水いらずで飮んで居たところへ、自分達とは樣子が違ひ、しかも正月だといふのにふだん着の着流しと云ふ形を見て、一座はしばらく聲が止んだ。
「おい、みんな飮め飮め。酒ならいくらでも其處いらの酒庫にある。三田公なんかに遠慮する必要はない。こいつはタンクといふあだ名のある男なんだから、みんなで盃をさしてやつてくれ。」
「へい、そんならえらいひつれいですが。」
先づ一人年長者らしいのが盃をさすと、忽ち十幾人が、あつちからもこつちからも、獻盃に集まつて來た。
「大將、話せらあ。」
最初玄關に取次に出たのが、さつさと返盃する三田の手際を稱讚したので、一座はどつと笑つた。直ぐに一人の異分子は、殆ど存在しないものゝ如く、失脚した重役を取巻く職工連の、何の

くつたくも無い酒盛となつた。

十一の四

中では一番年の若いのが、盃を持つてやつて來て、ぴたりと三田の前に坐つた。

「大將、大將はうちの專務さんとは友達だといふ事だが、今度の事についてはどういふ御意見です。」

「僕は一介の職工であります。しかし、生意氣なやうですが、生れながらの職工ではありません。多少學事にこゝろざした事もありましたが、今は生産的勞働者たる事を天職と心得、田原專務の理解ある指揮の下に働いてゐるものであります。否、働いてゐたものです。」

少し出齒で、おまけに醉拂つてゐて脣が乾く爲め、演說口調で喋ると、唾が飛散する。惡い相手につかまつたものだと、三田が苦り切つてゐるにも拘らず、田原は頗る滿足の體で、

「此先生は中學出でね、第一の新思想家なんだ。八時間勞働要求の時なんか、僕もさかんにいためつけられたんだ。勿論こつちも率先して實施しようとは思つてゐたのだが、外の重役の奴等が同意しやあがらないんだから……」

「專務さん、それは吾々にもわかつてゐました。專務さんの立場はわかつてゐたけれど、旣に吾々も世界的に目覺めて……」
「やい、學者よせやい。旦那方はそんな事あみんな御承知なんだ。」
「一文にもならん演說なんぞせんと、御酒を祝ふのが正月や。みんなして歌でもうたうたら、專務さんも喜ばはるやろ。」
二三人年とつたのが、若い中學出をたしなめた。
「何を云つてるんだ。そんな幇間根性でゐるから結束した運動が出來ないんだ。吾々が父とも思ふ專務さんが、橫暴なる資本家に壓迫されて辭表を出すといふ時に、吾々が懷手して見てゐられるか。うたなんかうたつてゐる場合ぢやあ無いぞ。」
「何いひくさる。口ばかり達者でも、工場へ出て見い。一人前のうではあらへんやないか。」
「馬鹿な、問題が違ふわ。」
「違ふ事あらへん。仕事も出來(でけ)んおぬしみたいなもんに、口きゝづらされたらえらい迷惑や。」
「何だと。貴樣達が意氣地無しで、勞働者の生活を改善する事を知らんから、何時も口をきいてやるんだ。」

「阿呆、何ぬかす。わがのやうな若僧に頼まんかて俺達は困る事あらへんぞ。」
「低能ッ。」
「阿呆。」
突然殺氣だつた二三人が立上つた。
「待て、待て。待つてくれ。」
夙にべろべろに酔つて、すべて其の場の事は自分を思ふ人々の熱情のあらはれだと考へていゝ氣持になつてゐた田原も、愕然として目の前の御膳を蹴飛ばしながら立上つた。すんでの事に修羅場となりさうだつた座敷の眞中に、田原はどつかりと胡坐を組んだ。
「諸君、まあ靜かに聞いてくれたまへ。」
もとより演說は學生時代から飯よりも好きで、殊におだてのきく大衆相手の芝居がかつたのは御手のものだから、正になぐりあひさうだつた者も席について、一瞬間座敷は緊張した。
「諸君、諸君の熱情には感謝する外に言葉がない。私は諸君と仕事をするやうになつてから、一日たりとも諸君の爲め、會社の爲めによかれと念ずる事を忘れた事は無い。私は馬鹿だ。世間見ずだ。書生つぽだ。御坊ちやんだ。低能だ。阿呆だ。しかし、自ら恥ぢないのは、私は誠心誠意

を以て、諸君の爲め、會社の爲めに盡した事である。勞働時間の制限、賃銀の增額、養老積金の創設、寄宿舍の改善等、未だ理想的とは申兼るが、少くとも或程度迄は目的を貫徹した。不肖田原が微力を以て、頑迷不靈の金力主義者等に對抗し、鋭意諸君並びに會社の幸福繁榮をはかる爲めに日も足らざりしは、諸君の認むるに吝ならざるところと敢て信じます。然るに今回會社百年の爲めに正論を唱へ、飽迄も初志の徹底を期して奮闘したるも力及ばず、遂に辭表を提出するの止むなきに至り、再び會社に於て諸君と見ゆる事の出來ない身の上となりました……」

田原は何時の間にか自分自身の雄辯に感激して、涙を一ぱい眼に溜めて居たが、我慢が出來なくなり、嗚咽して言葉も途絶えた。膝に手を置いて固くなつて聽いてゐた職工達も、醉つた時の感傷性も手傳つて、水洟をすゝり始めた。

「わかつた。專務さん、もう何も云つて下さるな。吾々は團結して專務さんを擁護するんだ。未だ遲くは無い。諸君、團結せよ。」

中學出の職工はいざり出て、田原の手をとりながら叫んだ。感動の極、おいおい泣出した大の男もあつた。

三田はこつそり劇的場面をすべり出て、細君にだけいとまを告げておもてに出た。雨は益々し

げく、風に飛ぶ潮のしぶきと共に吹きつける。小石のごろごろする濱邊を、傘を斜めにして通る頭の上で、

「田原専務萬歳。」

と、二階をゆるがす合唱が聞えた。その醉拂ひの聲を、三田は不思議に寂しく聞いた。絶間無く岸を打つ浪の音よりも、萬歳の聲は長く耳の底に殘つた。

十二の一

机の抽斗の中にはふり込んで置いた蟇口の中の十圓札が一枚紛失した事は誰にも話さずに三田の肚の中にしまつてあつた。若しいひ出して誰彼に嫌疑がかゝつても面白く無い。盜んだやつが舌を出してゐる事を考へると癪にさはるけれど、盜みもしない人間が疑はれたり、調べられたりするよりは我慢か出來る。第一机の抽斗に蟇口をいれて置くといふのがよく無いのだと、結局三田は自分の不注意を戒めたばかりだつた。

松の內も過ぎて、東京から歸つて來た三番の野呂は、毎晩お米を相手に酒を飲んでゐたが、何時盜まれたのか財布の中の五圓札が一枚なくなつたと騒ぎ出した。

「僕の財布の中の札が一枚消えてなくなつたのだが、誰か心當りは無いか。鼻紙たの半巾(ハンケチ)と一緒に床の間に置いて、一寸風呂に入つてゐる間の出來事なんだ。たしかに五枚あつたのが四枚しか無い。」

女中三人を部屋に呼びつけて、大きな聲で怒鳴るやうに訊くのであつた。

「野呂さん、ほんまだつか。うちでその様な間違のあつたゝめしが無いのに、どないしたんでつしやろ。」

「あんさんのおもひ違ひではおまへんか。」

お米とおつぎが交々(こもごも)いふのにつゞいて、おりかの聲も聞えた。

「だつて野呂さんをかしいぢやありませんか。どうせとるのなら財布ぐるみ持つて行きさうなものですねえ。五枚あると思つてゐても、ほんとは四枚だつたのではないでせうかねえ。」

「そんな事があるもんか。今日歸りに買物をした時、十圓札三枚を五圓に兩替して貰つて、その中の一枚丈拂つたんだ。」

「そんならその時落しはつたのと違ひまつか。」

「誰が落すもんか。大枚五兩だぜ。」

口さきで訊いたからとて埒のあかない事はわかり切つてゐるのだが、その埒のあかなさに野呂はじれつたがつて居る様子だつた。
「お前達の中で、僕が風呂に行つてる時此の部屋に來たのは誰だ。」
おどかせば白狀させる事が出來るとでも思つてゐるのか、一段と居丈高になつた。
「あたしは來やしません。臺所が忙しくて、そんなひまはありませんでした。」
「おつぎさん、あんた二階にゐたんやないか。」
「いゝえ、階下で干物取入れてゐた。あんたこそ野呂さんの洋服たゝんでゐたのやないのんか。」
「何いうて。野呂さんが御風呂場に行かはる前に、あてら階下に下りてん。」
三人とも互に無關係な事をあきらかにしようと、とりとめも無い事をいひ合つた。
「お客さんいうても三田さんの外にはゐてはらへんし……」
先刻から耳をすまして聞いてゐた三田は、自分の名前が出たのでどきつとした。つい此間自分も蟇口から札を一枚拔取られたので、他人事とは思はれなかつた。入物ごと取るので無く、目立たないやうに一枚ぬき取る方法迄同じだとすると、同一犯人である事は確かだ。一番深い疑をかけてゐたのはおみつだつたが、あれは全く見當違ひだつたと思ふと、その人は殊に犯人にし度く

なかつたのだから、安心に似た心持もあつた。しかし、自分の名前が不圖耳に入つた時は、三田も流石に胸が騷いだ。まさかに嫌疑をかけられようとは考へられないが、相手が自分に對して好意を持つてゐない人間だから何ともいへない。三田は十圓札を盜まれた時に、いち早く問題にしなかつた自分の手ぬかりを悔いた。

十二の二

「さうするとお前達は、一人も此の部屋には足踏しなかつたといふんたな。」

野呂は又同じ詰問を繰返した。

「五圓札一枚はあきらめてもいゝけれど、此の部屋で金がなくなつたとあつては、安心して醉月に止つてゐる事は出來ない。場合によつてはおもて沙汰にしても調べて見なくてはならん。」

女中達はすつかり脅かされてしまつて、何の意味も無い事をくどくどとつぶやきあつてゐるばかりだつた。その時、

「みな二階で何してる。ぺちやくちや喋つて居らんで、早う來て御膳だてせんならんで。」

梯子の下で、おかみさんの叫ぶのが聞えた。

「へえ、今直ぐに行きます。」
お米の細い聲が廊下に出て答へた。
「何してんのや。三人ともかたまつて。」
「今、野呂さんのお金が失せた云はゝつてなあ。」
「何？　お金がなうなつた？」
仰山に驚いた様子で、とんとん梯子段を上つて來た。
「野呂さん、あんたとこでお金がなくなりましたのか。」
「あゝ、一寸風呂に行つた間に、財布の中から五圓札を一枚ぬかれてしまつた。其處のところに置いといたのだが。」
「へえ、ほんまだつか。あんたの思ひ違へではおまへんか。あたしとこでは開闢以來そのやうな事はあらへんのやがなあ。」
おかみさんは自分のうちに惡名をつけられたやうに思つてゐるらしく、中腹な口のきゝ方た。
「開闢以來ない事だと云つたつて、現に僕の部屋で、僕の財布の金が盜まれたんだから爲方が無いぢやあないか。」

「ほしたら誰ぞ盜んだと云はゝるのですな。」
「まあさう考へる外に爲方が無いぢやないか。」
「そんなら誰がとつたかわかつてゐますか。うちでお金が紛失したと云はれては、そのまゝにはして置かれへん。」
「誰がとつたかわかつてゐれば文句は無いさ。わからないから訊いてゐるんだ。」
「お前達覺えはあるか。」
おかみさんはかみつくやうに女中達に訊いたが、その實野呂に對する敵意を示す爲めに意氣込んでゐるのであつた。
「覺えは無いといふのだよ。誰も此の部屋に足踏しなかつたと云ふんだ。不思議ぢやあないか。此の三人の外には、一番の三田さんといふ人しかゐないんだからねえ。」
「野呂さん、置いて貰ひまつさ。お金は尊いものには違ひないが紙でこしらへたものでつせ。何時何處で落さんものでも無し、又勘定違ひといふ事もおまつしやろ。滅多にうちのお客さんの事なんぞ云うて貰うたら困りますがな。」
「誤解してはいかんよ。僕は一番のお客を疑ふなんて事はないんだ。たゞね、此の三人の外には

二階にゐる人はあの人丈だと云つた迄さ。」

聞いてゐる三田は坐つてはゐられなかつた。野呂の言葉には確かに自分を疑ふ調子は含んでゐないで、矢張女中を怪しんでゐる事は明白で、自分の外は卽ち三人の女中だといひ度い爲めに引合に出してゐるのだとは思ふが、それにしても不愉快だつた。

「よろしうおま。あんたの念ばらしにみんな裸にして調べて貰ひまつさ。お前達せんぐり着物からおこしから振うてみせてあげ。」

突然おかみさんの男性的な聲が、一際強く響いた。

十二の三

「お米、お前から着物ぬいだらえゝ。お前が野呂さんの一番お氣に入りらしいからなあ。」

「おかみさん、裸になるのはかんにんしとくれやす。」

「何も恥しい事なんぞあらへんがな。お前は何處から何處迄野呂さんにお目にかけた筈やないか。それ位の事はわかつて居る。お客さんの念ばらしにすつぱり脱いだらどうだ。」

我儘で癇癪持のおかみさんは、自分の氣に喰はない事にぶつかると、ふだんのあけすけな心持

に、意地の惡さを加へて、散々に當り散らかさなければ承知しないのであつた。
「さ、早う帶解いたらえゝ。愚圖々々してゐたら埒があかんわ。」
「おかみ、何もさう迄いはなくたつていゝぢやないか。誰も女中達を裸にして見せろとは云やあしない。たゞ心當は無いかと訊いたばかりなんだ。」
見るに見兼るといふよりも、全く自分を目ざしたおかみさんのあてつけに辟易して、野呂はなだめる態度になつた。
「いゝえ、あんさんはよくてもこちらが心持が惡い。醉月でお客さんの物がなくなつたとあつては、うつちやつては置かれまへん。あての氣の濟むやうに詮議せんならん。」
「そんな事を云はれては僕か迷惑だよ。たかが五圓札一枚で、みんなにいやな思ひをさせるのは僕の本意で無い。君が詮議したいのなら此の部屋を出て行つてやつてくれたまへ。」
「ほうだつか。えらい御邪魔しましたなあ。あては、あんさんかうちの女衆になくなつたお金の行方を訊ねてゐやはるのやと思うて、お客さんの手をからんでも、自身たづねてあげるのがほんまやろと考へましてなあ、二人とも裸にむいてお目にかけようとしたのですが、そんならとつと去にまつさ。さ、みなも早う階下に行つて働かんと又どのやうな事が起るかもしれへんぜ。」

捨ぜりふを殘して廊下に出たが、何と思つてか、三田の部屋に肥大な體を運んだ。

「大きな聲出してつまらん事いうて濟んまへん。さぞ御きゝ苦しい事ておましたやろ。」

ほんの挨拶のつもりで、襖を半分あけて顏を出した。

「お金が無くなつたとかいふんですね。」

三田も知らん面も出來ないので、机に向つてゐた體を捩向けた。

「へえ、三番の野呂さんの財布の中から五圓の御札に羽が生えて飛びましてん。あたしとこでは

つひぞ其樣な事はおまへんのでしたが、不思議な事があるもんですなあ。」

大きな聲を出して濟まなかつたと詫に來たのが、一層大きな聲で、明かに野呂の部屋迄聞えよ

がしにいふのであつた。三田は勝ほこつたおかみさんの態度が面白くなかつた。

「不思議だねえ、僕の部屋でも蟇口の中の札が一枚羽が生えて飛んで行きましたよ。」

魔がさしたやうに皮肉な言葉が唇をついて出た。

「え、ほんまだつか。何時です。矢張今日だつか。」

急に聲を落しておかみさんは部屋の内に入つて來た。大きな聲を出されて、野呂に聞かれては

困るといふ顏色が正直にあらはれてゐた。

「僕のは正月の元日か二日なんです。鍵もかゝらない此の机の抽斗にはふり込んで置いたんたから、こつちが悪いと思つて默つてゐた。けれども又向ふの部屋で同じ事があつたとすると、ちつと面白くありませんね。」

三田は机の抽斗の中の蟇口から、十圓札一枚ぬきとられた時の事を、手短かに話した。おかみさんは何もいはず、引呼吸になつて聞いて居たが、

「三田さん、あんたのお話でちつと思ひ當る事もおますよつて、ひとつ洗ひ立てゝ見まつさ。それ迄は何も云はんとみてゐとくれやす。」

とひどく決心した様子を示した。

「しかし、あんまり荒立てない方がいゝかもしれませんよ。どうも僕は人間を調べるのは嫌ひだ。」

折角の平和がみだれ、みんなに氣まづい事が起りさうな豫感があつて、三田は喋つた事を後悔した。

十二の四

次の日から、おりかの姿が見えなくなつた。おかみさんは氣まりの惡いやうな、又一面には迅速に審いた手際をほこるやうな様子で、三田のところへ挨拶に來た。

「えらい申譯の無い事てして……」

と前置しての話によると、犯人はおりかで、昨夜遲く迄責め糺したあげく、すつかり白狀させたのである。

「あの女はちと足りん方でおましたが、心根は惡い者では御座りません。人さまの物に手をつけるいふやうな事は、滅多にする筈はないのですが、あのやうな面皰たらけの野猿坊みたいなもんでも、近頃情人が出來てあつたさうで、そやつに唆かされて惡心が萌したものと見えます。」

その情人といふのは此の宿の料理人で、年齡はおりかよりも二つ三つ若い、苦味走つたいゝ男だといふのであつた。それも勿論暇を出された。

三田はその料理人の後姿だけしか見た事が無かつた。隨分長い間の事だけれど、餘程變物と見えて、つひぞ他人と口をきいて居るのを見た事も無く、何時も薄暗い上方風の土間になつてゐる臺所で、齒のある下駄を穿いて庖丁の手を動かしてゐる姿丈が記憶にある。

その男と、つい近頃いゝ仲になつたらしく、おかみさんも氣がつかなかつたが、朋輩の者は、

何となくあやしいと睨んでゐたさうだ。料理人は道樂者で、給金を貰ふと松島の遊廓に遊びに行つたが、おりかを手に入れたのは、金廻の惡い時の間に合せの意味と、もう一つには遊びの資金を貢がせよう爲めだつたらしく、おりかは頭の物迄取られた事もかくさずに話したさうである。たうとうしまひには、男のあく事の無い要求に據處無く、三田の蟇口から十圓盗み、それがわからなかつたのに安心して、今度は野呂の財布から五圓とつたのださうである。

「ほんにお恥しい話ですが、なんせあのやうな馬鹿者のした事ですさかい、こらへて頂かうと思ひましてな、此の通り頭を下げまつさ。」

おかみさんは丸髷のあたまを疊に近くして、ほつと一息ついたが、直ぐに帶の間から十圓札を一枚出して、それは自分が辨償するから納めてくれといふのであつた。

「そりやあいけない。君に辨償して貰ふたんで筋違ひだ。金を盗むのはよくない事だが、隨分長い間世話になつたのだから、おりかさんに御禮にやつたと思へばいゝ。それは絕對に御斷りします。」

三田は少しく不機嫌になつて、きつぱり斷つた。

「ようわかりました。あんたの氣性を知らん事も無いのに、あてが惡おました。かんにんしてお

くんなはれ。」

おかみさんはもう一度叮嚀に頭を下げて、三田が突返した札を帶の間にしまつて部屋を出て行つた。

行つたと思ふと、直ぐに三番の野呂の部屋で、今迄のひそひそ聲とはうつて變つた高調子で、

「野呂さん、今日はあてあやまりに來たのだつせ。」

と云ふのが聞えた。此處でも一部始終を殘らず話した上で、帶の間に用意してある札を出して受取らせようとするのであつた。

「そりやあいかんよ。本人が改心して返却するのなら兎に角、おかみに損をかけるといふ理窟は無いからなあ。」

あれ程威張つたおかみさんが、頭を下げて詫に來たので、野呂は完全に復讐した得意の體だつた。

「それではこちらの氣が濟みません。うちのお客さんの物がなうなつたのを知らん顏してゐては、責任いふものが明かでなくて面白く無い。あての性分として、これ丈はどうしても納めて貰はん事には、氣色が惡うて堪らん。何だ彼だといはんと、しまつといておくんなはれ。」

「さうか。そんならおかみの氣の濟むやうに取つて置かうか。」
「さうしておくんなはれ。これで氣分がすうつとした。」
わざとらしい男笑を高々と響かせて、おかみさんは梯子段を下りて行つた。
三田は聞いてゐて驚いた。こつちと向ふと、全く人を見て扱ひを別にしてゐるおかみさんのやり口は、あんまりはつきりし過ぎてゐた。

十二の五

正月が過ると、宿屋は又忙しくなつた。各室ともふさがつて、今日も亦幾組断つたといふ事をおかみさんも女中達も自慢にして話した。料理人のかはりが來ないので、おかみさん自身重たい體で臺所の土間に立ち、たゞさへてんてこ舞して居る女中にのべつ幕無しの小言を浴せかけながら働いてゐた。斯ういふ場合にも、やがては高座の藝人にしたてる娘丈は、決して客の前に出さず、又水仕事などもさせないで、只管藝事ばかりを勵ませてゐるのだつた。
おりかのかはりも見つからなかつた。一人めみえに來たのはあつたが、腋臭がひどいといふ理由で採用にならなかつた。お米とおつぎとは二月の寒さにも、二階と階下の客の用で、額に汗を

流して居た。

「えらいなあ。」

「ほんに、二人ではやり切れへん。」

　廊下で顔を合せて、ほつと息をつく二人の口をついて、忙しさをかこつ言葉が出るのであつた。

「お前達、はうびはたんと貰へるのやよつて、もちつと辛抱して、骨をしみせずと働いておくれ。」

　叱るのだかなぐさめるのだかわからない調子で、おかみさんも頻に手不足を氣にしてゐた。

　さういふ狀態が一箇月近くも續いたか、二月の末になつて、おかみさんの姪だといふ二十三四の女か手傳に來る事になつた。それ程濃くない髮なのに、前髮も鬢もふくらませる丈ふくらませ、女中並の粗末な着物ながら、拔衣紋（ぬきえもん）の形にたゞ者で無いところを見せた、色の冴えない平顏ながら二重瞼（ふたへ）のはつきりした悧巧な目つきの、誰か見ても一寸いゝ女として許せる柄だつた。

「おときさんはなあ、うちのおかみさんの姪で、先頃迄生駒で藝妓（げいこ）に出てゐやはつたのだつせ。」

　とおつぎはいちはやく三田に話した。生駒の聖天樣には、三田も山上りの意味で出かけた事がある。山の下の町は兩側に料理屋が並び、あやしげな藝者か出入する景色は凄いものだつた。お

ときは其處で稼いでゐたのださうだが、近頃すつかり體を壞してしまつて、商賣も出來ない爲め、養生の積りで手助に來たと云ふ事だつた。
おときは三田の部屋にも給仕に來た。平氣で人の顔を正面から見守るところにも、しやうばい人らしいところがあつた。三田がだんまりで居る爲めか、差向ひでは多く口をきかなかつたが、おつぎやお米は、
「おときさんは三田さんが好きやいうてゐやはりまつせ。」
と云つてからかつた。冗談とは知りながら、その事を思ひ出して、三田は愈々口がきゝ惡くなるのだつたが、女の方は三田の意氣地の無いのを見透したやうに、ぢいつと顔を見ながら、口元に皮肉な微笑を漂はせてゐるのであつた。
朝は外の女中と一緒に早く起きて、緣側や廊下の拭掃除迄しなければならないのだつたが、さう云ふ事には馴れない爲めか、體を壞してゐるので體力が續かないのか、大儀らしく緣側に横坐りに身を崩して、ひまを盜んだり、時には三田の部屋の前の籐椅子に腰を下して、捨鉢になつて怠けて居る事もあつた。
「あたし、あのやうな商賣してゐたものですから、惡い病氣になつてしまつたのですよ。」

とあけつぱなしに話しもした。

十二の六

「三田さんも因果やなあ。おときみたいな女に好かれたらかなはん。」

とおかみさん迄もあたり憚らぬ冗談をいふやうになつた。

「あてはほんまに三田さん好きやわ。えゝ男やないけれど、無駄な口はこればかしもきかず、いやらしい事は少しも云はんし、男らしうてよろしいな。」

すれつからしは自分から面白がつて、輕い口を叩いた。わざと三田の給仕役は自分ときめてゐたが、變つた女が目の前にあらはれると、忽ち好奇心を動かす野呂は、部屋を距てた向ふから、

「おときさあん、おときさあん。」

と尻を長く引張つて呼ぶ事もあつた。

「好かん奴。」

舌うちして、返事もしないでゐると、お米が野呂にそゝのかされて迎ひに來るのである。

「おときさん、一寸來てほしいわ。野呂さんがあんたの御酌でないとおいしい事無い云はゝるよ

つて。」
「あたしら行かんかてあんたがゐたらえゝや無いか。あては一番の受持ときめた。」
「はあん、えらい御邪魔しました。濟んまへん。」
何がをかしいのか、きやらきやら笑ひながら野呂のところへ復命に歸つて、又仰山に笑ふのであつた。
おときは、今迄見た男といふ男のすべてが、直ぐに物にする機會を作らうとばかりするのに馴れて、男はみんなさうしたものときめて居たところ、まるつきり型の違ふ人間に出つくはしたので、珍しいもの好きの心から、からかつたりからかはれたりして、退屈を忘れようと云ふのだつた。何とかして相手にも氣を持たせる爲め、又一面にはほんとに眞面目に聽いてくれさうなので、これからの身のふり方を如何したらいゝかと相談する事などもあつた。
出來る事なら十分養生をして元氣な體になり、生駒なんぞはこりこりしたから、今度は大阪に住替てしやうばいをし度いと思ふけれど、自分のやうな藝無しでは、此の望はかなひさうも無い。今、或人に勸められてゐるのは、山陰道の米子で、藝者を抱へ度がつて居るのがあるから行つて見ないかといふ話で、此の方ならば何時でも先方から實物を見に來ると云ふ位乘氣なので、直ぐ

にも纏まるに違ひ無いが、鳥取縣なんてどんな處だらうと考へると心細い。いつたい自分のやうな女は、どうするのが一番いゝのだらうと云ふやうな話なのだ。勿論三田には返事のしやうも無い。どうせ何處の土地へ行つたつて、此の病毒の沁みた體を賣る外には途が無いに違ひ無いのだ。生駒だらうが、米子だらうが同じ事だ。三田にとつては、斯ういふ風に、全く浮ぶ瀬の無い人間を見る事は氣の毒で堪らない。しかし、それを救ふ力も無いのだから、結局氣持が重苦しくなるばかりだつた。

「ねえ、三田さん、あんたならどないしやはります。自分の事にして考へて見とくんなはれ。」

たゝみかけて無理な注文を出されて、三田は愈々閉口するばかりだ。

「だつて僕にはわからないよ。自分の事にして見ろつたつて、藝者になつた事も無し、生駒だつて米子だつて、君なら抱へようと云ふ人もあるだらうが、僕では誰も買ひもしまい。」

三田は苦笑の外に手を知らなかつた。

十二の七

二月の末から三月へかけて、暖い日には宿の玻璃（ガラス）戸の外を、海の方から來る鷗の群が、雪白の

翼をひるがへして飛ぶ長閑な日もあつたが、終日その硝子戸をがたがた鳴らして吹く風の日も多かつた。びしよびしよ雨の降る日には、川の水も白けて寒く、見てゐる丈でも底冷がして、なかなか火鉢は手放せたかつた。

風の日には頭痛がし、雨の日にはお腹(なか)や腰が痛むと云つて、おときは客の居ない部屋の疊につつ伏して居る事が多かつた。早春らしい青空の日には、縁の日當(ひあたり)に長々と眠つてゐる事もあつた。そんなだらしの無い恰好をして居るところを、おかみさんに見つかると、肚ではそれ程怒つてゐなくても、言葉の調子の男のやうに荒いのが、家中(うちぢゆう)に響く小言を浴せかける。

「なんぼお前は寢て稼いでゐたというて、晝日中寢そべつて居られては、うちの品行が惡う見えてかなはん。」

などゝ、相手の弱點を無遠慮にさらけ出すのを聞いてゐると、いつたん沈んでは浮び上れ無い女は一層可哀さうだつた。しまひには足腰も利かなくなり、骨も肉も腐つて來るのだらうと思はれた。

それでも、酒飲の客の前にでも出ると、外の女中とは違つて、お酌のしぶりも型に入つたところがあるので、おときさんおときさんとおだてあげ、うまく行つたらものにしようとする氣振(けぶり)を

見せる者もあつた。

「知らん事故爲方も無いが、あのやうな女にかゝりあうたらえらい目にあはされますかな。」

とおときを嫌ふおつぎは、蔭口をきいて居たが、それが事實になつて現れた。

「三田さん、あんた知つてゐやはりまつか。野呂さんがなあ、おときさんからえゝ物貰はゝつたのだつせ。」

白肥の顏中笑ひにして、さも小氣味よさゝうに話すのだつた。女と見れば機會をうかゞつて一度はどうにかし度いと云ふ好みの病的に強い野呂は、最初からおときに目をつけて居たが、おときの方では嫌つてゐた。ところがおときも小遣にも不自由する身の上なので、たうとう野呂の望をかなへさせたが、驚く事には其の仲立(なかだち)は、今でも引續いて野呂のお伽をつとめて居るお米だつた。しかも野呂は、お米の口から相手が病氣の體だと聞かされながら、たかをくゝつて引張込んで、結局今では醫者に通つてゐると云ふのだつた。

「おかみさんの云ふ事がどうでつしやろ。野呂さん云ふ人は、コレラの虫の居る魚を知りながらも喰べる人ですと。」

おつぎは朗かな聲で、面白をかしい男女情事の光景迄描寫した。

三田はその後廊下で野呂にあふ度に、人間の世の中の掟ををかして、天罰をかうむつた人を見るやうな、一種痛快な感想を禁じる事が出來なかつた。

十二の八

「三田さん、あたしたうとう米子の方へ行く事になつてしまうたんですよ。」

おときが給仕に來て、遂に決心した事を話したのは、三月もなかばを過ぎてからだつた。何とかして大阪を離れ度く無いと思つて愚圖々々して居たけれど、もう目の前に花時も迫つて來て居るのに、着物をこしらへる事さへ出來ないので、思ひ切つて知らぬ田舍に行く決心をしたと云ふ。

「だつて君は體がほんとで無いつていふんぢやあないか。それで差支無いのかい。」

今でも醫者に通つて居る野呂をまのあたり見て居るので、此の女が山陰道の町に行つてからの事が、はつきり想像されるのであつた。おときは妙にむすめらしく羞を含んだ表情をして、心持顏を赤くしながら、

「何が差支る云やはりまんの。」

と首を傾けて、習慣性の微笑に、いたづらと捨鉢をまぜてきゝかへした。

「何がつて、困るだらう。」

三田は云ひにくくて、頬張つた飯を不器用にもぐもぐ嚙みながら、自分の方が顔の赤くなるのを感じた。

「いやな三田さん、何も困る事なんぞあらしまへん。」

さういふ話をきつかけに、もつと冗談口をきいて居たいのがおときの肚だつたが、三田はそれつきり箸を置いてお茶を請求した。

「どうせ汚れた體ですもん、どうならうとかまふもんですか。御客だつてさうですわ。たかのしれたお金で人をおもちやにするのですさかい、ちつとやそつとのむくいは當前でつしやろが。」

突然何か癪にさはつたやうな口をきいて、自分を嘲るやうに笑つた。三田は、さういふ運命の下に居ない自分なんかには、何をいふ事も許され無いやうな氣がして、胸が重くなつた。

米子の藝者屋の主人だといふ六十近い婆さんが、隣の十疊の部屋におちついたのは、それから間も無かつた。生際のあだ白く拔上つた、黒眼鏡の下の鼻の、婆さんらしく無くつんと高いのが、根性をよく見せ無かつた。磨き込んだ爲めか、いやに赤味の失せずに光つて居る顔色も、かへつて邪險に見えた。それが猫撫聲で話をしてゐるのを、三田は忌々しく思つて居た。婆さんはおと

きの外にも一人二人抱へる爲めに上阪したのだと云ふ事で、五六日滯在してゐたが、愈々明日は歸るといふ晩には、仲に立つて口をきいた男などを呼んで醉月で酒盛をした。おときと、もう一人米子につれて行かれると云ふ女が、二人とも島田に結つて立働いて居た。おときよりも年上の女は、三味線を彈いて流行唄をうたつた。

「三田さん、あたし明日立つ事にきまりましてん。」

酒が廻つて亂雜な騷ぎになつた座敷をぬけて、これも飲まされたらしいおときが挨拶に來た。

「それについて、あんさんに御願がおますが、かなへてくれはりまつか。」

三田の机の側にぴたりと坐つて、ひどく眞劍だつた。三田は何を云ひ出されるのか少々不氣味に思つて、默つて相手を見守つた。

「なあ三田さん、これが一生の御願ですがな。」

「御願つて何さ。御願にもいろいろあるからね。」

「あのなあ、あての名前をつけておくんなはれ。」

何かと思つて內心びくびくしてゐたところ、米子に行つてから、何といふ名で出ようか考へてくれと云ふのだつた。

「駄目だよ、僕なんかにそんな事を頼んだつて。それよりも生駒に居た時の名がいゝぢやないか。何ていふんだか知らないが。」

「生駒ではをかしな名前で、供奴(ともやつこ)いうてましてん。」

「供奴？　いゝ名ぢやあないか。」

「いゝえ、お供の奴さんでは出世しまへん。なんぞ縁起のよろしい名前を考へとくんなはれ。」

「おときつていふ本名がいゝぢやないか。假名の名前は優しくていゝぜ。」

「おときだつか。本名はいややわ。」

「そんなら小登喜(ことき)さ。のぼるよろこびなら縁起もいゝや。」

「小登喜？」

矢張滿足はしない様子だつたが、しばらくして、

「三田さん、頂いて置きまつさ。」

と叮嚀に頭を下げた。

翌日、三田が會社へ行つてゐる間に、おときは米子の藝者屋の婆さんにつれられて立つた。三田の机の抽斗の中には、半紙に鉛筆で走書(はしりがき)したものがはいつて居た。

三田さん、あたしは行きます。小登喜といふ名は大切に致します。
あなた様も早くよい奥さんを貰うて末永く御榮え遊ばされ度候。

十三の一

花の少い大阪の市民の口にも、造幣局の櫻の噂がのぼる頃となつた。醉月はおのぼりさんで賑つて、何時も手不足で困つて居たが、漸く料理人も新規に雇入れ、女中の補充には蠣船からお兼を連れて來た。ぽかぽか暖くなると蠣は禁漁になり、蠣船は貸端艇屋や氷屋にかはつてしまふので、それを機會におかみさんは、おつさんと堅い約束をして、お兼を働かせる事になつたのである。約束といふのは、一切お兼には手を出さないと云ふ事で、その代償として當分の飲代をつかませた。

お兼はまるつきり氣が利かなかつた。大きな體の取廻しが惡く、何處か心にもうつろなところがあるらしく、お膳を落したり、瀨戶物を割つたりして、のべつにおかみさんの小言を喰つて居た。人間は極めて善良で、いくら叱られても默々として働いて居た。着物の着こなしが下手なのか、つんつるてんの感じの消えない、あく迄も山出しだつたが、邪氣の無い健康な肉體にはち切

れる程漲つて居る若々しい血色は、好色者(すきもの)の好奇心を唆るところがあると見えて、おときに貰つた記念の悩みから漸く救はれたばかりの野呂は、早くもたゞならぬ冗談をいひかけるのであつた。

「野呂さん、あんたもあきれたものだんな。おときさんの事でもう懲々(こり〳〵)しやはつたらう思うてましたがな。」

おつぎが大きな聲で云ふのが聞えると、

「おときさんには懲々したさ。だから今度は健康無比のお粂さんにしようと云ふんだ。いくら俺がちやびんだつて、おつさんよりはましだらうぢやあないか。」

と野呂の答へが續いた。

その野呂のもの好きに助勢するのは、相も變らぬお米だつた。お米が夜更にこつそりと三番から出て來るのは、今でも三田の目にふれるのだつたが、それにも拘らず男と女とをくつつけて見る異常な興味を持つてゐるらしかつた。

「お粂さん、ちよつと來て。野呂さんがえゝ物あげるいうてはるし。」

全く相手を馬鹿にしながら、野呂と共々にからかつて居るのであつた。

三田は野呂といふ男の、大法螺を吹く威張やで、女と見れば相手の人格を無視して直ぐに手に

入れようとする態度を憎んでゐたので、此の田舍女が何んとかして肱鐵砲を喰はせてくれゝばいゝのにと念じてゐたが、事實は雜作も無く裏切られてしまつた。

何時も銀杏返に結つてゐたお兼が、大きな束髮に變つた日の事である。おつぎは話をする前に顏中笑ひになつて、をかしくて堪らなさうに呼吸(いき)をはずませたものである。

「三田さん、三田さん。あんたお兼さんのつむりの大きい櫛見やはりましたか。あれなあ、野呂さんからのおつかひ物ですと。」

三田も不似合なお兼の庇髮(ひさしがみ)のうしろに、大き過る位大きい西班牙櫛(スペインぐし)のさゝつて居るのを、をかしいと思つて居たが、それが特別の意味のあるものとは知らなかつた。いつたいあのカルメンの用ひさうな圖でかい櫛は、思ひ切つて野蠻な風をしない限りは、どんな髮にも似合はないものとして三田は忌々(いまいま)しく思つて居たが、その時以來一層嫌ひになつた。

「あの人、前から束髮にしい度い云うてゐたのですが、櫛が無いのんで、よう結ぶ事出來(でけ)へんのでした。そこがそのなあ、お米さんのとりもちで、あの櫛ひとつで野呂さんとひと晩仲ようしやはりましてん。」

三田はあまりの不愉快にそれつきり取あはなかつた。

だが、野呂がお粂をためすのに成功した事は、お米とおつぎの口から、此の宿のみんなの耳に傳はつた。

「おつさん、あんた此の様な事聞かされてどない思うたるねん。」

何も彼もかくしておけないおつぎは、おつさんに迄話を持つて行つた。

「へえ、ほんまか。」

流石におつさんも驚いたが、

「たつしやなつもりでゐても、年とつたらかなはん。お粂みたいなもんでも、少しでも若い男の方がえゝと見える。」

よだれの垂れさうな大口を開いて、何のくつたくも〔原〕笑つてのけた。

十三の二

寒いうちは石垣の間にでも冬籠して居たのか、ちつとも姿を見せなかつた龜の子が、ぬるみ始めた水に夫婦でぽつかりと浮び出した。

「三田さん、次の日曜にお花見になと出かけまほか。」

「行かう。おみつつあんを誘つて。」
「おときさんよりもおみつつあんの方がよろしうおまつか。」
「そりやあいゝさ。あたし三田さん好きやわ、なんて人前で大きな聲を出さない丈でもいゝ。」
「そしたらお辨さげて行きまほ。」
そんな話をしてゐる頃であつた。陽氣がよすぎるので、會社の勤にはみが入らず、誰も彼も懐中の乏しさは氣ぶりにも見せないで、吉野に行かうとか、奈良の方がいゝとか、しきりに遠足の計畫も提案されて居た。
或日、三田が事務室の机の上に積まれた書類を整理して居ると、
「三田さん、面會です。」
と給仕の子供が、室の入口に顔を出して、いけぞんざいに叫んだ。三田は洋筆を置いて立つた。
「女の人ですよ。」
少し低能の癖に體ばかり年に似合はず發育して居る給仕は、いやみな笑を口許に浮べてさゝやいた。
女の訪問者なんか思ひもかけない事なので、全く見當がつかなかつたが、應接間の扉を開ける

と、意外にも其處に立つて居るのは、此の正月情人(をとこ)の爲めに盜みをして、醉月を追出されたおりかだつた。洋風の室に馴れ無い爲め、何處に體を置いてい丶か見當のつかない樣子だつた。

「三田さん、御機嫌よう。御變りもありませんか。」

一見して下宿か安料理屋の女中としか見え無い女に、勤先へやつて來られて不機嫌な三田を見ると、元來金を盜んだひけ目のあるおりかは、一層身の置所に困つた風で、てれかくしに愛想笑を見せた。

「まあ、かけたまへ。」

三田は自分が先に手本を示して、無理におりかを腰かけさせた。ちんちくりんの女だから、卓子(テーブル)の上に面皰だらけの顏を載せたやうで、足は床につくかつかない形だつた。

「醉月の人達、お米さんもおつぎさんもみんな達者ですか。」

「達者だ。」

「おかみさんも？」

「あ丶。」

「野呂さんはどうしました。」

「ゐるよ。」

それつきり話はきれてしまつた。其處に給仕がお茶を運んで來た。どんな客でも、應接間へ通つた人には茶を出すのが會社のならはしだつた。

「濟みませんねえ、あたしなんかうつちやつといて下さればいゝんだのに。」

そんな事を云ひながら、二三度縮毛の頭を下げた。給仕は吹出しさうな顏をして引さがつた。

十三の三

「あたしねえ、今御靈さんの裏手の牛屋にゐるんですよ。洋食もありますがねえ。」

根比べのやうに三田は默つて居るので、おりかは爲方が無く口を切つた。

「へえ、あの人も一緒かい。」

「あの人つて?」

「君のいゝ人さ。」

「あらやだよお。誰があんな奴と一緒にゐるもんか。」

みそつぱをあからさまに、ひどく力んで否定したが、忽ち聲を落して、

「三田さん、實はねえ、あいつのことで是非々々あなたにきいて頂き度い事があつて來たんだけど、どうでせうねえ。隨分あたし氣まりは惡いんだけど、大阪では外に知つてる人もないし、それに三田さんはなさけ深い方だから……」

おりかは料理人ともろともに醉月を追出されると直ぐにその牛屋の女中に住込んだが、梅田の驛の近くの宿屋に口を見付た男の爲めに年中いたぶられて、折角の客からの貰ひも卷あげられ、おまけに晝日中呼出しに來られるのに辟易してゐたが、その牛屋の主人と云ふのが顏役で、おりかの打あけ話を聞いて、男と手を切らせるやうに話をつけてくれる事になつた。

「それについて少しばかしお金が入るんだけど、三田さん、何とかして頂けないでせうかねえ。」

おりかは流石に額から汗を流して賴むのであつた。

「つまり手切金かい。」

「いゝえ、手切金なんて程澤山は入らないんですよ。二十圓も貸して下さればいゝんですがねえ。あいつときれいさつぱり別れてしまへば、あんたにも長く御迷惑はかけないで、直きに御返し出來るんですがねえ。」

大阪には外に賴る人もなく、又三田程親切な人は無いので、氣まりの惡いのをがまんして來た

のだと、繰返し繰返し、結局二十圓の金を貸して呉れといふのであつた。
三田はその話を信じなかつた。情人にみつがせられて困つて居るのは事實に違ひ無いが、牛屋の主人の顔役といふのが仲に立つた以上、手切金も主人が立替てくれさうなものである。殊に二十圓といふ僅な金高が、ほんとの手切金らしく思はれなかつた。こつちを御人よしだと思つてやつて來たんだらう。つい此間人の金を盜んで置きながら、よくものめのめ出て來られたものだと、ぺらぺら喋るみそつぱの口を、忌々しく思つた。斷然斷つてやらうと思つてゐるところへ、給仕が呼びに來た。
「三田さん、支店長さんが御呼びです。」
三田は胸がどきんとした。何時迄もこんな女と差向ひで話をしてゐるのは面白くないと思つた。それで、
「話はわかつたがね、僕は今忙しいから、いづれ君の奉公してゐる牛屋に行つて見るよ。」
と云ひながら立上つた。
「何時來て下さいます。なるたけ早くね。」
「あゝ、今晩行くかも知れない。」

一刻も早く追出さうと思ふばかりだつた。

「では待つてますよ。」

何といふづうづうしいやつだらう、本來ならば來られた義理ではないぢやあないかと思ひながら、彼はうなづいて置いて、さつさと事務室に引上げた。

支店長室に入つて行くと、

「三田君、誰か女の御客さんださうだが、どういふ人だね。」

いきなり意外な質問に三田はすつかり面くらはされた。

「以前宿にゐた女中なんですが……」

「それが何か用事でもあるのかね。あまり私行上の事に迄立入つて世話は焼き度くないが、會社に迄たづねて來られるやうな間柄ですか。」

「いゝえ、私もづうづうしいのに驚いたのですが、金を貸してくれと云つて突然やつて來ましたのです。」

かくすにもかくす丈のいひわけは無いので、いつそ正直に一部始終を話してしまつた。まさかに金を盗んだやつだとは云はなかつたが、料理人とくつついて追出された事、その情人(をとこ)にいたぶ

られて困つてゐる事を詳しく述べた。
「しかし、特に君のところへ無心をいひに來ると云ふのはをかしいぢやあないか。」
支店長は疑のとけない様子でつつ込んで來た。
「どういふ積りなんですか、私を一番親切な人間たと思ふと云つてやつて來たのですが……」
「三田君、いゝ加減にせんといかんぜ。親切は結構だが、あまり度が過ぎると馬鹿になる。」
さう云つて、さもをかしさうに全身に波を打たせてからからと笑つた。

十三の四

會社の營業時間が終ると、三田は誰よりも先に仕事をしまつて退出した。晝間突然おりかにやつて來られて、ふだんから會社員の型にはづれて居る爲めに、三文文士だとか內職づとめだとか、兎角蔭口をきかれ勝だつたのが、一段と噂の種になつたところへ、支店長に呼びつけられた事迄も殘らず知れ渡つたので、數十人の社員の眼は、一樣に嘲笑の色を帶びて、三田の一身に注がれたのである。彼は全く敗走する兵卒の如く、人目を避けて退出した。
先刻(さつき)おりかと別れる時は、何でもいゝから早く其場をきり上げ度い一心で、こつちから牛屋を

たづねる約束をしたが、斯うなつてはいつそ直ぐにも出かけて行つて、手取早くけりをつけた方がいゝ。愚圖々々して居て又押かけられては堪らないと思つた。三田は御靈さんの境内の文樂座の前を通つて、裏手の狹い道に出た。直ぐ目の前に、かなり大きいすきやき屋があつた。三田は躊躇せずに入つた。階下は土間になつてゐて、洋食部と書いた黑塗の看板がかゝつて居た。三田は靴を脫いで、二階に上つた。

廣い二間つゞきの座敷には二列に食臺が並んで居たが、時間の關係か、客は一組も無かつた。

「おいでやす。お誂は？」

いかにも牛屋の姐さんらしい大柄の女中が、後にくつついて來た。

「あのねえ、此のうちにおりかさんといふ人ゐますか。」

「おりかさん？」

女中は折角誂物を訊いたのには答へないで、思ひもかけない事をいふ客をうさんくさゝうに見ながら、首を傾けた。

「おりかさん？　そのやうな人は居たれしめへん。」

「ゐない？　ゐない筈は無いがなあ。くりくり肥つた、脊の低い、縮毛の、みそつぱで、面皰だ

らけの女の人なんだが。」
全く心當りの無い樣子なので、三田は卽座に尋人の特徵を描出した。
「あゝ、ゐてはりま。その人やつたらおりかさんおまへんで。おちかさんですがな。」
「おちかさん？　違ふ。僕のきいてるのはおりかさんていふんだ。」
「いゝえ、違ふ事あれしめへん。ちつこいくせによう肥つた、癖髮で面皰のあとの仰山ある人でつしやろ。その人やつたら、うちにゐてはりまつせ。」
三田の描寫はすつかり效果をあらはして、女は名前の違ふ事なんか問題にしないで立上つた。
「おちかさんでしたら、今直ぐに呼んで來てあげます。」
梯子段のところで、三田の人相をしつかりと頭にたゝみ込む爲めに振かへつて見たが、そのまゝ階下に下りて行つた。
間もなく姿をあらはしたのはおりかだつた。
「あらやだ。三田さんぢやあないの。お松さんたら、役者のやうないゝ男があんたを尋ねて來てゐるよなんて、すつかりかつがれちやつた。」
「なんだい、僕だつていゝ男ぢやあないか。」

「あらやだ。三田さんはいゝ男つていふんぢやなくて、賴母しい男なんですよお。」

おりかは、晝間の約束を守つて三田がやつて來たので、すつかり悅喜してしまつた。面皰つらを皺だらけにして、げらげら笑ひながら、一人ではしやいだ。

「今の人におりかさんて云つたら、そんな人はゐませんと云つたが、此處ではおちかさんていふのかい。」

「えゝ、その方が呼びいゝだらうと思つてねえ。」

おりかは名前なんか何だつていゝぢやあないかといひ度さうな無雜作を以て答へた。

「三田さんは御酒でしたね。牛肉ですか、かしわですか。かしわの方がいゝでせう。牛は臭くていやだねえ。」

一人で心得て、いそいそ立つて行つた。

十三の五

煮つまる鍋を前にして、三田はおりかの酌で飮んで居たが、どう考へても自分の立場は不思議だつた。金を盜まれた女にまた金を貸してくれと賴まれ、うかうかと呼出された形で此處に來て

居るのは、決していゝ役で無かつた。全く御人よしと見くびられてゐるのだと云はれても否めない。その馬鹿々々しい役廻を、何とか氣の利いた方に轉換する事は出來ないかしらと考へてゐた。斷然要求をしりぞけるのが男らしくていゝかしら。默つて二十圓はふり出してやる方が、かへつて大きいかしら。

「どうしたのさ、三田さん。たんとあがつて下さいよ。うちの御酒惡くないでしよ。」

おりかは三田の默々としてゐるのを不機嫌と思つて、しきりに酒を勸めた。

「醉はせて口說かうといふのかい。」

「あらやだ。三田さんも人が惡くなつたねえ。」

「そりやあ惡くなるさ。おりかさんみたやうな凄いのとつきあつてゐるんだもの。今日も會社で君の爲めに叱られちやつた。」

支店長に呼びつけられて、油を絞られた話をした。

「あらまあ、濟まなかつたねえ。會社は女が行つちやあいけないんですか。」

「つまりみんなが燒餅やくのさ。」

「よかつたなあ。」

ひとに迷惑のかゝる事なんか何とも思はないらしく、面白さうに笑ふのであつた。
「それであんた何ていつたの。」
「君がいろ男にせめられて、金を借りに來た事を話してしまつた。」
「やだよ、三田さん。」
「さうしたら、そんなふしだらな女に一文も貸すなつて支店長が云つたよ。」
つい飲まされた、惡酒の醉が出て、三田は割合に上機嫌になつてしまつた。厚顏無恥なのか、無智の極罪が無いのかわからないおりかに對しても、とるにも足りないものに向ふ時の、ゆとりのある心持が湧いて來た。
「ふんとにあんたきいてくれないの。あたしの後生一生の御願なんですけどねえ。」
三田が冗談をいふ丈の心持になつたのと反對に、おりかは相手が賴りにならなくなつて、不安心らしく眞面目に訊いた。
「今その御金が無いと、あたしあいつの爲めにどんな目にあはされるかしれないんですもの。きつと御返しゝますから、何とか助けて下さいな。御恩は死ぬ迄忘れません。」
ほんとの涙か噓の涙か、目の中を濡らして眞劍に膝を進めた。

「だがねえ、どういふわけで僕がさういふ役を振られるのか、それがわからない。お人よしだとか、甘いとかいふので目星をつけられたのかしら。」

「まあ、三田さんたら……」

面皰だらけのおりかの頬をつたつて、涙が落ちて來た。困つた事になつたぞと思つてゐたところに、どかどか二階に上つて來た三人連の會社員らしい客があつた。衝立も何も無い部屋だから、妙な場面に陷つてしまつた三田とおりかを、先方では早くもをかしく思つたらしく、しきりに視線を集めては、さゝやき合つて居た。三田は一層弱つてしまつたが、おりかは別段の動揺も見せないで、目頭に殘る涙を袖で拭いて、しばらくなほざりになつて居たお銚子を取上げた。

「もう御酒はやめる。僕は歸るから勘定してくれないか。」

一刻も居たゝまれない氣持がして、盃を拒んだ。

「またいゝぢやありませんか。御飯もあがらないくせに。」

おりかはあわてゝ引止めようとしたが、三田は頭を横に振つた。

「それぢやあどうしても歸るんですか。三田さん、怒つてらつしやるの。」

「怒つてゐやあしない。たゞ歸るんだ。」

それが性分なのだが、ひとつの事を繰返してゐるのが嫌ひなので、おもはず語氣が強くなつた。おりかも爲方なく立上つて、勘定書を取つて來なければならなかつた。

勘定をすまして歸るばかりになつたが、つれなく歸つて行く自分の態度を辯解するやうな心も動いた。その瞬間に三田は拾圓札二枚をちひさくたゝんで、おりかの目の前にはふり出した。

「それでいゝんだらう。」

驚いてゐるおりかにはかまはずに、三田は勢よく立上つて一文字に梯子段を下りた。

「三田さん、濟みません。」

おもて迄おりかは追かけて來たが、三田はさつさと歩き出した。大きな朧月が、うすら明るい空にぼやけて浮んでゐた。ありもしない財布から、二十圓を無意味に投出した後の心持は寂しかつた。

「矢張俺はお人よしだなあ。」

此のせち辛い世の中に生きて行くのが心細いやうな感慨さへ胸に湧いて來た。

十三の六

なまぬるい夜風に吹かれながら、ぽかりぽかり自分の靴の音をきいて歩いて居るうちに、味の濃過ぎた酒の臭ひも消えて、白々とした心持になつた。

「今日は大層遅い御歸りですな。何處ぞへ寄つて來てゞしたの。」

宿の格子をあけると、靴を脫ぐひまも無く、おつぎが出て來て訊いた。

「今日は不思議な人に逢つた。」

「不思議な人ですつて？」

「おりかさんさ。」

「え、おりかさん？　うちに居たおりかさんだつか。あの人何處に居てはります。」

「御靈さんの裏手のすきやき屋の仲居さんになつて居る。」

「ほんまですかいな。」

たつぷり好奇心は持ちながら、全く信じられない顏をして居るおつぎに、三田は多少の噓をまぜて話した。まさかに會社にたづねて來て、情人と別れる爲めに入用の金を貸してくれと云はれたとは云ひ兼て、偶然往來で逢つて誘はれて行つた事にした。あんまりみんなに憎まれ過ぎて居るおりかをかばふ心持も、そのおりかに甘く見られてゐる自分自身をかばふ氣もあつた。

「おりかさん、あんたに逢うてどないして居やはりました。途方ない困つて居りましたやろ。」
「さうでも無かつた。相變らず面皰だらけの顔をして、げらげら笑つてゐたつけ。」
「へえ、逃げもかくれもせんと。」
まだまだいろいろ訊き度がつて居るのを振切るやうにして二階へ上つて行く後から、帳場で耳を傾けて居たおかみさんが、わざわざ廊下へ出て來て聲をかけた。
「三田さん、おりかのやつ、ようあんたに顔が合はされたもんですなあ。」
人の物に手をかけた根性の曲つたものを、手ひどくどづいて來て貰ひたかつたやうな意氣込で、何か痛快な事を期待して居るのは、言葉のいきにも現れて居た。
「僕もさう思つたんだが、本人は存外平氣らしかつた。おかみさんを始め、こゝのうちの人達はみんな無事かつてきいて居ましたよ。」
「ようその樣な口がきかれたもんや。それであの料理人の男も同じ家に奉公してゐるのだつしやろか。」
「いゝえ、あの男は梅田の驛の近所の宿屋にゐて、今でもお金をねだりに來て困るとこぼして居ました。」

「さうでつしやろ。もともとおりかみたいな女に誰が好んで手を出すもんで。これをみつがせよう爲めのわるさですがな。」
母指とひとさし指で圓をこしらへて、一寸痛快らしく笑つた。
「そしてあんさんはおりかの居る家へ行かはりましたのか。」
「來ないかつて云ふもんだから、おトかさんのお酌で飲んで來た。」
「まあま、あんさんもよう出來たお方ですなあ。」
家中に響き渡るやうな大きな聲で、仰山に驚いて見せた。臺所で働いて居る者も、帳場に居る娘も、一齊に笑つた。

十四の一

お花見の計畫も、懷中の乏しさにずるずるに延びて居るうちに、花は遠慮なく散つてしまつた。水の流も深くなつて、またたくひまに貸端艇が、中之島附近から土佐堀へかけ、又道頓堀のどぶ泥のやうな水面にも、無數に浮ぶ時節となつた。三田が醉月へ來てから、早くも一年になつたのである。最初のうちこそ、だんまりむつつりの、とつつきにくい人間として氣ぶつせいに思つて

居たが、今では氣心も漸くわかつて、おかみさんも女中も、それ程變物あつかひにはしなくなつた。しかし、未だに手を叩いて用事をいふ事は一度も無く、食事と食事の間には茶も飲まず、部屋は少しもちらかさず、全く手のかゝらないのが、かへつて一脈不氣味な、氣心の知れない感を宿の者にいだかせるのであつた。

三田は一番の古顏だつたが、それに次ぐものは野呂だつた。野呂は此の宿に來た頃、三田につきあひを求めたが、相手にされなかつたので、それ以來顏を合せても、二人は挨拶をしなかつた。三田はそんな事は無頓着だつたが、野呂は明かに含んで居た。此の男も酒のみで、飲めば必ず助平になるたちだつた。お米は引續いてお酌に侍り、夜もこつそりその部屋に忍んで來て居た。女中を相手に大言壯語をもてあそぶのは野呂の好むところだつた。如何に自分が大正化學工業株式會社にとつて缺く可らざる働手であるか、如何に社長に信用されて居るか、如何に部下に怖れられて居るかと云ふ様な、お山の大將のほこりを得々としてひけらかした。

その野呂と、のつぴきならぬ事になつて、三田は一緒に酒を飲まなければならなくなつた。或日の事で、三田が退出時間の近づく事ばかり念じながら仕事をして居るところへ、支店長が呼んで居ると給仕が云つて來た。又何かお小言かと思ひながら、ふてくされた肚で行くと、存外支店

長は上機嫌で、
「三田君、君は今晩何か先約でもあるかね。若しひまならば一緒に飯を喰はう。」
といふ意外な話だつた。支店長の同窓の友達で、大正化學工業株式會社の社長をして居る大河原といふのが來阪中なので、その宿をたづねたところ、何かと世話をしてゐたのが野呂で、いろいろ話の末に、三田と同宿だといふ事がわかつた。久々でうちとけた話をしようといふので、支店長が大河原を招く事になつた時、その場のついでゞ野呂も誘つたから、その話相手に三田にも出てくれといふのであつた。よくない役廻だとは思つたが、別段用事も無いと云つた手前、今更斷るわけにも行かなかつた。
「どうも私は口不調法で、とても接待役はつとまり兼ますが……」
「いやあ、どうしてどうして、北の新地は僕なぞよりは地の理を知つてる筈ぢやあないか。大分君の私生活については野呂君から面白い報告があつた。今晩あらためて拜聴する事にしませう。」
と大(おほい)に意味のありさうな事を云つて、三田をいやがらせた。

十四の二

夕方、三田は支店長と肩を並べて歩きながら、今朝出がけに氣の付いた靴下の兩方の踵に大きな穴のあいて居るのを思ひ出した。支店長にその事を話して、途中で買つて穿きかへる方がいゝかしらとも思つたが、何となくいひ出し惡くて、新地の茶屋に着くまで愚圖愚圖になつてしまつた。靴を脱ぐと、踵から全身に風の沁み渡る氣がして、人しれず赤面した。

廣い座敷で暫く待つてゐると、大河原が野呂を従へてやつて來た。支店長に引合はされて三田は大河原に挨拶した後で、野呂とも口をきかなければならなかつた。

「やあ、三田さん。今日は私迄支店長さんの御招にあづかりました。」

「始めまして。わたくしは三田です。」

同時に雙方が頭を下げたが、野呂はすつかり馴染のやうな口をきゝ、三田は一年近くも同宿で顔を合せてゐるくせに、初對面の挨拶も變なものだと思ひながら、正式には初對面に違ひ無いので、あらたまつた口上を述べた。

「なんだ、三田君は野呂さんとは始めてかい。」

野呂の口から、三田とはよく知合つて居る様に聞かされてゐた支店長は、すくなからず意外な様子だつた。

「えゝ、ついかけちがひまして。」
「左様か。僕は親しくつきあつて居るやうに聞いたものだから……」
「いや、三田さん。あなたの事は洗ひざらひ支店長さんに御話してしまひましたよ。はつはつはつは。御互にざつくばらんがいゝです。」
野呂はその場のゆきちがひをつくり笑でごまかして、つぼにはまらない事を云ふのであつた。
ぬけめのなさゝうな骨相の大河原大正化學工業會社長は、如何にも親しげに舊友の支店長と話をして居るし、又めいめいの地位の相違もある爲め、自然に三田は野呂の相手をつとめなければならなかつた。
酒と一緒に藝者があらはれると、野呂は第一に活氣づき、支店長や大河原から三田に迄、一々盃を貰つて歩き、をかしくも無い事にも仰山な高笑を酬いて、一座を賑かさうと心懸けてゐた。三田は、自分もちつとは取持役として働かなければならないのだとは感づきながら、どうしても氣輕に座を立つ事が出來なかつた。
「三田君、君は酒豪なんだから、遠慮なく飲んでくれたまへ。」
と支店長は見るに見かねるといふよりも、あんまり氣の利かないのが腹だたしさうに、二度三

度同じ言葉を繰返した。その肚の中は、底の底迄わかつて居るのだが、三田は自分の性分を、どうする事も出來なかつた。平生酒に對しては隨分意地の汚ない方なのが、御馳走酒ではうまくなかつた。いくら勸められても、兎角盃は膳の上に冷い酒をたゝへてゐた。

「三田さん、ちつとも上らんではないですか。あなたの御手並は豫々聞及んでゐるのですが、例のそら蟒先生ですな、あれを盛つぶすのはあなた丈ですよ。」

段々醉の廻つて來た野呂は、顏中脂肪でぬらぬら光らせ、若い藝者の手を握つたり、助平たらしい冗談を云つたりするあひ間には、何彼と三田をいやがらせるのであつた。

「さうさう、三田君の御氣に入だといふ蟒といふのを呼んでくれ。」

野呂にきかされて名前を知つてゐる支店長も、面白さうに相槌をうつた。

「蟒? けつたいな名前だんな。そのやうな藝妓はんは、新地にはゐたれしめへんぜ。」

大丸髷を頂いて、どつしり構へてゐる仲居頭は意地の惡さうな太い眉毛を寄せて首をひねつた。

「なんとかいひましたなあ、三田さん。脊のおそろしく高い、眞青になつてコップ酒を飮む……」

「わかりました。お葉さんでつしやろ。」

「それそれ、お葉さん卽ち蟒さ。三田さんのところへしけ込んで來てゐるのがやけて堪らんから、

からかつてやつたところが、えらい女でなあ、俺の此の茶瓶にさあと酒を浴せやがつた。」

野呂は大河原や支店長への座興に、自分の薄禿の頭を叩いて笑はせた。

十四の三

蜂があらはれた時は、大河原も野呂も十分に醉ひ、量を節してゐる支店長さへ誘はれて聲が高くなり、三田丈が妙に白けた心持で不機嫌をおしかくして居た。

「いよう、蜂姐さん。」

お約束の座敷に出てゐたのであらう、すぐれて脊の高いので裾を引いて、一段とひよろ長く見えるのを、見上げる形で野呂がはやした。

「今晩は。此處のうちの逢狀に三田樣故はやはや御越しと書いてあつたので、あんたが此のうちを知つてる筈は無いがと不思議に思うて來ましてん。おゝしんど。姐さん、コップ貸しとくんなはれ。」

醉つた時にはおきまりで、傍に人無きが如き我儘を極める蜂は、外の客には目もくれずに、三田の前に坐つて、直ぐさまコップ酒をあふりつけた。

「おいおい、なんぼ三田さんがいゝからつて吾々にも御言葉を下し賜はつてもいゝだらう。」

「初對面の方は羞しおますさかいな。」

「初對面だつて。驚いたねえ、俺の此の茶瓶に酒をぶつかけたのは、よもや忘れは致すまいが。」

わざと芝居めかした太い聲を出して、野呂は禿頭をつき出した。

「へえ、あんたの茶瓶にお酒をかけましたかいな。あんまり度々なので、何時何處でやつたかよう覺えません。」

「冗談いつちやあいけないぜ。お前が三田さんのところへ忍んで來た時さ。忘れたか。」

蜂は始めて思ひ出した。

「あゝ、あんたでしたかいな。あても阿呆やなあ。そのやうなしやうむない茶瓶に、おいしいお酒かけるやうなもつたいない事、なんでしたのやろ。」

「まあ、お葉さん姐さんのいはゝる事。」

若い藝者や舞妓は、よく訓練されたかしましい聲をはりあげて笑つた。

「さ、みなしてコツプで飲みまほういな。あんたも床柱しよつてえらさうな顏してゐないで飲んだらどうですか。」

「僕は弱卒だ。その上茶瓶仲間だから、酒でもぶつかけられてはかなはん。まあ、お前と三田君の合戰を拜見してゐよう。」

「へえ、大けな體して、おまはりさんみたいな髯はやした男が、御酒もよう飲めへんのか。そんな事て、御役所だか病院だか知らんが、よう勤まるもんですな。」

蟒はたて續けにコップ酒をあふりながら、支店長を尻目にかけて、口から出まかせの毒口をきいてゐた。ふだんから決して愛想のいゝ方で無いのが、殊に御機嫌斜めだつた。

「おいおい、むちやいふなよ。そちらは三田さんところの大將だぜ。」

野呂は蟒の放言をさし止めようと氣を揉んでゐた。

「大將だらうが兵隊だらうが御酒のよう飲めんやうな男は一人前とはいはれへん。さ、三田公、飲まん人はほつといて、こちらはこちらで飲みまほ。おゝ暑つ。足袋脱がして貰ひまつせ。」

いきなり脱いだ足袋を座敷の隅へ投げて、飲み干したコップを三田に差した。

「さかんなものだねえ。」

と大河原が苦々しげにいふと、

「きゝしに勝る豪の者だよ。」

と支店長も興ざめた顔をして答へた。

十四の四

三田は自分の一身の處置に困つてしまつた。本來ならば支店長の下役として、客の接待につとめなければならないのが、生れついての氣重の爲めに、盃を貰つたり返したりする事さへ滿足には出來ないで、内心ひどく參つてゐたところへ、我儘氣儘な蜂が出現して、傍若無人に振舞ふので、座敷はちぐはぐな心持でいつぱいになつてしまつた。前から來てゐた若い藝者や舞妓は、型にはづれた蜂の振舞に調子が合せ切れなくなつて、一人減り二人減り、殘つてゐる者は膝に手を置いて、所在なさに難澁してゐた。三田の心になつて見ると、一座の不興に對する責任は、みんな自分がしよはされたやうだつた。

「三田公、あんたなんで飲みなれへんの。そのコップ返してほしいわ。」

一向頓着無く、蜂がせめ立てるので、愈々酒を飲む氣は無くなるのであつた。

「今日はいけないよ。場所を考へろよ。」

小聲で云ひながら手を振つて見せたが、かへつて氣勢を高めてしまつた。

のか。」

「なんで今日はいけないのか聞かして貰ひまほ。三田公ともあらうものが、今日も明日もあるも

「よせよ。今日は接待役なんだ。君も、あつちに居るおれきれきの方に行つて、御機嫌をうかゞつて來てくれ。」

「阿呆らしい。御酒を飲まんやうな人間の御機嫌がうかゞへますかいな。第一あんたみたいな不精者を接待役に擇ぶのが間違ひのもとや。なあ、大將。三田公は三田公らしく氣儘に御酒を飲ませて置いたらどうでつしやろ。」

折角三田は聲を落してさゝやいてゐたのに、蜂はわざと高調子で、あまづさへ支店長の方へからんで行つた。

「三田君、氣儘に飲んで貰ひ度いね。此の姐さんのお相手は君でなければつとまらんよ。」

支店長は心の中の不滿を聲に出して、怒鳴るやうに云つた。

「大將。あんたよう物のわかつた御方だんな。此の姐さんの御相手はほんまに三田公に限るのだつせ。三田公は男ぶりがえゝといふのでも無し、藝事も出來へんし、不粹の親玉みたいなもんやけれど、酒の飲みつぷりがよろしいなあ。ようてようてたまらん。」

蜂はコップと德利を兩方に捧げて、ふらふら立上ると、支店長と大河原がしきりに話をしてゐる前に行つて坐つた。

「おいおい、さう手放しでのろけられてはそれこそたまらんぞ。」

すつかり虎になりながらも、蜂の横暴を懲らしてやらうといふ肚で、横つちよから野呂が聲をかけた。

「えらい御世話さん。あ、んたのろけいふのはどないな事か知つてゐやはりまつか。三田公とあたしのやうなきれいな交際をして居るものが、友達をほめるのはのろけとは違ひまんがな。なあ、大將。さうでつしやろ。」

「さうさう。」

支店長はうるさゝうに、冷かすやうにうなづいて見せた。酒癖を露骨にあらはして來た蜂は、相手が自分をうるさがつてゐると見てとつて、愈々つむじを曲げてしまつた。

「ふふん、あんた此のあてをうるさい、邪魔な奴やと思うてゐる。邪魔なら邪魔でいにまつせ。」

「なあに邪魔なものか。珍しい藝者もあるものだとつくづく感心してゐるのだ。」

「ほんまだつか。」

「ほんとさ。」
「そんなら此のコップを受けとくんなはれ。」
「そりやあ困るよ。酒丈は許してくれ。」
「一杯丈受けたつてよろしいがな。折角差したコップをつき戻されたら、心地惡うてかなはん。」
蜂は醉へば醉ふ程蒼ざめて、それが此の女の取柄ともいふ可き澄んだ眼が、どんよりとすわつて來た。
「心地惡うてかなはんと云はれても、飮めないものは爲方が無い。そんなに飮ませ度いのなら三田君に飮ませたらいゝだらう。」
「いゝえ、あんたに是非とも飮んで貰ひ度い。」
なみなみとついだ酒の光るコップを鼻さきへつきつけて、どうしても飮ませようとする氣勢を見せた。
「いかんいかん。何と云つても飮まんよ。」
「これ程頼んでも拜んでも飮みなれへんのか。」
「飮まん。」

支店長の聲は叱るやうに力強く響いた。
「飮まんというても飮ません事には肚の虫が承知せん。」
「承知するもしないもあるか。勝手に管を巻いてゐろ。」
痛癪筋を額に立てゝ、支店長は更に大きな聲で怒鳴つた。
「怒らはつたな。面白い。怒られてへこむやうなんとは違ひまつせ。飮まんと云ふなら、かうして飮ましてやる。」
あつといふ間も無かつた。蟒はコツプのふちに盛上つてゐた酒を、支店長の頭からぶつかけた。
「あれえ、姐ちやん。」
はらはらしながら、取さばく力も無く膝に手を置いて居た若い藝者の立騒ぐ中を、蟒は一文字に部屋の外に消えてしまつた。

十五の一

三田は突然東京の本店へ復歸を命ぜられた。支店長につれられて北の新地のお茶屋へ行き、蟒が酒癖を出して支店長に酒を浴せてから間も無かつた。誰から誰に傳つたのか、事の次第は大袈

袈に、社内の者の噂となつた。支店長と三田とが一人の女を張合つて、三田の方が若い丈有利になり、女は三田の爲めに支店長の面前で啖呵を切つたあげく、怒つてつかみかゝらうとした支店長に、酒をぶつかけたと云ふのだつた。まるで新派の芝居でする「通夜物語」の一場面の如き話になつてしまつた。しかも支店長はその女に未練があるので、本店に三田をかへした後でゆるゆる掌中のものにしようと云ふ魂膽だといふのであつた。

三田は何の辯解もしなかつた。再び東京に歸るのは嬉しくない事もなかつたが、何と云つても突然の轉任のうらには、馬鹿馬鹿しい出來事が潛んでゐるのだから、なさけなかつた。支店長は本店にむかつて、如何いふ理由を述べて轉任の申請をしたのだらう。さういふ事を追及して考へると、全く東京なんかに歸る氣はしなくなつた。

それでも、轉任の命令が下ると、一週間以內に出立する內規だつたから、直ぐにそれぞれ手配をした。一年半大阪に居た間に、自分の周圍にゐた人々に別れを告げる爲め、その人達を招待する事にした。醉月の主人とおかみさん、娘、女中三人、おつさん、田原、蜂、おみつの十人を選び、場所はおりかの奉公してゐる牛肉屋の二階ときめた。旣に野呂の口から、新地の一夜の出來事は、殘らず宿の者に傳へられ、みんなは蜂の狼藉を惛み、三田の災難に同情して居たので、今

度の轉任も勿論それに起因するものと推察してゐた。

「ほんまにえらい災難ですなあ。あの蟒さんいふ人は、もともと評判のようない人では無いのでつしやろか。なんであんたあのやうな人を御贔負にしてゐやはつたのか、ほんまに口惜いと、みなで云うてまつせ。」

おつぎはさも腹立たしさうに蟒を罵つた。

「僕の轉任は、蟒のしわざの爲めでは無いよ。第一醉つた時の間違ひなんか、咎む可き事では無いさ。」

三田はさり氣なく云つてのけたが、あんまり人に兎や角いはれるのが面白くなさゝうなので、宿の者も蔭で評判する丈で、一切その事は口にしなくなつた。

けれども、三田の催すお別れの會に、蟒も招かれて來ると云ふのは、何としても合點が行かなかつた。

「あてにはどうしても三田さんの御腹の中がようわからん。矢張惚れてゐやはるのんやろか。」

「あのやうな怖い顔つきしてゐやはつても、此の道ばかりは別や云ふよつてなあ。」

「それかというて、何も蟒さんのやうな醉ひたんぼの女はんに惚れはらんかて、外にどつさりえ

ゝ女かありさうなもんやないか。」

口々に各自の意見をのべて、三田の物好を笑つたり、蟒のやうな女を友達扱ひにするだらしの無さに憤慨したりした。

「お前達のいふ事はみな違うて居る。三田さんは怒りつぽいやうに見えて、その實あの人程心の廣い方は珍しい。」

一度も口をきいた事も無いくせに、ひどく三田贔負の醉月の主人は、自ら信じるところあるらしく、たゞ一人三田の肚の中迄飲込んだやうな事を云つて居た。

十五の二

愈々翌朝は出立といふ日の晩、三田か主人の別れの會は、おりかの奉公して居る御靈さんの裏の牛肉屋の二階で催された。宿の主人は折角なから外出は嫌ひたといふ理由で、おかみさんは女中達を出してやると後で困るから自分とお兼たけは留守番をするといふ理由で不參だつた。お米とおつぎとおつさんと、珍しくも後日娘義太夫になる筈の娘が、途中でおみつを誘つて來た。他所ゆきの顏つきをして、此の人々が二階へ通ると、三田は一足先に來てゐて、おりかと話しなが

ら待つて居た。

「まあ、みなさん御揃ひで、あたし羞しいよ。」

おりかはいろいろ弱味のある身を恥ぢてか、眞赤になつた面皰だらけの顔に袂を當てた。

女同志は御互にしつくりとは結びつかない話を喋り合つて居たが、結局は三田の身の上に落(おち)て行つた。

「三田さんも急に御歸りなさる事になつたんだつてねえ。」

「それがあの蟒さんのわるさの爲めいふ事知つてゝだつか。」

「へえ、あののんだくれの藝者？」

苦い顔をして腕ぐみしたまゝ感慨に耽つて居る三田には頓着無く、おつぎとお米はおりかが眞相を知らないのに優越感を起して、かはるがはる左右から話すのであつた。此の場に臨んでは、もう遠慮も我慢もいるものかといふ勢だつた。

「よし給へ。今その蟒も來るんだから。」

三田は堪り兼て話を兩斷してしまつた。恰も其の時、

「やあ、皆さん、遲くなりました。」

と梯子の中段から大きな聲をかけて、田原がせり上げの樣にあらはれると、後には蜂がつゞいた。
「今途中ででつくはしてなあ、道行のやうに並んで來た。」
田原は何時もに變らぬつけ元氣で、何となく固くなつてゐる一座を賑かにしようとするのであつた。
「噂をすれば影さ。待ちくたぶれて惡口を云つてたところだ。」
「あてのでつしやろ。」
蜂も流石に眞面目な顏をしてゐたが、商賣人だけに氣を取り直して、忽ち田原と調子を合せて、室内の陽氣を高めようとするのであつた。
「あの女故に三田さんも東京へ歸らはる事になつた。あいつが來たら、みなでどづいてやろ、こない云うてゐやはつたのと違ひまつか。」
度胸を定めて先手を打つて、たしかに異心のある外の女達の方に、腹藏なく笑ひかけた。
「全くその通りだ。さ、おりかさん、御馳走を賴むよ。今日こそは蜂の頭から熱燗一合ぶつかけてやるから。」

三田の冗談に一座は腹をかゝへた。笑と酒は人と人との間に横はる邪魔を直ぐさま追拂つて、めいめいの話聲も高くなり、話題の少いのをまぎらす女達の笑聲は絶間がなくなつた。

十五の三

三つ四つ食臺をつなぎ合せた上に、一齊に濃い湯氣を立てゝ居る牛鍋を兩側から挾んで、口も箸も忙しく動いた。

「おい三田公、あちらにゐらつしやる御老體はどなただ。紹介して吳れなくちやあいけないぢやあないか。」

酒量の無い癖に最初に馬力をかける田原は、見る間に赤く額を染めて、ふだんから人一倍高い調子が更に高くなり、一人で喋つてゐたが、飲干した盃をおつさんに差した。

「醉月のおつさんでね、そもそも僕があの宿へ行く事になつたのは、天神橋の蛸安で、此の人と落合つたおかげなんだよ。」

「そんなら御話は豫々三田公から承つて居ります。僕は田原です。何分よろしく。」

眞面目くさつてつきつける盃を、おつさんはにたにた笑ひながら兩手で受けて押頂いた。

「社長さんの御盃を頂いてはもつたいないわ。」
「何云やあがるんだい。昨日の社長、今日の浪人だ。東京に追かへされる三田公の方が、喰扶持に離れない丈まだしもましだ。此おつさん隅に置けねえ悪者だぞ。」
田原は下手な卷舌で、がらりと碎けたところを見せて、おつさんに親しい心持を持たせてしまつた。
「おつぎにゐらつしやるのは醉月の娘はん、豐竹小呂昇はんと承知して居るが、こちらにゐらつしやるも一人の娘はんはどなた樣です。」
お米とおつぎの間に、特に今日結つたばかりの島田の首を行儀よく据ゑて、つゝましく笑つてゐるのに、田原は先刻から目をつけて居た。
「そちらはおみつつあん。」
三田は何と云つていゝか一寸躊躇したが、
「何時か蜂女史の大嵐の時、びしよ濡にした一張羅を仕立直して貰つた人の話をした事があつたらう……」
「あゝあの……」

横合から蜂が感嘆の聲をあげたが、あゝあの淫賣かと云はうとしたので、あわてゝ自分で口を押へて、

「へえ、あんたでしたか。その節うちの三田公のくたぶれた着物を縫うてやらはつたのは。」

とあやふくきり拔けた。

「おい蜂。俺の頭からざぶりとやつてくれ。おみつつあんに着物を縫直して貰へるなら、酒でも水でもなんでも構はん。」

田原は顛狂な形をしておみつを拜みながら、ざんぎりの頭をぴよこぴよこ下げた。

最初のうちこそ敵意を持つてゐたが、惡醉さへしなければ目端の利く蜂は、誰にもへだてを忘れさせ、全く水入らずの會合となつた。おつさんは好物の酒にありついたので、口尻に唾の垂れさうな恰好で盃を含み、お米もおつぎもおみつも、田原と蜂に強ひられて、白粉の顏をほの紅くした。

「君はちつとも飲まないやうだが、コツプでも貰はうぢやあないか。今晩は僕も首を横に振らないで、最後迄つきあふよ。」

「三田さん、今夜丈はかんにん。」

蟒はあわてゝ手を振つて拒んだ。
「此處でコツプで飮み出したら、折角の御別れの會を、又むちやにしてしまひまつせ。」
しんそこから訴へるやうな眞面目な顏をして、どうしてもきかなかつた。

十五の四

とはいふもの丶、ほろ醉は次第に度を過して來た。殊に田原は調子に乘つて女連に盃をさし、醉はせる積りが、かへつて自分が醉つてしまつた。
「三田公、お前はどうせ大阪の人間ではないと思つてゐたが、斯う早く引上ようとは思はなかつたよ。お前のおふくろに、一人前の人間にして吳れと賴まれてゐたんだが、未だ半人前にもならないうちに俺の目の屆かないところへ手放してしまつては、佛つくつて魂入れずだ。」
何か一演說やらなくては納まらないやうな感慨深い心持が襲つて來た。それを無理に振捨る態度を見せて、彼はいきなり立上つた。
「諸君。三田公の爲めに乾盃しませう。」
「よろし、ひとつしめましよか。」

第一におつさんが應じた。めいめいの盃に酒をたゝへて、一齊に飲干すと、しやんしやんしやんと〆たのである。

三田は不意に、鼻の頭に水洟がたまつた氣がして、眼の中があつくなつた。

「難有う。わたくしも皆さんの健康を祝します。」

居ずまひの崩れてゐたのが、きちんと坐り直して、三田はサイダアを飲んでゐる宿の娘の前に空つぽになつてゐるコツプを取ると、手酌でいつぱいにして一息に飲んだ。ぐぐうつと腹の底迄酒が沁みると、胸に込み上て來る酔と共に、何か心にたまつて居る事を、殘らず吐出してしまひ度くなつた。

「少々遲ればせながら、一寸御挨拶を申述べます。」

少し酔つたかなと考へる餘裕は十分あつたが、それを押切つてしまふ感激が燃えて居た。

「謹聽々々。」

田原は自分の御株を奪はれたやうにも思はれ、又自分の舞臺が廻つて來たやうにも感じて、さかんに拍手した。

「今晩はそれぞれ御忙しいところを繰合せて御出で下さつて、滿足に思ひます。今度突然東京に

歸る事になりましたが、此の大阪の一年有半は、皆さんの御蔭でいゝ修業を致しました。その間に、最も親切にかたくなな私をよき友達としてつきあつて下さつた皆さんに別辭を述べるには多少の感慨があります。醉月の御主人夫婦の缺席は遺憾ですが、娘はんもおつさんもお米さんもおつぎさんも來てくれ、又我が飲友達蜂さんは、ひくてあまたの御座敷を斷つて來てくれ、その蜂さんにお酒をぶつかけられた爲めにはからずも御友達になつたおみつつあんもゐるし、場所はおりかさんの奉公してゐるところで、考へて見ると此の座敷の中に、私の一年有半の大阪生活は、そのまゝ生きて動いて居るやうに思はれます。」

「ひやひや。」

田原はたんまりの三田の意外な雄辯に感興をそゝられて、又しても拍手しないではゐられなかつた。

「たゞ一つ殘念なのは、私が會社のゆきかへりに殆ど毎日すれ違ひ、ひそかになつかしく思ひながら、遂に機會を失して友達となる事の出來なかつた無名の美しき人を此の場に見る事の出來ない事であります。」

「へえ、三田さんにその樣な人がおましたの？」

「誰だ誰だ、そいつは。」

蟒と田原と同時に左右から詰寄つた。

「三田さん、それはあんさんが今日は逢はなんだので氣色が惡い、今日は逢うたので縁起がえゝ云ははつた何處やらの御店につとめてゐる娘さんの事でつしやろ。」

おつぎは三田にからかつた頃のことを思ひ出して、得意さうに云つた。

「ふうむ、初耳たね。」

「初耳なものか。君はその娘を見た事がある。一度往來で見る光榮を有した事がある。」

「さうかなあ、俺の記憶には無いよ。しかしほんとに三田公がおもひを焦したとすると實に愉快だ。いつたい全體何者だ。」

「日華洋行の受附なんだ。」

「へえゝ、意外千萬だなあ。」

「私は正直にいふと、若し機會があればその娘さんには眞劍になつたかと考へるのであります。」

三田はひどく眞面目な顏をして、ずばりといひ切つて、もう一杯コツプの酒を飲干した。

十五の五

三田は一息ついてから、そもそも靴屋のおやぢと不愉快な交渉をした事、ぶかぶかの靴を穿いて裏通を歩いて行く向ふから、つゝましやかに來ては擦違ふ銀杏返の娘の事、その娘に對してどういふ心持を持つてゐたか、日華洋行の主人の悲慘な最期の爲めに、ふたゝび逢はなくなつた事を話した。どういふものか、愈々大阪を去るといふ時になつて、その娘の姿は、最も明かに彼の心によみがへつて來たのだ。

「ふうむ、そいつは面白いなあ。」

小說でも讀むやうな興味で、田原はしきりに詳しく聞き度がつた。外の者も、三田にもそんな心持があつたのかと、半信半疑で呼吸を呑んだ。

「その娘さんを此處に見る事の出來ないのは、たつた一つの遺憾であります。」

三田は又繰返して云つた。

「けなり、けなり。その娘さんの話もうやめてほしいわ。名前も知らず、何處の人かも知らんで、なつかしいとか忘られんとか云ふ柄かいな。」

蟒はわざと怒つた様子を見せて話を遮つた。
「まあ、さうやくなよ。三田公の一目惚なんか全く話だ。黙つて聞いてゐてやれよ。」
「あかん。あてがあかんいうたらあかん。」
田原と蟒の爭ふのを、みんなは面白がつて見てゐた。
「あかんも何もないよ。話し度くてももう種は盡てしまつた。たゞ遺憾々々と繰返しまして、扨てその遺憾はあるにはあるが……」
三田は立てつゞけに飲んだ酒で高くなつた聲で續けた。
「その外のお友達とは斯う迄親しくおつきあひをし、私としては一生忘れられない人々となりました。私は字が下手なので手紙を書くことは大嫌ひです。だから、東京へ歸つたが最後手紙なんかは恐らく書きますまい。年賀狀さへ出さないだらうと思ひます。けれども、どうぞ三田といふ男がゐた事を忘れないで下さい。みなさんからも手紙を頂かうとは思ひません。たゞ忘れないで下さい。私も忘れません。靑二才の口から云ふと變だからいゝ加減にして置きますが、みなさんの友情に對し、心の中ではしみじみ感謝して居ます。怒る言葉は樂に出るけれど、感謝の言葉といふ奴は、いやみになつていけません。だからこれでおしやべりは止めて、もう一度皆さんの健

康を祈ります。」
三田は又なみなみと酒をみたしたコップを高く捧げて、美事に干した。
「三田さん、あたしにも飲ましとくんなはれ。なんやら涙みたいなもんが眼の底から湧いて來てかなはん。」
今日ばかりはコップ酒は御免だと云つてゐた蜂は、何かに感じて涙で目の中を濡らしてゐた。それをまぎらす爲めであらう、いきなり三田の手からコップを奪ひ取ると、
「さ、誰ぞお酌。」
と甲走つた聲で叫んだ。
「來たぞ、來たぞ。斯う來なくては面白くないんだ。」
田原は直ぐに調子を合せて、德利を取あげた。蜂は咽喉を鳴らして、一息に流し込んだ。
「あゝおいしい。もう數珠切つたからはあとの事は知りまへんで。三田公、今晩は夜どほし飲みまほういな。」
無理に控へてゐた酒だから、もうひとつ續けさまにあふつたが、あかりの下で振仰いだ頰邊には涙が光つてゐた。

十六の一

大阪らしくどんよりと曇つた朝、三田は宿醉のはれぼつたい顔をして、梅田まで見送るといふおつさん、娘はん、お米、おつぎ、おみつに取圍まれて、荷車を從へながら、今更なつかしい川岸を歩いて行つた。めいめいいろいろな感慨はありながら、變に胸のふさがつたやうな氣持で、誰一人はかばかしく口をきく者も無かつた。

驛にはおりかも來て待つてゐたが、三田が必ず來てゐると思つて居た田原と蜂の姿は見えなかつた。

切符を買つたり、荷物を預けたりしてゐると、もともとぎりぎりの時間だつたから、直ぐに改札口は開いた。

「田原さんと蜂さん姐さんはどないしやはつたのやろ。」

と三田が我慢して云ひ出さない言葉を、さも不平さうにいふものもあつた。

「昨晩の飲過で頭があがらないんだらう。田原なんか、あんなに醉拂つて居て、無事に御影まで

歸れたかどうかわからないぜ。」

しまひには足腰の立たなくなる迄コップであふりつけた蜂と、前後不覺になつて牛肉屋の床の間を枕にして寢てしまつた田原の夜前の姿を、三田は寂しく思ひ出した。

澤山の人の群がる歩廊(プラットフォーム)に立つても、三田は田原と蜂を心待に待つた。ほんとに自分を知つてゐるのは、廣い世の中に此の二人きりのやうな氣がした。いくら昨晩は醉つたからつて、今日はどうしても來なければならない筈だと、遂には不平に思つたが、時間は刻々に迫つて、三田の乘る可き汽車は轟然と驛の中へ侵入して來た。

「さあ、愈々御別れだ。」

急に名殘惜(なごりをし)さが深くなつたが、否應なしに乘込んだ。

窓から頭を出して、其處に一列に並んでゐるみんなとそれぞれ挨拶をかはしてゐるところへ、田原と蜂がかけつけた。二人とも兩手に麥酒瓶(ビールびん)を持つて、いきせき切つて來た。

「あぶない、あぶない。もう少し寢てゐたら間に合はないところだつた。昨夜は夜中に目が覺めたら、一人で知らないうちに寢てゐるんだ。驚いたねえ、それが堂島裏町の宿屋なんだ。」

田原は窓に近く寄つて、手に持つて居た麥酒瓶を腋の下に挾んで、三田と握手した。あんまり

ひどい醉ひ方なので、まだしも本性のある蟒が、近所の宿屋へ連れて行つて、荷物のやうに預けて來たのださうだ。

「今朝かつて、あてが起しに行つてあげなんだら、よう間に合ひはしませんでしたぜ。」

蟒はさういふひまに、これは兩手の麥酒を側に居るおりかに渡し、素早く自分の袂から紙製のコップを取出した。それを三田にも田原にもおつさんにも、外の女達にもひとつ宛持たせ、帶の間から栓拔を出して、手際よく瓶の口を取り、みんなのコップになみなみと酌いだ。

「いゝか、三田公の爲めに別れの乾盃だ。さうして萬歲を三唱する。」

部下に命令するやうな態度で田原がいつた時、發車の合圖の汽笛が高く響いた。送る者と送られる者と、あたりの人の好奇心に輝く視線を殘らず身に浴びながら、一齊に乾盃した。

「三田公萬歲。」

田原は音頭を取つて聲を張上げたが、これは流石に誰も應じなかつた。

「萬歲。」

田原は構はずに三度叫んだが、その時汽車は既に人々を後に殘して滑り出した。

うす汚なく曇つた空の下に、無秩序に無反省に無道德に活動し發展しつゝある大阪よ、さらば

さらばといふ様に、烟突から煤烟を吐き出しながら、東へ東へと急走した。（大正十四年十月三日稿了）

後記

第四巻は小說「大阪」「大阪の宿」を收錄した。前者は大年十一年十一月十九日、後者は大正十四年十月三日の稿了である。

著者が明治生命保險會社大阪支店詰として、大正六年十一月から大正八年十月までの足掛三ヶ年間の大阪生活に取材した作品は、この外に「日曜」「大空の下」「友情」「失職」の四篇があるが、この中本卷の二篇は後述の如き流布本の刊行により、最も廣く人口に膾炙されてゐる作品である。制作年代を斯く異にする作品を、同時に本卷で收錄したのは、著者生前にこの兩篇を一卷に採錄されてゐる右の前例に從つたのと、且つ題材的にも一聯の作品と見做され得ること、編纂上頁數の好都合なること等の理由によるものである。

「大阪」

本篇は作者三十六歲の時の制作で、「大阪每日新聞」夕刊第一面に大正十一年七月十五日から同年十二月二日まで、百十四回連載されたものである。「六月から引續いて大阪每日新聞に連載してゐる長篇『大阪』が年

中追はれ勝で、屢々電報で催促を喰ふ有様だつた。」と、當時の事情が「青山の家」（「貝殼追放一」收載）に記述されてあるが、殆ど毎回ごとに執筆されたものと思はれる。そのためか、「七の四」が原稿郵送中紛失し、その回は掲載されず、紙上では勝手に次回分を繰上げて「七の四」としてゐる。また、「四ノ一〇」末尾には新聞紙に對する批判が約八行抹消されて發表されたものであつたが、後、大正十二年四月、一巻に纏められ東光閣から刊行されたときには、著者自ら加筆され、紛失の一回分も增補された。

「大阪」の校訂は東光閣版「大阪」を底本とし、原據として掲載紙「大阪毎日」を採り、尙、再編纂本春陽堂版「明治大正文學全集」第三十八巻及び春陽堂文庫版第八十七篇「大阪」を參照した。

掲載紙と刊本との著しい相違點は、大阪辯と句讀訓點であるが、掲載紙にあつて原本に脫落してゐる個所も二三に止まらなかつた。これは再編纂本でもすべて脫落のまゝであるが、作者が明かに補正されたと認められるもの以外、不注意の脫落は他の例を參照し大方增補することにした。

大阪辯は、慶應義塾大學經濟學部大正十五年卒業の大阪船場出身芝順一郎氏が、大阪毎日に連載中の後半ごろから、作者の依頼により訂正加筆し、更に東光閣より刊行の際補正されたもので、今回も同氏に照合を煩はし、改めて訂正した個所も亦二三ある。

「大阪の宿」

大正十四年十月號「女性」(プラトン社發行)に第一回を發表され、翌十五年六月號まで九卷に亙り中篇小說として連載された。作者三十九歲から四十歲の制作である。

本篇の校訂は、大正十五年九月に發行された友善堂版「大阪の宿」を底本とし、原據としては揭載誌「女性」全九卷を採り、春陽堂版「明治大正文學全集」第三十八卷及び春陽堂文庫版第八十八篇「大阪の宿」の二册を參照した。

尙、本文の大阪辯は前記「大阪」とは多少趣きを異にしてゐるので、作者の親友にして、當時最も交涉繁く、小說「日曜」の序に見る如く初期「大阪もの」の大阪辯の指導者であつた梶原可吉氏に照會したところ、作者の大阪辯の上達振りを實例を擧げて指摘し、作者自身の硏鑽に由るものと判定された。

作者の文字遣、假名遣はかなり特色のあるものであるが、本卷の校正に當つては、つとめてその原形を尊重し、實際に當つて疑義の生じた際はその都度數次實行委員が合議して、すべて一定の規準に從つて行つた。

本卷の校訂校正には平松幹夫、荻野忠治郎、水木京太三君の協力を得た。(和木淸三郎記)

昭和十五年十一月五日印刷
昭和十五年十一月十日發行

水上瀧太郎全集　四卷

著者　阿部章藏

發行者　岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所　岩波書店
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

精興社印刷　板倉製本